古城遺跡

—安中古城住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1988

群馬県安中市教育委員会

古 城 遺 跡

—安中古城住宅団地造成事業に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書—

古城遺跡正誤表

ページ	行	誤	正
１２	２２	麿滅	磨滅
５５	２８	縄文時代に前期に	縄文時代前期に
９３	１５	ブルーク	グループ
１００	１２	古城１Ａ→古城１Ｃ	古城１Ｃ→古城１Ａ
１０３	１１、１６	部々	部分
１２０	２５	大平記	太平記
１２０	２９	建武３年（延元元年）	建武３年（１３３６-延元元年）
１２１	２４	タセラレタルル	タセラルル
１２１	３４	泣	陰
１２５	２９	海雲寺	海竜寺
１２６	１２	陳	陣
図版－５	４段目	壙土層断面図	堀土層断面図
図版－６	１段目	２号断面	２号断割

上空から見た古城遺跡 (1)

上空から見た古城遺跡 (2)

序

安中市は群馬県の西部に位置し、関東地方と信越地方を結ぶ大動脈の要衝として、古代から栄えて参りました。また、碓氷川の清流は緑豊かな田園風景を映し、古(いにしえ)より歴史の移りゆきを見つめています。このように良好な環境が「教育と文化のまち」安中市を育んでまいりました。

近年、安中市では人口の増加に伴い、住宅不足の問題が生じてきたところから、板鼻字古城の地に群馬県企業局が住宅団地を造成することになりました。しかし、板鼻地区は板鼻城址をはじめとする旧蹟や伝説など歴史的環境が色濃く残っている地域でもあります。今回造成された「安中古城住宅団地」も古城の字名の由来のとおり、中世の館址が残っていることが判明しました。

そこで、安中市教育委員会では、この古城遺跡の発掘調査を実施し、記録保存のかたちで、後世に伝えてゆくことになりました。古城遺跡では、古城の名の由来の中世館址が発掘され、室町時代の安中の歴史の一部が解明されました。また、西毛地域では最古の旧石器時代の集落も発見され、黎明期の安中の様子が明らかになりました。そして、多くの非常に重要な遺物も出土しています。

こうした埋蔵文化財は貴重な文化遺産であり、文化の香り高い安中市を作り上げてゆくために大きな役割を果たしてゆくものと思います。今後は社会教育、学校教育の場で広く活用し、多くの市民の方々に、文化財に対する理解を深めていただけるよう努力してゆく所存であります。

最後に、春から秋までの長期間にわたり、夏の酷暑の中も発掘作業に従事していただいた作業員の方々や、１年半もの長きにわたり、遺物整理作業に携わり、本書の作成の一助となった作業員の方々の労をねぎらうとともに、発掘調査中に何かと御協力いただいた板鼻地区の皆様には厚くお礼申し上げます。

安中市教育委員会

教育長 多　胡　純　策

例　　言

1．本書は群馬県企業局が行う安中古城住宅団地造成事業に伴う、古城遺跡（略称Ｅ－２）の発掘調査報告書である。

2．調査は群馬県企業局の委託を受けて、安中市教育委員会が実施した。

3．発掘調査及び遺物整理は、昭和61年４月１日から昭和63年３月31日まで実施した。

4．調査組織は次のとおりである。

安中市教育委員会事務局

社会教育課長	茂木勝文	主　事（社教主事）	田中秀雄
社会教育係長	反町良一	主　事	大工原　豊(担当)
主任(社教主事)	森泉寿義雄	調査員	千田茂雄
主任	萩原　昭(昭和62年３月転出)	調査員	瀧野　巧(昭和62年３月転出)
主任	松本　豊		

5．本書の編集は大工原が行い、執筆分担は次のとおりである。

大工原豊　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ－１、Ⅵ－１

千田茂雄　Ⅳ、Ⅴ－２、３、４、Ⅵ－２

6．中世陶器の鑑定は大江正行氏（群馬県埋蔵文化財事業団）にお願いした。

7．黒曜石の産地同定については金山喜昭氏（野田市郷土博物館）らに分析していただいた。

8．テフラ及び重鉱物分析は（株）パリノ・サーヴェイ（早田勉氏）に依頼して行った。

9．板鼻地区の城館址について、山崎一氏（群馬県文化財審議会委員）により玉稿を賜った。また古城館址の復元図は須藤美智子氏にお願いした。

10．遺構の写真撮影は千田、瀧野が行い、遺物写真は大工原、千田が行った。

11．２区の全体図作成及び、遺跡の航空写真撮影は朝日航洋（株）が実施した。

12．本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

13．発掘調査及び遺物整理の期間中、次の方々に御指導、御協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。（敬称略・50音順）

赤山容造、麻生敏隆、麻生　優、安斎正人、安蒜政雄、池上　悟、石守　晃、岩崎泰一、岡本東三、小野和之、織笠　昭、角張淳一、加部二生、神戸聖語、栗島義明、小島純一、小林達雄、小菅将史、佐藤宏之、白石典之、白石浩之、須藤隆司、外山和夫、長崎潤一、西井幸雄、能登健、洞口正史、前原　豊、松村和男、森田秀策、若狭　徹

14．発掘調査及び、遺物整理作業の参加者は次のとおりである。記してその労をねぎらいたい。

秋山幸子、新居進子、蘭　悦治、有阪嘉達、石川ミイ、磯貝スエ子、稲川己代士、井上民衛、井野恵美、今井利彦、伊与久陽子、岩坂尚子、氏家芳子、内田喜美子、内田純子、大塚すえ子、岡田早百合、岡田頼夫、小川正子、小柏　守、片桐佳子、金井京子、金井武司、岸部美智子、狐塚　章、小板橋正樹、小林富夫、小林八重子、小山徳一、後閑修市、斉藤篤志、斉藤説成、斉藤万平、斉藤三枝、酒井理恵、提橋博之、佐藤千津子、佐藤令江、桜井　修、桜井義男、島崎幸子、島田信昭、下　明子、下マス江、神宮幸四郎、鈴木孝幸、須藤　功、須藤だい、反町　徹、高木公太郎、高橋直樹、多胡千佳子、多胡好夫、多胡　静、田島かつ子、田島元治、田中利策、田中重一、田中美子、田中幸枝、豊島すえ、長岡政枝、長岡正樹、中川京子、中嶋孝之、中嶋哲志、西村ひさ江、西村水子、半田八郎、平尾　包、平尾雅次、藤原善康、布施正男、古田絵奈、細山三郎、細山ふみ、真下盛吉、真下正博、松本恭子、松本清枝、松本節子、松本文作、宮口清隆、宮崎清一、柳沢悦子、柳沢　潔、柳沢孝保、柳田ちえ、湯川秀司、横山晴恵、吉沢満紀、吉沢秀子、吉田重雄、吉田由美子、吉田貴之

考古学専攻生　中島　誠（明治大学）

凡　　例

1．各調査区、遺構の縮尺は次のとおりである。

　１区全体図、３・４区全体図：1/200、２区全体図：1/400

　住居址、土壙、井戸：1/60、掘立柱状建物址、柱穴列：1/100

2．遺物の縮尺は次のとおりである。

　旧石器時代遺物：2/3（磨石、敲石等1/3）、縄文時代　土器、石器：1/3

　平安時代：坏等　1/3、甕：1/6、中世　陶磁器、灯明皿、古銭：1/3、土鍋、石臼等：1/6

3．旧石器時代石器計測表中の器種、石材の略称は次のとおりである。

Ｆｌ	剝片	Ｏｂ	黒曜石
Ｃｏ	石核	ＧＡｎ	黒色安山岩
Ｋｎ	ナイフ形石器	Ｓｈ	頁岩（黒色頁岩）
Ｓｃ	削器	Ａｎ	安山岩
ＲＦ	二次加工のある剝片	Ｃｈ	チャート
局磨	局部磨製石斧		

本 文 目 次

序

例　言

凡　例

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　調査の方法と経過 …… 2

1　調査の方法 …… 2

(1)　グリッドの設定…… 2

(2)　試掘調査…… 2

(3)　本調査…… 2

(4)　遺物整理…… 3

2　調査の経過 …… 4

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境 … 6

Ⅳ　基本層序 …… 8

Ⅴ　遺構と遺物 ……10

1　1区の遺構と遺物……10

(1)　1A区の遺構と遺物……10

(2)　1B区の遺構と遺物……20

(3)　1C区の遺構と遺物……21

2　2区の遺構と遺物……55

(1)　縄文時代の遺構と遺物……55

(2)　平安時代の遺構と遺物……61

(3)　中世の遺構と遺物……68

3　3区の遺構と遺物……85

(1)　ピット群……85

(2)　溝……85

(3)　井　戸……85

(4)　土　壙……85

(5)　グリッド及び表採遺物……87

4　4区の遺構と遺物……90

(1)　概　要……90

(2)　表採遺物……90

Ⅵ　成果と問題点……92

1　古城遺跡におけるAT下の石器群について ……92

(1)　1A区における集落の景観……92

(2)　1C区における集落の景観……93

(3)　古城遺跡の石器群の位置づけ……98

2　古城館址についての若干の考察 ……103

(1)　遺構の概要 ……103

(2)　館址の構造 ……103

(3)　遺構の時期区分 ……104

(4)　遺跡の年代 ……105

付編1　古城遺跡のテフラ分析及び重鉱物分析 ……111

付編2　黒曜石の産地推定 ……119

付編3　板鼻城の成立と歴史 ……119

挿 図 目 次

第１図　試掘トレンチ・グリッド設定図……付
第２図　遺跡位置図……７
第３図　古城遺跡と周辺遺跡……折
第４図　基本層序柱状図……９
第５図　１区全体図……付
第６図　１Ａ区遺物分布図……折
第７図　１Ａ区接合関係図……折
第８図　１Ａ区ブロック相関関係図……13
第９図　１Ａ区石器実測図(1)……14
第10図　１Ａ区石器実測図(2)……15
第11図　１Ａ区石器実測図(3)……16
第12図　１Ａ区石器器種別・石材別組成図…16
第13図　１Ａ区石器実測図(4)……17
第14図　１Ａ区石器実測図(5)……18
第15図　１Ｂ区遺物分布図……20
第16図　１Ｂ区石器実測図……21
第17図　１Ｃ区遺物分布図……付
第18図　１Ｃ区石器接合関係図……付
第19図　１Ｃ区ブロック相関関係図……23
第20図　１Ｃ区石器器種別・石材別組成図…27
第21図　１Ｃ区石器実測図(1)……28
第22図　１Ｃ区石器実測図(2)……折
第23図　１Ｃ区石器実測図(3)……29
第24図　１Ｃ区石器実測図(4)……30
第25図　１Ｃ区石器実測図(5)……31
第26図　１Ｃ区石器実測図(6)……32
第27図　１Ｃ区石器実測図(7)……33
第28図　１Ｃ区石器実測図(8)……34
第29図　１Ｃ区石器実測図(9)……35
第30図　１Ｃ区石器実測図(10)……36
第31図　１Ｃ区石器実測図(11)……37
第32図　１Ｃ区石器実測図(12)……38
第33図　１Ｃ区石器実測図(13)……39
第34図　１Ｃ区石器実測図(14)……40
第35図　２区全体図……付
第36図　縄文時代土壙実測図……56
第37図　縄文土器実測図……57
第38図　表採遺物実測図……59
第39図　Ｈ－１号住居址実測図……62
第40図　Ｈ－１号住居址出土遺物実測図……63
第41図　Ｈ－２号住居址実測図……65
第42図　Ｈ－２号住居址出土遺物実測図……66
第43図　掘立柱建物址実測図……折
第44図　掘立柱建物址実測図……折
第45図　掘立柱建物址・柱穴列実測図……折
第46図　１号・２号井戸実測図……73
第47図　１号・２号井戸出土遺物実測図……74
第48図　土壙実測図(1)……77
第49図　土壙実測図(2)……78
第50図　地下式壙実測図……79
第51図　土壙・地下式壙出土遺物実測図……80
第52図　堀・溝セクション図……82
第53図　堀・溝出土遺物実測図……82
第54図　館址造成状況図……折
第55図　表採遺物実測図……84
第56図　３・４区全体図……付
第57図　井戸実測図・井戸出土遺物実測図…86
第58図　土壙実測図・土壙出土遺物実測図…88
第59図　グリッド及び表採遺物実測図……89
第60図　表採遺物実測図……91

第61図　１Ａ区・ＩＣ区ユニット概念図……92
第62図　１Ａ区ユニット別石器器種組成図…93
第63図　１Ｃ区ブロック・ユニット別石器器種組成図(1)……94
第64図　１Ｃ区ブロック・ユニット別石器器種組成図(2)……95
第65図　１Ａ区・１Ｃ区剝片剝離工程模式図……98
第66図　古城館址中世遺構配置図 ……105
第67図　古城館址Ｉ期・II期遺構配置図 …106
第68図　古城館推定復元図 ……107
第69図　古城遺跡（№５）とテフラの代表的露頭の位置 ……116
第70図　古城遺跡とその周辺のテフラ柱状図 ……117
第71図　古城遺跡テフラ試料重鉱物組成 ……118
第72図　古城墨址縄張図(1) ……132
第73図　古城墨址縄張図(2) ……133
第74図　古城墨址縄張図(3) ……134

付　表　目　次

第１表　調査工程表……５
第２表　１Ａ区石器計測表(1)……19
第３表　１Ａ区石器計測表(2)……20
第４表　１Ａ区接合資料一覧表……20
第５表　ブロック間接合する接合資料一覧表……24
第６表　ブロック間で移動する個体別資料一覧表……24
第７表　１Ｃ区石器計測表(1)……44
第８表　１Ｃ区石器計測表(2)……45
第９表　１Ｃ区石器計測表(3)……46
第10表　１Ｃ区石器計測表(4)……47
第11表　１Ｃ区石器計測表(5)……48
第12表　１Ｃ区石器計測表(6)……49
第13表　１Ｃ区石器計測表(7)……50
第14表　１Ｃ区石器計測表(8)……51
第15表　１Ｃ区石器計測表(9)……52
第16表　１Ｃ区接合資料一覧表(1)……53
第17表　１Ｃ区接合資料一覧表(2)……54
第18表　Ｈ－１号住居址出土遺物観察表……64
第19表　Ｈ－２号住居址出土遺物観察表……67
第20表　１号井戸遺物観察表……75
第21表　２号井戸遺物観察表……75
第22表　土壙出土遺物観察表……81
第23表　溝出土遺物観察表……82
第24表　堀出土遺物観察表……82
第25表　１号井戸遺物観察表……86
第26表　横川駅北露頭にみられるテフラの諸特徴 ……118

図 版 目 次

口　　絵　空から見た古城遺跡
図版－1　古城遺跡全景
図版－2　1A区、1B区、1C区
図版－3　1C区、2区全景、土壙
図版－4　H－1・2号住居址、1・2・3・4・15・16号掘立、D－9・12号土壙
図版－5　D－10号土壙、1号地下式壙、2区1・2号井戸、堀全景・土層断面
図版－6　溝、2・3・4号断割土層断面
図版－7　5・6号断割土層断面
図版－8　4A区全景・土層断面、4B区全景・旧流路・調査状況、試掘調査、現場説明会
図版－9　1A区出土遺物
図版－10　1C区石器(1)
図版－11　1C区石器(2)
図版－12　1C区ブロック出土遺物(1)
図版－13　1C区ブロック出土遺物(2)・ブロック外出土遺物・石器使用痕・接合資料(1)
図版－14　1C区接合資料(2)
図版－15　1C区接合資料(3)
図版－16　1C区接合資料(4)
図版－17　2区土壙出土遺物、表採遺物
図版－18　2区H－1号住居址出土遺物
図版－19　2区H－2号住居址出土遺物
図版－20　2区1・2号井戸出土遺物
図版－21　2区土壙・1号地下式壙出土遺物
図版－22　2区溝・堀出土遺物、表採遺物
図版－23　2区表採遺物、3区1号井戸出土遺物
図版－24　3区1号井戸・土壙出土遺物、表採遺物
図版－25　3・4区表採遺物
図版－26　4区表採遺物
図版－27　土層中に含まれる重鉱物(1)
図版－28　土層中に含まれる重鉱物(2)

I　調査に至る経過

安中市板鼻地区は高崎市と隣接しており、住宅地域として適している。そこで、群馬県企業局では板鼻字古城地内に住宅団地を造成することを計画し、安中市教育委員会へその旨の連絡があった。当初、この場所は昭和30年代に安中公害の汚染地区へ客土をする際、土取りを行った場所であり、埋蔵文化財はすでに存在しないと思われた。しかし、計画区域と土取り区域とを照合したところ、土取りしておらず、埋蔵文化財が存在する部分があることが判明した。また、すでに土取りを行った部分についても、掘削深度が浅く、堀蔵文化財が残存している可能性のある部分があることも明らかとなった。

このうち、道場川以北の部分は全く土取りを行っておらず、「徳定屋敷」と呼ばれていることが判明した。そして、現地踏査を行ったところ、堀、曲輪等の遺構が現存していることが確認された。そこで、城郭研究家山崎一氏（群馬県文化財審議委員）に調査していただいたところ、中世城館址であることが確認されるに至った。

このような事情で、県企業局と市教育委員会との間で、昭和60年12月から再三にわたって協議が繰り返えされた。しかし、計画区域が広大であり、埋蔵文化財の存在する部分も明確でないことから試掘調査を実施して、遺跡の範囲を確認することになった。

試掘調査は昭和61年４月に実施された。その結果、中世城館址、土壙群、水田址のほか、土取りされた部分からも旧石器が発見された。そして、試掘調査の結果を受けて、再度県企業局、市教育委員会間で協議が行われたが、計画変更は不可能ということで、発掘調査を実施して、記録保存の措置をとることになった。

II　調査の方法と経過

1　調 査 の 方 法

(1)　グリッドの設定

今回の調査にあたっては、板鼻城遺跡の調査と同じく、板鼻城、鷹の巣出丸、小丸田出丸と古城館址の関係を考慮し、これら相互の位置関係を明確にするために、板鼻城本丸にある三角点（X＝37764.75、Y＝－81192.47、H＝169.02）を基点とし、この点から真北に延びるラインとこれに直交するラインを基線として、グリッドを設定した。大グリッドは100m×100mとし、北から南へ１、２、３……、西から東へイ、ロ、ハ……とし、北西隅の座標をグリッドの呼称とすることにした。また、小グリッドは４m×４mとし、北から南へA、B、C…Yとし、100mで一順するので、それ毎に大グリッド名称を冠して呼称することにし、西から東へ１、２、３……と呼ぶことにした。すなわち、板鼻城本丸の三角点は大グリッドでは５－へ、小グリッドでは５A－126となる。

(2)　試 掘 調 査

試掘調査は20m毎に２m巾のトレンチを東西方向に19本設定した。土取りされていない部分では、バックホーによりII$_b$層～V層まで掘削してから、人力により遺構確認作業を行った。また、土取りされた部分では、バックホーにより掘削を行い、ローム層の存在の有無について確認した。ローム層が存在しない場合、その時点で作業を終了し、ローム層が存在する場合、X$_b$層～X$_c$層まで掘削し、その後、人力によりXI$_c$層まで掘り下げ、遺物の有無について、確認作業を行った。

そして、検出された遺構、遺物については、平板測量により記録し、写真撮影を行った。また、旧石器時代の遺物が検出された部分については、土層断面図を作成した。

発掘作業終了後は遺物整理作業を行い、遺跡の範囲、面積、時代等、本調査を実施する際の基礎資料を整備した。

(3)　本　調　査

本調査は試掘調査の結果、遺跡が存在することが判明した部分を面的に調査し、記録保存の措置をとることを目的として実施した。本遺跡は種類、時代等から１区（旧石器）、２区（館址）、３区（谷地）、４区（土壙群）に分けられ、各区毎に調査方法が異なる。

1区は旧石器時代の調査区である。遺物はXI_a層～XI_c層にかけて検出されるので、バックホーによりX_a層～X_b層まで掘削し、その後、人力により精査を行った。調査の効率化をはかるため、最初は千鳥にグリッドを掘り下げ、遺物が検出された場合、その周囲のグリッドを掘り下げる方法で、遺物が検出されなくなるまで、面的に層位毎に精査を実施し、XI_c層中位まで掘り下げた。出土した遺物は平板測量で位置を記録し、層位的に取り上げた。また、土層断面図を作成し、随時写真撮影を行った。そして、土層の堆積状態及び成因を調べるため、テフラ分析及び重鉱物分析を実施した。

2区は中世館址であり、バックホーによりII_a層～V層上面まで掘削し、それと並行して人力により遺構確認を行った。確認された遺構は順次精査し、遺構毎に遺物を取り上げた。そして、2区の場合、中世館址であり、大規模な遺構であるため、ヘリコプターによる航空写真測量により、平面図を作成した。また、細部については補備測量を平板測量で行った。ほかに遺構の土層断面図を必要に応じて作成し、個々の遺構についても逐次写真撮影を実施した。

3区は中世の土壙群であり、バックホーにより、III層まで掘削し、その後、人力により遺構確認作業を行った。そして、確認された遺構については順次精査し、遺構毎に遺物を取り上げた。また、遺構に伴わない遺物はグリッド毎に取り上げた。検出された各遺構については、平板測量により平面図を作成し、土層断面図も作成した。写真撮影は逐次行い、記録を行った。

4区は谷地部分であり、II_a層までバックホーで掘削し、その後、人力でII_b層を精査し、旧地形を平板測量により記録した。出土遺物は随時地点毎に取り上げた。また、写真撮影も実施した。

(4) 遺物整理

1区の遺物は水洗・注記→写真撮影・台帳作成→接合→実測→トレース→写真撮影の順で整理し、2～4区の遺物は水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース→写真撮影の順で整理作業を実施した。また、これと並行して、各種図面整理・作成、トレース、写真整理作業を行った。1区の黒曜石製剝片については原産地推定のため熱中性子放射化分析を実施した。

2　調 査 の 経 過

古城遺跡の試掘調査は昭和61年４月１日から５月１日までの間実施した。まず、中世館址、土壙群、水田址の可能性のある谷地の存在を確認した。そして、それらの遺跡の範囲の確認作業を行った。その後、土取りされた部分にもローム層が残っている部分が広く存在していることが判明したので、その部分に対する遺構、遺物の確認作業を並行して行ったところ、４月８日に13トレンチ、14トレンチ西端部において、黒色帯中（XI_c層）より、旧石器時代の石器が検出された。そこで、旧石器時代の遺跡の範囲確認作業を行ったところ、新たに２地点確認された。

試掘調査終了後は遺物整理作業を実施した。また、試掘調査の結果に基づき、県企業局と市教育委員会の間で、造成計画と遺跡の保護について、再三にわたり協議を行った。しかし、計画変更が困難であることから、遺跡部分については、本調査を実施して記録保存することになった。

本調査は昭和61年５月10日から10月31日まで、約６ヶ月間実施した。本調査は１区から開始し１Ａ区、１Ｂ区、１Ｃ区の順で行い、８月28日に調査を終了した。１区の調査は降水量の多い時期であったため、かたい土層を掘るには好都合であったが、しばしば水没するなどして、当初の予定より調査は遅れた。

２区の調査は７月25日から10月31日にかけて行った。２区の場合は表土が薄く、遺構の確認も容易だったため、順調に進行した。航空写真測量は10月14日に実施した。その後、館の造成状況についての調査を行った。

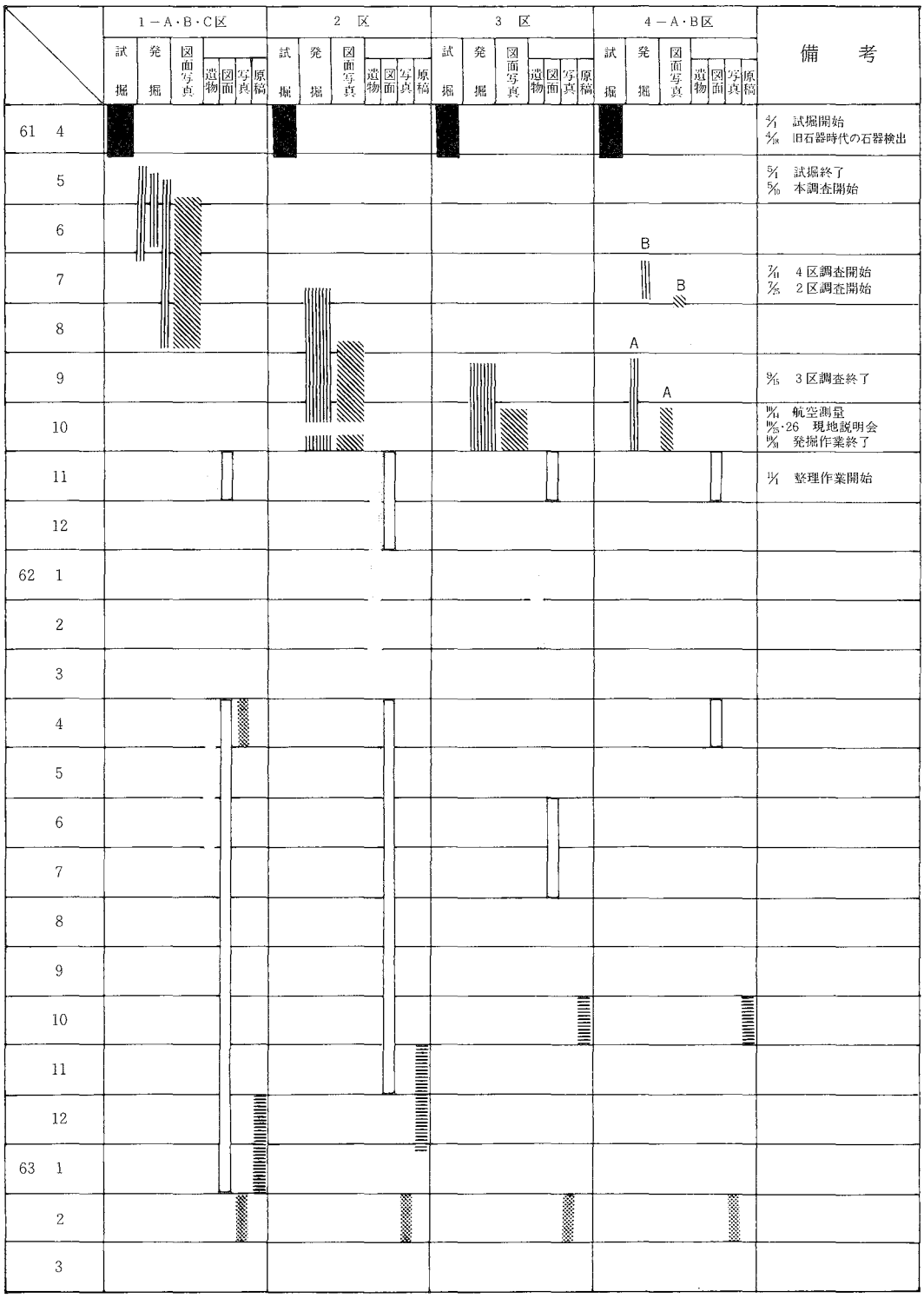
３区は９月５日から10月31日まで実施した。３区は遺構確認面が褐色土層（IV層）であったが、遺構が少ないこともあり、順調に作業は進行した。

４区の調査については、４Ｂ区を7月11日から８月１日までの間、４Ａ区を９月５日から10月31日までの間実施した。

調査期間中、10月25日、26日に現地説明会を開催した。また、11月７日には板鼻地区住民を対象として、説明会を実施した。そして、11月８日には安中小学校、碓東小学校児童が見学に訪れた。その後、11月21日から24日まで、安中市文化センターで、出土遺物の展示を行った。

遺物整理作業は昭和61年11月１日から昭和63年３月31日にかけて行った。昭和61年度には主として２区～４区について行い、昭和62年度は１区～４区について実施した。特に１区の石器接合作業、石器実測作業は予定より大巾に遅れた。また、２区の掘立柱建物址は重複が多く、建物を分離するのに困難であった。

なお、さらに詳細な作業工程については第１表のとおりである。


1－A・B・C区
2　区
3　区
4－A・B区
試掘
発掘
図面写真
遺物
図面
写真
原稿
備　考
61　4
5
6
7
8
9
10
11
12
62　1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
63　1
2
3
B
A
4/1　試掘開始
4/16　旧石器時代の石器検出
5/1　試掘終了
5/10　本調査開始
7/1　4区調査開始
7/25　2区調査開始
9/15　3区調査終了
10/1　航空測量
10/25・26　現地説明会
10/31　発掘作業終了
11/1　整理作業開始

第1表　調査工程表

III　遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境

古城遺跡は群馬県安中市板鼻字古城地内に所在する。本遺跡の存在する安中市は群馬県西部(西毛）に位置し、関東山地の西縁部にあたる碓氷峠付近に源を発する碓氷川中、下流域にある。碓氷川は市域を東流し、中宿付近で九十九川と合流する。古城遺跡はこの合流点より、約１km下流の右岸（北岸）台地上に存在する。標高322.9mの天神山から南東方向へ延びる丘陵部付近にあたり、遺跡の標高は160m～175mである。

碓氷川からは鷹の巣の崖の陰にあたり、直接見えないやや奥まった所にあり、古城遺跡のある台地と鷹の巣の崖との間には蟹沢川が流れ、深く谷を刻んでいる。さらに詳しくみると、古城遺跡の中に源を発する道場川が南東方向へ谷を刻んで流れており、蟹沢川と道場川に挟まれた南東方向へ延びる細長い台地（１区、３区）と、道場川の北東の突出した舌状台地（２区）と、道場川に沿った谷地（４区）の部分に遺跡が存在する。

１区は、旧石器時代の遺跡で、台地の南側にあたり、やや南東へ傾斜している。微地形をみると１Ａ区と１Ｃ区は台地が少し南へ張り出して、平坦部が広い部分にあたり、その間に小さな谷が入り込んでおり、そこに１Ｂ区が存在する。

２区は館址で、この館址は、道場川の北東の短く突出した台地を利用して造られている。２区北側には小さな谷が入り込み、その谷を利用して堀を掘り台地から切り放すようにしている。

３区は道場川の源の西側の台地の部分である。本来、台地の窪んだ部分であり、そのため土取りを免れている。３区の地形をみると、北東へ傾斜している。

４区は道場川に沿った谷地部分であり、水源部分では谷は南へ開いている。水源部分が４Ａ区でやや南へ下った部分が４Ｂ区である。

歴史的環境

板鼻地区は古くは東山道が通り、鎌倉時代以降は鎌倉街道との分岐点であったことから、交通の要衝として重要な場所であった。また、江戸時代には中山道の宿場町として栄えていた。そのため、板鼻地区には歴史的遺物や旧蹟等が多く残っており、それらにちなんだ伝説・伝承も多く存在する。そして、東山道は、古城遺跡の付近を通っていたと推定されている。また古城遺跡に関する伝承等も残っている。

古城遺跡のある板鼻字古城は、以前この場所に城館址が存在したことに由来する字名である。字古城に存在する館址については、昔より伝承されており、川島一郎氏は『板鼻昔物語』(1961年)の中で「徳定屋敷」の伝承について記し、『中仙道板鼻宿』(1972年）の中で「姥懐(うばぴとこ)の出丸」と呼

上大島
下大島町
前井毛
八幡霊園
浄水場
岩田町
栃谷戸
板鼻
小丸田
市平谷津
安中
本町
上町
毘沙門
観音塚古墳
総合運動公園
碓氷川
中宿一丁目
板鼻一丁目
長伝寺
石井橋
梅木
在家
東平
中宿
西
岩井
道々巻
亜鉛製錬所
中平
山神
上鼻高
北野殿
東野殿
野殿
中市
坂組
中野殿
若林
0
500
1000
1500

第２図　遺跡位置図

び、「徳定屋敷」の字名が残っていたことを記している。また、この古城館址（徳定屋敷）の南東の山裾には「姥ヶ池」と呼ばれる湧水があり、伝説が残っている。そして、古城館址の北西には一遍上人が開いた念仏道場があったと伝承されている場所がある。道場川の名称の由来はここからきているとみられる。また、道場川の水源付近には古井戸があったと伝えられる。

古城遺跡の南東には、板鼻城址がある。この城は東西約400m、南北約350mの大規模な城郭で、「螺郭式」或いは「螺旋壕式」と呼ばれる非常に珍しい構造のものである。市道改修工事に伴い、一部発掘調査を行っており、戦国時代の城郭とみられる（安中市教育委員会1987年）。

また、これに附随して、板鼻城の東に小丸田曲輪（上の山出丸）があり、江戸時代初期には里見讃岐守の陣屋であったと言われている(『上毛風土記』)。そして、鷹の巣の崖上には鷹の巣出丸が存在する。これら板鼻城を中心とする城郭は、しばしば混同されて記載されることがあり特に板鼻城と鷹の巣出丸は混同されることが多い。また、板鼻城と古城館址についても、混同されて記述されることがある。

これら、板鼻の城郭については、付編『板鼻城の成立と歴史』において山崎一氏が、詳細に記述している。

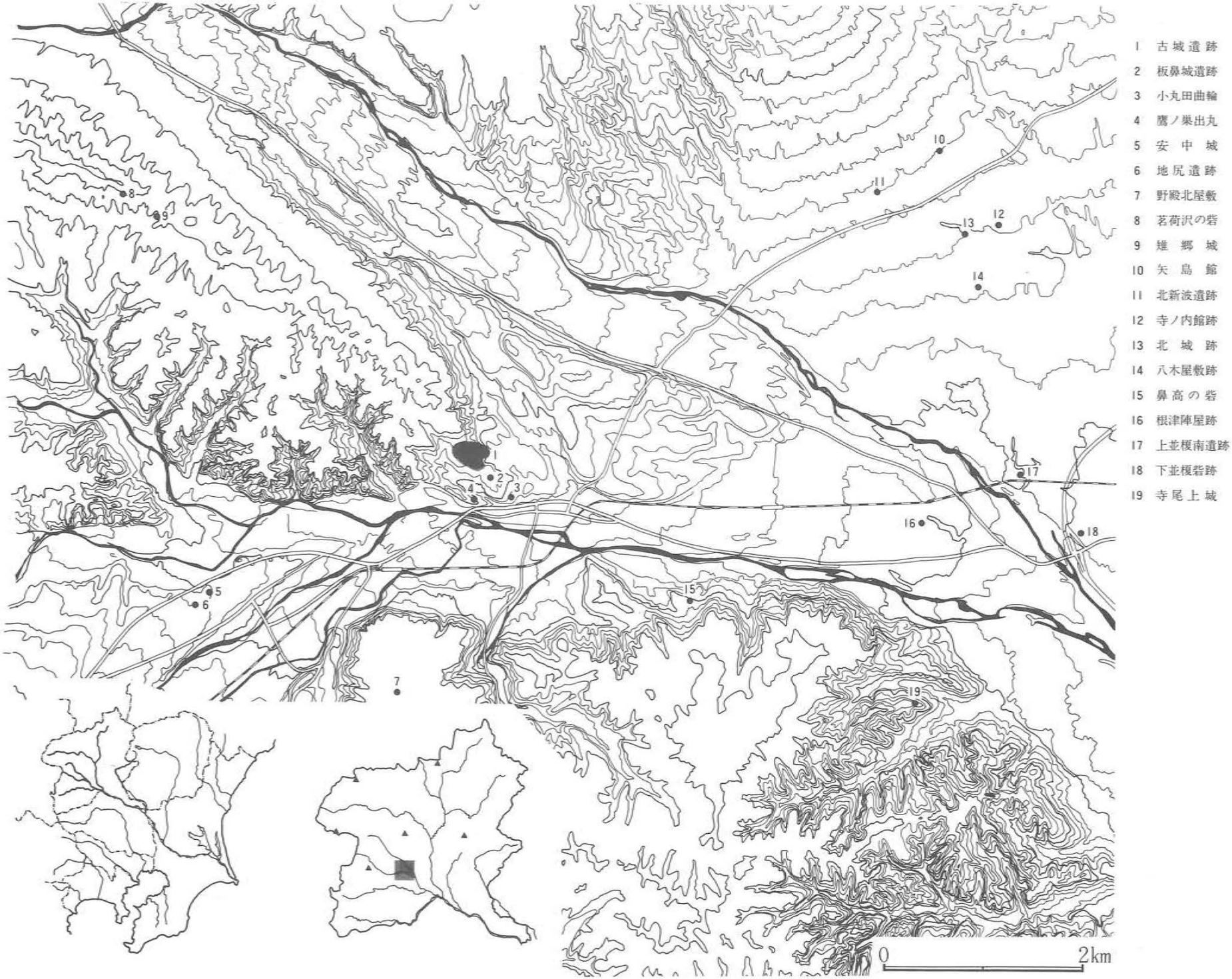
このほか、周辺の関連する遺跡をみると、北西方向へ天神山から尾根伝いに行ったところに雉郷城、茗荷沢の砦が存在する。そのほか、秋間地区には「秋間七騎」の居城と伝えられる城址が多数存在する。そして、安中城、地尻遺跡（中世館址）は南西約３kmの位置にあたる。また、北東約５～６kmには長野氏に関連する矢島館、寺ノ内館、北新波砦等が存在する。ちなみに、箕輪城は本城址の北北東約７kmの位置にある。

一方、旧石器時代の遺物がまとまって出土している遺跡は、古城遺跡のほかには近辺に存在せず、安中市注連引原Ⅱ遺跡、高崎市八幡中原遺跡で槍先形尖頭器が各１点検出されている程度である。

Ⅳ　基本層序

本遺跡における層序は、１区・２区・３区・４Ａ・Ｂ区とそれぞれ地形が異なるため、層序も各区ごとに違いが認められる。

以下各区ごとの特徴についてみてみたい。１区ではＶ層より上層は土取りされているため、この部分の層序に関しては付近の土取されていない場所を参考に復元した。２区では長い間の耕作のためか As-A、As-B の純層を確認することができなかった。３区では As-A の純層は所々に確認されたが、As-B の純層は確認されなかった。As-A は耕作時に寄せられたものであろう。４Ａ・Ｂ区では As-A の純層は確認されなかったが As-B の純層は40cm～60cmと厚い堆積を確



第3図　古城遺跡と周辺遺跡

認できた。これは谷地である4区へ周囲から流れ込んだものと思われる。

以下、各層序について、特徴を簡単に述べることにする。

I_a層　黒褐色土層　耕作土層。As-A を多量に混入する。

I_b層　灰色白色軽石層　浅間A軽石（As-A　1783年）純層。

II_a層　黒褐色土層　As-B 多量に混入する。中世遺物包含層。

II_b層　灰褐色軽石層　浅間B軽石（As-B　1108年）純層。

III層　黒色土層　しまり、粘性ともややある。白色粒子を少量混入する。縄文時代遺物包含層。

IV層　褐色土層　しまり、粘性ともにあり。

V層　黄褐色土層　ローム層、いわゆるソフトローム層。

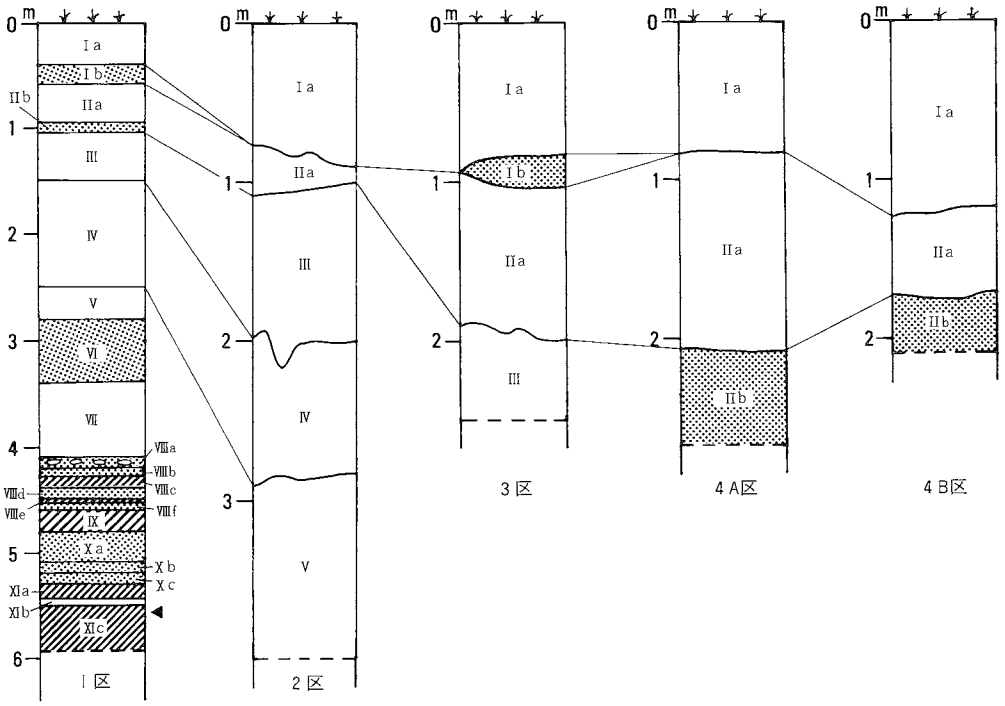
VI層　黄色軽石層　板鼻黄色軽石層（As-YP　約1.3万年前）。

VII層　黄褐色土層　ローム層、いわゆるハードローム層。

VIII_a層～X_c層は板鼻褐色軽石層（As-BP　約1.6～2.1万年前）で、IX層の暗色帯をはさんで上下2層に区分され、その中を上層は暗黄褐色の間層をはさみ6層に下層は3層に細分される。下層に当るX_a～X_c層は、室田軽石層 As-MP（森山　1971年）で詳細については付編参照。

VIII_a層　黄褐色土層　しまり、粘性ともに強い。黄褐色軽石をブロック状に含む。

VIII_b層　黄灰色軽石層　粘土化している。



第4図　基本層序柱状図

VIII_c層　暗黄褐色土層　軽石を大量に混入するが土壌化している。

VIII_d層　黄灰色軽石層　VIII_b層より暗い。粘土化している。

VIII_e層　暗黄褐色土層　VIII_c層より明るい。軽石を大量に混入するが土壌化している。

VIII_f層　暗黄灰色軽石層　粒子が細かく、黒色粒子を多く混入する。

IX層　暗褐色土層　軽石を大量に混入するが土壌化している。

X_a層　褐色軽石層　粘土化している。

X_b層　灰白色軽石層　X_a層より粒子が大きい。粘土化している。

X_c層　黄灰白軽石層　X_b層より粒子が細かい。粘土化している。

XI_a層　暗灰褐色粘土層　しまり、粘性ともある。始良 Tn 火山灰（ＡＴ）を多く混入し、そのため色調が白っぽい。

XI_b層　灰白色火山灰層　始良 Tn 火山灰（ＡＴ　約2.2万年前）純層。

XI_c層　暗褐色粘土層　非常に硬くしまり、粘性も強い。

１区の旧石器時代の遺物は、ＡＴ混りのXI_a層からＡＴ純層のXI_b層、XI_c層中位までの間で出土している。

V　遺構と遺物

1　１区の遺構と遺物

(1)　１Ａ区の遺構と遺物

a．遺構（第６図～第８図）

出土状況

１Ａ区ではXI_a層～XI_c層中位にかけて、遺物が検出された。遺物はXI_c層上位に集中する傾向がみられたが、XI_b層及びXI_c層中位からも少量検出された。また、XI_a層からも若干検出されたが、平面分布、石材、接合関係からみて、文化層は一つで、XI_c層上位にあったと考えられる。

遺物の出土範囲はほぼ調査区中央にまとまるが、調査区西端及び東側にも分布する。調査区の北側は土取りされてしまっているが、本来はさらに北側にも遺物の分布域が広がっていたと推定される。また、南側は調査区外であるが、南側へも遺物の分布域は延びているとみられる。

１Ａ区からは86点の石器が検出されており、平面分布に疎密が認められる。そこで、視覚的に遺物がまとまる部分をブロックという単位に分けて分析してゆくことにする。１Ａ区の石器はＡ

（註1）

―1～6ブロックの6つに分けることが可能である。以下、各ブロックについて、述べてゆくことにする。

A―1ブロックは3S―73グリッドに存在し、2.5m×2mの範囲に20点の遺物がまとまる。砥石が1点あるほかはすべて剥片である。

A―2ブロックは3S―73、3T―73グリッドに位置し、1.5m×0.6mの範囲に8点の遺物がまとまる。すべて剥片である。

A―3ブロックは3S―74、3T―73、3T―74グリッドにかけて遺物が分布する。5.0m×2.7mの範囲に20点の遺物が分布する。1A区の中心的ブロックであり、遺物の内訳は台石1点、石核1点、剥片18点である。ブロックの中央部西側に直径約1.5mの倒木址があり、遺物が攪乱を受けている。台石はこの中から出土している。

A―4ブロックは3T―74、3T―75、3U―75グリッドに位置する。4.0m×3.5mの範囲に19点の遺物が分布する。このブロックも中心的ブロックであり、遺物の内訳はナイフ形石器3点（2点接合）、石核1点、剥片15点である。

A―5ブロックは3T―72、3T―73、3U―73グリッドに位置する。このブロックは調査区の南端にあり、さらに南へ遺物の分布範囲が広がるとみられる。4点の剥片が出土している。

A―6ブロックは3U―74、3U―75グリッドに位置する。4点の遺物が0.8m×2.4mの範囲に分布するが、さらに南の調査区外へ広がる可能性がある。石核1点のほかは剥片である。

接合資料とブロックの関係

次に接合関係についてみると、第7図、第8図のようにA―1、2、3、4ブロックは相互に接合関係をもっており、強い関連性が認められる（AG―1、2、7）。また、ブロック内で完結するものはA―1ブロック（AG―4）、A―4ブロック（AG―5、6）に存在する。A―3ブロックはこれらのブロックの中間に位置し、台石を有している。そして、A―3ブロック内で剥離された剥片（Tool?）がA―1、2、4ブロックに移動していることがわかる（AG―1、2）。また、石核も存在している。このようなことから、A―3ブロックは石器製作に係る空間であったと推定される。一方、AG―7ではA―4ブロックからA―2ブロックへ剥片（Tool?）が移動しており、石核も存在することから、石器製作ブロック的傾向を示している。しかし、A―4ブロックにはナイフ形石器が集中しており、石器消費ブロック的色彩もある。また、A―1、A―2ブロックはA―3、4ブロックより剥片の供給を受けており、石器消費ブロック的色彩が強いブロックである。

小　　結

これらA―1～4ブロックは、それぞれブロックの機能が少しずつ異なり、相互に補完されて、有機的結合関係をもつブロック群、すなわちユニットを構成していると推定される。これは、遺

跡内の生活の１個の単位であるとみられる。１Ａ区の場合、Ａ－５、６ブロックは全体象がはっきりしないので、現在の段階ではこのようなユニットは認められないが、少なくとも、Ａ－１～４ブロックのユニットとは別のユニットの構成員であると考えられる。

ｂ．遺物（第９図～第13図）

１Ａ区からは86点の遺物が検出されており、そのうち75点がブロックとしてまとまりをもつ。石材についてみると、黒色安山岩が、大部分を占め、黒曜石、黒色頁岩、安山岩がわずかに存在する。また、器種別にみると、大部分が剥片で、石核、ナイフ形石器、台石、砥石が若干存在する。これは、石材が黒色安山岩で、表面が風化してしまっていることにより、二次加工のある剥片（リタッチド・フレイク）などは識別できないことによると考えられる。

１＋２はナイフ形石器である。主要剥離面の打点が表面基部へくるように置き、左側縁部は切断し、裏面基部に平坦剥離を多用して調整を施している。刃部は長く、先端は丸味を帯びている。４もナイフ形石器である。先端部は欠損しているが、１＋２と同様の形態であったとみられる。調整は基部に、左側縁部は表から、右側縁部は表裏両面から施される。

３、５～９、12は剥片である。剥片には不定形のものが多いが、これらの剥片は比較的形が整っており、道具（Tool）として使われた可能性がある。３は求心剥離により作出されたもので縁辺部に微細な剥離が観察される。また、５、６、８は剥片の尾部が尖った形状のものである。

10、11、13は石核である。10は求心状剥離による剥片を素材としたもので、周囲のエッジの薄い部分を切断し、切断剥片を作出している。11、13も剥片素材で、周囲を切断することにより剥片を作出している。また、11ではさらに切断面を打面として横長剥片を作出している。

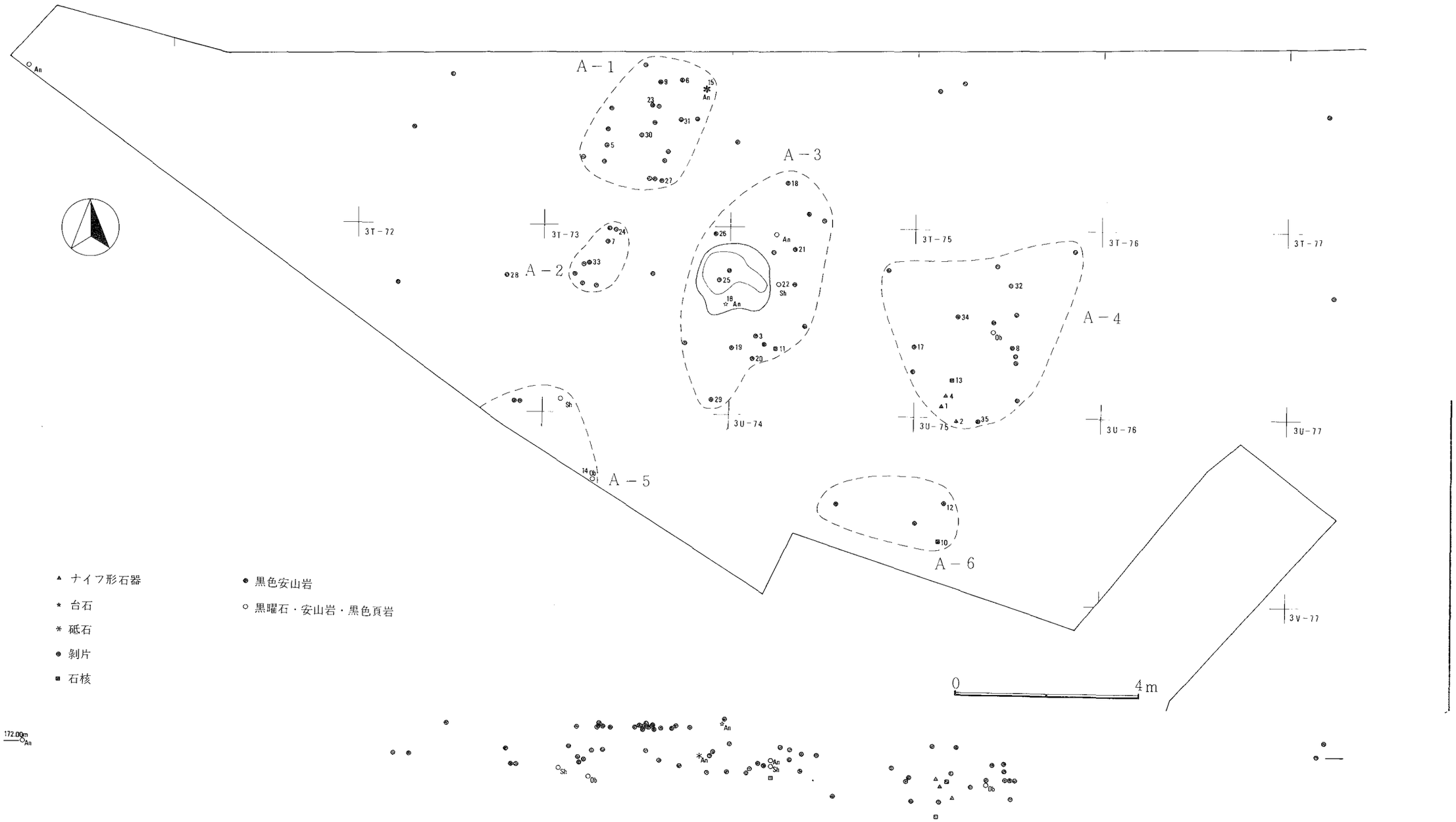
14は黒曜石製の剥片である。表面に細石刃を作出したような剥離が観察される。

15は砥石の可能性のある河原石である。左右の側縁部は直線状に面取りがなされている。また、裏面には磨滅によるとみられる微妙な段差が認められる。安山岩製である。

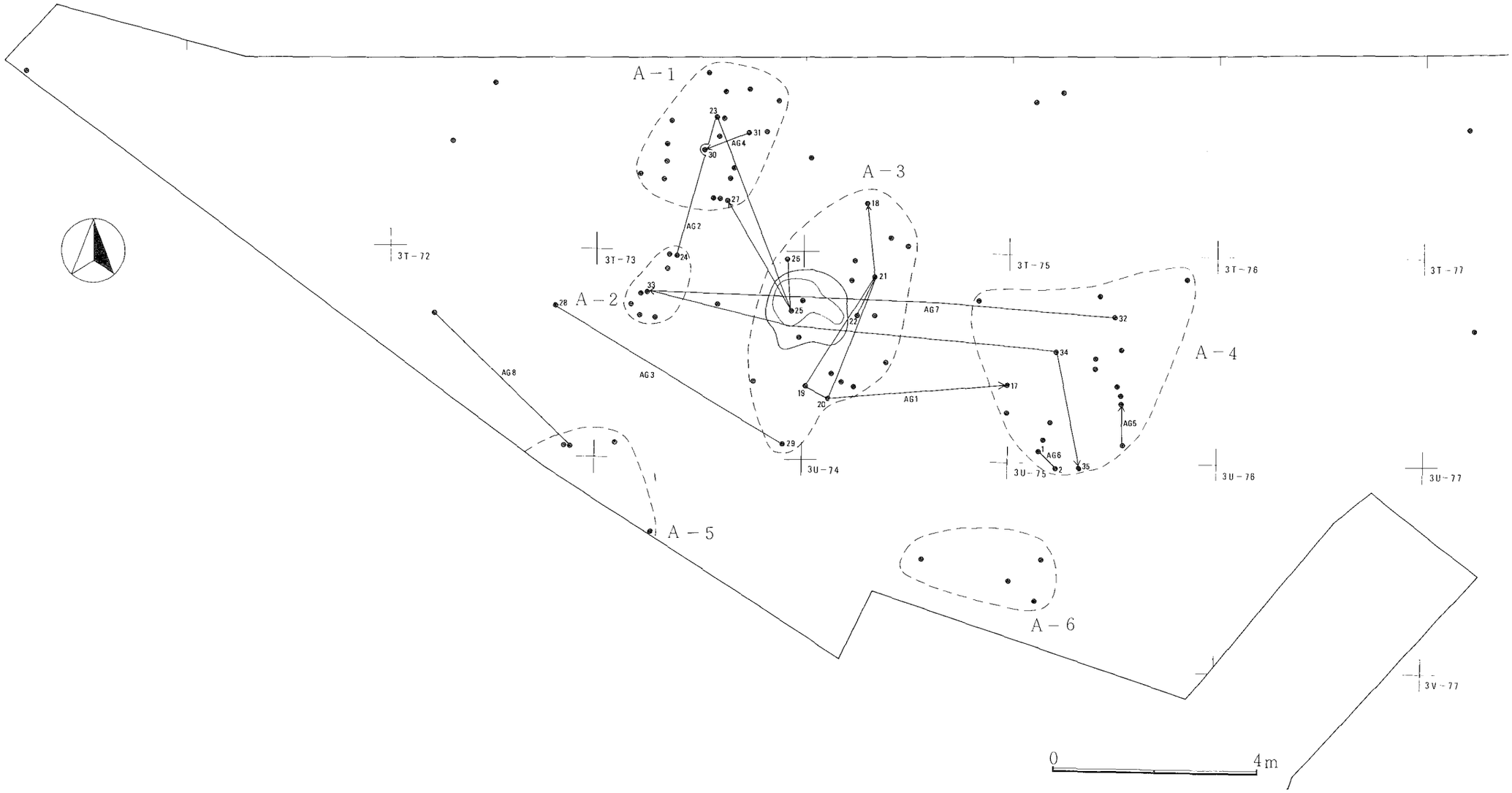
16は台石である。偏平な河原石で、表裏両面に平坦面がある。使用痕は認められないが、Ａ－３ブロックの中心部から出土しているため、何らかの作業の台石として用られたと考えられる。安山岩製である。

接合資料ＡＧ－１（17～22）は求心状剥離が多用されている例である。打面は原礫面であり、打面調整は認められない。この資料からみると、遺跡内での剥片剥離は作業面から１～２回剥離した程度で終了しており、この遺跡での滞在期間が短期間であったことが推定される。

ＡＧ－２（23～27）は切断剥片素材の石核から剥離されたものである。本来の素材剥片の主要剥離面が23、24の表面に残っている。剥離作業はＡ－３ブロックで行われたとみられるが、23、27はＡ－１ブロックへ、24はＡ－２ブロックへ移動している。これは、これらの剥片が道具とし



第６図　ＩＡ区遺物分布図



第７図　IA区接合関係図

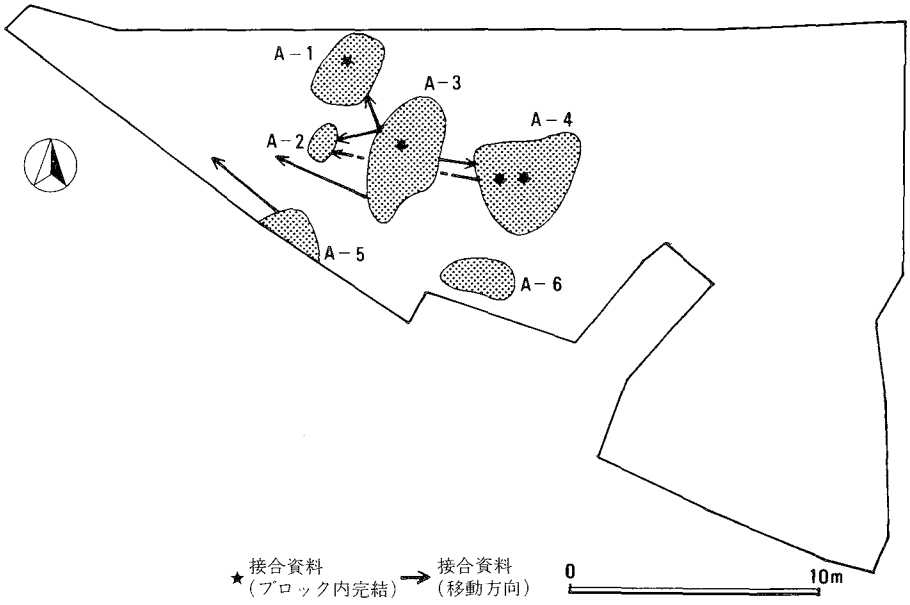
て使用されたことを示している。特に23、27は画一性が強く、組織的に生産されている可能性が高い。

ＡＧ－３（28、29）、ＡＧ－４（30、31）は折断剥片の資料である。２資料とも求心状剥離により作出された剥片を二次的に切断したものと推定される。

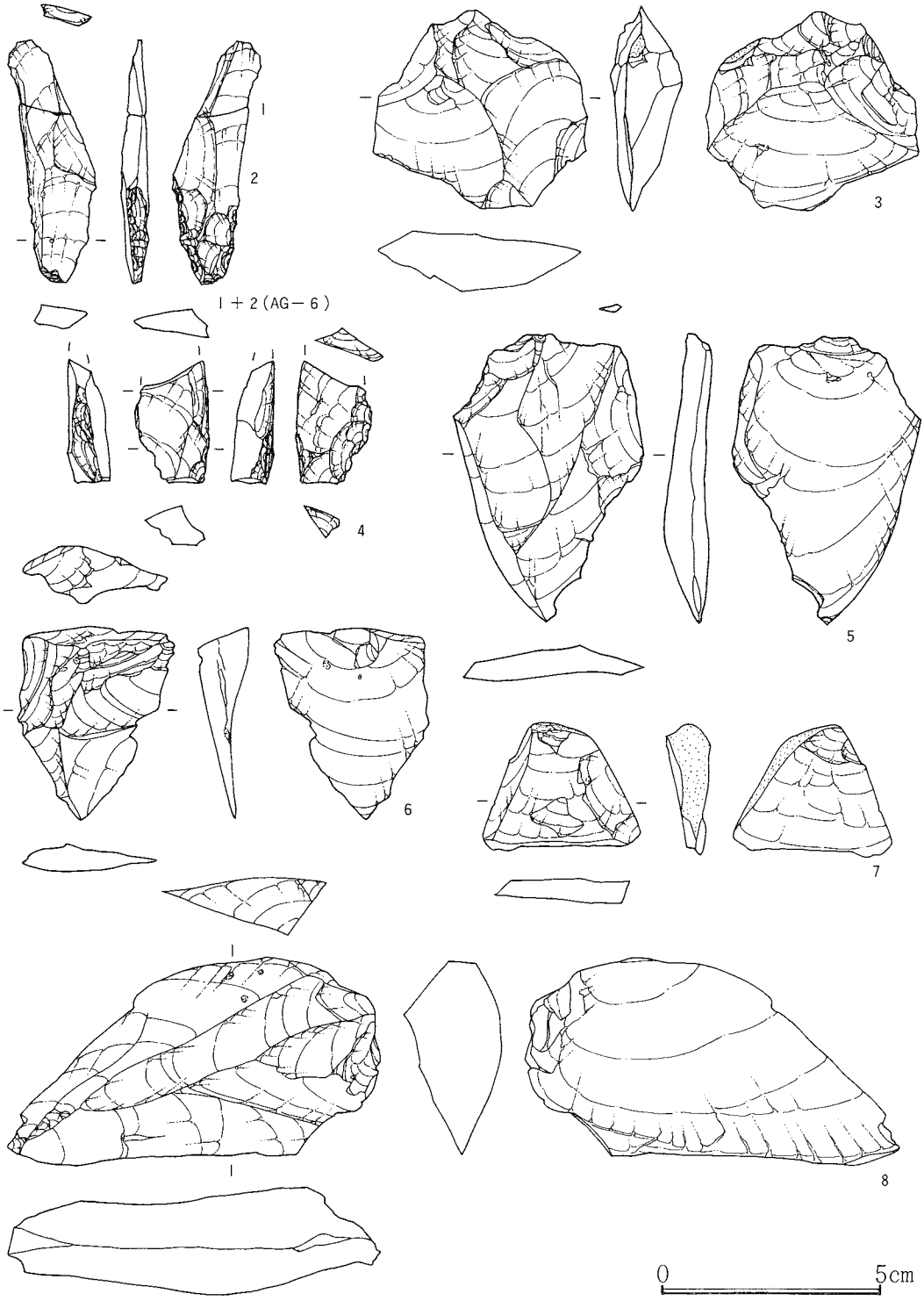
ＡＧ－７（32～35）は横長不定形剥片を連続して剥離している資料である。打面は単剥離面で剥離角度は大きい。剥離作業はＡ－４ブロックで行われたとみられるが、33は二次的に切断されて、Ａ－２ブロックへ移動している。

小　　結

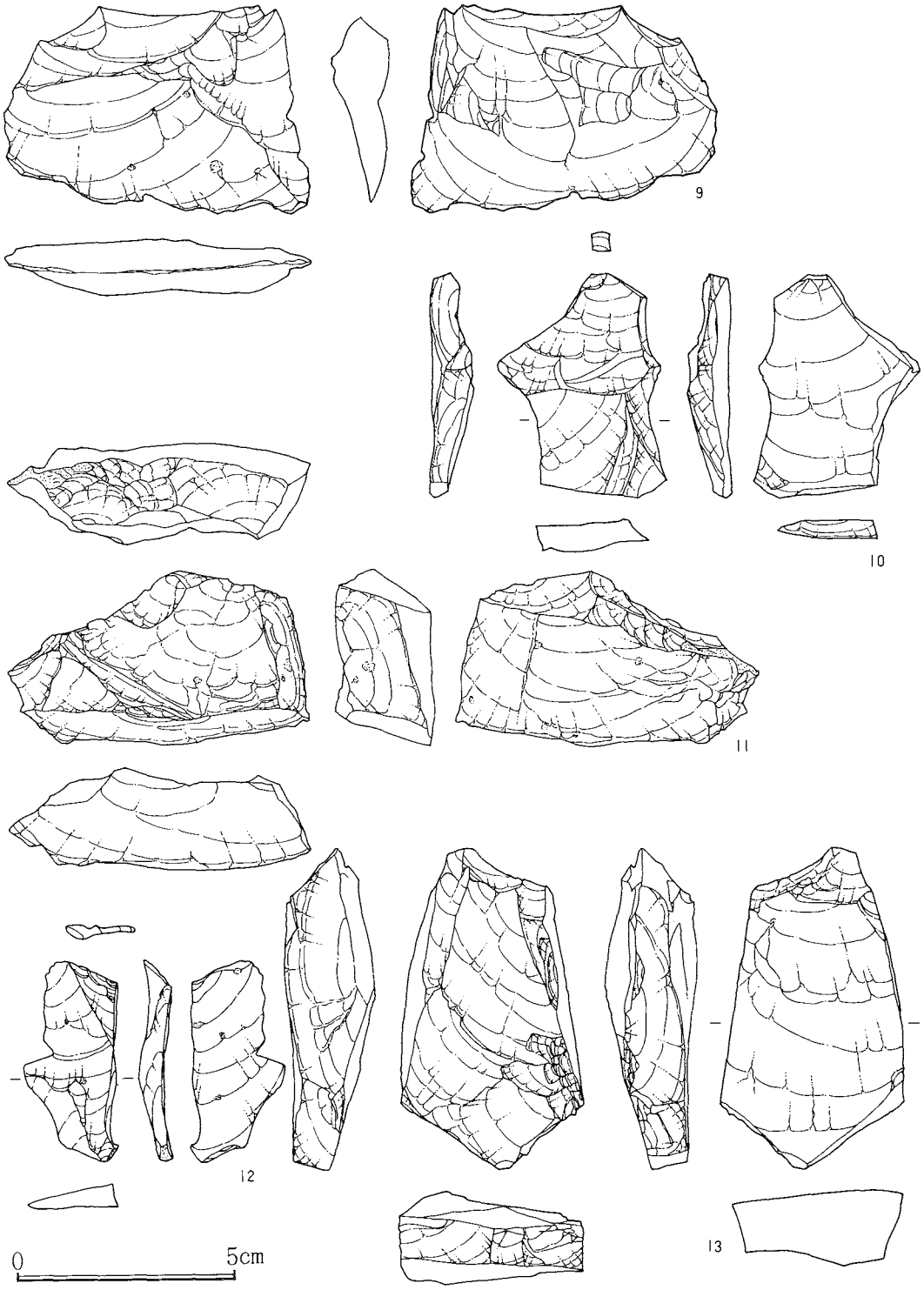
１Ａ区における剥片剥離技術には求心状剥離、横剥ぎ、切断が多用されており、石刃技法の存在はまったくみられない。また、剥片剥離工程についてみると、求心状剥離、横剥ぎによって作出された剥片を二次的に切断する作業工程が随所にみられる。ナイフ形石器については、整形段階で切断手法が用いられることと、調整段階で裏面に平坦剥離が多用されることなどが特徴的である。また、剥片素材の盤状石核や切断手法によって作出された小剥片も特徴的である。



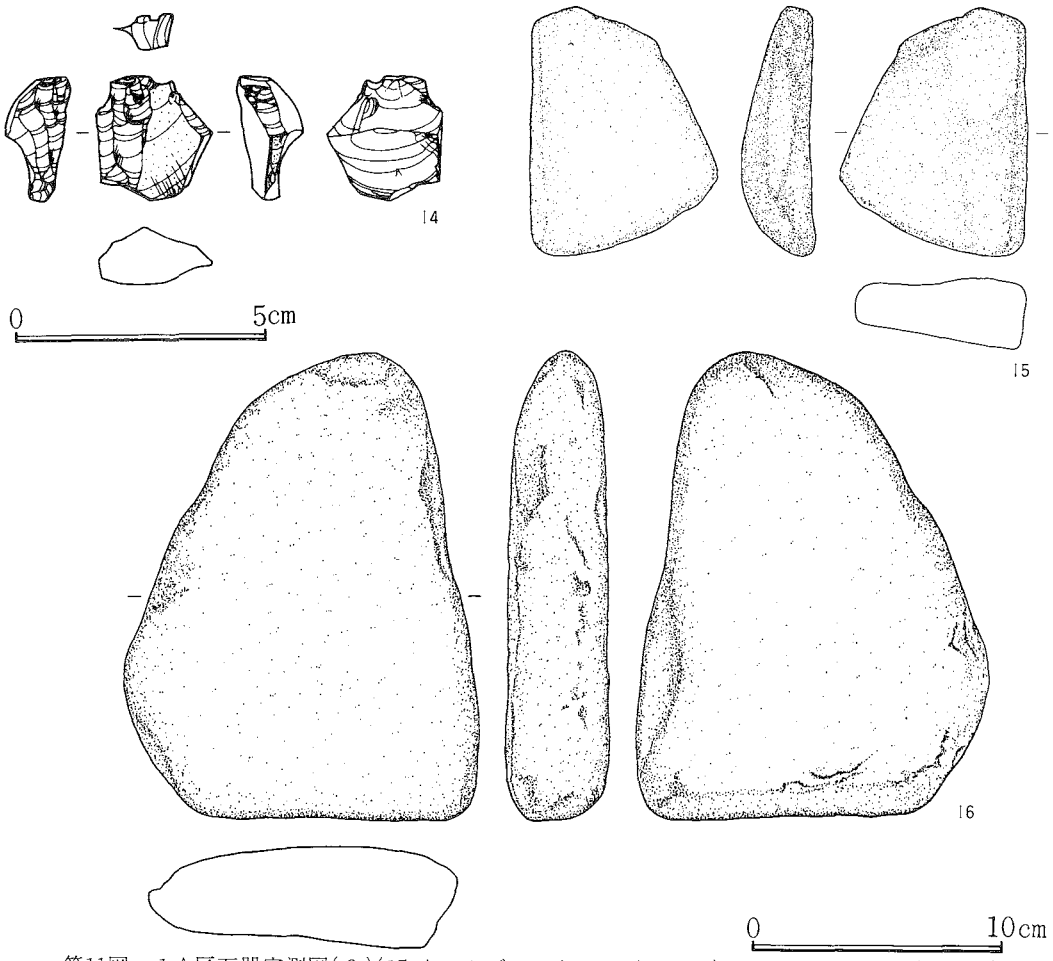
第８図　１Ａ区ブロック相関関係図



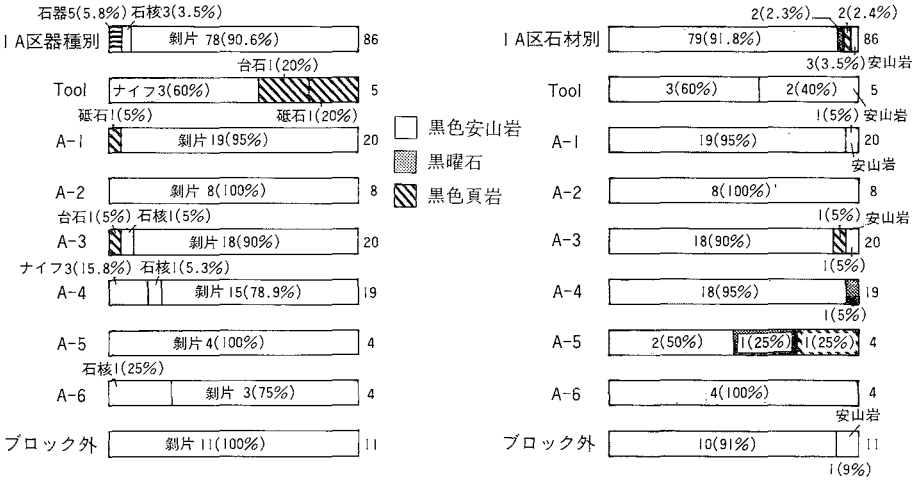
第９図　１Ａ区石器実測図(１)(５・６;Ａ－１ブロック、７;Ａ－２ブロック、３;Ａ－３ブロック、１・２・４・８;Ａ－４ブロック)



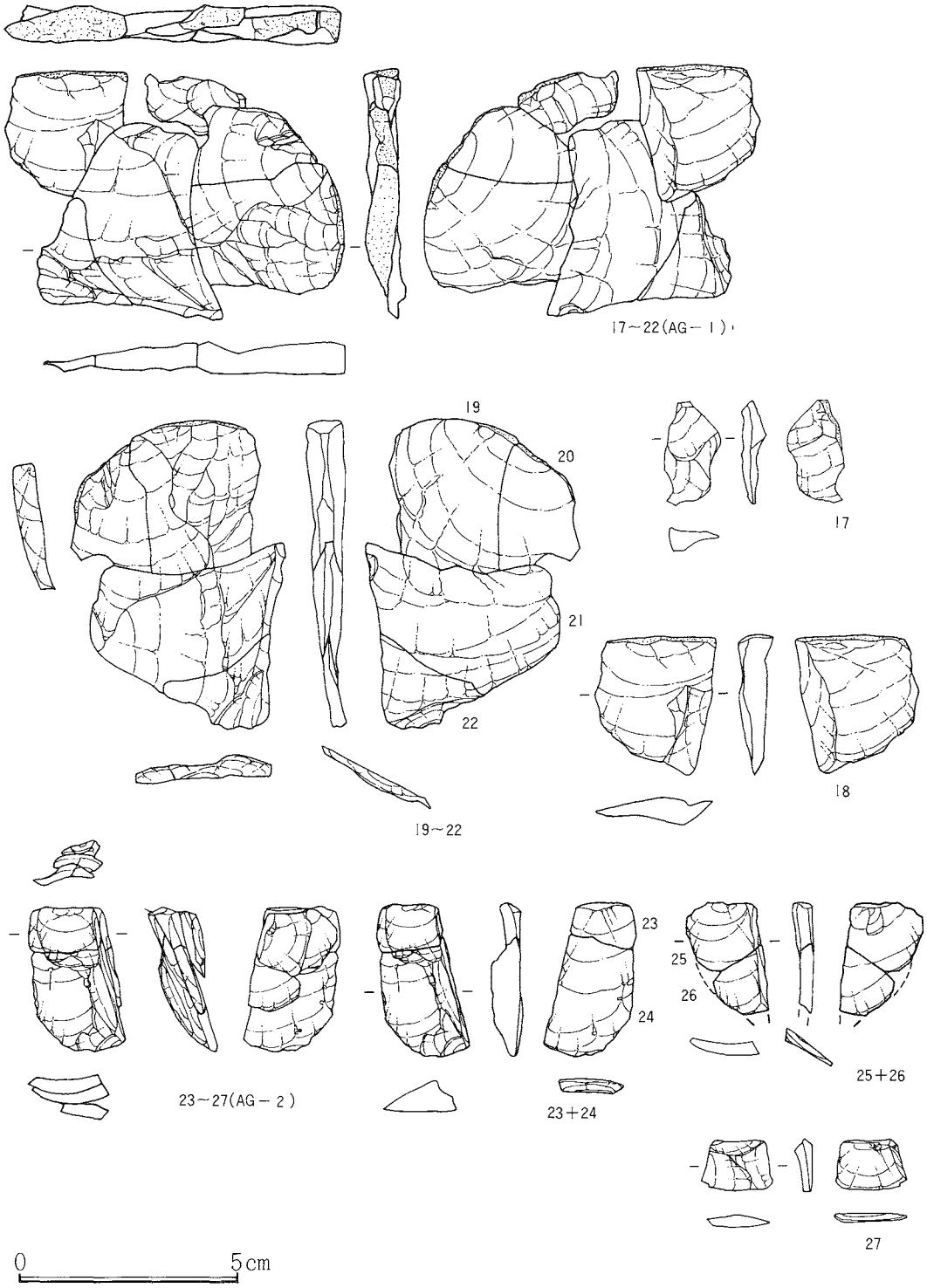
第10図　1A区石器実測図(2)(9;A－1ブロック、11;A－3ブロック、13;A－4ブロック、10・12;A－6ブロック)



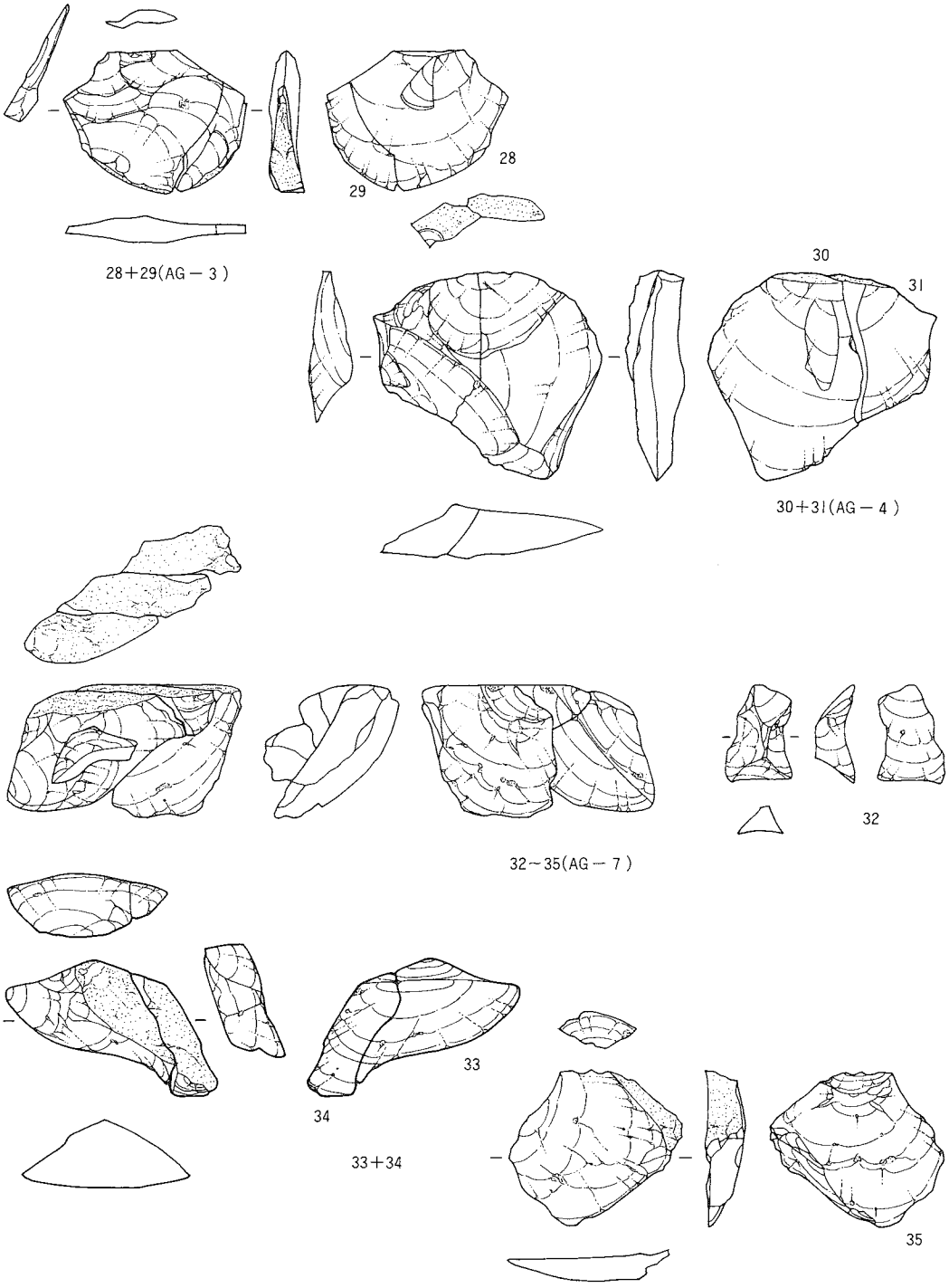
第11図　1A区石器実測図(3)(15;A－1ブロック、16;A－3ブロック、14;A－5ブロック)



第12図　1A区石器器種別・石材別組成図



第13図　1A区石器実測図(4)(23・27;A－1ブロック、24;A－2ブロック、
18～22・25・26;A－3ブロック、17;A－4ブロック)



第14図　1A区石器実測図(5)(30・31;A－1ブロック、33;A－2ブロック、
29;A－3ブロック、32・34・35;A－4ブロック28;ブロック外)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
3S—70	1	1	Fl	An		XIb		19	22	4.5	1.6	
3S—72	1	1	Fl	GAn		XIb		35	17	8.5	4.2	
	2	2	Fl	GAn		XIc		11	10	1.8	0.2	
3S—73	1	1	Fl	GAn	A—1	XIb		14	23	47.0	1.1	
	2	2	Fl	GAn	A—1	XIb	AG—4	43	36	10.3	20.0	30
	3	3	Fl	GAn	A—1	XIb		22	19	6.5	3.1	
	4	4	Fl	GAn	A—1	XIc		27	21	11.7	6.1	
	5	7	Fl	GAn	A—1	XIb		9	10	1.6	0.2	
	6	8	Fl	GAn	A—1	XIb		12	7	6.9	0.6	
	7	9	Fl	GAn	A—1	XIc		65	44	10.4	21.9	5
	8	10	Fl	GAn	A—1	XIc	AG—2	10	14	3.0	0.8	23
	9	11	Fl	GAn	A—1	XIc		9	21	9.0	2.3	
	10	12	Fl	GAn	A—1	XIc		42	36	12.2	10.2	6
	11	13	Fl	GAn	A—1	XIc	AG—4	32	23	10.6	8.1	31
	12	14	Fl	GAn	A—1	XIc		57	66	12.1	38.9	9
	13	15	Fl	GAn	A—1	XIc		14	24	11.0	3.3	
	14	16	Fl	GAn	A—1	XIc		34	40	12.8	18.5	
	15	17	Fl	GAn	A—1	XIc		10	16	5.7	0.9	
	16	19	Fl	GAn	A—1	XIc		21	29	12.2	6.3	
	17	20	Fl	GAn	A—1	XIc		22	36	11.9	9.8	
	18	21	Fl	GAn	A—1	XIc	AG—2	12	16	3.9	0.9	27
	19	22	Fl	GAn	A—1	XIc		32	17	9.3	4.4	
	20	23	砥石	An	A—1	XIc		98	74	27.8	240.0	15
3S—74	1	1	Fl	GAn		XIc		28	32	7.9	5.2	
	2	3	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—1	28	32	7.8	6.4	18
	3	5	Fl	GAn	A—3	XIc		12	16	5.6	1.1	
	4	6	Fl	GAn	A—3	XIc		15	12	3.6	0.6	
3S—75	1	1	Fl	GAn		XIc		7	14	2.7	0.2	
	2	2	Fl	GAn		XIc		10	14	1.8	0.3	
3S—77	1	1	Fl	GAn		XIc		28	33	11.0	8.5	
8T—72	1	5	Fl	GAn		XIc	AG—3	31	35	7.6	8.0	28
	2	6	Fl	GAn		XIc	AG—8	19	22	9.8	2.7	
	3	7	Fl	GAn	A—5	XIa		25	30	10.4	7.4	
	4	8	Fl	GAn	A—5	XIc	AG—8	17	8	6.0	0.6	
3T—73	1	1	Fl	GAn	A—2	XIb		12	16	4.0	0.6	
	2	3	Fl	GAn	A—2	XIb	AG—2	26	18	6.6	3.4	24
	3	4	Fl	GAn	A—2	XIb		23	8	4.6	0.7	
	4	5	Fl	GAn	A—2	XIb		35	19	12.1	8.0	
	5	6	Fl	GAn		XIb		28	32	22.7	20.4	
	6	7	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—2	15	17	3.8	1.0	25
	7	8	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—3	9	16	7.0	1.8	29
	8	9	Fl	GAn	A—2	XIc		30	36	9.1	8.7	7
	9	13	Fl	GAn	A—3	XIc		11	15	1.8	0.4	
	10	14	Fl	GAn	A—2	XIc		18	22	4.8	1.1	
	11	15	Fl	GAn	A—3	XIc		15	27	11.0	2.9	
	12	16	台石	An	A—3	Xa		185	140	42.8	1660.0	16
	13	17	Fl	GAn	A—2	XIc		15	27	10.3	2.0	
	14	18	Fl	GAn	A—2	XIc	AG—7	26	31	16.2	12.3	33
	15	19	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—2	12	16	2.9	0.6	26
	16	21	Fl	Sh	A—5	XIc		45	37	11.9	17.8	
3T—74	1	2	Fl	GAn	A—3	XIb		20	19	7.3	2.0	
	2	4	Fl	GAn	A—3	XIb		33	18	7.5	3.3	
	3	7	Fl	GAn	A—4	XIc		13	8	4.0	0.4	
	4	8	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—1	22	24	3.4	1.3	22
	5	9	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—1	29	24	5.7	3.8	20
	6	10	Fl	GAn	A—3	XIc		45	48	7.1	25.5	3
	7	11	Fl	GAn	A—3	XIc		20	32	5.4	3.5	
	8	12	Fl	Sh	A—3	XIc		22	31	6.8	5.0	
	9	13	Fl	GAn	A—3	XIc		16	25	8.9	2.0	
	10	14	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—1	32	47	6.6	7.4	21
	11	15	Fl	GAn	A—3	XIc	AG—1	37	30	7.3	10.8	19
	12	16	Co	GAn	A—3	XIc		45	65	21.9	60.4	11
	13	17	Fl	GAn	A—4	XIc		21	11	2.7	0.6	
	14	18	Fl	GAn	A—4	XIc	AG—1	22	17	5.4	1.2	17
3T—75	1	2	Fl	GAn	A—4	XIb		50	82	21.7	82.5	8
	2	3	Fl	GAn	A—4	XIc		17	10	4.4	0.4	
	3	4	Fl	GAn	A—4	XIb	AG—7	22	15	7.0	1.9	32
	4	5	Fl	GAn	A—4	XIb	AG—7	29	21	9.4	3.7	34
	5	7	Fl	GAn	A—4	XIb	AG—5	13	13	8.1	0.9	
	6	10	Fl	GAn	A—4	XIc		30	40	8.3	9.5	
	7	12	Fl	GAn	A—4	XIc		5	13	2.0	0.2	
	8	13	Fl	GAn	A—4	XIc		12	17	7.9	1.3	
	9	14	Fl	Ob	A—4	XIc		17	24	9.5	2.8	
	10	15	Fl	GAn	A—4	XIc		33	51	22.3	39.9	
	11	16	Fl	GAn	A—4	XIc	AG—5	23	17	12.3	3.8	
	12	18	Kn	GAn	A—4	XIc	AG—6	10	20	3.8	0.7	1
	13	19	Kn	GAn	A—4	XIc		28	18	9.4	4.1	4

第2表　1A区石器計測表(1)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	14	21	Co	GAn	A－4	XIc		73	44	20.1	70.0	13
3T－77	1	1	Fl	GAn		XIb		20	26	5.8	2.8	
3U－73	1	1	Fl	Ob	A－5	XIb		26	23	11.6	5.7	14
3U－74	1	1	Fl	GAn	A－6	XIc		9	10	3.7	0.3	
3U－75	1	1	Fl	GAn	A－6	XIc		30	45	6.0	4.7	12
	2	2	Fl	GAn	A－6	XIc		24	28	7.0	3.7	
	3	3	Co	GAn	A－6	XIc		51	41	8.2	16.9	10
	4	4	Kn	GAn	A－4	XIc	AG－6	41	19	6.2	4.2	2
	5	5	Fl	GAn	A－4	XIc	AG－7	34	38	9.3	8.9	35

第3表　1A区石器計測表(2)

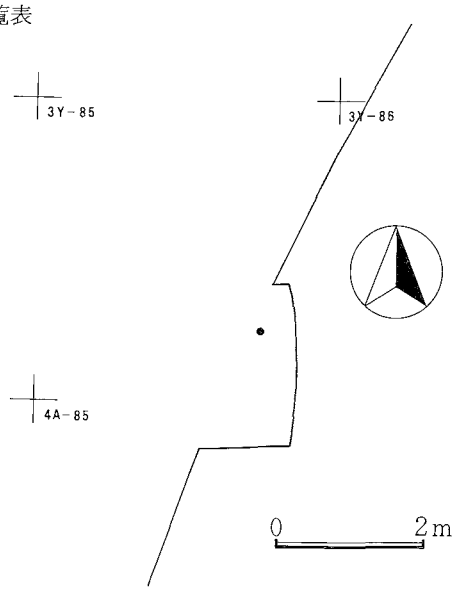
資料No.	個別番号	実測図
AG－1	3T74・11(19)＋3T74・5(20)＋3T74・14(17) ＋　＋ 3T74・10(21)＋3T74・4(22) ↑ 3S74・2(18)	○
AG－2	3S73・8(22)＋3T73・2(24) ↓ 3T73・6(25)＋3T73・15(26) ↓ 3S73・16(27)	○
AG－3	3T72・1(28)＋3T73・2(29)	○
AG－4	3S73・2(30)←3S73・11(31)	○
AG－5	3T75・11←3T75・5	
AG－6	3U75・4(2・Kn)＋3T75・12(1・Kn)	○
AG－7	3U75・5(35)←3T75・4(34)＋3T73・14(33)←3T75・3(32)	○
AG－8	3T72・2＋3T72・4	

第4表　1A区接合資料一覧表

(2)　1B区の遺構と遺物

a．遺構（第15図）

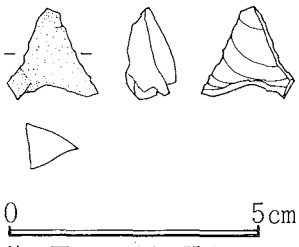
1B区は1A区て1C区の間の小さな谷部分であり、XIc層中より1点の石器が検出された。出土位置は3Y－85グリッドである。



第15図　1B区遺物分布図

b．遺物（第16図）

1はチャート製の剝片である。表面に大きく原礫面を残す。打面部は欠落している。計測値は長さ19㎜、幅18㎜、厚さ9.7㎜、重さ1.9ｇである。



第16図　1B区石器実測図

(3)　1C区の遺構と遺物

a．遺構（第17図～第19図）

出土状況

1C区ではXI_b層～XI_c層中位にかけて遺物が検出された。大部分はXI_c層上位より検出されており、また平面的分布、石材等からみても同一の石器群であり、生活面はXI_c層上位にあったとみられる。

1C区からは523点の遺物が検出された。このうち3点は3X－93、3W－94、3Y－94グリッドから各1点ずつ出土し、残りは3W～4Dライン、98～105ラインの南北24m、東西22mの範囲内より検出された。さらにこれらの遺物は14のまとまり（C－1～14ブロック）に分けることができる。

C－1ブロック　3W－100グリッドに位置する。4m×3.5mの範囲に19点の遺物が分布する。南東部分に密集する部分が存在する。黒曜石が多いブロックであり、遺物の内訳はナイフ形石器2点、削器2点、二次加工のある剝片1点、磨石1点、剝片13点である。石器（狭義）の比率の大きいブロックである。

C－2ブロック　3W－101、3X－101グリッドに位置する。3×2.4mの範囲に27点の遺物が分布する。石器としてはナイフ形石器1点、削器1点(2点接合)、二次加工のある剝片1点が出土している。

C－3ブロック　3W－102、3X－102グリッドに位置する。4m×1.5mの範囲に32点が分布する。内訳はナイフ形石器1点、石核1点、剝片30点である。黒色安山岩と黒色頁岩の占める割合が大きく、黒曜石は少ない。

C－4ブロック　3X－99・100、3Y－99・100グリッドに位置する。3m×3.5mの範囲に40点の遺物が存在し、内訳はナイフ形石器1点、削器2点(3点中2点接合)、石核1点、剝片35点である。黒色安山岩が黒曜石より多いブロックである。

C－5ブロック　3Y－99グリッドに位置し、2.5m×2mの範囲に9点の遺物が存在する。二次加工のある剝片1点と剝片7点であり、黒曜石が6点と多いブロックである。

C－6ブロック　3Y－99・100、4A－99・100グリッドに位置する。3m×6mの半円状の分布域をもつ。56点の遺物が存在し、ナイフ形石器3点、削器2点(5点中4点接合)、二次加工のある剥片3点、石核1点が含まれる。黒曜石が6割を占めるブロックである。

C－7ブロック　3Y－100・101グリッドに位置し、3m×4.5mの範囲に27点の遺物が分布する。削器3点、二次加工のある剥片1点がある。黒色安山岩が過半数を占めている。

C－8ブロック　4A－99・100グリッドに位置し、1.5m×3mの範囲に12点の遺物が分布する。二次加工のある剥片1点、敲石2点、剥片9点から成り、黒色安山岩が大部分を占める。C－8ブロックの西には台石が存在しており、C－8ブロックと関係あるとみられる。

C－9ブロック　4A－101、4B－101グリッドに存在し、4m×2mの分布域をもつ。28点の遺物が存在する。内訳はナイフ形石器1点、削器3点(4点中2点接合)、二次加工のある剥片1点、剥片22点であり、大部分は黒色安山岩である。C－9ブロックは作業の中心的ブロックと推定される。

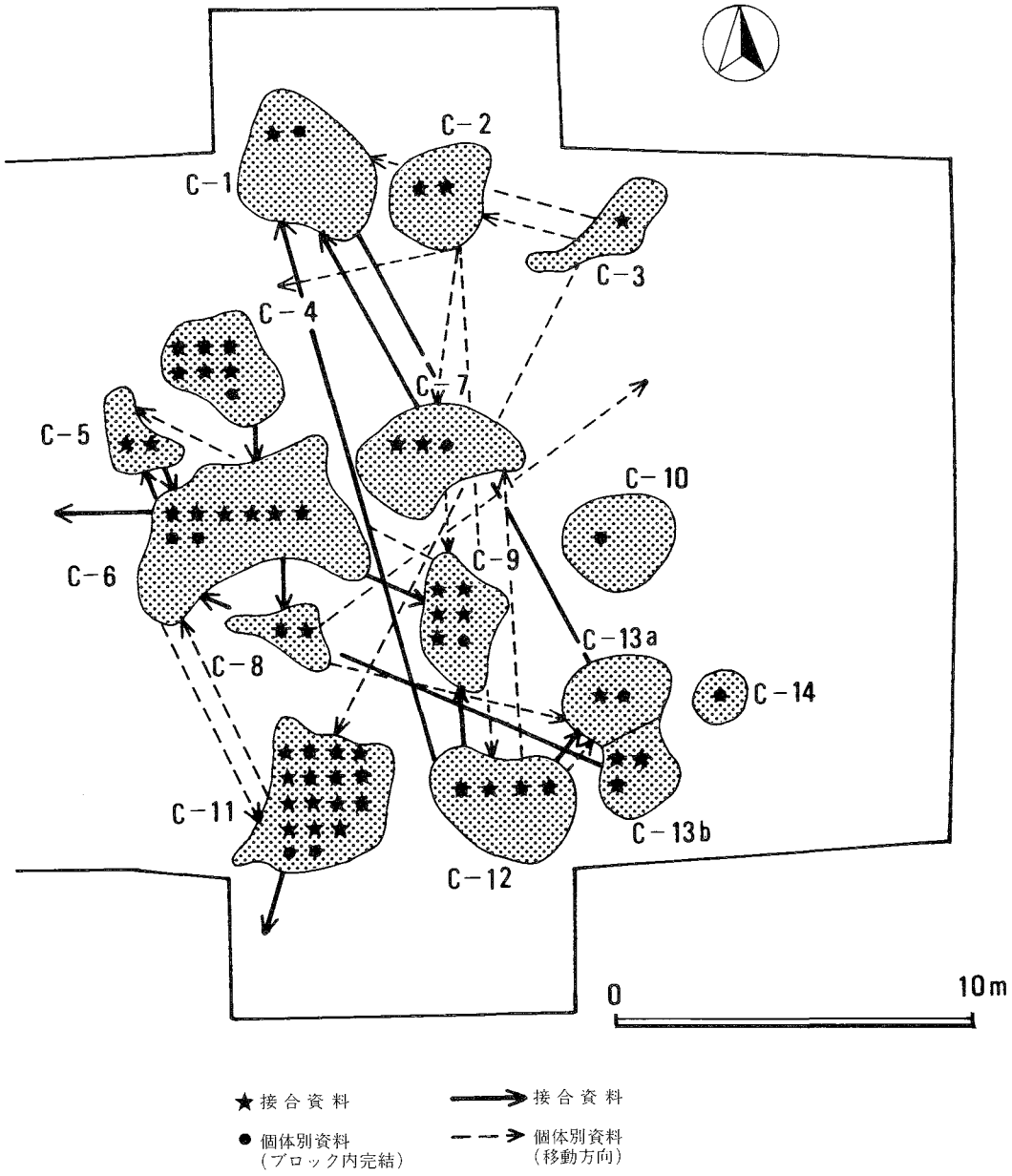
C－10ブロック　3Y－102、4A－102グリッドに位置し、2.5m×3mの範囲に11点の遺物が分布する。削器1点、敲石1点、剥片9点から成る。黒色安山岩が多いほか、チャートが存在する。

C－11ブロック　4B－100、4C－99・100グリッドに位置する。4m×4mの範囲に137点の遺物が密集する。黒曜石が109点と非常に多く80%を占める。また、1C区全体の黒曜石数の38.2%を占め、他のブロックと比較して突出している。遺物の内訳はナイフ形石器2点、二次加工のある剥片3点(4点中2点接合)、石核1点、剥片130点である。

C－12ブロック　4B－101・102、4C－101・102グリッドに位置し、3m×4mの範囲に54点の遺物が分布する。C－11と同じく、黒曜石の占有率が高い。遺物の内訳は局部磨製石斧1点、二次加工のある剥片1点(2点接合)、剥片51点である。ブロックの東寄りに遺物集中部分が存在する。

C－13ブロック　4A－102、4B－102グリッドに位置する。4m×3mの範囲に30点の遺物が分布する。このブロックは遺物分布と石材から、さらにa、b2つのサブブロックに分けることができる。C－13aブロックは北半部分で、16点から成る。石材は81%が黒色安山岩で、黒曜石は少ない。遺物の内訳はナイフ形石器1点、磨石1点、剥片14点である。一方C－13bブロックは南半部分で、14点から成る。石材はC－13aブロックとは対照的に黒曜石が86%で、黒色安山岩は少ない。内訳は削器1点(2点接合)、二次加工のある剥片1点(2点接合)、磨石1点、剥片9点である。このうち、磨石(127)はC－1ブロックの磨石(128)と接合関係にある。

C－14ブロック　4B－103グリッドにあり、1.2m×1.2mの範囲に14点の遺物が分布する。すべて剥片であり、黒曜石と黒色安山岩の比率は半々である。



第19図　1C区ブロック相関関係図

接合資料・個体別資料とブロックの関係

接合資料をみると、接合関係(註2)がブロック内で完結するものと、ブロック間に及ぶものがある。これはブロックが単に石器製作の場ではなく、使用の場でもあることに帰因すると考えられる。

まず、ブロック内で完結する資料についてみると、C－1、13aブロック1例、C－2、5、

7、8ブロック2例、C—13bブロック3例と少ないが、C—9ブロックでは5例、C—4、6ブロック6例と多く、C—11ブロックでは15例と群を抜いて多い。一方、C—10、14ブロックでは1例も存在しない(第19図)。これらの資料中には使用時の欠損と考えられる例もあるが、基本的にはブロックの石器製作頻度を反映していると推定される。

ブロック間で接合する例は第19図、第5表のとおりであり、近接するブロックばかりでなく、かなり離れたブロックでも接合している。そして、接合資料のうち、剥片剥離作業が行われた場所から移動した例について、器種と移動方向についてみることにする。

移動した器種では磨石、削器、二次加工のある剥片など石器（狭義）が多い。また剥片でも使用された可能性のある、形の整ったものが多くみられる。そして、移動の方向についてみると、C—6ブロックから他のブロックへ移動するものが4例と多く、逆にC—6へ移入されるものも2例ある。また移動方向不明ながら、C—6ブロックと関係するものも1例ある。そして、C—12ブロックでは他のブロックへ移動するものが3

接合資料	母ブロック	移動先	移動器種
CA—1	C—1	↔ C—13a	磨石（127・128）
CG—3	C—6	→ ブロック外	FL（55）
CG—6	C—6	→ C—5	FL
CG—13	C—6	→？C—9	FL（90・91）
CG—17	C—12	→？C—13a	FL（124）
CO—2	C—7	→ C—1	Sc（9）
CO—8	C—5	→？C—6	FL
CO—14	C—4	→ C—6	FL（貝殻状）（23）
CO—16	C—6	→ C—8	R・F（70）
CO—17	C—12	→ C—9	R・F（87）
CO—26	C—12	→ C—1	FL
CO—30	C—6	↔ C—13b	FL（52・53）
CO—35	C—11	→ ブロック外	FL

第5表　ブロック間接合する接合資料一覧表

個体別資料	母ブロック	移動先	種動器種
母岩—2	C—3	→ C—2	Sc（13・14）
母岩—3	C—2	→ C—7	FL
		→ C—12	FL
		→ ブロック外	FL
母岩—4	C—3	→ C—1	FL
母岩—5	C—3	→ C—11	FL
母岩—9	C—6	→ C—11	Kn（98）
母岩—11	C—7	→ C—9	FL
母岩—12	C—8	→ ブロック外	FL
母岩—13	C—8	→？C—13a	FL
母岩—15	C—9	→ C—5	FL
母岩—18	C—12	→ C—13a	FL（CG—7）
		→ C—13a	Kn（112）
母岩—22	C—12	→ C—7	FL（63）
母岩—23	C—11	→ C—6	Sc（45）

第6表　ブロック間で移動する個体別資料一覧表

例あるが、他のブロックより移入されるものはみられない。一方、C－1、9ブロックでは、他のブロックより移入される傾向が強い。

次に、個体別資料についてみると、第19図、第6表のとおりである。まず、ブロック内で完結する資料は11例であり、特に偏在性は認められない。一方、複数ブロック間にわたって存在する資料についてみると、移動の母ブロックとなるのは、C—13ブロック3例、C－8、12ブロックが各2例と供給元となっている。そして(註3)移動先のブロックでは、C－7、11、13aブロックが各2例移入されている。移動した器種としては、ナイフ形石器2例、削器2例、剥片11例（1例は接合資料）であり、石器（狭義）が移動している傾向が認められる。

以上、接合資料・個体別資料より、ブロックの性格と相互の関係についてみることにする。移動の母ブロックとなり、移出傾向の強いブロックはC－3、12、4ブロックで、移入傾向の強いブロックはC－1、13aブロックである。また、移出入のあるブロックはC－6、7、11、2、8、9ブロックである。そして、移出入ともないブロックはC—10、14ブロックである。

次に移動頻度では、C－6、12ブロックが最も高く、活動の核となっていることが推定される。また、C－7、9ブロックは各ブロックの間に位置し、移出入も多い。さらに、これらのブロックの上を通過する形で移動する資料も多く、活動の交差点的存在のブロックと言うことができる。

一方、C—11ブロックは、接合・個体別資料からみると、資料が群を抜いて多いにもかかわらず、大部分がブロック内で完結してしまい、閉鎖性が強いブロックである。また、C—10、14ブロックも他のブロックと関係をもたず、閉鎖的である。

小　　結

1C区のブロック相互の関係について、ブロックの性格（器種、石材組織、数量）、位置関係、接合・個体別資料から総合的に考えてみることにする。

まず、各ブロックの同時性については、接合、個体別資料などからみて、一時期に形成されたと判断される。基本的には20m×15mの楕円形の範囲内にまとまっており、個々のブロックもある種の制約を受けて楕円形になるように展開していると推定される。

次に、石器の移動状況からブロックの性格について考えてみると、以下の4つに分類される。

Ⅰ型　主として石器製作が行われ、他のブロックへ移出する石器生産型ブロック（C－3、4、12）(註4)

Ⅱ型　石器の移出入ともある石器生産消費型ブロック（C－2、5、6、7、8、9、13b）

Ⅲ型　石器の移入傾向の強い石器消費型ブロック（C－1、13a）

Ⅳ型　ブロック内で移動が完結し、石器製作と使用がブロック内で行われる自給自足型ブロック（10、11、14）

これら、Ⅰ～Ⅳ型は相互に関連性を持ちながら遺跡内に存在し、一つの集団を形成していると

考えられる。

また、これらのブロックは幾つかの有機的結合をもつユニット（ブロック群）にまとまっていることがわかる。C－1、2、3ブロックは遺物分布域の北辺に並んでおり、他のブロックとやや距離を置いて位置している。相互に個体別資料による関係をもち、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ型ブロックが各1つずつ存在し、相互補完的関係をもっている。これをユニット1とする。

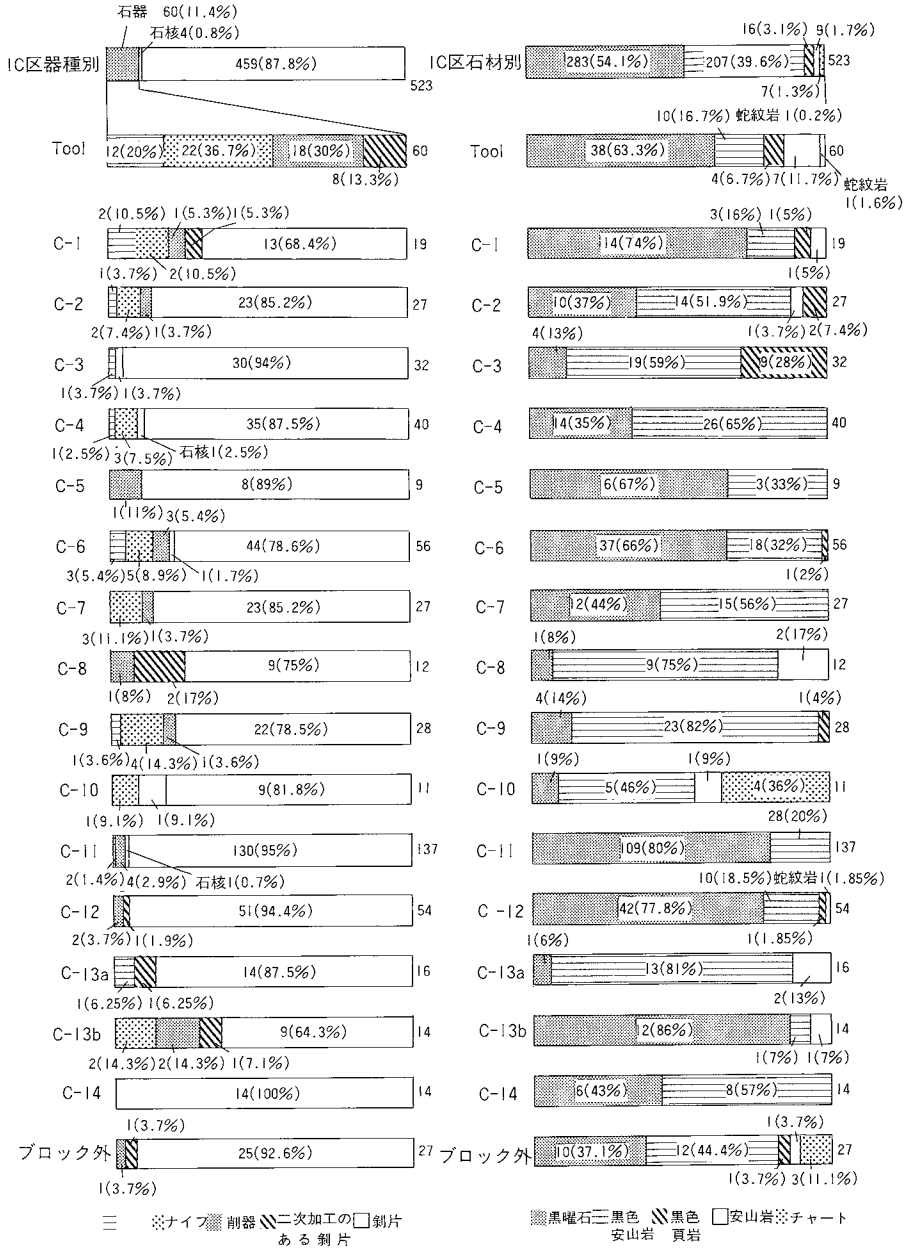
C－6ブロックはこの遺跡の中で、あらゆる面で中心的色彩の強いブロックである。このブロックを核として、C－4、5、7、8ブロックが周囲に展開する。これらのブロックはC－7ブロックを除き、相互に関係をもっている。また、C－7ブロックについても、位置的にはC－6ブロックの東に隣接しており、石材組成もC－6と類似していることから、このグループの構成員とみなすことができる。このブロック群はC－4（Ⅰ型）を除き、他はすべてⅡ型のブロックである。これをユニット2とする。

C－9、10、12、13a、13b、14ブロックは遺物分布域の南東に位置している。このグループの核となるのはC－12ブロックであり、C－9、C－13a・bブロックは相互に関係を有している。これら中心グループはⅠ型（C－12）、Ⅱ型（C－9、13b）、Ⅲ型（C－13a）が相互に役割を補う形で存在している。そして、C－10、14ブロックはこの中心グループに従属するように周囲に位置しているが関係をもたないⅣ型である。このうち、C－14ブロックは小ブロックで、石器（狭義）もないことから、独立して存在するのは困難である。一方、C－10ブロックは小ブロックながら石器（狭義）を持ち、他のブロックの所持しないチャートを有しているなど、差異が認められる。或いは独立存在するブロックの可能性もあるが、位置的条件を重視し、同じユニットの構成員をとして把えることにする。これをユニット3とする。

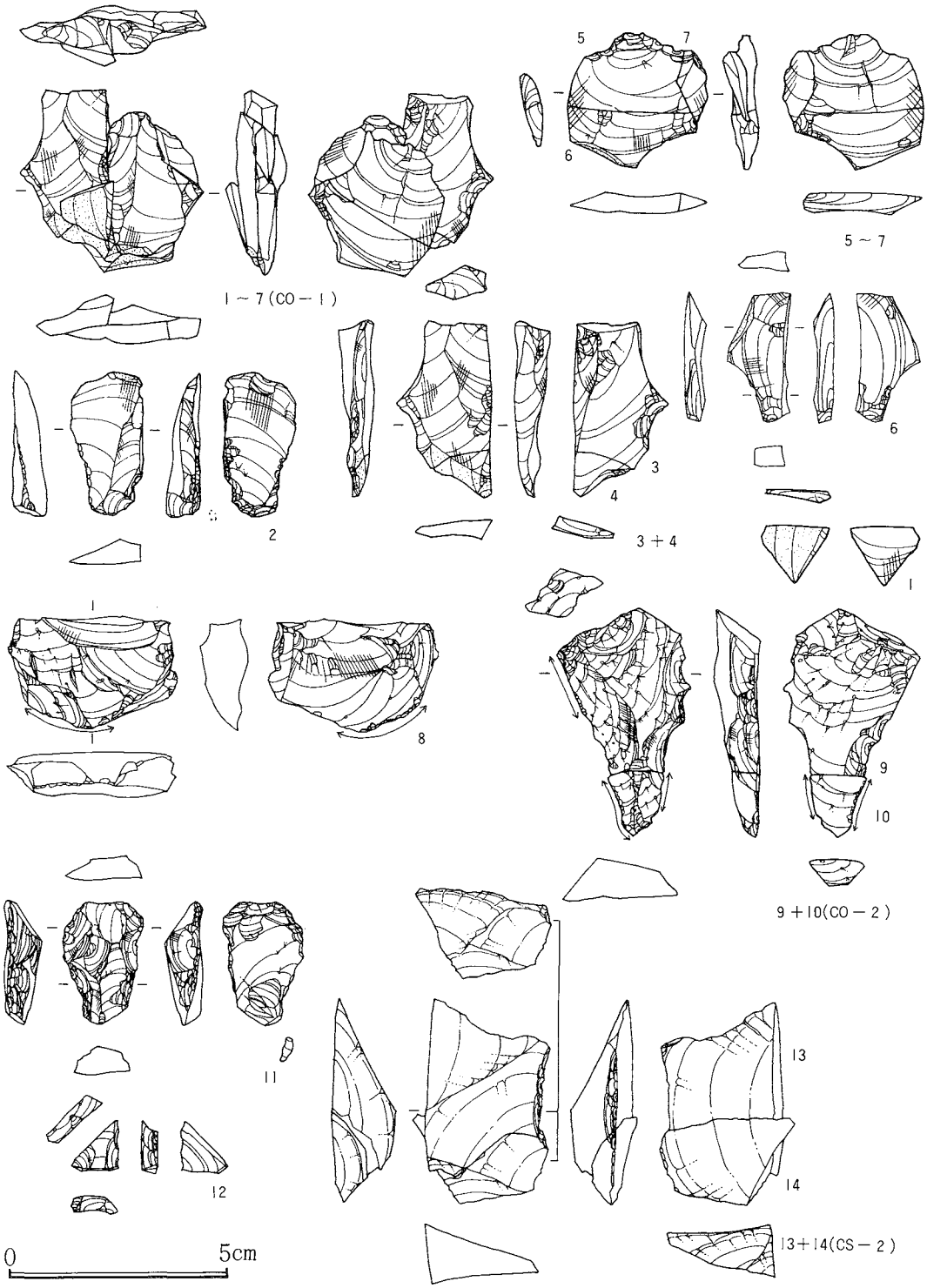
残るC－11ブロックであるが、黒曜石を多数所有し、密集してブロックが完結する形状を呈しているなど、他のブロックと異なる点が多い。また、Ⅳ型であり、閉鎖性が強く、石器（Tool）も多く所有していることから、1ブロックでユニットを構成するものと考えられる。これをユニット4とする。

次にユニット相互の関係についてみると、ユニット2を中心として、北側にユニット1、南側にユニット3、4が展開する。そして、東側にはブロックの存在しない開口部が存在しており、東に「コ」の字形に開いた集落構造をもっていたと推定される。また、ユニット2とユニット3はC－7、9ブロックを共有する形で密接な関係をもっていると考えられ、ユニット1はこれらのユニットとはやや疎な関係にあると判断される。そして、ユニット4についてはユニット3とは近いにもかかわらず、ほとんど関係を持たず、ユニット1、2と疎な関係で結びついている。

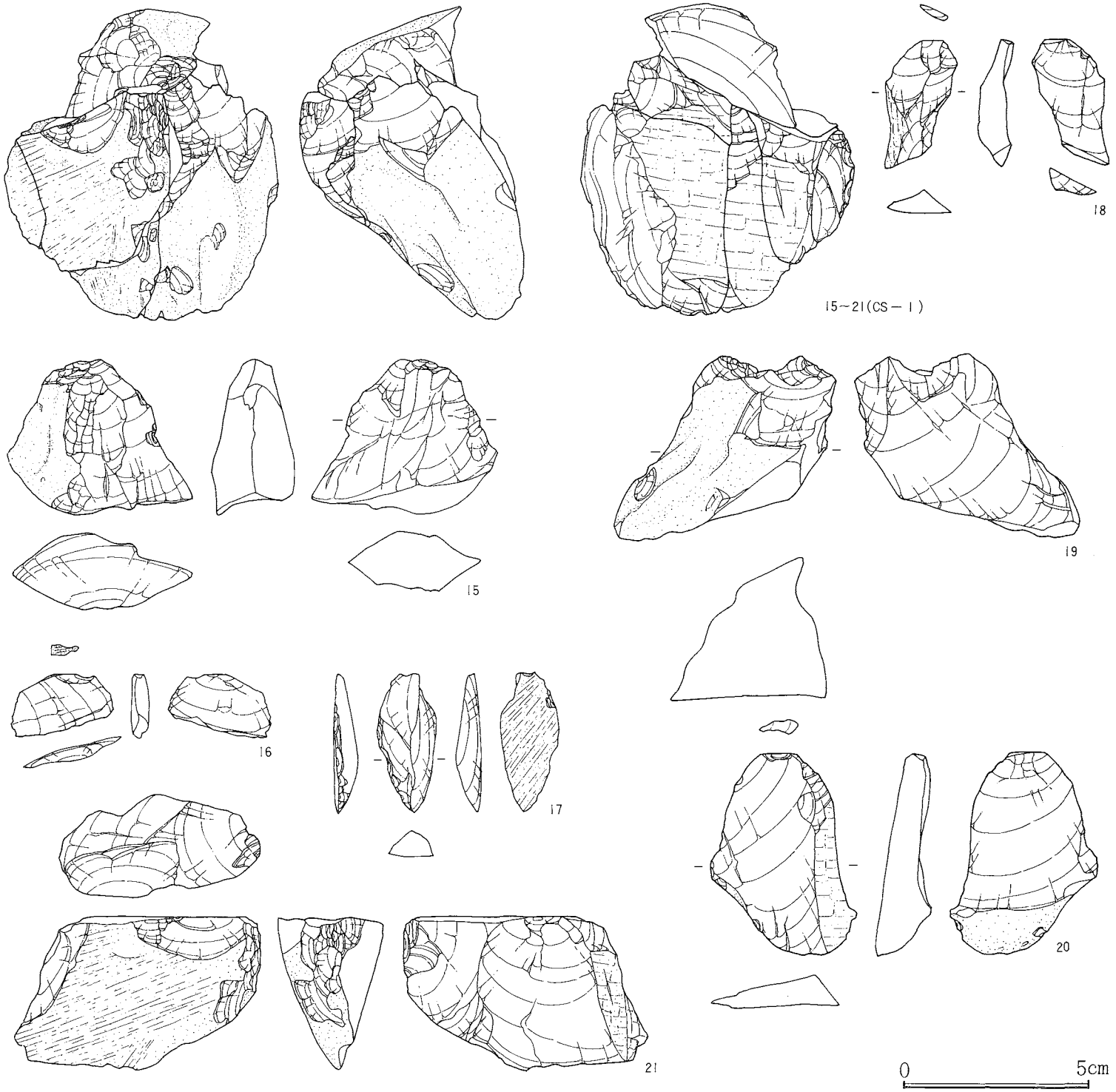
これらのユニットは同時期に構成されたもので、同一生計を営む集団であると推定される。こういった集団は狩猟を行う際の単位集団であるとみられ、1C区の場合も、短期間に営まれたキャ



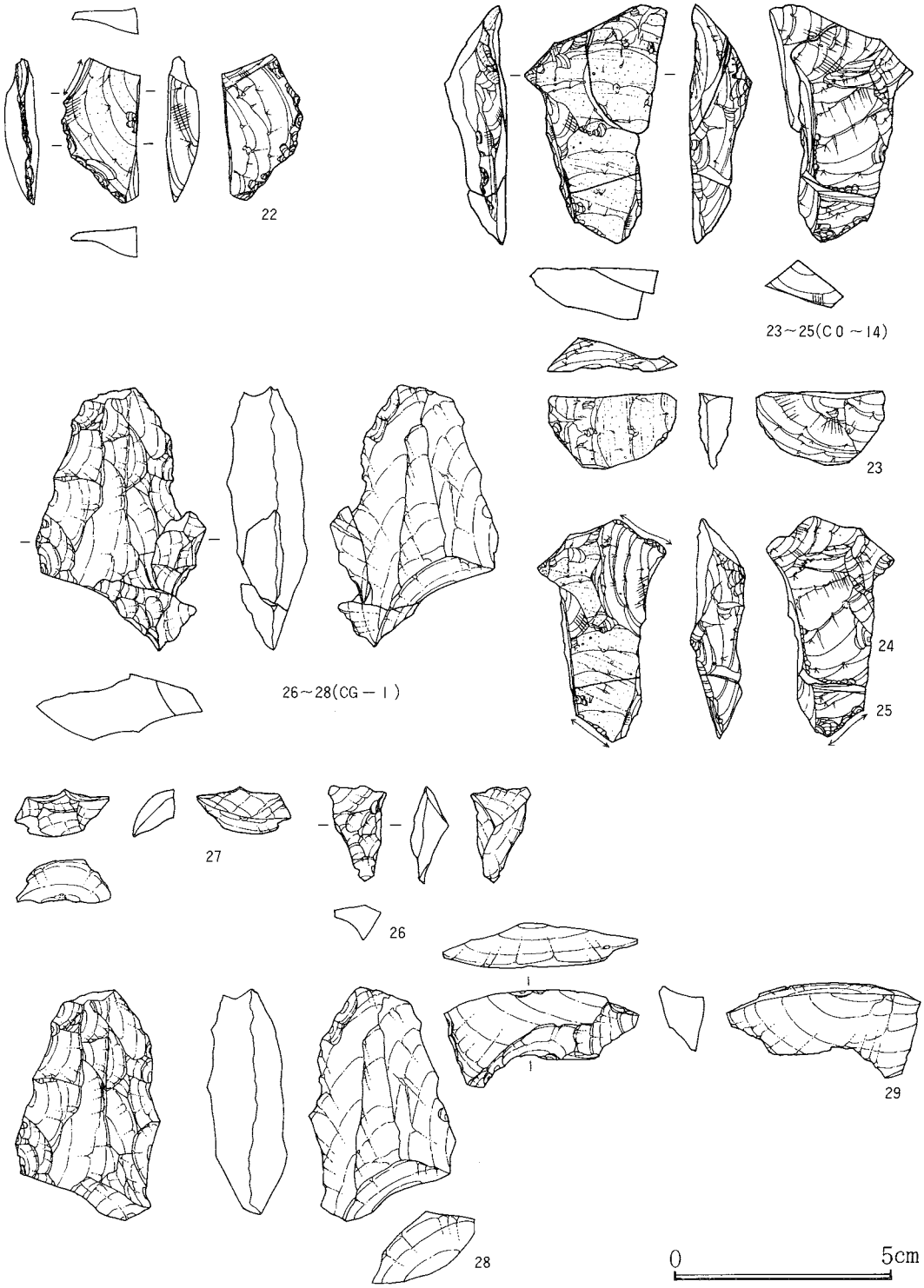
第20図　IC区石器器種別・石材別組成図



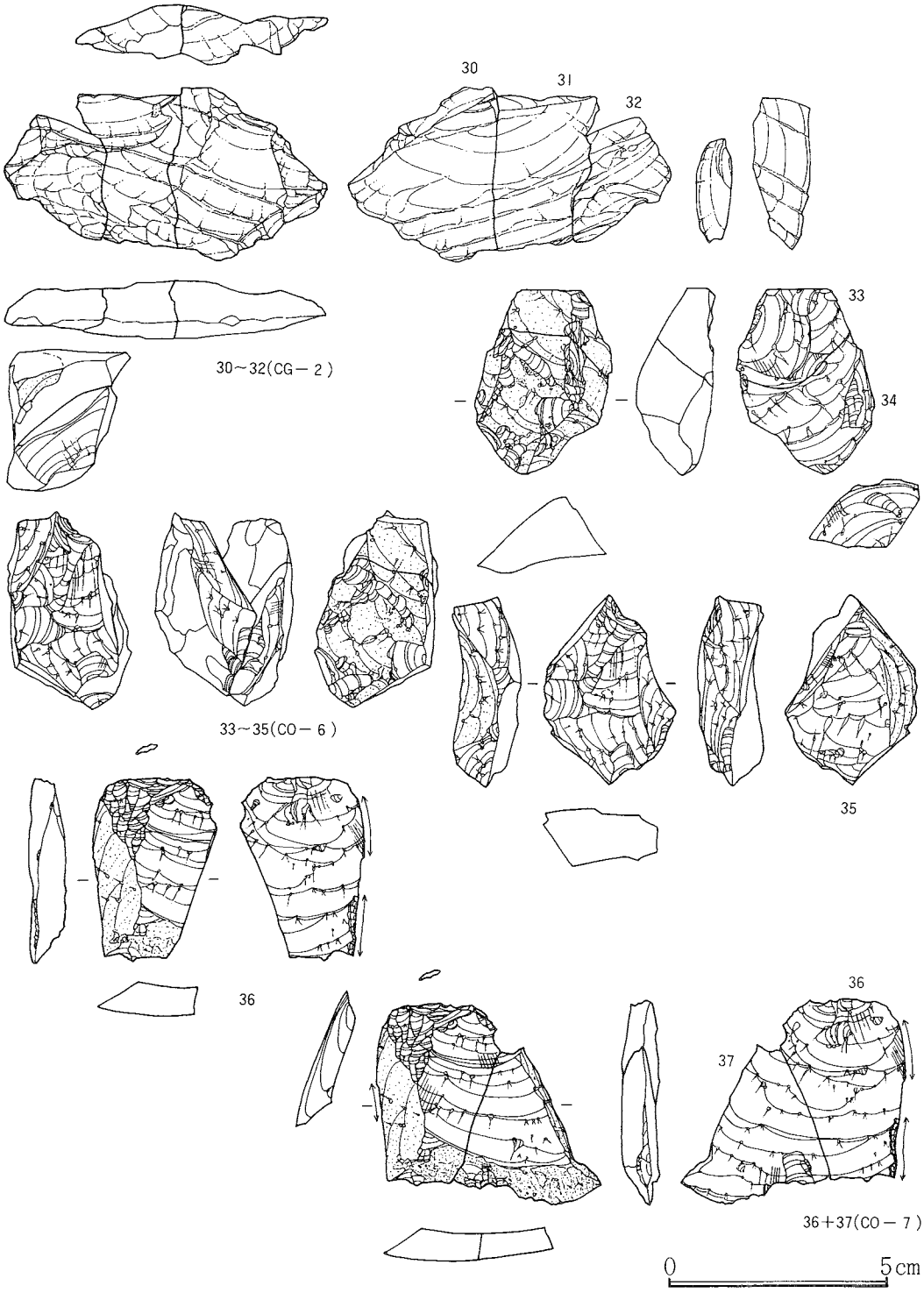
第21図　1C区石器実測図(1)(1～9;C－1ブロック、11～14;C－2ブロック、10;C－7ブロック)



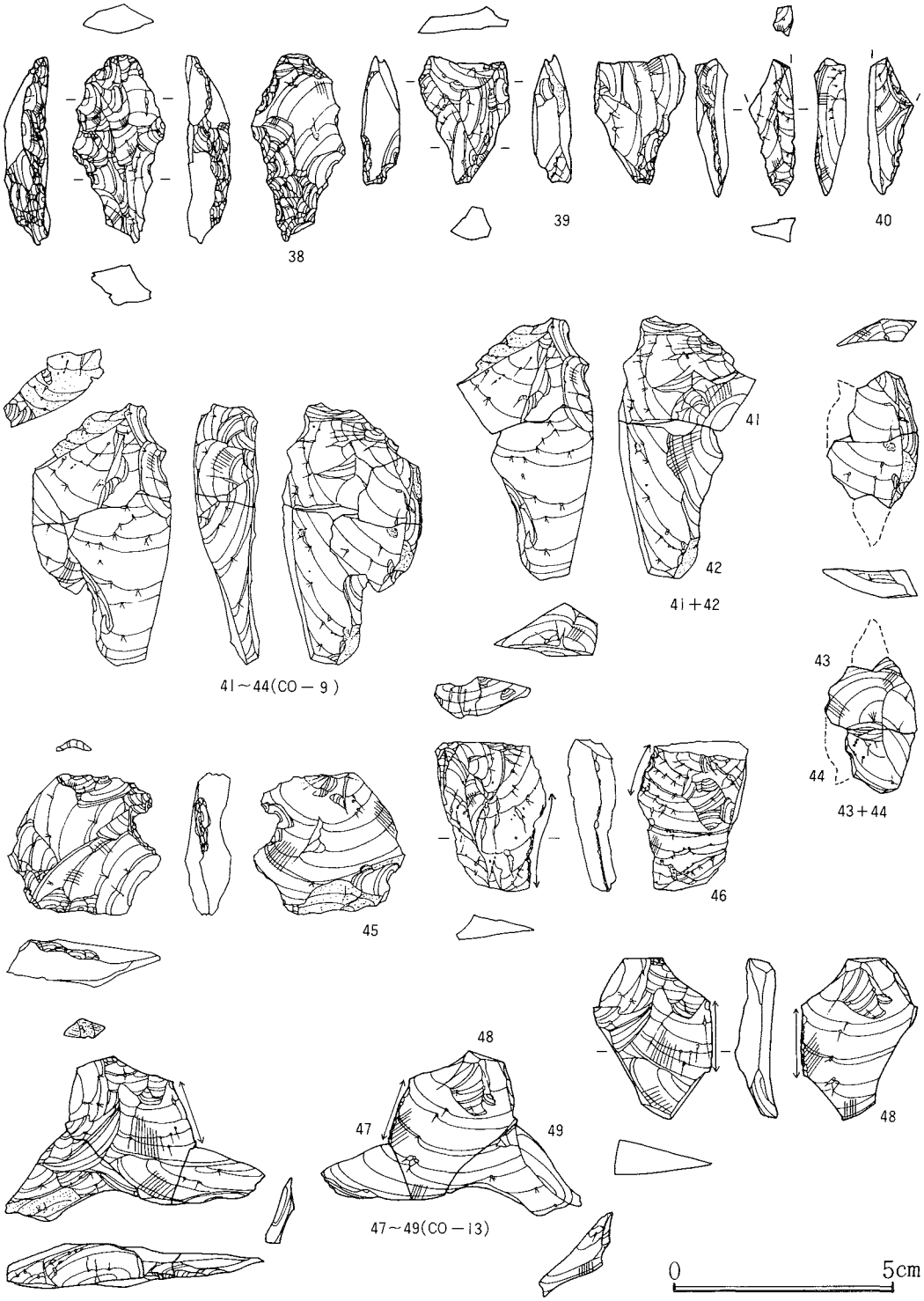
第22図　1C区石器実測図(2)(15～21;C－3ブロック)



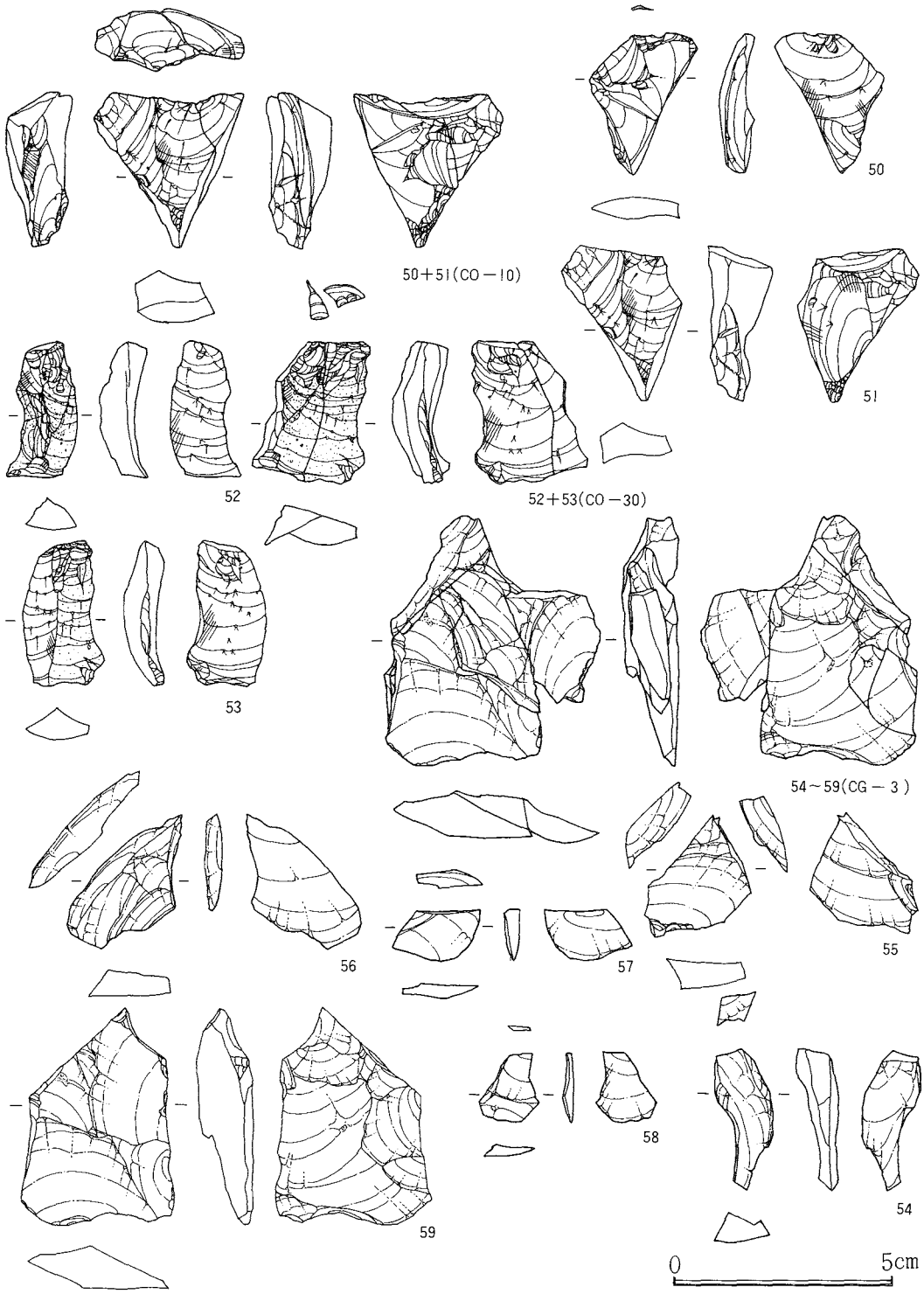
第23図　1C区石器実測図(3)(22・24～29;C－4ブロック、23;C－6ブロック)



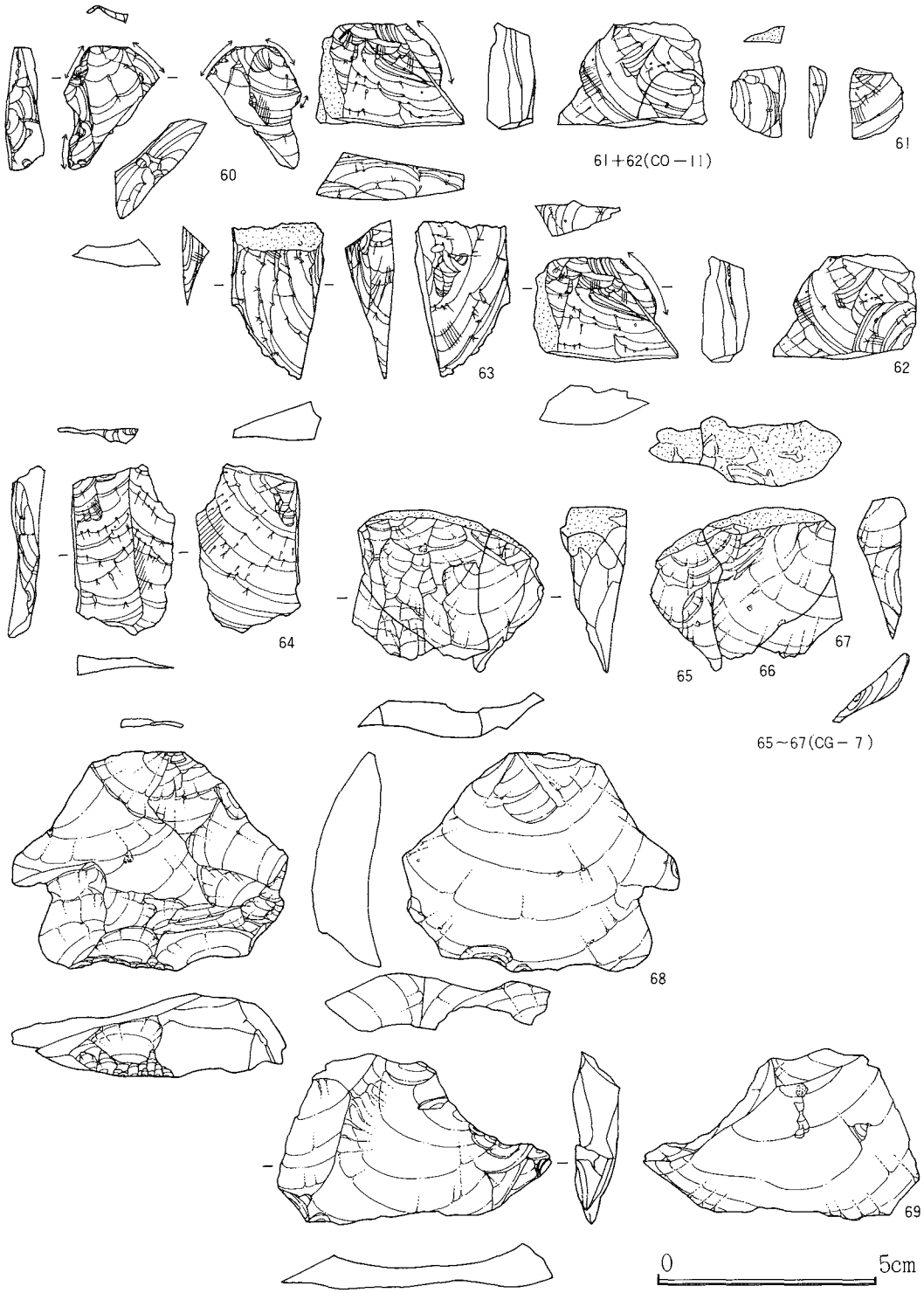
第24図　1C区石器実測図(4)(30～35;C－4ブロック、36・37;C－5ブロック)



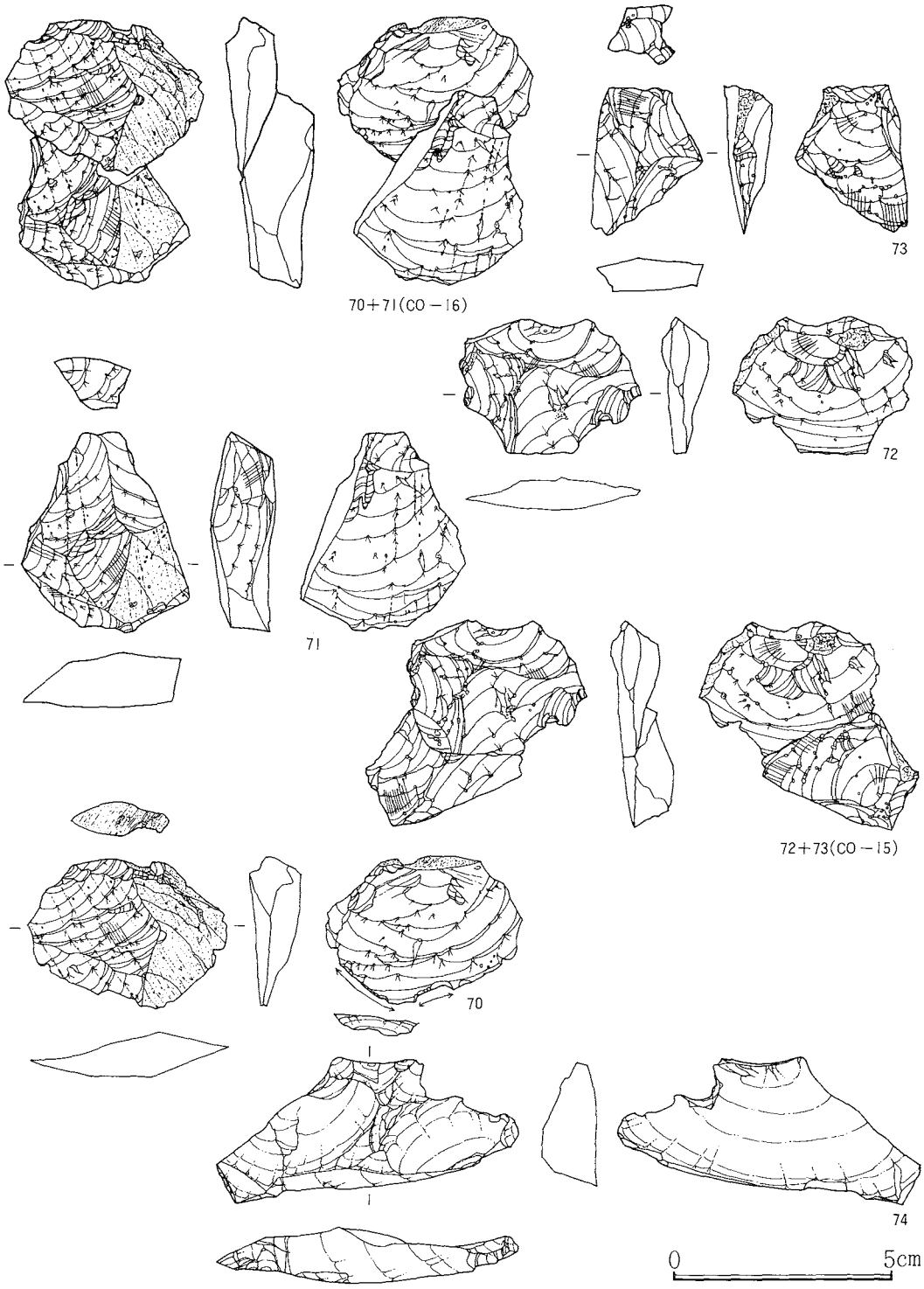
第25図　1C区石器実測図(5)(38～49;C－6ブロック)



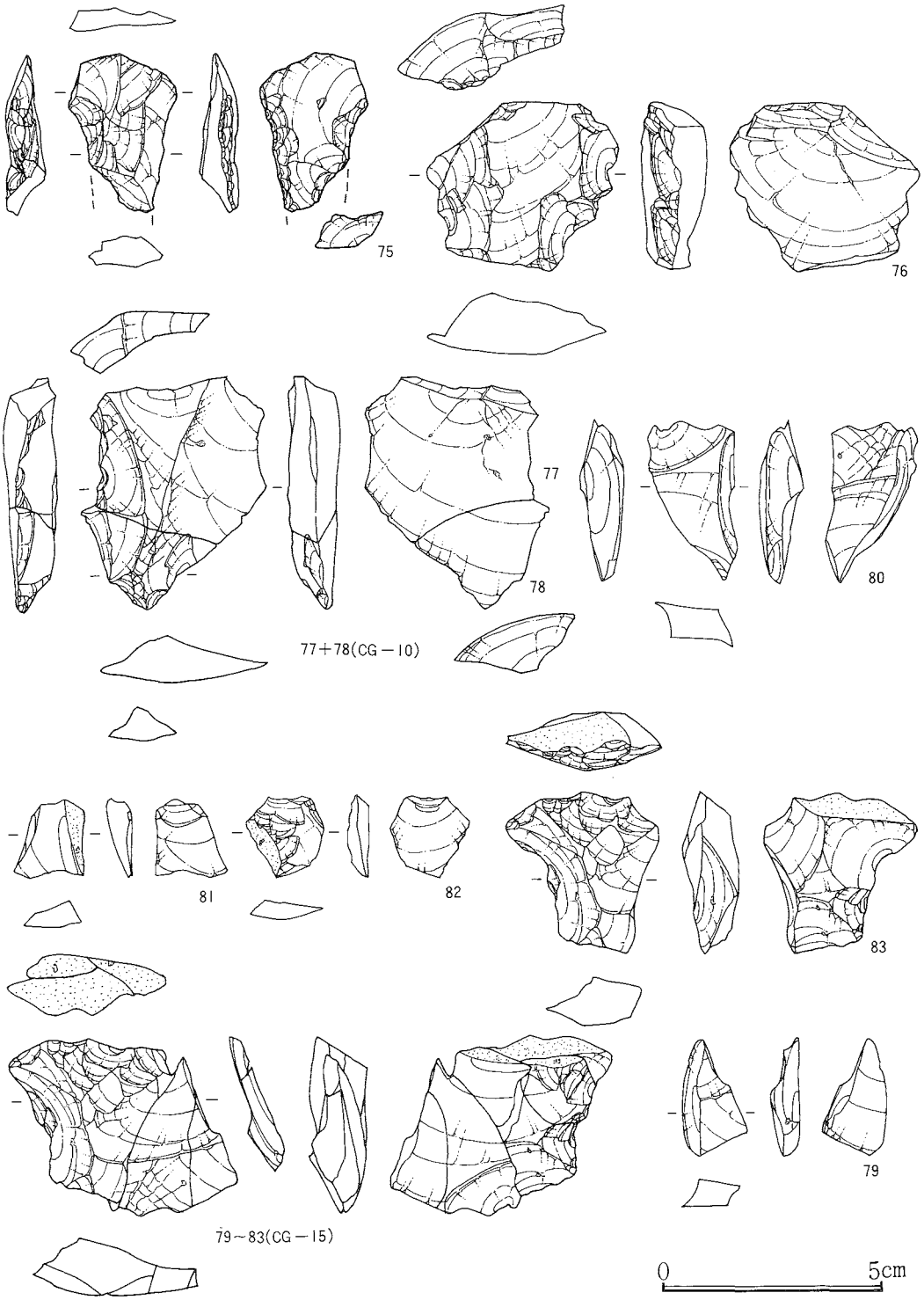
第26図　1C区石器実測図(6)(50・51・53・54・56～59;C－6ブロック、52;C－13bブロック、55ブロック外)



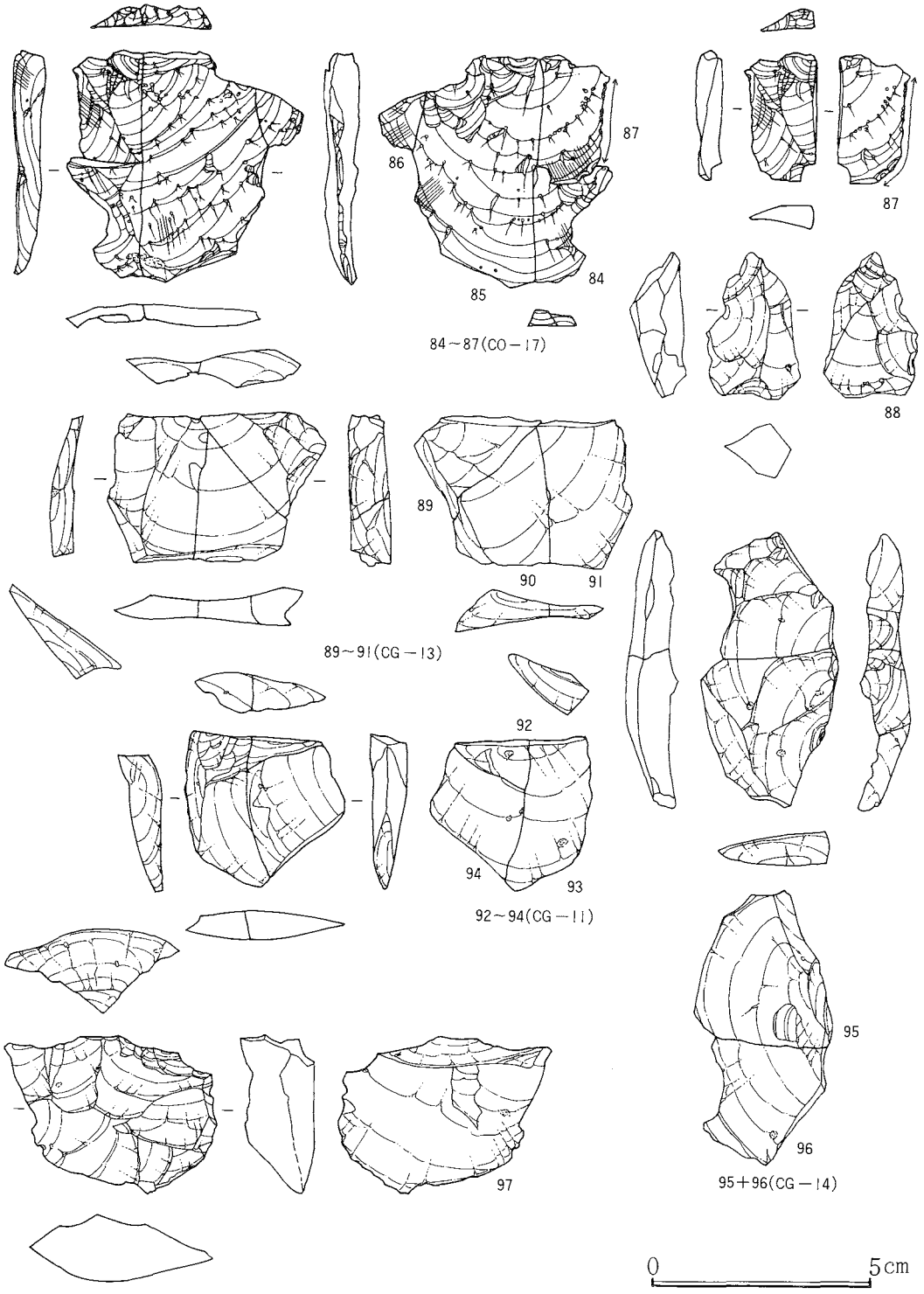
第27図　1C区石器実測図(7)(60～69;C－7ブロック)



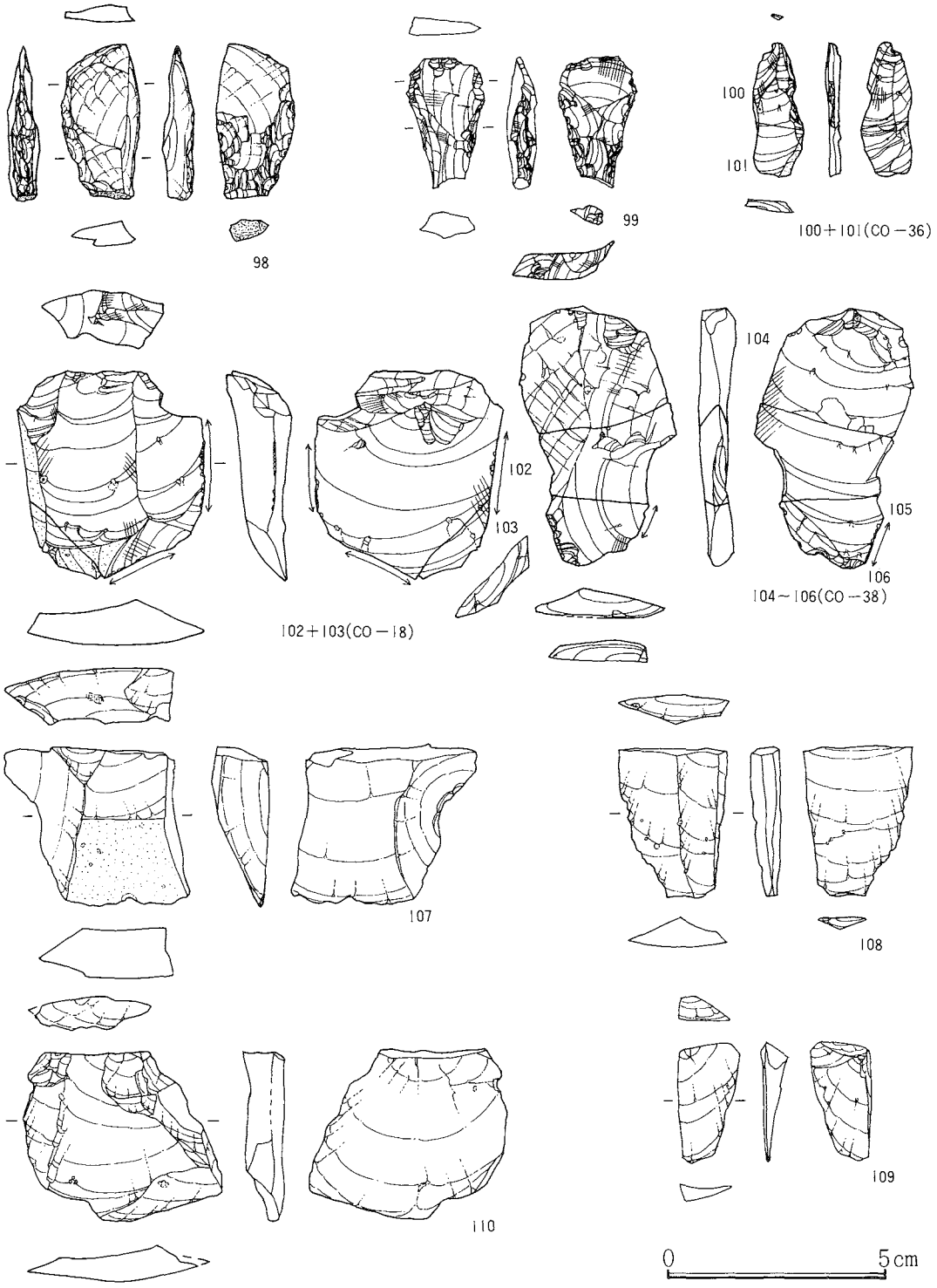
第28図　１Ｃ区石器実測図(８)(71～74;Ｃ－６ブロック、70;Ｃ－８ブロック)



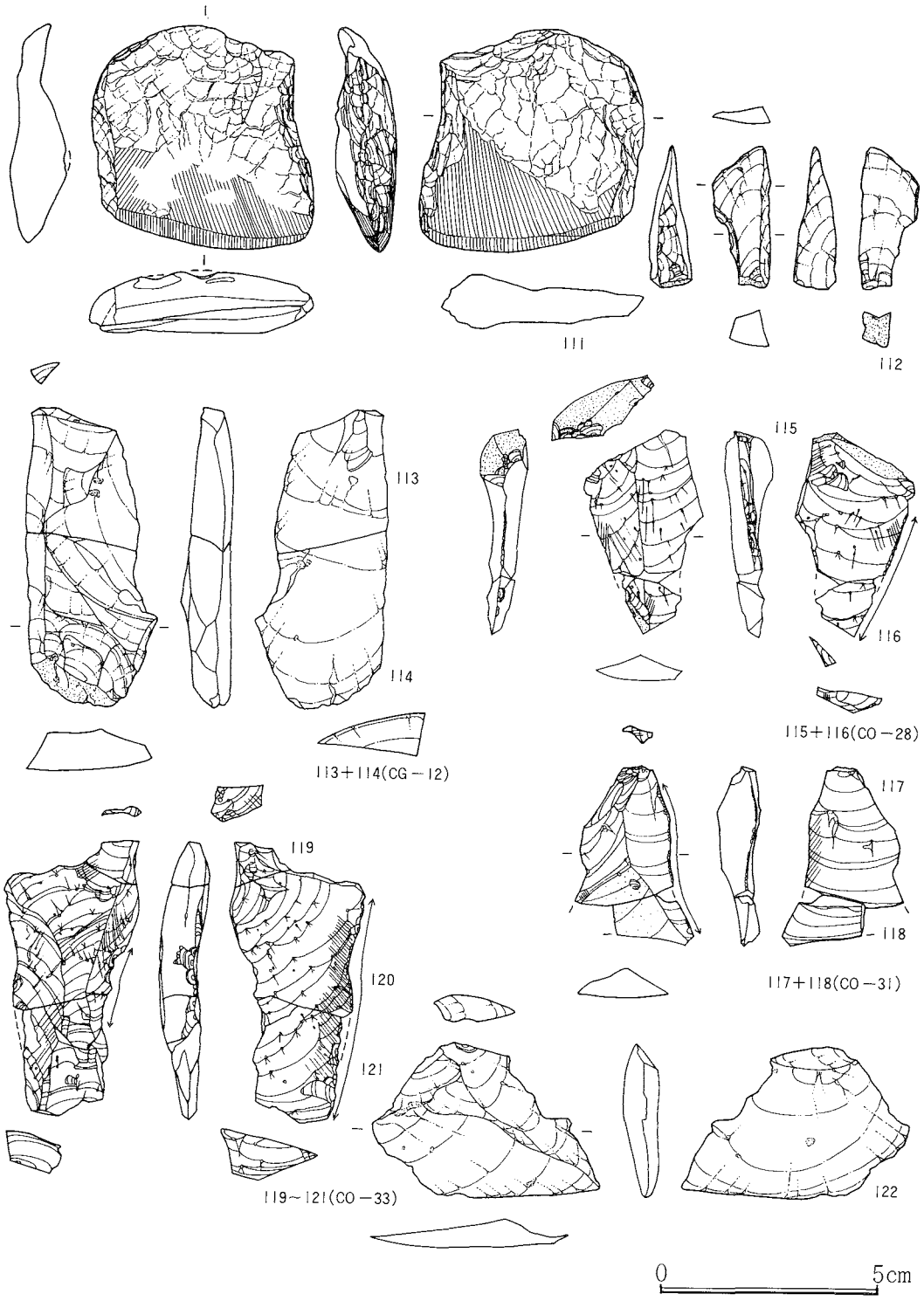
第29図　1C区石器実測図(9)(75～83;C－9ブロック)



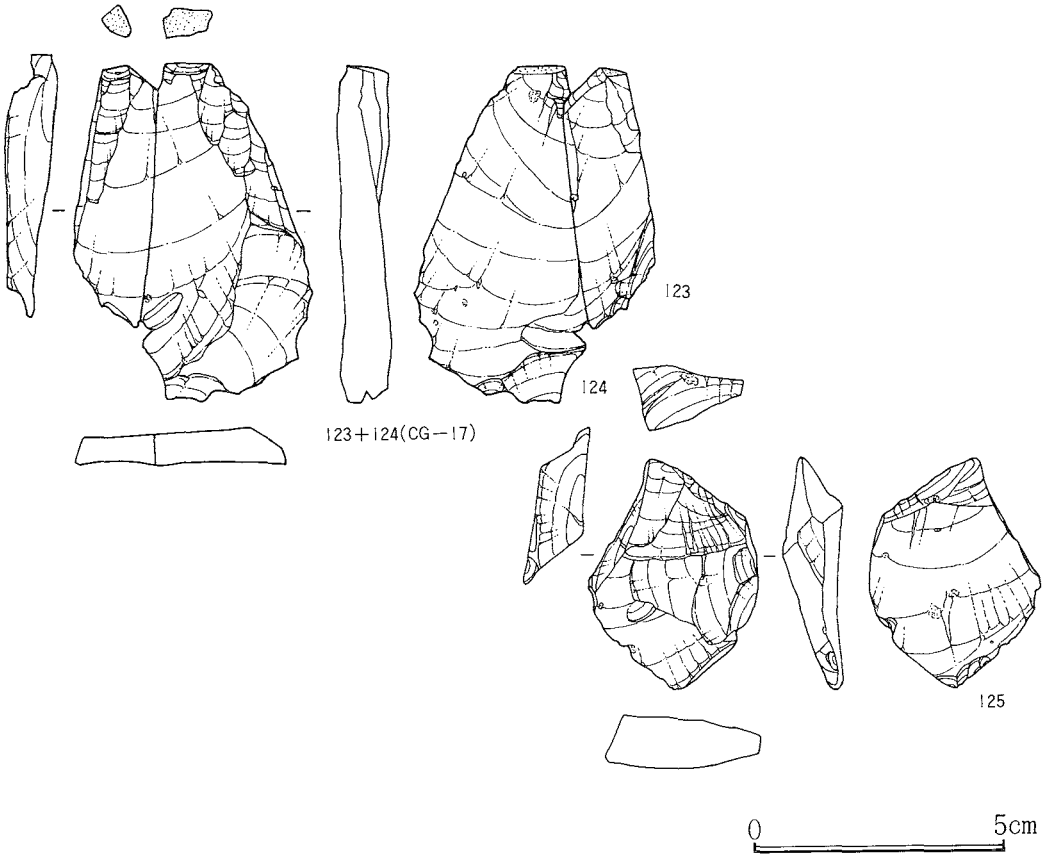
第30図　1C区石器実測図(10)(89;C－6ブロック、84・87・90～96;C－9ブロック、88;C－10ブロック、85・86;C－12ブロック、97;ブロック外)

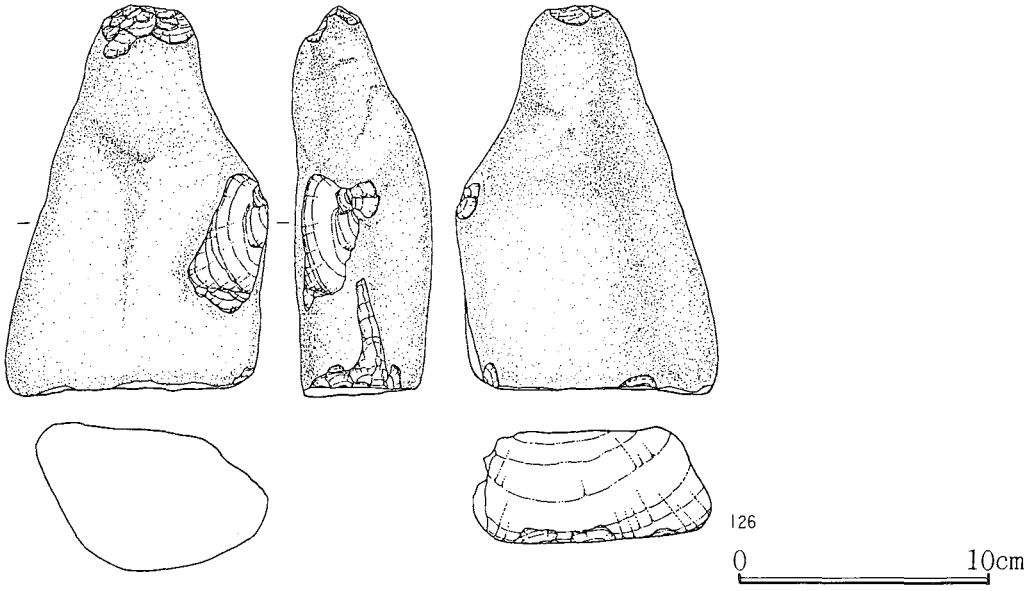


第31図　1C区石器実測図(11)(98～109;C－11ブロック、110;ブロック外)

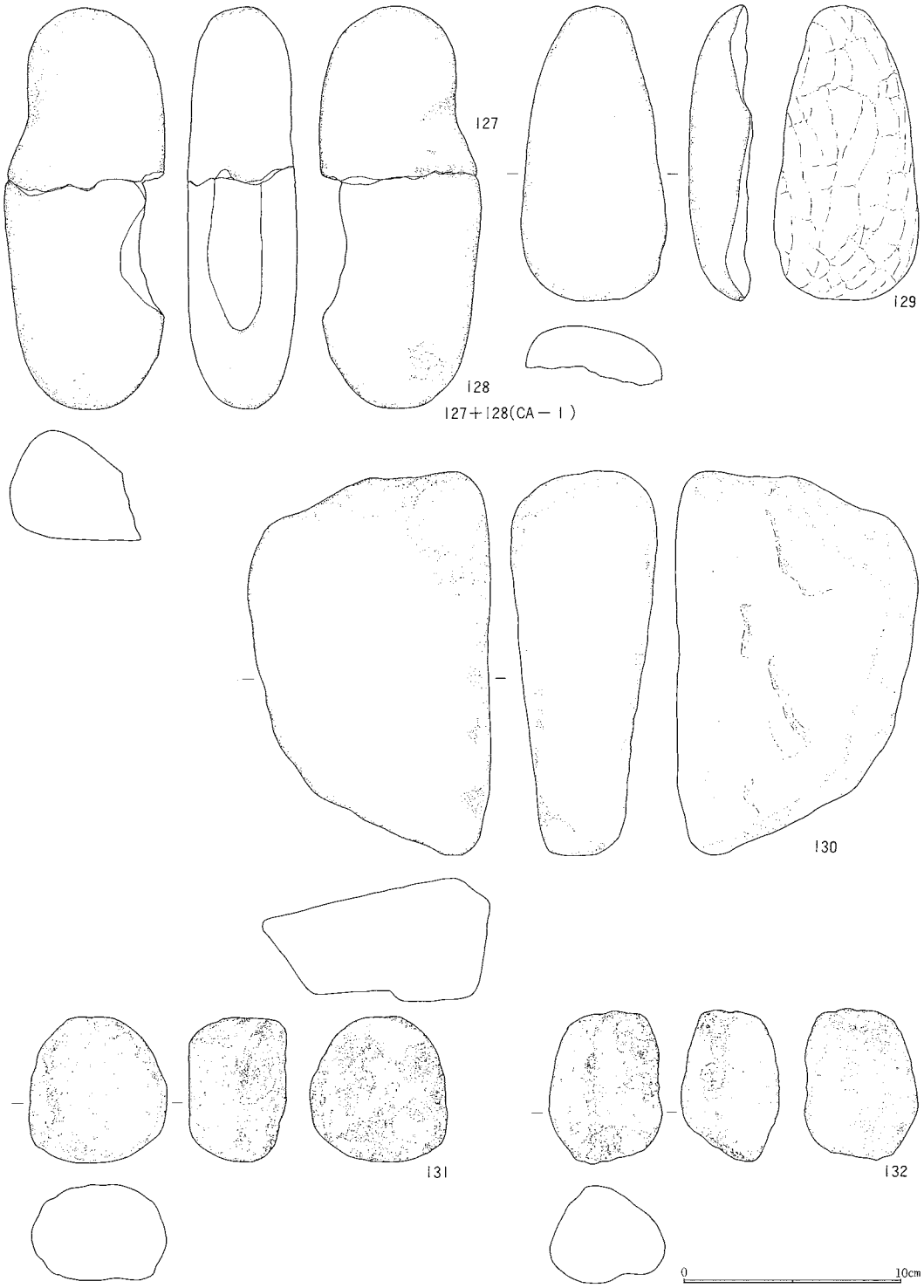


第32図　1C区石器実測図(12)(113・114;C－9ブロック、111・119～121;C－12ブロック、112・122;C－13aブロック、115～118;C－13bブロック)





第33図　1C区石器実測図(13)(126;C－10ブロック、123;C－12ブロック、124;C－13aブロック、125;C－14ブロック)



第34図　1C区石器実測図(14)(127;C－13aブロック、131・132;C－8ブロック、128;C－1ブロック、129;C－13b ブロック、130;ブロック外)

ンプ地であったと考えられる。

b．遺物（第20図～第34図）

1C区から523点の遺物が検出されている。全体及び各ブロックの器種、石材組成は第20図のとおりである。全体についてみると、石器（狭義）は60点であり、11.4%を占めている。また石材では黒曜石が283点と54.1%を占め、黒色安山岩が39.6%と次いで多い。残りは黒色頁岩、安山岩、チャート、蛇紋岩であり、いずれも少量である。

次に石器（狭義）については、ナイフ形石器12点（20%）、削器22点（36.7%）、二次加工のある剥片18点（30%）、局部磨製石斧1点（1.7%）、磨石3点（5%）、敲石3点（5%）、台石1点（1.7%）である。また、石核は4点存在している。

各ブロックの石器については、前述のようにブロック毎に黒曜石と黒色安山岩の割合が異なっている。黒曜石の占める割合の高いブロックでは、C－1、5、6、11、12、13bブロックがある。また、黒色安山岩の比率の高いブロックでは、C－8、9、13aブロックが特に高く、C－2、3、4、7、14ブロックも過半数を占める。また、C－3ブロックでは黒色頁岩が、C－10ブロックではチャートがそれぞれ3割前後を占めており、他のブロックと差異が認められる。

ブロック毎の器種組成についてみると、石器（狭義）の割合では、C－1、6、8、9、13bブロックが高く、C－3、11、12、14ブロックでは低い、また、ブロック毎に器種の偏在性が認められ、性格、規模等に帰因するものとみられる。次に各器種の特徴と剥片剥離技術について述べてゆくことにする。

ナイフ形石器　2、6、11、17、22、38、39、40、75、98、99、112の12点が出土している。素材剥片は接合資料CO－1例のように、長幅比のほぼ等しい、不定形剥片を用いているものが多い。また、CO－10例にみられるような剥片剥離技法により作出した剥片（50）も素材となると考えられる。

調整は大きく3種類に分類することができる。1類：表面に急角度の調整を施すもの(11)。2類：切断した後、縁辺部に浅い調整を施すもの(2、6、17、22、40)。2の場合、調整は表、裏、表裏両面ともみられ、特に偏りはみられない。3類：裏面基部を中心に表裏両面に深い調整が施され、裏面には平坦剥離が多用されるもの(38、39、75、99)。また、1類と2類の中間の、切断と表面急角度調整を併用するもの（1′類；112）や、2類と3類の中間の、切断の後、裏面に平坦剥離を施すもの（2′類；98）も存在する。

形態についてみると、器長に対して鈍角な刃部を有する、台形状を呈するものが圧倒的に多く、（2、6、11、22、39、75、99)、切出形を呈するもの(17、98、112)、尖頭状を呈するもの(38)も少数例みられる。また、基部は先細りの形状を示すものが多い。

石材については、黒曜石のものが多く（2、6、11、22、38、39、40、99)、黒色安山岩（75、

98、112)、黒色頁岩（17）の例もみられる。そして、使用痕についてみると、11、22、33、99は刃部に潰れ、刃こぼれ、微細な剥離が観察される。

削器　14例（18点）ある(３、９＋10、13＋14、24＋25、28、41～44、45、60、68、76、83、77＋78、88、115＋116)。素材は長幅比の差の少ない幅広のものが多く、(３、24＋25、45、68、76、77＋78、83、88)、縦長のもの(９＋10、41～44、60、115＋116）も目立つ。また、石核状のもの（28）も存在するが、横長剥片を素材とするものはない。そして、形状についてみると、様々であるが、尾部が尖状を呈するもの（９＋10、77＋78、115＋116）は形態的にまとまる。

刃部形状は、鋸歯状を呈するものが多く(９＋10、28、41～44、76、77＋78、83、88)、次いで抉入部（ノッチ）をもつものが多い（３、13＋14、45、115＋116)。また、直刃（24＋25)、凹刃（68)のものがある。このうち68は刃部が厚く、急角度であるので、掻器の可能性もある。また、９＋10はＣ－７ブロックで10を欠損した後、再調整を施されてＣ－１ブロックに残されたものである。そして、28、83、88は後述するように小形貝殻状剥片の石核の可能性もある。

石材については黒曜石のもの（３、９＋10、24＋25、41～44、45、60、116＋117）と、黒色安山岩のもの（28、68、76、77＋78、83、88）がほぼ同じで、黒色頁岩（13＋14）が１点存在する。

二次加工のある剥片　15点ある（８、12、36、46、48、62、70、87、100、102＋103、106、117＋118、120＋121等)。素材は縦長剥片(46、100、106、117＋118、120＋121)、長幅比のほぼ同じ幅広剥片（36、62、70、87、102＋103）が同数であり、横長剥片（８、48）を素材としたものは少ない。また、素材剥片を切断しているもの(12、36、48、62、87、106、120＋121)が比較的多く、素材の形状を変化させることなく使用しているもの（８、46、70、102＋103、117＋118）はやや少ない。このうち、106は104、105と接合するが、切断が調整によるものか使用時におけるものか判然としない。

また、石材はすべて黒曜石である。これは黒色安山岩、黒色頁岩等の石材は風化により、微細な剥離を観察することができないためと考えられ、これらの石材の剥片中にも二次加工のある剥片は相当量存在するものと推定される。

局部磨製石斧　Ｃ―12ブロックより１点検出されている（111)。蛇紋岩製であり、側縁部に調整を施した後、刃部を研磨している。本来はもっと大形の石斧であったものが、節理によって分割されてしまったと推定される。刃部は蛤刃状を呈し、左側が片減りしている。

磨石　２例（３点）出土している（128＋129、130)。128＋129は長楕円形を呈し、表裏両面に平坦な磨面がある。また、両端部から右側縁部には敲打痕が観察される。石材は安山岩製である。中ほどで欠損しており、128はＣ―13ａブロック、129はＣ－１ブロックから出土している。１つの磨石を分割して使用したものと考えられる。130はＣ―13ａブロックから出土したもので楕円形を呈する。半割されており、裏面は分割面である。磨面は表面にあたるが、磨痕は明瞭でない。

安山岩製である。

敲石　3点出土している(126、131、132)。126はスタンプ形石器のような形状を呈し、下端部には平坦な分割面を有する。両端部及び右側縁部には敲打痕が観察される。安山岩製であり、C―10ブロックより出土している。131は円形を呈し、側縁全周及び裏面に敲打痕が顕著である。132は楕円形を呈し、裏面及び両端部に敲打痕が認められる。131、132とも多孔質の安山岩製であり、C―8ブロック内で近接して出土している。

台石　1点出土している(130)。不整楕円形を呈し、表面及び右側縁部に平坦な磨面を有する。表面中央部に敲打痕が認められる。安山岩製である。C―8ブロックに近接して出土しており、C―8ブロックの敲石との関連性も考えられる。

剥片剥離技術　石材により以下のような特徴が認められる。

黒色安山岩の場合、原石から素材剥片作出に至る剥片剥離初期段階の原礫面を大きく残す剥片は存在せず、素材剥片(69、74、97、110、122、125)と素材剥片切断段階(29、30～32、65～67、89～91、92～94、95＋96、107、113＋114、123＋124)、素材剥片より小形貝殻状剥片剥離段階(54～59、79～83)の資料が存在する。したがって、素材剥片獲得段階については不明確な部分がある。しかし、素材剥片を観察すると、①打角が大きく、打面は原礫面、単剥離面、山型の稜をもつ複剥離面のものがある。②長幅比のほぼ等しい幅広剥片が多い、③打撃の方向は一方向のものと多方向に及ぶものがある、といった特徴がある。このことから、打面を転移しつつ、求心状に剥離を行う工程と、打面と作業面を交互に移動して剥離を行う工程が存在することがわかるがどのように関連性をもつのかについてははっきりしない。

また、素材剥片から石器(Tool)と小形貝殻状剥片を同時に作出する剥片剥離工程はCG―3(54～59)とCG―15(79～83)によって理解することができる。CG―3の場合、最終的に裏面平坦剥離により、小形貝殻状剥片(57、58)を目的別剥片として作出している。また、CG―15では切断に近い剥離(79、80)で整形した後、裏面平坦剥離により、小形貝殻状剥片(81、82)と鋸歯状削器(83)を作出している。しかし、素材剥片折断工程はそれ自体によって石器となるものは少なく、さらに細部調整段階を経て石器となるようである。また、細部調整段階については各器種の所で述べたので省略する。

次に黒色頁岩の場合、原石から素材剥片作出段階、細部調整段階に至るまで、CS―1(15～21)によって知ることができる。基本的には黒色安山岩の剥片剥離工程と同じであり、ナイフ形石器(17)、幅広の縦長剥片(19、20)を作出しているが、小形貝殻状剥片(16)は直接剥離してしまっている。

そして、黒曜石の場合、原石から素材剥片作出段階(33～35、50＋51、52＋53、70＋71、72＋73)、素材剥片切断段階(1～7、36＋37、47～49、63、84～87)、細部調整段階の各工程の資料

が存在する。素材作出段階は定まった打面をもたず、打面を転移しつつ、求心状に剝離を行っている。この剝離技法によって得られた剝片は縦長剝片と長幅比のほぼ等しい幅広剝片である。切断調整段階では切断は縦、横両方向みられ、その後細部調整を行って石器を製作している。また、素材剝片から小形貝殻状剝片を作出する工程は、黒曜石の場合も存在し、23～25（ＣＯ―14）61＋62（ＣＯ－11）によって理解することができる。素材剝片の角を打点として、裏面平坦剝離の手法により作出している。こうした、小形貝殻状剝片（16、23、57、58、61、81、82）は各石材とも存在し、形態的にも技術的にも画一性が認められるので、一つの器種であると考えられる。

小　　結

１Ｃ区の石器群は長幅比のほぼ等しい幅広剝片を素材とし、切断と裏面平坦剝離を多用する剝片剝離技法によって、石器を製作することを特徴としている。ナイフ形石器にはこういった技術が特に顕著にみられ、いわゆる「台形(様)石器」の範疇に含まれる。また、削器には鋸歯状削器と抉入削器が多いのも、この石器群の特徴である。そして、これまで見逃されがちであった、小形貝殻状剝片が、安定して存在していることも、この石器群の特徴と言えよう。さらに、局部磨製石斧については、ＡＴ下の石器群の中に特徴的に見られる石器であり、他の石器群との関連性を明らかにする上で、重要な資料である。

今後の課題としては、これらの石器の機能・用途を明らかにすることであり、それによってＡＴ下の石器群の様相をさらに明確にすることができよう。

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
3W－94	1	1	Fl	Ch		XIc		10	9	1.7	0.2	
3X－93	1	1	Fl	Sh		XIc		33	27	11.4	9.9	
3Y－94	1	1	Fl	Ch		XIc		27	24	4.8	3.0	
3W－100	1	1	Fl	Ob	C－1	XIc		9	9	8.2	0.5	
	2	2	RF	Ob	C－1	XIc		9	9	8.2	0.5	
	2	2	RF	Ob	C－1	XIc		31	39	10.3	11.1	8
	3	3	Fl	GAn	C－1	XIc	母－1	19	16	5.1	1.2	
	4	4	Fl	Ob	C－1	XIc	CO－1	13	13	3.9	0.4	7
	5	5	Fl	Ob	C－1	XIc		14	16	3.0	0.4	1
	6	6	Fl	GAn	C－1	XIc	母－1	21	27	6.6	4.6	
	7	7	Fl	Ob	C－1	XIc	CO－26	8	16	2.3	0.2	
	8	8	Sc	Ob	C－1	XIc	CO－2	38	30	10.1	9.8	9
	9	8	Fl	Ob	C－1	XIc		23	11	5.4	1.2	
	10	9	Fl	Ob	C－1	XIc		20	6	6.4	0.6	
	11	10	Fl	Ob	C－1	XIc	CO－1	20	28	4.7	2.8	5
	12	11	Fl	GAn	C－1	XIc	母－1	36	24	9.8	1.1	
	13	12	Fl	Ob	C－1	XIc		15	15	6.8	1.0	
	14	13	Fl	Sh	C－1	XIc	母－4	20	14	4.0	1.1	
	15	14	Kn	Ob	C－1	XIc	CO－1	33	17	6.5	2.9	2
	16	15	磨石	An	C－1	XIc	CA－1	110	68	49.1	555.0	128
	17	16	Kn	Ob	C－1	XIc	CO－1	29	18	5.0	2.0	6
	18	17	Sc	Ob	C－1	XIc	CO－1	34	22	7.4	4.8	3
	19	18	Fl	Ob	C－1	XIc	CO－1	12	14	2.5	0.4	4
3W－101	1	1	Fl	Ob	C－2	XIc		9	8	2.2	0.1	
	2	2	Fl	Ob	C－2	XIb		14	20	5.2	0.7	
	3	3	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	10	17	3.7	0.6	
	4	4	Fl	Ob	C－2	XIc		10	17	3.5	0.5	

第７表　１Ｃ区石器計測表（１）

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	5	5	Fl	An	C－2	XIc	母－3	20	19	4.6	1.2	
	6	6	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	18	24	4.4	1.8	
	7	7	Fl	Ob	C－2	XIc		6	7	3.3	0.2	
	8	9	RF	Ob	C－2	XIc		11	11	3.8	0.5	12
	9	10	Fl	Ob	C－2	XIc	CO－3	14	23	9.0	2.0	
	10	11	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	8	11	2.4	0.2	
	11	12	Fl	Ob	C－2	XIc		8	5	2.0	0.1	
	12	13	Fl	GAn	C－2	XIc		7	12	2.3	0.2	
	12	13	Fl	GAn	C－2	XIc		4	6	1.8	0.1	
	13	14	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	47	63	7.6	19.6	
	14	15	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	37	54	7.4	26.7	
	15	16	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	18	16	3.7	1.0	
	16	17	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	40	65	5.3	57.1	
	17	18	Sc	Sh	C－2	XIc	母－2　CS－2	25	28	7.2	4.4	14
	18	19	Fl	Ob	C－2	XIc		5	6	0.6	0.03	
	19	20	Fl	Ob	C－2	XIc	CO－3	13	24	7.6	1.8	
	20	21	Sc	Sh	C－2	XIc	母－2　CS－2	41	28	1.3	10.5	13
	21	22	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	11	12	3.3	0.6	
	22	23	Kn	Ob	C－2	XIc		29	18	7.5	3.7	11
	23	24	Fl	GAn	C－2	XIc		8	8	1.5	0.1	
	24	25	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	13	13	3.2	0.5	
	25	26	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	38	20	15.6	9.7	
	26	27	Fl	GAn	C－2	XIc	母－3	28	9	7.1	1.8	
	27	28	Fl	GAn		XIc		40	28	10.1	8.9	
3W－102	1	1	Fl	GAn		XIc		30	37	11.2	12.6	
	2	2	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	35	26	10.1	11.9	
	3	3	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	13	23	6.9	1.7	
	4	4	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	30	60	11.2	17.6	
	5	5	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	25	31	13.5	10.7	
	6	6	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	13	13	4.2	0.7	
	7	7	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	15	24	5.6	15.0	
	8	8	Fl	Sh	C－3	XIc	母－2　CS－1	55	40	14.9	23.4	20
	9	9	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	55	75	17.0	67.8	
	10	10	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	16	14	5.1	1.0	
	11	11	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	58	36	17.3	33.4	
	12	12	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	33	11	4.2	1.7	
	13	13	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	18	20	5.9	2.2	
	14	14	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	17	14	6.2	1.4	
	15	14	Fl	GAn	C－3	XIc		8	12	4.5	0.3	
	16	15	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	21	29	5.4	3.2	
	17	16	Fl	Sh	C－3	XIc	母－2　CS－1	42	45	21.9	34.9	15
	18	17	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	44	31	17.4	24.5	
	19	18	Fl	Ob	C－3	XIc		9	9	2.3	0.2	
	20	19	CO	Sh	C－3	XIc	母－2　CS－1	66	42	27.7	77.0	21
	21	20	Fl	GAn	C－3	XIc	母－5	65	31	18.7	30.6	
3X－99	1	1	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	31	50	9.7	10.8	
	2	2	Fl	Ob	C－4	XIb	CO－4	38	19	6.6	3.0	
	3	3	Fl	GAn	C－4	XIc	CG－5	26	19	5.8	2.5	
	4	4	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6　CG－1	13	24	10.0	1.7	26
	5	5	Sc	Ob	C－4	XIc	CO－14	15	17	10.3	1.6	25
	6	6	Fl	GAn	C－4	XIc		12	10	2.7	0.3	
	7	7	Sc	Ob	C－4	XIc	CO－14	40	30	10.6	10.9	24
	8	8	Fl	Ob	C－4	XIc		8	13	1.8	0.2	
	9	9	Fl	Ob	C－4	XIb	CO－4	6	16	2.9	0.2	
	10	10	Fl	Ob	C－4	XIc		20	21	4.8	1.4	
	11	11	Fl	GAn	C－4	XIc		7	11	1.7	0.2	
	12	12	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6　CG－2	36	24	12.7	13.0	31
	13	13	Fl	Ob	C－4	XIc	CO－5	12	9	3.9	0.3	
	14	14	Fl	Ob	C－4	XIc	CO－6	34	30	16.3	12.4	34
	15	15	Fl	GAn	C－4	XIc		9	12	2.7	0.3	
	16	16	Fl	Ob	C－4	XIc	CO－6	18	29	16.9	5.3	33
	17	17	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	30	40	8.7	6.6	
	18	18	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6　CG－2	39	38	13.5	16.1	30
	19	19	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	20	50	10.8	8.3	
	20	20	Fl	GAn	C－4	XIc		33	28	17.8	17.0	
	21	22	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	36	19	13.8	7.5	

第8表　1C区石器計測表(2)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	22	23	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	22	13	3.5	1.0	
	23	24	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	32	50	9.7	10.7	
	24	25	Sc	GAn	C－4	XIc	母－6 CG－1	53	35	16.0	28.8	28
	25	26	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6 CG－2	24	32	7.8	4.7	32
	26	27	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	19	24	9.0	2.4	
	27	28	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	11	16	3.7	0.5	
3X－100	1	1	Fl	GAn		XIb	母－3	24	26	7.8	2.9	
	2	1	Fl	GAn		XIb		9	7	3.5	0.2	
	3	2	Fl	GAn		XIb	母－3	20	40	2.2	10.5	
	4	3	Fl	GAn		XIb	母－3		13	18	4.2	0.8
	5	4	Fl	GAn	C－4	XIb	母－6	26	33	12.8	9.7	
	6	5	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	22	45	9.8	7.2	29
	7	6	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	16	4	2.9	0.2	
	8	7	Fl	Ob	C－4	XIc	CO－5	16	14	3.9	0.7	
	9	8	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6	18	15	4.0	0.7	
3X－101	1	1	Fl	GAn	C－2	XIc		24	31	4.5	2.1	
3X－102	1	1	Fl	Sh	C－3	XIb	母－2 CS－1	16	28	5.0	2.4	16
	2	2	Fl	Sh	C－3	XIc		26	23	11.8	4.9	
	3	3	Fl	Sh	C－3	XIc		70	71	30.8	67.6	
	4	4	Fl	Sh	C－3	XIc	母－2 CS－1	35	19	6.6	3.6	18
	5	5	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	21	22	8.4	2.8	
	6	6	Kn	Sh	C－3	XIc	母－2 CS－1	37	16	6.7	3.6	17
	7	7	Fl	Ob	C－3	XIc		9	13	2.2	0.2	
	8	8	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	16	12	6.1	1.2	
	9	9	Fl	GAn	C－3	XIc	母－4	21	36	8.0	6.5	
	10	10	Fl	Ob	C－3	XIc		25	17	5.8	2.0	
	11	11	Fl	Ob		XIc		7	9	2.4	0.1	
	12	12	Fl	Ob		XIc		4	6	2.9	0.1	
	13	13	Fl	Ob	C－3	XIc		6	9	1.2	0.02	
	14	14	Fl	Sh	C－3	XIc	母－2 CS－1	42	70	43.2	79.7	19
3Y－94	1	1	Fl	Ch		XIc		10	9	1.9	0.2	
3Y－98	1	1	Fl	GAn		XIc	CG－3	25	25	6.7	3.5	55
3Y－99	1	1	CO	Ob	C－4	XIc	CO－6	32	38	12.5	15.5	35
	2	3	Fl	GAn	C－6	XIc		12	17	6.2	0.8	
	3	4	Fl	GAn	C－6	XIc		33	69	12.7	20.3	74
	4	5	Fl	Ob	C－6	XIb	CO－15	37	26	10.6	8.1	73
	5	6	Sc	Ob	C－6	XIb	CO－9	38	25	12.9	8.3	42
	6	7	Fl	Ob	C－4	XIc		32	13	8.3	2.9	
	7	8	Fl	Ob	C－5	XIc	CO－7	37	33	6.3	6.0	37
	8	9	RF	Ob	C－5	XIc	CO－7	41	28	8.5	9.6	36
	9	10	Fl	Ob	C－5	XIc		13	20	11.8	2.5	
	10	11	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－8	21	20	11.0	3.6	
	11	12	Fl	GAn	C－4	XIc		24	27	4.4	2.8	
	12	13	Fl	GAn	C－5	XIc	母－9 CG－6	15	38	8.5	5.1	
	13	14	Fl	Ob	C－5	XIc	CO－8	23	16	9.2	2.6	
	14	15	Fl	Ob	C－5	XIc		18	14	5.0	1.0	
	15	16	Fl	GAn	C－5	XIc	母－15 CG－4	28	22	5.4	2.7	
	16	17	Fl	GAn	C－5	XIc	CG－4	10	14	2.4	0.3	
	17	18	Fl	GAn	C－6	XIc		21	9	4.9	0.9	
	18	19	Fl	Ob	C－5	XIc		10	17	3.7	0.5	
	19	20	Fl	GAn	C－6	XIc	母－8	25	40	7.1	6.7	
	20	21	Fl	Ob	C－4	XIc		14	17	4.9	0.7	
	21	24	Kn	Ob	C－4	XIc		34	19	7.6	3.4	22
	22	25	Fl	GAn	C－4	XIc	母－6 CG－1	11	22	6.9	1.6	27
	23	26	Fl	Ob	C－6	XIc		9	13	3.3	0.3	
3Y－100	1	1	Fl	GAn	C－4	XIc	CG－5	13	14	4.5	0.6	
	2	2	Fl	GAn	C－6	XIb	母－9 CG－6	16	24	6.5	1.4	
	3	3	Fl	GAn	C－6	XIc	CG－13	22	30	10.5	0.8	89
	4	4	Fl	Ob	C－6	XIb		22	15	10.0	2.2	
	5	5	Fl	GAn	C－4	XIc		40	54	10.2	20.8	
	6	6	Fl	GAn	C－6	XIc	母－8	23	59	7.0	4.4	
	7	7	Fl	GAn	C－6	XIc		35	32	9.1	8.8	
	8	8	Fl	GAn	C－6	XIc	CG－3	52	42	12.7	17.1	59
	9	9	Sc	Ob	C－6	XIc	CO－9	29	30	16.9	9.1	41
	10	10	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－13	21	29	8.6	3.7	49
	11	11	CO	Ob	C－6	XIc	CO－10	23	38	12.2	7.7	51

第9表　1C区石器計測表(3)

グリッド	No	旧No	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	12	12	Fl	GAn	C－6	XIc	CG－3	19	37	6.3	3.4	56
	13	13	Fl	Ob	C－6	XIc		12	10	3.3	0.4	
	14	14	Fl	Ob	C－6	XIb	CO－10	33	24	7.1	3.4	50
	15	15	Fl	GAn	C－6	XIc		13	15	7.8	1.1	
	16	16	Fl	Ob	C－6	XIc		16	12	4.1	0.5	
	17	17	Fl	Ob	C－7	XIc		5	11	4.1	0.2	
	18	18	RF	Ob	C－7	XIc	CO－11	28	30	12.0	8.1	62
	19	19	Fl	GAn	C－7	XIc	CG－7	32	19	10.7	3.8	65
3Y－101	1	1	Fl	GAn	C－7	XIc		14	23	3.5	0.7	
	2	2	Sc	Ob	C－7	XIc	CO－2	16	13	6.0	0.9	10
	3	3	Fl	Ob	C－7	XIb	CO－11	16	17	3.8	0.6	61
	4	4	Fl	GAn	C－7	XIb	母－11	16	22	7.5	3.0	
	5	5	Fl	GAn	C－7	XIb	母－10	45	33	13.8	17.9	
	6	6	Fl	Ob	C－7	XIc		36	33	4.4	4.6	64
	7	7	Fl	Ob	C－7	XIc		19	24	5.5	2.1	
	8	8	Fl	Ob	C－7	XIc		22	29	10.9	4.9	
	9	9	Fl	GAn	C－7	XIc	母－3	40	22	13.2	10.3	
	10	10	Fl	GAn	C－7	XIc		9	12	4.2	0.3	
	11	11	Fl	GAn	C－7	XIc		39	61	8.9	18.8	69
	12	12	Fl	GAn	C－7	XIc	母－11	23	18	4.5	1.5	
	13	13	Fl	Ob	C－7	XIc		11	12	4.0	0.4	
	14	14	Sc	Ob	C－7	XIc		31	19	8.2	3.6	60
	15	15	Fl	GAn	C－7	XIc	母－11	41	39	7.0	10.1	
	16	16	Fl	GAn	C－7	XIc	CG－7	22	13	4.4	0.7	67
	17	17	Fl	Ob	C－7	XIc		11	29	7.4	2.3	
	18	18	Fl	GAn	C－7	XIc	母－11	17	19	2.4	1.8	62
	19	19	Sc	GAn	C－7	XIc	母－10	54	62	16.8	45.5	68
	20	20	Fl	GAn	C－7	XIc	母－11	10	18	3.7	0.6	
	21	21	Fl	GAn	C－7	XIc	CG－7	42	29	13.7	15.3	66
	22	22	Fl	Ob	C－7	XIc	母－22	26	35	10.1	0.6	63
	23	23	Fl	Ob	C－7	XIc		27	13	6.7	2.2	
	24	24	Fl	GAn	C－7	XIc	母－10	47	39	7.8	6.8	
3Y－102	1	1	Fl	GAn	C－10	XIb	母－16	20	11	5.3	0.9	
	2	2	Fl	GAn		XIc	母－12	17	26	5.4	2.5	
	3	3	Fl	GAn		XIc		34	50	7.8	21.9	97
	4	4	Fl	GAn	C－10	XIc	母－16	7	21	5.1	0.7	
	5	5	Fl	GAn	C－10	XIc	母－16	11	14	0.3	0.3	
4A－98	1	1	Fl	Ob		XIc		13	10	4.1	0.5	
4A－99	1	1	Fl	GAn	C－6	XIc	CG－3	13	32	7.8	2.5	54
	2	2	Fl	GAn	C－6	XIc	母－7	18	18	4.2	1.0	
	3	3	Fl	GAn	C－6	XIb		16	12	7.3	0.9	
	4	4	Fl	Ob	C－6	XIb		15	17	10.3	1.4	
	5	5	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－12	20	25	10.0	3.4	
	6	6	Fl	GAn	C－6	XIc	CG－3	14	21	3.5	0.8	57
	7	7	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－13	13	21	3.9	0.8	47
	8	8	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－14	17	30	7.3	2.9	23
	9	9	Fl	Ob	C－6	XIc		11	4	2.5	0.1	
	10	10	Fl	Ob	C－6	XIc		8	13	2.7	0.2	
	11	10	Fl	Ob	C－6	XIc		6	13	1.7	0.1	
	12	11	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－16	46	36	5.0	21.3	71
	13	12	Fl	Sh	C－6	XIb		56	48	7.3	41.9	
	14	13	Fl	Ob	C－6	XIc		9	9	2.3	0.3	
	15	15	Fl	Ob	C－6	XIc		9	19	5.7	0.5	
	16	16	Sc	Ob	C－6	XIc	母－23	34	35	11.3	7.7	45
	17	17	RF	Ob	C－6	XIc		33	25	11.0	2.0	46
	18	18	敲石	An	C－8	XIc		67	63	5.8	235.0	131
	19	19	Kn	Ob	C－6	XIc		31	11	7.1	1.6	40
	20	20	Fl	Ob	C－6	XIc	CO－30	31	25	7.2	3.8	53
	21	21	Kn	Ob	C－6	XIc		30	20	8.9	3.7	39
	22	22	Fl	Ob	C－6	XIc		11	18	4.8	0.6	
	23	23	敲石	An	C－8	XIc		65	50	45.1	180.0	132
	24	24	Fl	Ob	C－6	XIc		13	6	4.8	0.2	
	25	25	Fl	GAn	C－6	XIc	CG－3	12	19	3.1	0.5	58
4A－100	1	1	Fl	GAn	C－8	XIc	母－12	9	20	3.4	0.6	
	2	2	Fl	GAn	C－8	XIb	母－13　CG－8	25	18	5.2	1.5	
	3	3	Fl	GAn	C－6	XIb	母－7	15	17	2.9	0.5	

第10表　1C区石器計測表(4)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	4	4	RF	Ob	C－6	XIb	CO—13	36	27	7.4	5.4	48
	5	5	Fl	Ob	C－6	XIb		27	34	4.2	7.0	
	6	6	Fl	Ob	C－6	XIb	CO—15	31	42	8.8	8.8	72
	7	7	Fl	Ob	C－6	XIc	CO—12	28	16	8.0	2.7	
	8	8	Sc	Ob	C－6	XIc	CO—9	18	22	5.4	1.6	43
	9	9	Sc	Ob	C－6	XIc	CO—9	16	15	6.0	1.4	44
	10	11	Fl	GAn	C－8	XIc	CG—9	18	20	7.0	1.6	
	11	12	Fl	GAn	C－8	XIc	母—12	9	16	2.0	0.2	
	12	13	Fl	GAn	C－8	XIc	母—13　CG—8	11	16	6.2	0.8	
	13	14	Fl	GAn	C－8	XIc	CG—9	20	26	6.2	2.3	
	14	15	Fl	GAn	C－8	XIc	CG—9	22	29	7.8	5.4	
	15	16	Fl	GAn	C－8	XIc	母—12	23	24	7.2	3.0	
	16	17	RF	Ob	C－8	XIc	CO—16	34	46	11.2	11.9	70
	17	18	Fl	GAn	C－8	XIc		8	12	4.1	0.2	
	18	19	Kn	Ob	C－6	XIc		43	21	10.0	6.7	38
	19	20	Fl	Ob	C－6	XIb		24	13	3.9	1.0	
	20	21	Fl	GAn	C－6	XIc	母—7	38	30	6.6	5.2	
	21	22	RF	Ob		XIc		13	12	4.7	0.8	
	22	23	Fl	Ob		XIc		23	19	4.9	1.4	
	23	25	Fl	Ob	C－6	XIc		12	16	4.7	0.6	
4A—101	1	1	RF	Ob	C－9	XIb	CO—17	29	20	6.3	3.1	87
	2	2	Fl	GAn	C－9	XIc	母—14 CG—11	30	24	7.6	4.6	94
	3	3	Fl	GAn	C－9	XIc	母—15	18	24	8.8	3.2	
	4	5	Fl	GAn	C－9	XIc	母—14 CG—11	14	18	7.7	1.3	92
	5	6	Fl	GAn	C－9	XIb		8	14	2.9	0.2	
	6	7	Fl	Ob	C－9	XIb		27	18	6.1	2.4	
	7	8	Fl	GAn	C－9	XIc		12	17	3.1	0.6	
	8	9	Fl	Ob	C－9	XIc	CO—17	27	23	5.6	2.1	84
	9	10	Sc	GAn	C－9	XIc	CG—10	37	41	2.3	17.1	77
	10	11	Sc	GAn	C－9	XIc	CG—15	34	36	13.2	11.8	83
	11	12	Fl	GAn	C－9	XIc	母—18 CG—15	30	32	10.1	5.6	80
	12	13	Fl	GAn	C－9	XIc	母—14 CG—11	35	21	3.2	5.0	93
	13	14	Fl	GAn	C－9	XIc	CG—13	25	31	8.7	1.0	90
	14	15	Fl	GAn	C－9	XIc	CG—15	19	16	5.6	1.3	81
	15	16	Fl	GAn	C－9	XIc	母—11 CG—12	43	30	13.3	15.0	114
	16	17	Fl	GAn	C－9	XIc	CG—15	18	18	5.0	1.4	82
	17	18	Fl	GAn	C－9	XIc	CG—13	21	34	7.2	5.3	91
	18	19	Fl	GAn	C－9	XIc	母—14 CG—14	31	39	9.4	11.6	95
	19	20	Fl	GAn	C－9	XIc	母—14 CG—14	33	31	8.3	6.5	96
	20	21	Sc	GAn	C－9	XIc	CG—10	22	31	10.0	4.6	78
	21	22	Kn	GAn	C－9	XIc		37	24	8.8	6.1	75
	22	23	Fl	Ob	C－9	XIc		27	22	4.8	2.0	
	23	27	Fl	GAn	C－9	XIc	母—15	16	12	5.1	0.7	
	24	28	Fl	GAn	C－9	XIc		12	6	2.6	0.2	
	25	29	Fl	GAn	C－9	XIc	母—11 CG—12	35	25	10.6	8.2	113
	26	30	Fl	GAn	C－9	XIc	CG—15	26	14	7.4	2.2	79
	27	31	Fl	Sh	C－9	XIc		46	25	12.0	13.7	
4A—102	1	1	Fl	GAn	C-13a	XIb	母—17	27	28	6.9	4.4	
	2	2	Fl	An	C-13a	XIb		26	27	8.2	4.1	
	3	3	Sc	GAn	C—10	XIc	母—16	21	35	13.0	7.5	88
	4	5	敲石	An	C—10	XIc		157	103	52.7	1227.0	126
	5	8	Fl	GAn	C-13a	XIc	母—17	62	32	15.2	32.1	
	6	9	Fl	GAn	C-13a	XIc		19	8	4.1	0.6	
	7	10	Fl	Ch	C—10	XIc		17	16	5.7	0.9	
	8	11	Fl	Ch	C—10	XIc		24	16	3.4	0.8	
	9	13	Fl	Ch	C—10	XIc		27	18	5.8	2.2	
	10	15	Fl	Ch	C—10	XIc	母—16	45.0	21.0	16.7	13.1	
	11	16	Fl	Ch	C—10	XIc		10.0	13.0	2.3	0.2	
	12	18	Fl	Ob	C—10	XIc		34.0	40.0	11.8	13.7	
4A—103	1	1	Fl	Ob		XIb		12.0	10.0	5.6	0.4	
	2	2	Fl	Ob		XIb		29.0	28.0	8.0	4.9	
4B—99	1	1	台石	An		XIc		175.6	115.7	65.7	1635.0	130
	2	2	Fl	GAn		XIc		8.0	16.0	3.7	0.5	
4B—100	1	1	Fl	Ob	C—11	XIb		15.0	17.0	6.5	1.2	
	2	2	Fl	GAn	C—11	XIb		33.0	26.0	8.2	8.7	
	3	3	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	18.0	22.0	6.6	1.7	

第11表　1C区石器計測表(5)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	4	5	RF	Ob	C—11	XIc	CO—18	48.0	32.0	3.7	20.9	102
	5	6	Fl	Ob	C—11	XIc	母—23	31.0	29.0	9.2	5.9	
	6	7	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	18.0	14.0	3.2	0.8	
	7	8	Fl	Ob	C—11	XIc		7.0	11.0	3.2	0.1	
	8	9	Fl	Ob	C—11	XIc		10.0	22.0	5.6	0.8	
	9	11	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	17.0	29.0	8.5	3.4	
	10	12	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	13.0	9.0	4.2	0.4	
	11	13	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—25	13.0	22.0	6.7	1.4	
	12	14	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—19	25.0	24.0	10.8	5.6	
	13	15	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—23	16.0	19.0	9.1	2.3	
	14	16	Fl	GAn	C—11	XIc		9.0	11.0	2.2	0.3	
	15	17	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	25.0	34.0	5.2	3.1	
	16	18	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—20	5.0	17.0	2.6	0.3	
	17	18	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—20	10.0	13.0	2.7	0.3	
	18	19	Fl	Ob	C—11	XIc		18.0	40.0	9.5	5.1	
	19	20	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—21	17.0	17.0	10.1	2.1	
	20	21	Fl	Ob	C—11	XIc		17.0	12.0	5.7	0.9	
	21	22	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	35.0	44.0	4.2	21.8	107
	22	23	Fl	Ob	C—11	XIc		19.0	13.0	7.5	1.2	
	23	24	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—22	14.0	24.0	7.4	2.0	
	24	25	Fl	Ob	C—11	XIc		31.0	9.0	10.1	1.5	
	25	26	Fl	GAn	C—11	XIc		13.0	16.0	3.2	0.5	
	26	27	Fl	Ob	C—11	XIc		11.0	9.0	2.4	0.2	
	27	28	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—21	23.0	21.0	3.5	3.4	
	28	30	Fl	Ob	C—11	XIb	CO—25	36.0	45.0	11.1	12.9	
	29	32	Kn	Ob	C—11	XIb		30.0	18.0	7.5	3.2	99
	30	33	Fl	GAn	C—11	XIc	母—20 CG—16	14.0	15.0	2.7	0.5	
	31	34	Fl	Ob	C—11	XIb		26.0	8.0	3.5	0.3	
	32	35	Fl	GAn	C—11	XIb	母—20	12.0	19.0	2.3	0.5	
	33	36	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—34	14.0	23.0	9.3	1.8	
	34	38	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—19	13.0	13.0	4.3	0.7	
	35	39	Fl	Ob	C—11	XIc		28.0	38.0	11.3	11.6	
	36	40	CO	Ob	C—11	XIc	CO—19	63.0	42.0	27.8	62.5	
	37	41	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—34	18.0	13.0	7.8	1.5	
	38	42	Fl	GAn	C—11	XIc	母—20 CG—16	17.0	17.0	3.3	1.0	
	39	43	Fl	GAn	C—11	XIc		5.0	9.0	1.2	0.02	
	40	44	Fl	Ob	C—11	XIc		12.0	9.0	4.9	0.5	
	41	45	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	15.0	13.0	3.3	0.6	
	42	46	Fl	Ob	C—11	XIc		12.0	17.0	2.9	0.4	
	43	47	Fl	Ob	C—11	XIc		11.0	15.0	5.7	0.8	
	44	48	Fl	Ob	C—11	XIc		12.0	9.0	4.9	0.4	
	45	49	Fl	GAn	C—11	XIb	母—21	8.0	14.0	3.0	0.3	
	46	50	Fl	Ob	C—11	XIb		14.0	9.0	2.5	0.2	
	47	50	Fl	Ob	C—11	XIc		10.0	7.0	4.1	0.2	
	48	50	Fl	Ob	C—11	XIc		8.0	5.0	1.7	0.03	
	49	51	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	7.0	12.0	3.9	0.3	
	50	53	Fl	Ob	C—11	XIb	CO—23	21.0	26.0	14.5	7.0	
	51	54	Fl	Ob	C—11	XIb		13.0	11.0	3.3	0.4	
	52	55	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—23	12.0	12.0	8.1	0.6	
	53	56	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—35	11.0	12.0	3.8	0.4	
	54	56	Fl	Ob	C—11	XIc		12.0	6.0	5.2	0.4	
	55	56	Fl	Ob	C—11	XIc		7.0	12.0	2.7	0.2	
	56	57	Fl	Ob	C—11	XIc		23.0	21.0	7.7	3.3	
	57	57	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—23	10.0	15.0	6.0	0.6	
	58	57	Fl	Ob	C—11	XIc		17.0	10.0	3.2	0.3	
	59	58	Fl	Ob	C—11	XIc		12.0	10.0	7.8	0.7	
	60	58	Fl	Ob	C—11	XIc		12.0	7.0	0.8	0.1	
	61	58	Fl	Ob	C—11	XIc		9.0	11.0	3.3	0.1	
	62	58	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	9.0	15.0	3.4	0.4	
	63	59	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—24	37.0	32.0	13.3	14.4	
	64	59	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—24	20.0	24.0	11.5	5.5	
	65	59	Fl	Ob	C—11	XIc		9.0	10.0	3.3	0.1	
	66	60	5Fl	Ob	C—11	XIc		16.0	26.0	6.7	2.0	
	67	60	Fl	Ob	C—11	XIc		10.0	10.0	2.6	0.3	
	68	61	Fl	Ob	C—11	XIb	母—21 CO—19	15.0	16.0	11.6	2.7	
	69	61	Fl	Ob	C—11	XIb		24.0	22.0	6.6	3.5	

第12表　1C区石器計測表(6)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	70	62	Fl	Ob	C－11	XIb		6.0	10.0	2.0	0.1	
	71	63	Fl	Ob	C－11	XIb	CO－22	34.0	13.0	10.4	3.8	
	72	64	Fl	Ob	C－11	XIc		8.0	7.0	0.1	0.1	
	73	65	Fl	GAn	C－11	XIc	母－20	23.0	33.0	6.1	3.8	
	74	66	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	11.0	4.5	0.5	
	75	66	Fl	Ob	C－11	XIc		8.0	15.0	3.5	0.4	
	76	66	Fl	Ob	C－11	XIc		7.0	13.0	3.9	0.3	
	77	66	Fl	GAn	C－11	XIc		7.0	7.0	1.8	0.1	
	78	67	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	14.0	4.8	0.4	
	79	68	Fl	Ob	C－11	XIc		8.0	9.0	4.8	0.2	
	80	69	Fl	GAn	C－11	XIc	母－5	46.0	44.0	21.7	46.5	
	81	71	Fl	Ob	C－11	XIc		33.0	12.0	6.8	1.8	
	82	72	Fl	Ob	C－11	XIc		10.0	9.0	4.4	0.3	
	83	73	Fl	Ob	C－11	XIc		6.0	15.0	1.8	0.2	
	84	74	Fl	Ob	C－11	XIc		8.0	5.0	3.9	0.2	
	85	75	Fl	Ob	C－11	XIc		8.0	11.0	5.6	0.4	
	86	76	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－25	17.0	19.0	6.0	1.9	
	87	77	Fl	Ob	C－11	XIc		5.0	20.0	4.0	0.3	
	88	78	Fl	Ob	C－11	XIc		14.0	20.0	6.2	0.7	
	89	82	Fl	Ob	C－11	XIc		11.0	18.0	1.8	0.2	
	90	83	Fl	Ob	C－11	XIc	母－23	11.0	15.0	5.2	0.4	
4B－101	1	2	Fl	Ob	C－12	XIb		6.0	13.0	2.1	0.1	
	2	3	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	12.0	4.0	0.5	
	3	4	Fl	Sh	C－12	XIc		43.0	36.0	6.4	16.9	
	4	5	Sc	GAn	C－9	XIc	母－15	37.0	46.0	16.4	26.9	76
	5	6	Fl	Ob	C－12	XIc		8.0	7.0	3.5	0.1	
	6	7	Fl	Ob	C－12	XIc		14.0	14.0	4.7	0.5	
	7	8	Fl	GAn	C－12	XIc	母－3	9.0	14.0	3.1	0.4	
	8	9	Fl	Ob	C－12	XIc		16.0	17.0	2.6	0.5	84
	9	10	Fl	Ob	C－12	XIc	CO－17	52.0	30.0	7.2	11.2	85
	10	11	Fl	Ob	C－12	XIc		21.0	19.0	7.5	2.0	
	11	12	Fl	GAn	C－12	XIc	CG－17	52.0	18.0	9.9	11.1	123
	12	13	Fl	Ob	C－12	XIc		11.0	21.0	5.1	0.9	
	13	14	Fl	Ob	C－12	XIc	CO－26	22.0	27.0	6.5	3.3	
	14	15	局磨	蛇紋岩	C－12	XIc		51.0	52.0	13.5	37.0	111
	15	16	Fl	GAn	C－12	XIc	CG－18	8.0	17.0	3.4	0.4	
	16	17	Fl	GAn	C－12	XIc	CG－18	14.0	18.0	8.6	1.2	
	17	18	Fl	Ob	C－12	XIc		11.0	10.0	3.0	0.3	
	18	19	Fl	Ob	C－12	XIc		23.0	10.0	2.7	0.5	
	19	20	Fl	GAn	C－12	XIc		15.0	17.0	1.9	0.2	
	20	21	Fl	Ob	C－12	XIc		26.0	32.0	17.6	12.7	
	21	22	Fl	Ob	C－12	XIc	CO－27	9.0	14.0	2.5	0.3	
	22	22	Fl	Ob	C－12	XIc	CO－27	6.0	10.0	1.4	0.1	
	23	22	Fl	Ob	C－12	XIc		4.0	8.0	2.5	0.1	
	24	23	Fl	GAn	C－12	XIc		23.0	29.0	7.5	4.4	
	25	24	Fl	GAn	C－12	XIc		25.0	29.0	5.4	3.5	
	26	26	Fl	GAn	C－12	XIc		39.0	34.0	17.7	19.8	
	27	27	Fl	GAn	C－12	XIc	CG－18	28.0	27.0	10.0	6.8	
	28	28	Fl	Ob	C－12	XIc		13.0	7.0	2.0	0.2	
4B－102	1	1	Fl	GAn	C-13a	XIc		37.0	30.0	5.4	5.7	
	2	2	Fl	GAn	C-13a	XIc	CG－19	34.0	29.0	9.4	7.6	
	3	3	Fl	GAn	C-13a	XIc	CG－19	19.0	14.0	6.0	1.0	
	4	4	Fl	GAn	C-13a	XIb	母－13	23.0	14.0	7.4	1.6	
	5	5	Sc	Ob	C-13b	XIc	CO－28	15.0	13.0	5.1	0.6	116
	6	6	Fl	Ob	C-13b	XIc	CO－29	17.0	22.0	5.5	1.5	
	7	7	Fl	Ob	C－12	XIb		24.0	29.0	9.9	4.6	
	8	8	Kn	GAn	C-13a	XIc	母－18	33.0	14.0	9.3	3.6	112
	9	9	Fl	GAn	C-13a	XIc	母－18 CG－17	67.0	34.0	9.0	23.5	124
	10	10	Fl	GAn	C-13a	XIc	母－17	63.0	48.0	18.2	58.7	
	11	11	Fl	GAn	C-13a	XIc		15.0	19.0	4.8	1.7	
	12	12	Fl	GAn	C-13a	XIc	母－17	40.0	37.0	20.5	26.2	
	13	14	Fl	Ob	C-13b	XIc	CO－30	31.0	15.0	8.1	3.3	52
	14	15	磨石	An	C-13b	XIc		135.0	67.0	21.8	290.0	129
	15	16	Fl	GAn	C-13b	XIc		29.0	39.0	8.4	7.8	
	16	17	Sc	Ob	C-13b	XIc	CO－28	30.0	30.0	10.3	6.3	115
	17	18	Fl	Ob	C-13b	XIc		10.0	13.0	4.1	0.3	

第13表　1C区石器計測表(7)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	18	19	RF	Ob	C-13b	XIc	CO—31	12.0	19.0	3.4	0.8	118
	19	20	RF	Ob	C-13b	XIc	CO—31	33.0	23.0	9.1	4.7	117
	20	21	Fl	Ob	C-13b	XIc		19.0	21.0	4.3	1.5	
	21	22	Fl	Ob	C-13b	XIc		7.0	19.0	2.6	0.3	
	22	23	RF	Ob	C-13b	XIc	CO—33	39.0	34.0	10.0	9.5	120
	23	24	Fl	Ob	C—12	XIc		11.0	16.0	7.0	1.0	
	24	25	Fl	Ob	C-13b	XIc		38.0	37.0	9.5	10.2	
	25	26	Fl	Ob	C-13b	XIc	CO—29	14.0	20.0	4.4	1.2	
	26	27	Fl	GAn	C-13b	XIc	母—17	22.0	23.0	6.5	2.6	
	27	28	磨石	An	C-13a	XIc	CA—1	84.0	73.0	46.0	380.0	127
	28	29	Fl	Ob	C-13b	XIc		16.0	14.0	2.7	0.5	
	29	30	Fl	Ob	C—12	XIc		13.0	13.0	4.3	0.6	
	30	31	Fl	Ob	C—12	XIc		18.0	16.0	5.2	1.4	
	31	32	Fl	Ob	C—12	XIc	母—22 CO—32	45.0	48.0	5.3	25.9	
	32	33	Fl	Ob	C—12	XIc		18.0	14.0	4.7	1.2	
	33	34	Fl	Ob	C—12	XIc	母—22 CO—32	35.0	47.0	13.2	18.0	
	34	35	Fl	Ob	C—12	XIc		15.0	13.0	7.4	1.1	
	35	36	Fl	Ob	C—12	XIc		10.0	11.0	2.9	0.2	
	36	37	Fl	Ob	C—12	XIc		13.0	23.0	2.3	0.7	
	37	38	Fl	Ob	C—12	XIc		10.0	12.0	2.9	0.2	
	38	39	Fl	Ob	C—12	XIc		8.0	8.0	1.9	0.1	
	39	40	Fl	Ob	C—12	XIc		14.0	16.0	8.7	1.0	
	40	40	Fl	Ob	C—12	XIc		21.0	13.0	7.5	2.2	
	41	41	Fl	Ob	C—12	XIc		22.0	20.0	7.5	2.8	
	42	42	Fl	Ob	C—12	XIc	CO—33	10.0	13.0	8.9	0.7	119
	43	43	Fl	GAn	C—12	XIc		10.0	14.0	2.3	0.3	
	44	45	Fl	Ob	C—12	XIc		21.0	12.0	5.5	1.1	
	45	46	Fl	Ob	C-13a	XIc		35.0	54.0	8.3	11.6	122
4B—103	1	1	Fl	GAn	C—14	XIb		13.0	18.0	5.0	1.0	
	2	2	Fl	Ob	C—14	XIb		20.0	16.0	3.8	0.7	
	3	3	Fl	Ob	C—14	XIb		7.0	11.0	1.4	0.1	
	4	4	Fl	Ob	C—14	XIb		7.0	14.0	1.5	0.1	
	5	5	Fl	GAn	C—14	XIb		12.0	12.0	3.9	0.5	
	6	6	Fl	GAn	C—14	XIc	母—19	45.0	35.0	12.1	15.7	125
	7	7	Fl	GAn	C—14	XIc		24.0	14.0	4.5	1.2	
	8	7	Fl	GAn	C—14	XIc		8.0	11.0	1.3	0.1	
	9	8	Fl	GAn	C—14	XIc		42.0	38.0	11.1	13.4	
	10	9	Fl	GAn	C—14	XIc	母—19	34.0	51.0	23.6	35.2	
	11	10	Fl	GAn	C—14	XIc		23.0	22.0	3.4	1.5	
	12	11	Fl	Ob	C—14	XIc		15.0	10.0	3.4	0.4	
	13	12	Fl	Ob	C—14	XIc		12.0	12.0	1.8	0.2	
	14	13	Fl	Ob	C—14	XIc		18.0	6.0	4.2	0.3	
4B—104	1	1	Fl	Ob		XIb		6.0	7.0	3.9	0.1	
4C—99	1	1	RF	Ob	C—11	XIc	CO—36	20.0	13.0	3.8	0.7	100
4C—100	1	1	Fl	Ob	C—11	XIb	CO—37	28.0	15.0	9.9	2.8	
	2	2	Fl	Ob	C—11	XIb	CO—37	16.0	27.0	5.8	1.3	
	3	3	Fl	GAn	C—11	XIb		12.0	8.0	4.6	0.2	
	4	4	Fl	Ob	C—11	XIb		12.0	21.0	7.0	0.8	
	5	5	Fl	Ob	C—11	XIb		14.0	15.0	3.2	0.6	
	6	6	Fl	Ob	C—11	XIb		37.0	34.0	8.4	11.0	
	7	7	Fl	Ob	C—11	XIb		9.0	16.0	6.8	0.6	
	8	8	Kn	GAn	C—11	XIb	母—9	36.0	19.0	7.2	4.6	98
	9	9	Fl	Ob	C—11	XIc	母—23	16.0	16.0	4.3	1.1	
	10	10	RF	Ob	C—11	XIc	CO—18	7.0	22.0	6.1	0.8	103
	11	11	Fl	Ob	C—11	XIc		7.0	9.0	2.5	0.1	
	12	13	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—23	11.0	19.0	9.6	0.8	
	13	15	RF	Ob	C—11	XIc	CO—38	23.0	20.0	6.4	1.8	106
	14	16	Fl	Ob	C—11	XIc		14.0	12.0	3.7	0.6	
	15	17	Fl	Ob	C—11	XIc		11.0	10.0	1.0	0.1	
	16	18	Fl	GAn	C—11	XIc	母—21	14.0	21.0	2.2	0.6	
	17	19	Fl	Ob	C—11	XIc		11.0	14.0	3.0	0.3	
	18	20	Fl	Ob	C—11	XIc		5.0	9.0	2.4	0.1	
	19	21	Fl	Ob	C—11	XIc		11.0	13.0	2.6	0.2	
	20	22	Fl	Ob	C—11	XIc		6.0	10.0	4.2	0.2	
	21	23	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—38	20.0	32.0	6.4	3.7	105
	22	24	Fl	Ob	C—11	XIc	CO—40	22.0	15.0	5.2	1.2	

第14表　1C区石器計測表(8)

グリッド	No.	旧No.	器種	石材	ブロック	層位	接合関係	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
	23	25	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－39	22.0	30.0	8.8	2.8	
	24	26	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－38	28.0	32.0	8.2	7.6	104
	25	27	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－36	11.0	12.0	2.3	0.3	101
	26	28	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	10.0	2.7	0.2	
	27	29	Fl	Ob	C－11	XIc		22.0	16.0	7.5	1.7	
	28	30	Fl	Ob	C－11	XIc		20.0	8.0	2.8	0.3	
	29	31	Fl	Ob	C－11	XIc		17.0	11.0	7.2	0.7	
	30	32	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－40	15.0	9.0	3.5	0.4	
	31	33	Fl	Ob	C－11	XIc		25.0	14.0	4.1	1.0	
	32	33	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	16.0	3.2	0.5	
	33	34	Fl	GAn	C－11	XIc	母－20	11.0	16.0	3.5	0.6	
	34	35	Fl	Ob	C－11	XIc		10.0	11.0	5.1	0.5	
	35	36	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－34	27.0	16.0	9.9	3.7	
	36	37	Fl	GAn	C－11	XIc		15.0	29.0	5.9	1.8	109
	37	38	Fl	Ob	C－11	XIc	母－23	19.0	19.0	6.0	1.3	
	38	38	Fl	Ob	C－11	XIc		8.0	13.0	2.8	0.2	
	39	39	Fl	GAn	C－11	XIc		8.0	15.0	4.8	0.4	
	40	40	Fl	Ob	C－11	XIc		11.0	16.0	4.5	0.4	
	41	41	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	7.0	2.2	0.1	
	42	42	Fl	Ob	C－11	XIc	CO－39	17.0	13.0	7.6	1.1	
	43	43	Fl	GAn	C－11	XIc		34.0	25.0	7.1	5.8	108
	44	44	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	12.0	3.8	0.4	
	45	45	Fl	Ob	C－11	XIc		9.0	16.0	3.0	0.4	
	46	46	Fl	Ob	C－11	XIc		12.0	13.0	5.3	0.7	
	47	47	Fl	Ob		XIb	CO－35	20.0	17.0	8.8	2.4	
	48	47	Fl	Ob		XIb		12.0	20.0	7.2	0.8	
	49	48	Fl	GAn		XIb		39.0	46.0	8.7	16.3	110
	50	49	Fl	GAn		XIb		21.0	18.0	4.3	1.5	
4C－101	1	1	Fl	Ob	C－12	XIc		7.0	10.0	3.2	0.1	
	2	2	Fl	Ob	C－12	XIc		18.0	7.0	2.8	0.4	
	3	3	Fl	Ob	C－12	XIc		13.0	15.0	6.9	0.6	
	4	3	Fl	Ob	C－12	XIc		5.0	9.0	4.2	0.2	
	5	4	Fl	Ob	C－12	XIc		11.0	13.0	2.0	0.2	
4C－102	1	1	RF	Ob	C－12	XIc	CO－33	26.0	20.0	9.0	4.3	121
	2	2	Fl	Ob	C－12	XIc	CO－17	14.0	12.0	2.8	0.4	86
	3	3	Fl	Ob	C－12	XIc		15.0	22.0	5.5	1.6	

第15表　1C区石器計測表(9)

資料No.	個　別　番　号	実測図
CG－1	3X99・4（2b・Sc）→3Y・22(27)→3X99・24(28)	○
CG－2	3X99・25(32)＋3X99・12(31)＋3X99・18(30)	○
CG－3	4A99・1(54)→3Y100・12(56)→3Y100・8(59)	
	＋	
	3Y98.1(55)	
	4A99・6(57)→4A99・25(28)	○
CG－4	3Y99・16→3Y99・15	
CG－5	3Y100・1→3X99・3	
CG－6	3Y100・2→3Y99・12	
CG－7	3Y101・16(67)＋3Y101・21(66)＋3Y100・19(65)	○
CG－8	4A100・2＋4A100・12	
CG－9	4A100・14＋4A100・13＋4A100・10	
CG－10	4A101・9（77・Sc）＋4A101・20（78・Sc）	○
CG－11	4A101・12(93)＋4A101・2(94)＋4A101・4(92)	○
CG－12	4A101・15(114)＋4A101・25(113)	○
CG－13	4A101・17(91)＋4A101・13(90)＋3Y100・3(89)	○
CG－14	4A101・18(95)＋4A101・19(96)	○
CG－15	4A101・26(79)→4A101・11(80)→4A101・14(81)→4A101・16(82)→	
	4A101・10（83・Sc）	○
CG－16	4B100・30＋4B100・38	
CG－17	4B101・11(123)＋4B102・9(124)	○
CG－18	4B101・16→4B101・15→4B101・27	
CG－19	4B102・2→4B102・3	
CO－1	3W100・5(1)→3W100・18（3・Sc）	
	＋　3W100・15（2・Kn）	
	3W100・19(4)	
	3W100・4(7)－3W100・11(5)	
	3W100・17（6・Kn）	○
CO－2	3W100・8（9・Sc）＋3Y101・2（10・Sc）	○
CO－3	3W101・9＋3W101・19	
CO－4	3X99・9→3X99・2	
CO－5	3X99・13＋3X100・8	
CO－6	3X99・14(34)＋3X99・16(33)	
	↓	
	3Y99・1（35・Co）	○
CO－7	3Y99・7(37)＋3Y99・8（36・RF）	○
CO－8	3Y99・13→3Y99・10	
CO－9	3Y100・9（41・Sc）＋3Y99・5（42・Sc）	
	＋　＋	
	4A100・9（44・Sc）＋4A100・8（43・Sc）	○
CO－10	3Y100・14(50)→3Y100・11（51・Co）	○
CO－11	3Y101・3(61)→3Y100・18（62・RF）	○

第16表　1C区接合資料1覧表(1)

資料No.	個　　別　　番　　号	実測図
CO—12	4 A99・5＋4 A100・7	
CO—13	4 A99・7(47)＋4 A100・4 (48・RF)＋3 Y100・10(49)	○
CO—14	4 A99・8(23)→3 X99・7 (24・Sc)＋3 ×99・5 (25・Sc)	○
CO—15	4 A100・6(72)→3 Y99・4(93)	○
CO—16	4 A100・16 (70・RF) →4 A99・12(71)	○
CO—17	4 A101・1 (87・RF)＋	
	＋　　4 B101・9(85)＋4 C102・2(86)	
	4 A101・8(84) ＋	○
CO—18	4 B100・4 (102・RF)＋4 C100・10 (103・RF)	○
CO—19	4 B100・12→4 B100・68→4 B100・36	
	↖ 4 B100・34 ↗	
CO—20	4 B100・16＋4 B100・17	
CO—21	4 B100・19＋4 B100・27	
CO—22	4 B100・23＋4 B100・71	
CO—23	4 B100・50＋4 B100・52＋4 B100・13	
	＋　　＋	
	4 B100・57＋4 C100・12	
CO—24	4 B100・63＋4 B100・64	
CO—25	4 B100・86	
	＋　→4 B100・28	
	4 B100・11	
CO—26	4 B101・13→3 W100・7	
CO—27	4 B101・21＋4 B101・22	
CO—28	4 B102・5 (116・Sc)＋4 B102・16 (115・Sc)	○
CO—29	4 B102・6＋4 B102・25	
CO—30	4 B102・13(52)→4 A99・20(53)	○
CO—31	4 B102・18 (118・RF)＋4 B102・19 (117・RF)	○
CO—32	4 B102・31→4 B102・33	
CO—33	4 B102・42(119)＋4 B102・22 (120・Sc)＋4 C102・1 (121・Sc)	○
CO—34	4 B100・37＋4 C100・35	
CO—35	4 B100・53→4 C100・47	
CO—36	4 C99・1 (100・RF)＋4 C100・25 (101)	○
CO—37	4 C100・1→4 C100・2	
CO—38	4 C100・13 (106・RF)＋4 C100・21(105)＋4 C100・24(104)	○
CO—39	4 C100・23＋4 C100・42	
CO—40	4 C100・30→4 C100・22	
CS—1	3 W102・17(15)→3 ×102・1(16)	
	↓	
	3 ×102・6 (17・Kn) →3 W102・20 (21・Co)	
	3 ×102・4(18)→3 ×102・14(19)→3 W102・8(20)	○
CO—2	3 W101・17 (14・Sc)＋3 W101・20 (13・Sc)	○
CO—1	3 W100・16 (128・磨石)＋4 B102・27 (127・磨石)	○

第17表　1C区接合資料一覧表(2)

2　2区の遺構と遺物

(1)　縄文時代の遺構と遺物

a. 遺　　構　(第36図)

縄文時代の遺構としては、土壙が9基検出された。

J－1号土壙

2A－117グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は箱状をなす。規模は1.27m×1.16m、深さ30cmで長軸方向はN－82°－Eである。底面のほぼ中央に小ピットがある。縄文時代前期に属する土器片6点出土。

J－2号土壙

2G－117グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.27m×0.95m、深さ49cmで長軸方向はN－70°－Eである。縄文時代の土器片1点出土。

J－3号土壙

1Y－118グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱状をなす。規模は1.32m×0.75m、深さ21cmで長軸方向はN－60°－Eである。縄文時代前期に属する土器片3点出土。

J－4号土壙

2A－118グリッドに位置する。形状は3号土壙に類似、規模は1.78m×1.01m、深さ60cmで長軸方向はN－75°－Eである。縄文時代前期に属する土器片6点、フレーク1点出土。

J－5号土壙

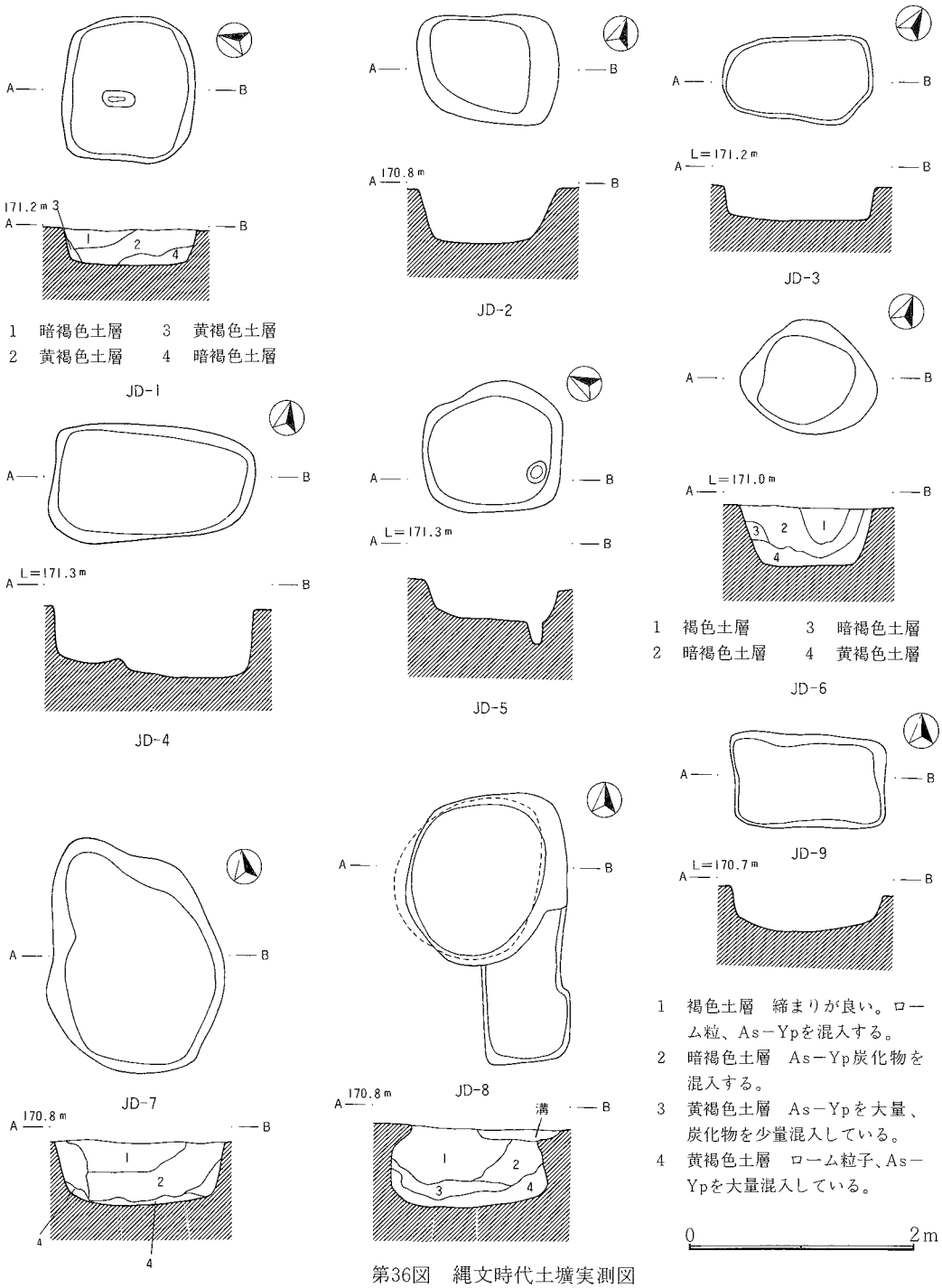
2D－119グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は箱状をなす。規模は1.21m×0.83m、深さ49cmで長軸方向はN－28°－Wである。低面南隅に小ピットがある。縄文時代前期に属する土器片2点出土。

J－6号土壙

2E－118グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形はやや丸みのある箱状をなす。規模は径1.12m、深さ38cmである。縄文時代前期に属する土器片12点出土。

J－7号土壙

2F－119グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形はやや丸みのある箱状をなす。規模は2.11m×1.33m、深さ55cmで長軸方向はN－13°－Wである。底面に横になった状態で、縄文時代に前期に属する小形の深鉢土器が1点、その他同時期に属する土器片33点、フレーク2点出土。

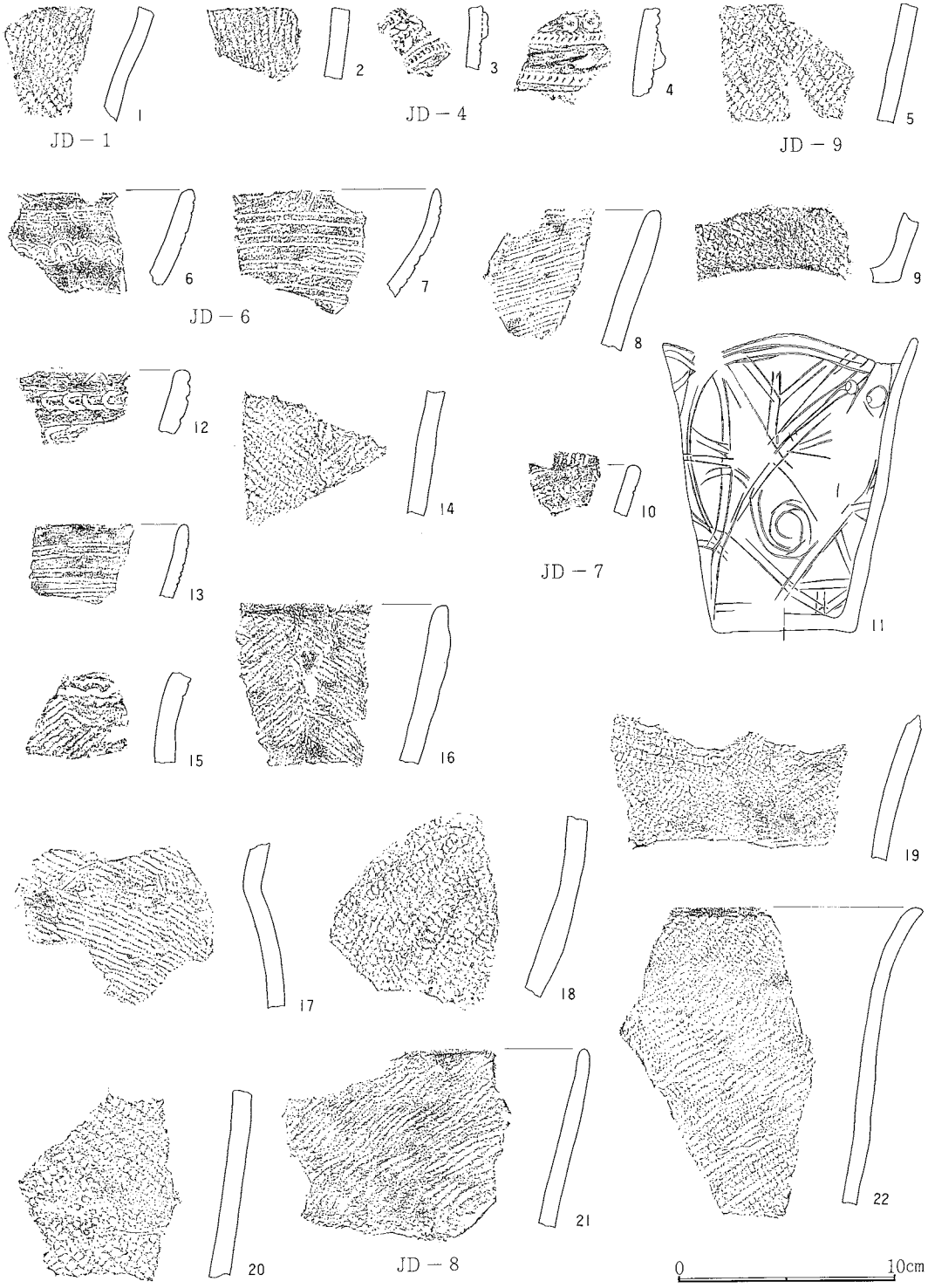


1　暗褐色土層　　3　黄褐色土層
2　黄褐色土層　　4　暗褐色土層

1　褐色土層　　3　暗褐色土層
2　暗褐色土層　　4　黄褐色土層

1　褐色土層　締まりが良い。ローム粒、As－Ypを混入する。
2　暗褐色土層　As－Yp炭化物を混入する。
3　黄褐色土層　As－Ypを大量、炭化物を少量混入している。
4　黄褐色土層　ローム粒子、As－Ypを大量混入している。

第36図　縄文時代土壙実測図



第37図　縄文土器実測図

J－8号土壙

2F－120グリッドに位置し、溝状遺構により切られる。平面形は不整円形で、断面形は袋状をなす。規模は径1.93m、深さ69cmである。縄文時代前期に属する土器片39点出土。

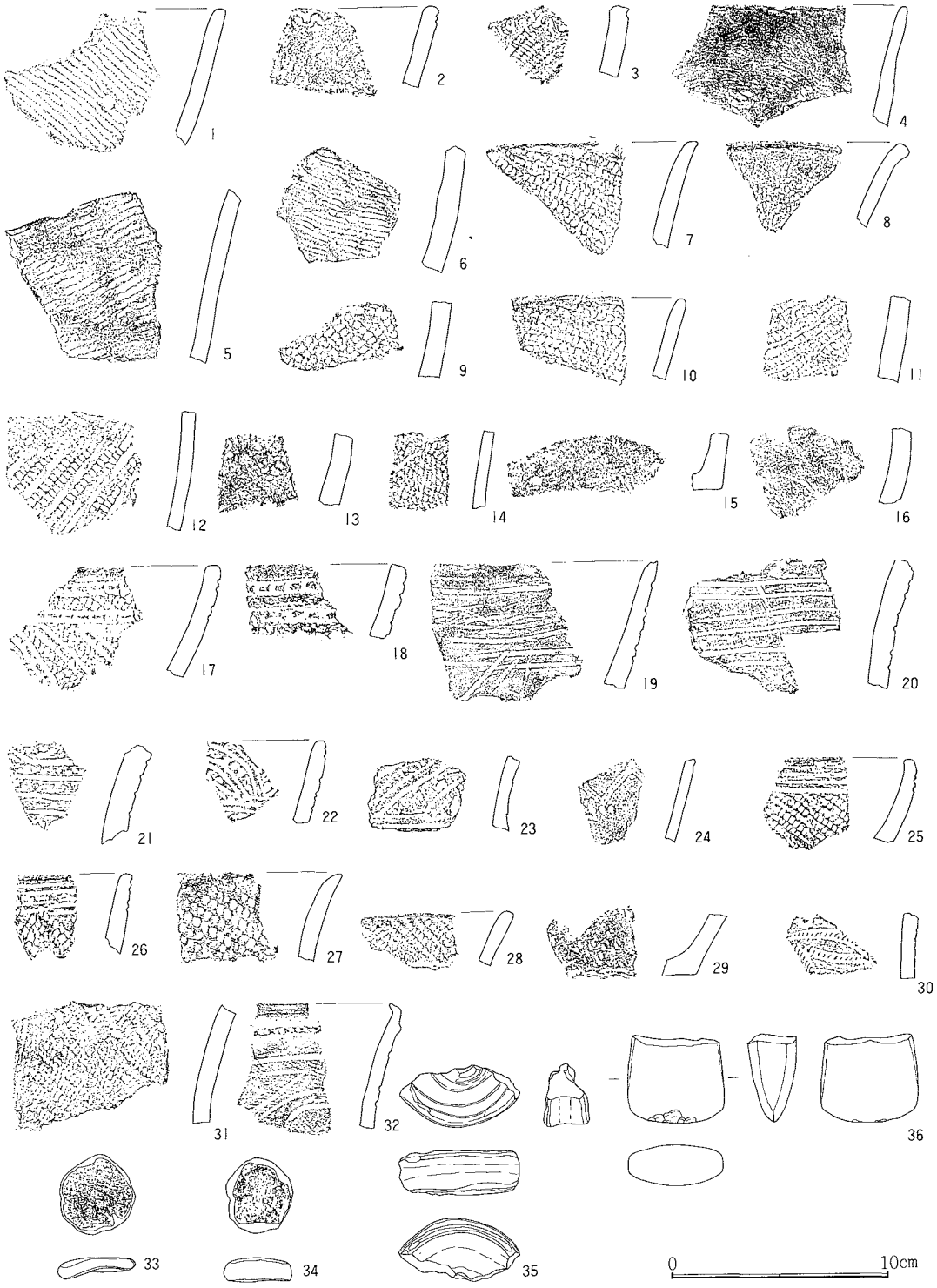
J－9号土壙

2F－121グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形はやや丸みのある箱状をなす。規模は1.38m×0.78m、深さ38cmで長軸方向はN－89°－Wである。縄文時代前期に属する土器片2点出土。

b．遺　　物　（第37図～第38図）

土壙出土遺物

1は1号土壙出土の遺物である。胴部破片で単節斜縄文が施されている。縄文時代前期諸磯式に属する。2～4は4号土壙出土の遺物で、縄文時代前期諸磯式に属する。2は胴部破片で、単節斜縄文が施されている。3は胴部破片で、中央に連続爪形文が施された結節沈線を持ち、それにそって連続爪形文が施される。4は胴部破片で、結節浮線を持ちそれにそって連続爪形文、円形竹管による刺突が施されている。5は9号土壙出土の遺物である。胴部破片で、単節斜縄文が施されている。縄文時代前期諸磯式に属する。6・7は6号土壙出土の遺物で、縄文時代前期前葉黒浜式に属する。6は口縁部破片で、横位は連続爪形文、コンパス文が施されている。7は口縁部破片で、横位に竹管による平行沈線が施されている。6・7共に土器の胎土に繊維が多く混入する。8～11は7号土壙出土の遺物である。8は口縁部破片で、横位に竹管による平行沈線が施され、胎土に繊維が多く混入する。縄文時代前期前葉黒浜式に属する。9は底部破片で、撚糸文が施されている。10は口縁部破片で、口唇部に刻を持ち、横位に連続爪形文が施されている。11は小型の深鉢で、口縁部は波状で口唇部に刻を持つ竹管による平行沈線が施され、口縁部に1対の補修孔を持つ。9・10・11共に縄文時代前期諸磯式に属する。12～22は8号土壙出土の遺物で、縄文時代前期前葉黒浜式に属する。12は口縁部破片で、横位に竹管による爪形文が施されている。13は口縁部破片で、横位に竹管による平行沈線が施されている。14は胴部破片で、単節斜縄文と無節斜縄文により羽状を作っている。15は胴破片で、単節斜縄文を施文にした後に竹管によるコンパス文を施されている。16は口縁部破片で、無節斜縄文により羽状を作っている。17は胴部破片で、無節斜縄文が施されている。18は胴部破片で、単節斜縄文が施されている。19は胴部破片で単節斜縄文と無節斜縄文により羽状を作っている。20は胴部破片で単節斜縄文が施されている。21は口縁部破片で単節斜縄文と無節斜縄文により羽状を作っている。22は口縁～胴部にかけての破片で、口縁は弱く外反し、単節斜縄文が施されている。12～22全ての土器の胎土に繊維が多く混入する。



第38図　表採遺物実測図

表採遺物

1～3は縄文時代前期前葉関山式に属する一群である。1は口縁部破片で、無節斜縄文を施文した後に口唇部に竹管によるコンパス文を施されている。2は口縁部破片で、単節斜縄文を施文した後に口唇部に竹管によるコンパス文を施されている。3は胴部破片で、単節斜縄文を施した後に竹管によるコンパス文を施されている。1～3全ての土器の胎土に繊維が多く混入する。4～26は縄文時代前期前葉黒浜式に属する一群である。4は口縁部破片で、無節斜縄文により菱形文様が施されている。5は胴部破片で、無節斜縄文が施されている。4と同一個体と思われる。6は胴部破片で、無節斜縄文が施されている。7は口縁部破片で、単節斜縄文が施され口唇部は弱く外反する。8は口縁部破片で、単節斜縄文が施され口唇部は強く外反する。9は胴部破片で、単節斜縄文が施されている。10は口縁部破片で、単節斜縄文が施されている。11は胴部破片で、附加条の縄文が斜位に施されている。12は胴部破片で附加条の縄文により菱形文様が施されている。15は底部破片で、単節斜縄文が施されている。16は胴部破片で、磨滅が著しい。17は口縁部破片で、単節斜縄文を施文した後に竹管による爪形刺突文を施されている。18は口縁部破片で、竹管による爪形刺突文が施されている。19は口縁部破片で、竹管による平行沈線が施されている。20は胴部破片で、竹管による平行沈線文が施されている。21は胴部破片で、単節斜縄文を施文した後に竹管による平行沈線文を施されている。22は口縁部破片で単節斜縄文を施文した後に竹管による平行線文を施されている。23は胴部破片で、単節斜縄文を施文した後に竹管による平行沈線を施されている。24は胴部破片で、竹管による爪形刺突文、平行沈線が施されている。25は口縁部破片で弱く内彎し、単節斜縄文を施文した後に口唇部下に二条の竹管による平行沈線を施されている。26は口縁部破片で、単節斜縄文を施した後に口唇部下に二条の竹管による平行沈線を施されている。4～26全ての土器の胎土に繊維が多く混入する。27～30は縄文時代前期諸磯式に属する一群である。27は口縁部破片で、口唇部は弱く外反する。口唇部下に単節斜縄文が施されている。28は口縁部破片で、単節斜縄文が施されている。29は底部破片で、単節斜縄文が施されている。30は胴部破片で、竹管による爪形刺突文、円形刺突文を施されている。31は縄文時代中期加曽利E式に属する土器である。磨消縄文帯を持ち、地文に単節斜縄文が施されている。32は縄文時代後期掘之内式に属する土器である。口縁部破片で、口縁部はくの字に屈曲する。口唇部下には押圧を施した隆帯が廻り、その下に充塡縄文帯が施されている。縄文は単節斜縄文である。33・34は土垂である。2点共磨滅が著しいが、縄文時代前期に属する土器片と思われる。35は耳栓である。縄文時代後期加増利B式に属するものと思われる。36は定角式磨製石斧の刃部破片である。

(2)　平安時代の遺構と遺物

a。住　居　址

H－1号住居址　（第39図）

2N－108・109・110、20－109グリッドに位置し、西壁、カマドの一部、床面の東端を土坑により切られている。平面形はやや歪みのある長方形をなす。規模は長軸4.38m、短軸3.50mで長軸方向はN－110°－Eである。

壁は確認面への掘り込みが浅いため残存状態は不良で、北壁で13cm、西壁で15cm、東壁から南壁にかけては壁を確認することができなかった。

床面は平坦でやや固く締っていた。柱穴は確認されなかった。

貯蔵穴は南東隅にあり、平面形は長方形をなし、規模は76cm×56cm、深さ38cmで、土器片が出土した。

カマドは住居の東側の中央よりに位置し、南端を土壙によって切られている。平面形は楕円形をなすとみられ、焼土が全面に堆積していた。

出土遺物は杯を中心として貯蔵穴、北壁、西壁寄りに多く出土した。西壁寄りにはローム塊、炭化材も検出された。

H－2号住居址　（第41図）

2M－108・109・110、2N－109、110グリッドに位置する。平面形は長方形をなす。規模は長軸5.0m、短軸3.40mで長軸方向はN－109°－Eである。

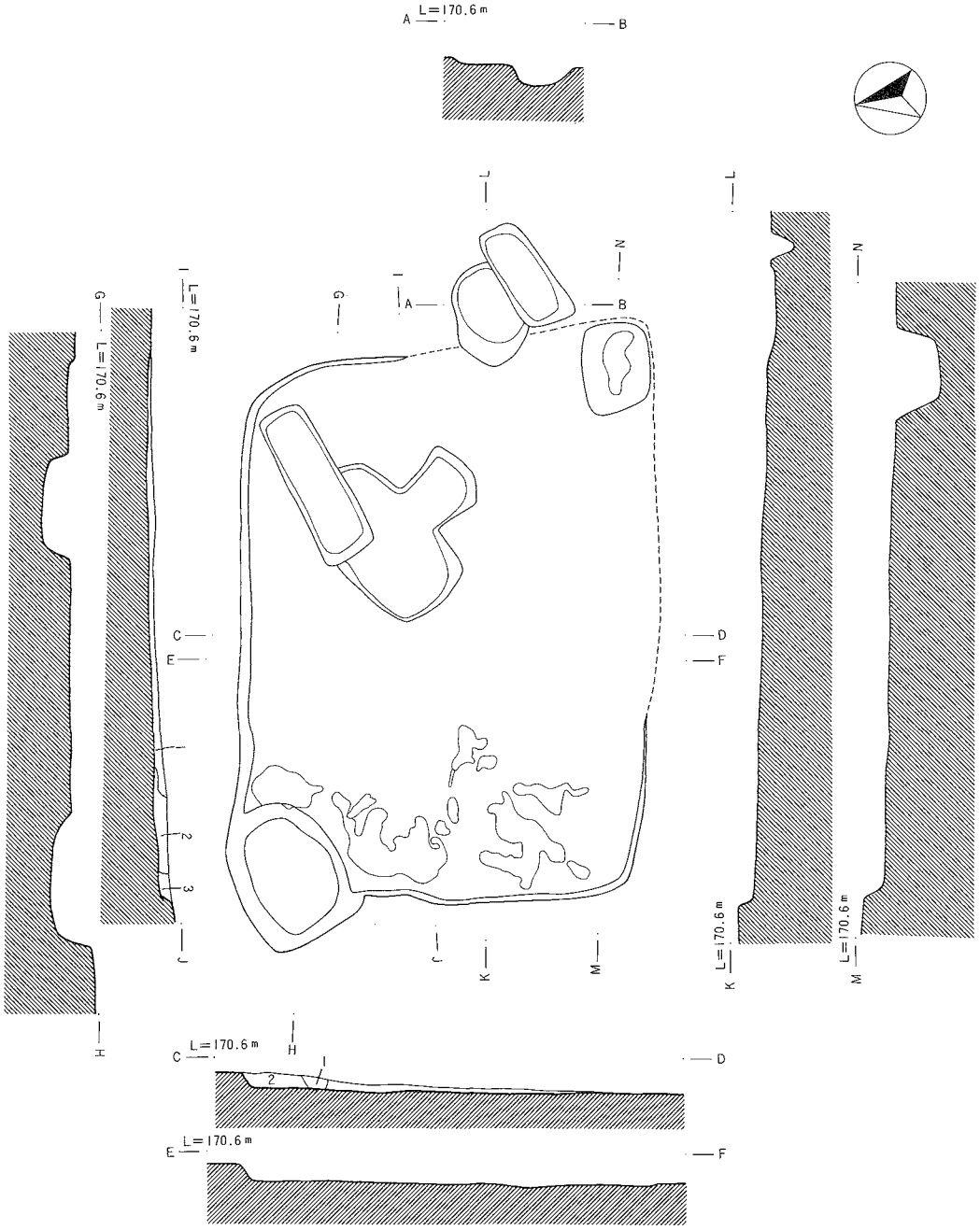
1号住居址同様掘り込みが浅く残存状態は不良で西壁で5cm、東壁、北、南壁の一部は確認することができなかった。

床面は平坦でやや固く締まっていた。ピットは2基検出された。径は47cm程で、深さは床面より12cm前後の浅いもので、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴と考えられるが2基のみのため、断定はしかねる。

貯蔵穴は南東隅にあり、東側を土壙により切られている。平面形はほぼ方形をなし、規模は60cm×56cm、深さ60cmで、土器片が出土した。

カマドはほぼ中央に位置し、平面形は楕円形をなす。

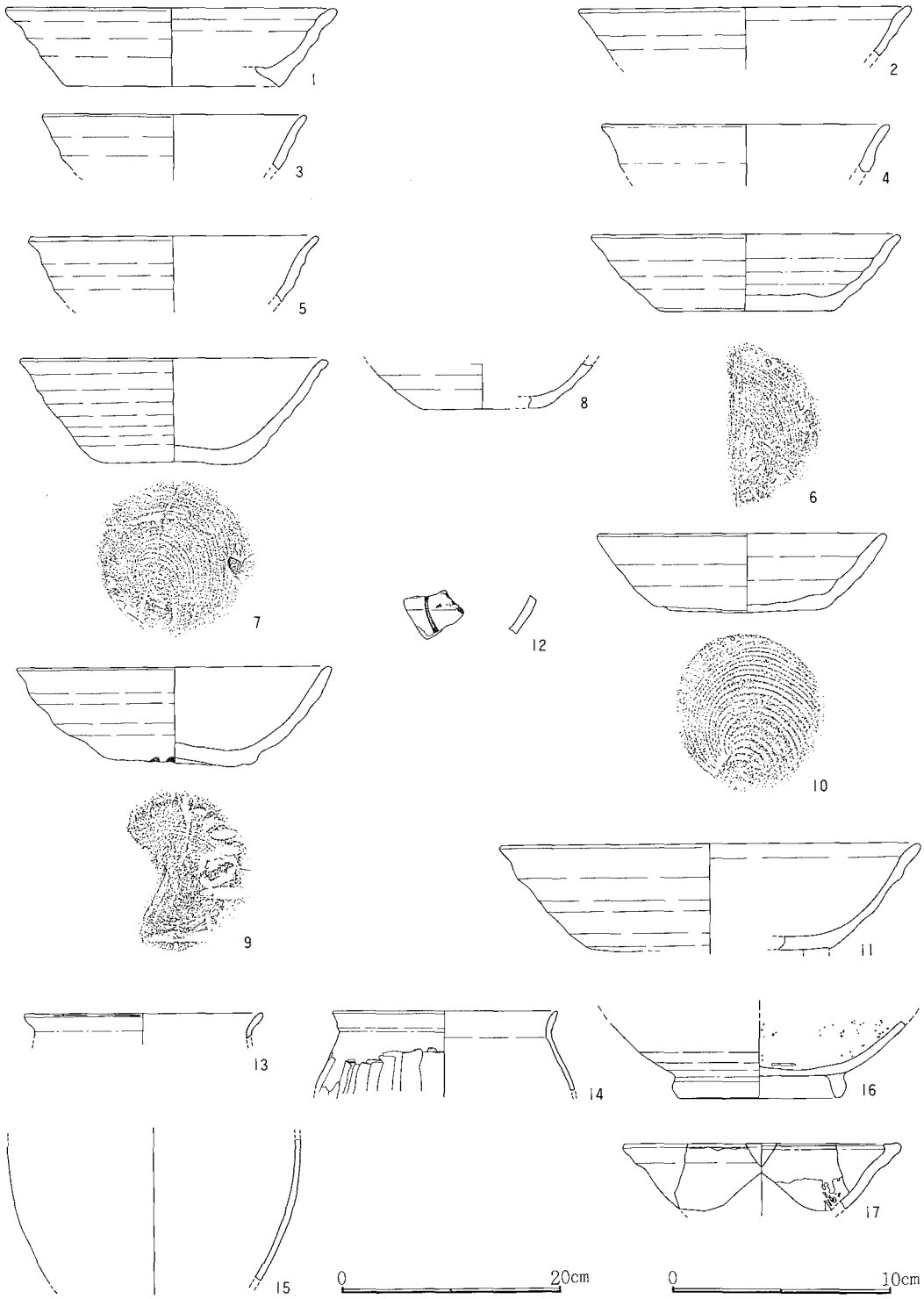
遺物は貯蔵穴を中心として、須恵器杯と土師器甕等が出土した。



1　褐色土層　細粒で締まりが良い。ローム粒子、焼土、炭化物を少量混入する。
2　暗褐色土層　細粒で締まりが良い。ローム粒子、焼土、炭化物を少量混入する。
3　黒褐色土層　細粒で締まりが良い。As－YPを少量混入する。

0　2m

第39図　H－1号住居址実測図



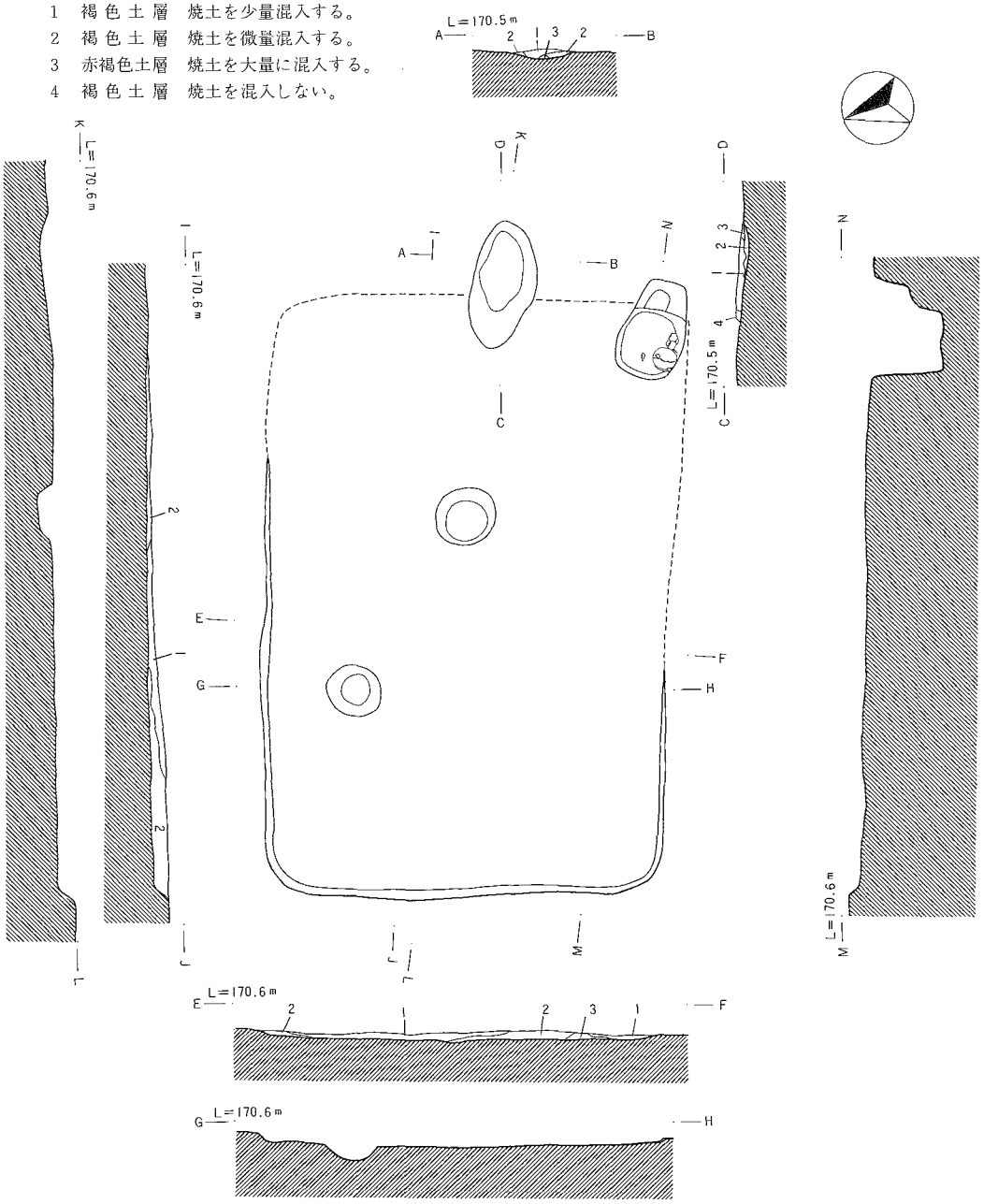
第40図　H－1号住居址出土遺物実測図

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	軟質	1/7	
2	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	やや軟質	1/7	土師質
3	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	やや軟質	1/10	
4	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ	緻密	硬質	1/9	
5	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ	緻密	やや軟質	1/9	外面に稜が良く残る
6	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	やや軟質	4/9	
7	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含む	やや軟質	3/4	外面に稜が良く残る
8	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含む	やや軟質	1/9	
9	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	やや軟質	3/5	底部に刺突跡あり
10	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	白色砂粒を少量含む	やや軟質	5/7	
11	須恵器	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含む	やや軟質	1/3	高台部欠損
12	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	白色砂粒を少量含む	やや軟質		墨書土器
13	土釜	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁1/12	土師質
14	土釜	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含み粗雑	普通	口縁～胴上部 1/12	土師質
15	土師器 甕	外面：胴部へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	やや軟質	胴部1/3	

No.	種別	器種	釉	生産地	時代
16	陶器	碗	灰釉	――	10C前
17	陶器	御皿	灰釉	瀬戸焼	15C前

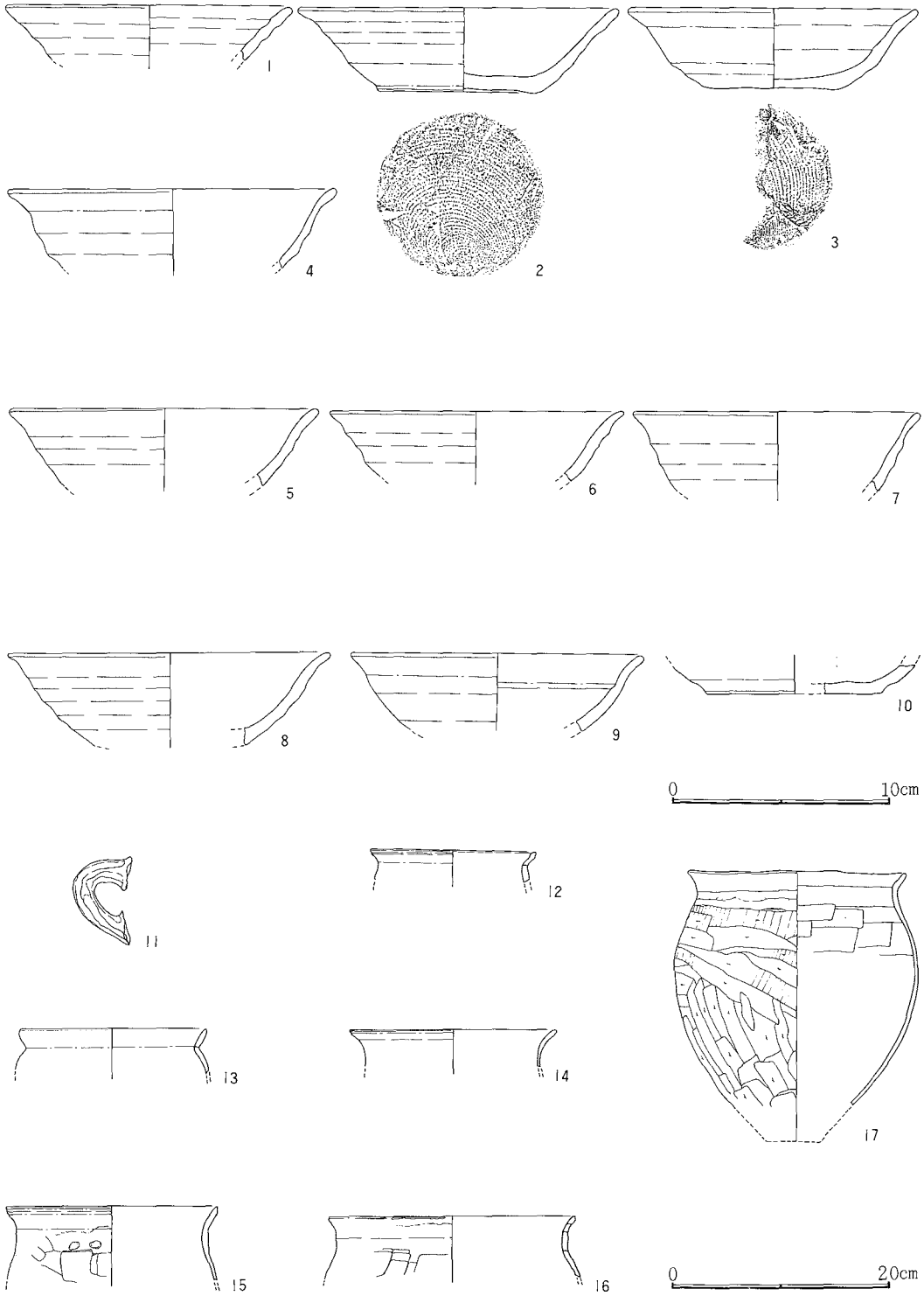
第18表　H－1号住居址出土遺物観察表

1　褐色土層　焼土を少量混入する。
2　褐色土層　焼土を微量混入する。
3　赤褐色土層　焼土を大量に混入する。
4　褐色土層　焼土を混入しない。



1　黒色土層　細粒で締まりが良い。白色パミスを少量混入する。
2　褐色土層　細粒で締まりが良い。ローム粒子、焼土、炭化物を少量混入する。
3　暗褐色土層　細粒で締まりが良い。ローム粒子、焼土、炭化物を少量混入する。

第41図　H－2号住居址実測図　0　2m



第42図　H－2号住居址出土遺物実測図

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	やや軟質	1/10	
2	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	白色砂粒を少量含む	やや軟質	9/10	内面に炭化物付着
3	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含むが緻密	やや軟質	3/5	
4	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	緻密	硬質	1/6	外面に稜が良く残る
5	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	硬質	1/5	
6	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含むが緻密	硬質	1/9	外面に稜が良く残る
7	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	硬質	1/10	
8	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	砂粒を少量含む	硬質	1/7	
9	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含むが緻密	硬質	1/7	内面に稜をもつ
10	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含む	硬質	1/9	
11	須恵器把手	手くね後ヘラナデ	細砂粒を含む	やや軟質	把手のみ	
12	土釜	内外面共横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁部	土師質
13	土釜	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁部	土師質
14	土釜	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁部	土師質
15	須恵器甕	外面：口縁部横ナデ、指腹押圧、胴部横方向ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁～胴上部 1/12	コの字状の縁を呈する
16	須恵器甕	外面：口縁部横ナデ、指腹押圧、胴部横方向ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁～胴上部 1/12	コの字状の縁を呈する
17	須恵器甕	外面：口縁部横ナデ、指腹押圧、胴部横方向ヘラケズリ 内面：横ナデ、肩部横方向ヘラナデ、胴部ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁～胴上部 9/10	コの字状の縁を呈する

第19表　H－2号住居址出土遺物観察表

(3)　中世の遺構と遺物

a．掘立柱建物址　（第43図～第45図）

1号掘立柱建物址

2Ｇ、２Ｈ―110―111グリッドに位置し、２号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はＮ―76°―Ｅを示す。構造は桁行２間である。規模は桁行4.5m、梁行3.25mで面積は14.6m²である。柱穴はほぼ円形。

2号掘立柱建物址

２Ｈ・２Ｉ―110、111グリッドに位置し、１号掘立柱建物址と重複する。棟方向は南北で方位はＮ―17°―Ｗを示す。構造は桁行２間、梁行１間である。規模は桁行東辺4.91m西辺4.85m、梁行3.0mで面積は14.6m²である。柱穴はほぼ円形

3号掘立柱建物址

２Ｉ・２Ｊ―110、111、112グリッドに位置し、４号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はＮ―80°―Ｅを示す。構造は桁行３間、梁行２間である。規模は桁行5.38m、梁行3.4mで面積は18.3m²である。柱穴はほぼ円形。

4号掘立柱建物址

２Ｉ・２Ｊ―111、112グリッドに位置し、３号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はＮ―70°―Ｅを示す。構造は桁行３間、梁行１間である。規模は桁行北辺6.63m、南辺6.7m梁行東辺3.65m、西辺3.42mで面積は23.6m²である。柱穴はほぼ円形。

5号掘立柱建物址

２Ｇ―113、114、２Ｈ―113、114、115グリッドに位置し、２号柱穴列と重複する。棟方向は東西で方位はＮ―74°―Ｅを示す。構造は桁行２間梁行２間で、総柱の建物である。規模は桁行北辺5.24m、南辺5.35m、梁行4.25mで面積22.5m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形。

6号掘立柱建物址

２Ｈ、２Ｉ―113、114グリッドに位置する。棟方向は東西で方位はＮ―76°―Ｅを示す、構造は桁行２間、桁行１間である。規模は桁行6.54m、梁行2.62mで面積17.1m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

7号掘立柱建物址

2Ｋ―114、２Ｌ―112、113、114、２Ｍ―112、113グリッドに位置し、８、10、11号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はＮ―72°―Ｅを示す。構造は桁行３間、梁行２間で、東側に１間×２間の庇を付す。規模は桁行北辺6.4m、南辺6.35m、梁行東辺4.3m、西辺4.5m、庇の張

り出し2m程で面積36.3m²である。柱穴は円形か楕円形。

8号掘立柱建物址

2K、2L—114、115、116グリッドに位置し、7、9、10、11号掘立柱建物址、7号柱穴列と重複する。棟方向は東西で方位はN—73°—Eを示す。構造は桁行4間、梁行2間である。規模は桁行北辺8.52m、南辺8.69m、梁行東辺4.19m、西辺4.03mで面積35.3m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

9号掘立柱建物址

2K、2L—115、116グリッドに位置し、8号掘立柱建物址、7号柱穴列と重複する。棟方向は東西で方位はN—75°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間である。規模は桁行北辺6.01m、南辺6.26m、梁行東辺3.7m、西辺3.84mで面積23.1m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

10号掘立柱建物址

2K、2L—119グリッドに位置し、7・8号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はN—69°—Eを示す。構造は桁行1間、梁行1間である。規模は桁行3.9m、梁行東辺3.8m、西辺3.6mで面積14.4m²である。柱穴はほぼ円形である。

11号掘立柱建物址

2K—114、2L—114、115グリッドに位置し、7・8号掘立柱建物址、7号柱穴列と重複する。棟方向は南北で方位はN—14°—Wを示す。構造は桁行2間、梁行1間で、桁行北辺の柱穴を検出することができなかった。規模は桁行4.6m、梁行2.92mで面積13.6m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

12号掘立柱建物址

2J—117、2K—117、118グリッドに位置し、14号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はN—72°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間である。規模は桁行北辺3.7m、南辺3.9m、梁行東辺3.7m、西辺3.5mで面積13.7m²である。柱穴は楕円形である。

13号掘立柱建物址

2J、2K—118グリッドに位置し、14号掘立柱建物址、10号柱穴列と重複する。棟方向は南北で方位はN—19°—Wを示す。構造は桁1間、梁行1間である。規模は桁行東辺3.7m、西辺3.5m、梁行北辺2.5m、南辺2.7mで面積9.4m²である。柱穴はほぼ円形、不整形である。

14号掘立柱建物址

2J・2K—117、118、119グリッドに位置し、12・13号掘立柱建物址、10号柱穴列と重複する。棟方向は東西で方位はN—76°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行2間である。規模は桁行7m、梁行東辺4.2m、西辺4mで面積28.7m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

15号掘立柱建物址

2M・2N—113、114、115グリッドに位置し、4号柱穴列と重複する。棟方向は東西で方位はN—73°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行3間で総柱の建物址である。規模は桁行北辺6.5m、南辺6.3m、梁行東辺6.05m、西辺5.85mで面積38.1m²である。柱穴は不整円形か楕円形である。

16号掘立柱建物址

2N—114、115、116、2O—115、116グリッドに位置する。棟方向は東西で方位はN—74°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。規模は桁行7.6m、梁行東辺3.9m、西辺4.2mで面積30.8m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

17号掘立柱建物址

2O—112、2P—111、112グリッドに位置する。棟方向は東西で方位はN—70°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間である。規模は桁行北辺4.11m、南辺3.75m、梁行東辺3.55m、西辺3.8mで面積14.4m²である。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

b．柱　穴　列　（第45図）

1号柱穴列

2J、2K—110グリッドに位置する。柱間2間が確認され、方位はN—6°—Wを示す。柱間は、北1間がやや長く2.3mで規模は4.32mである。柱穴はほぼ円形である。

2号柱穴列

2F、2G、2H—114グリッドに位置し、5号掘立柱建物址と重複する。柱間3間が確認され方位はN—1°—Wを示す。柱間は、北1間がやや短く2.68mで規模は8.38mである。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

3号柱穴列

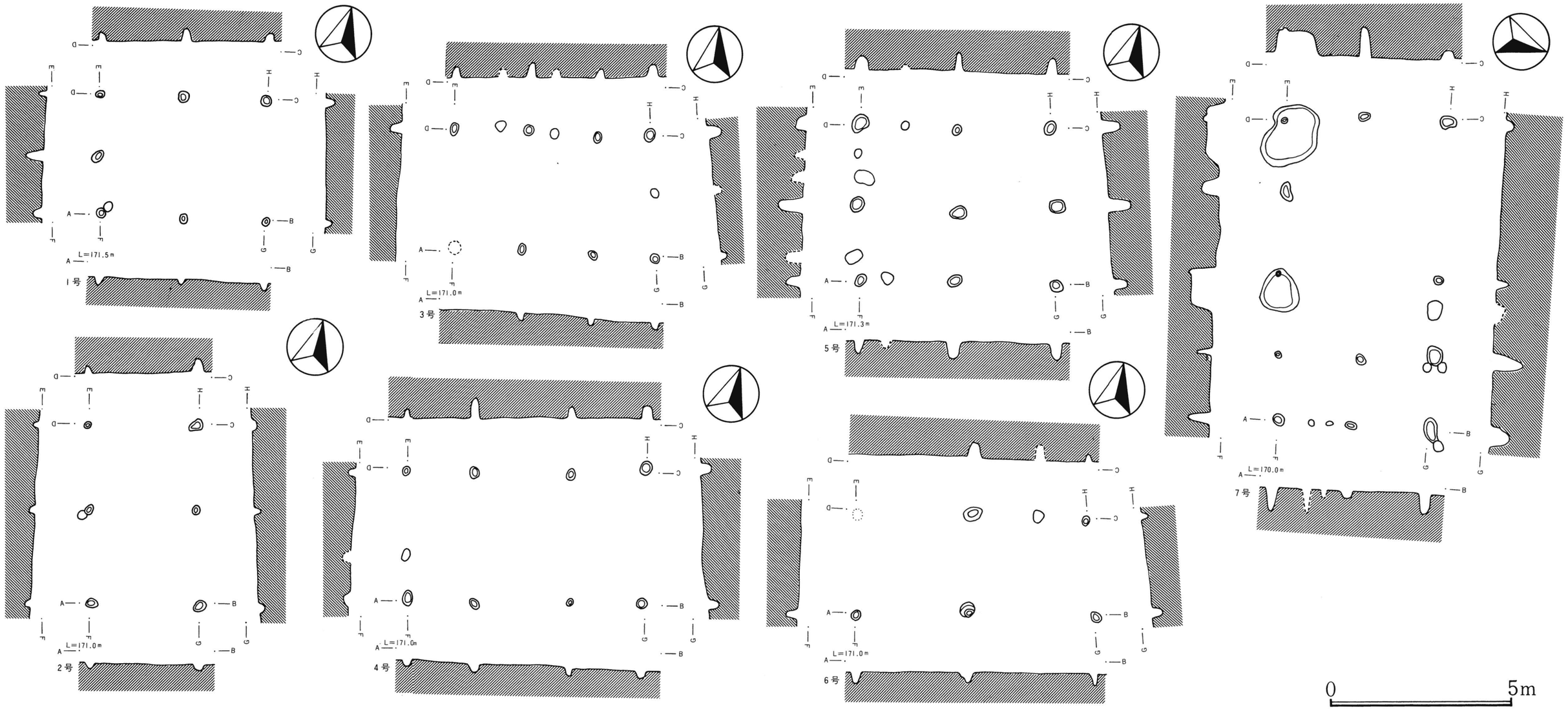
2M—112、2N—113グリッドに位置する。柱間2間が確認され、方位はN—21°—Wを示す。柱間はほぼ等間で、規模は4.3mである。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

4号柱穴列

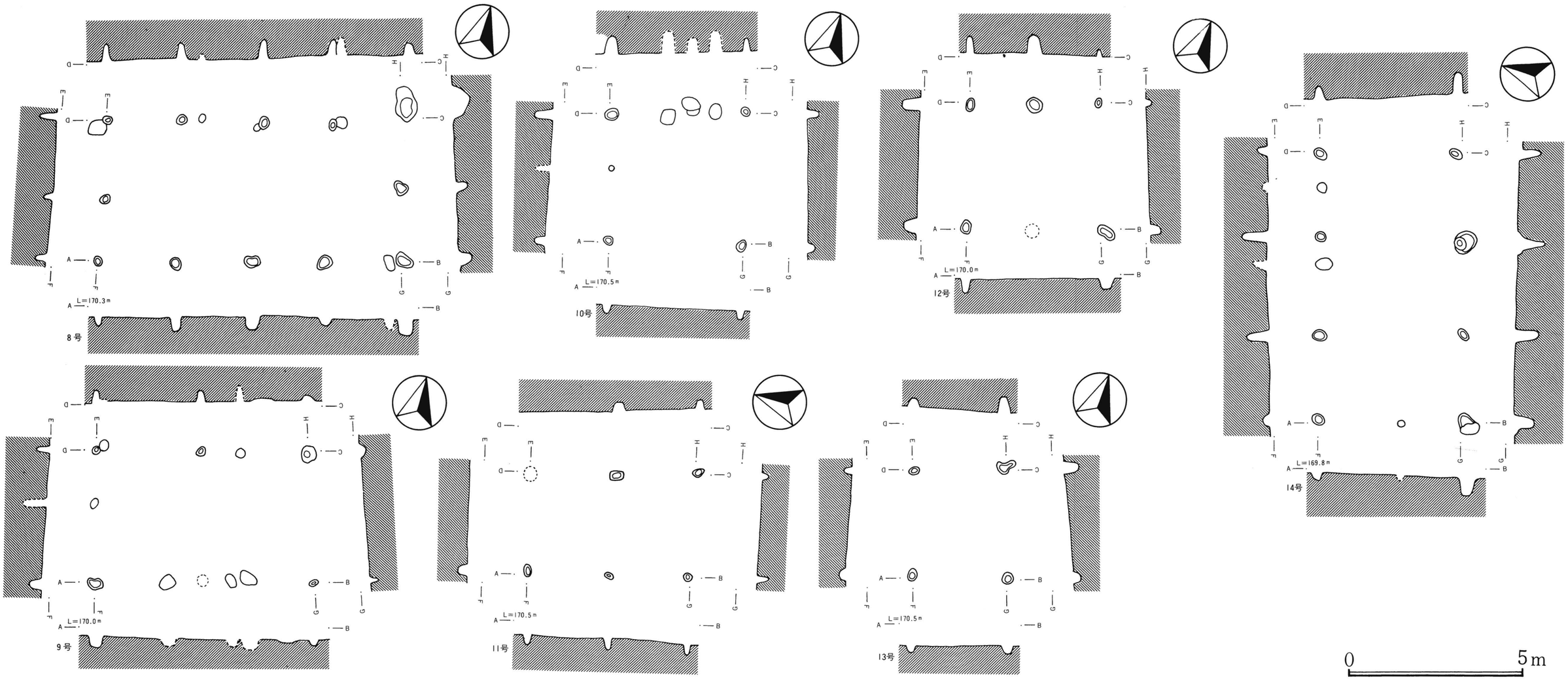
2N—113、114、2O—112グリッドにに位置し、5号掘立柱建物址と重複する。柱間4間が確認され方位はN—71°—Eを示す。柱間は最大58cmの差がある。規模は8.73mである。柱穴はほぼ円形である。

5号柱穴列

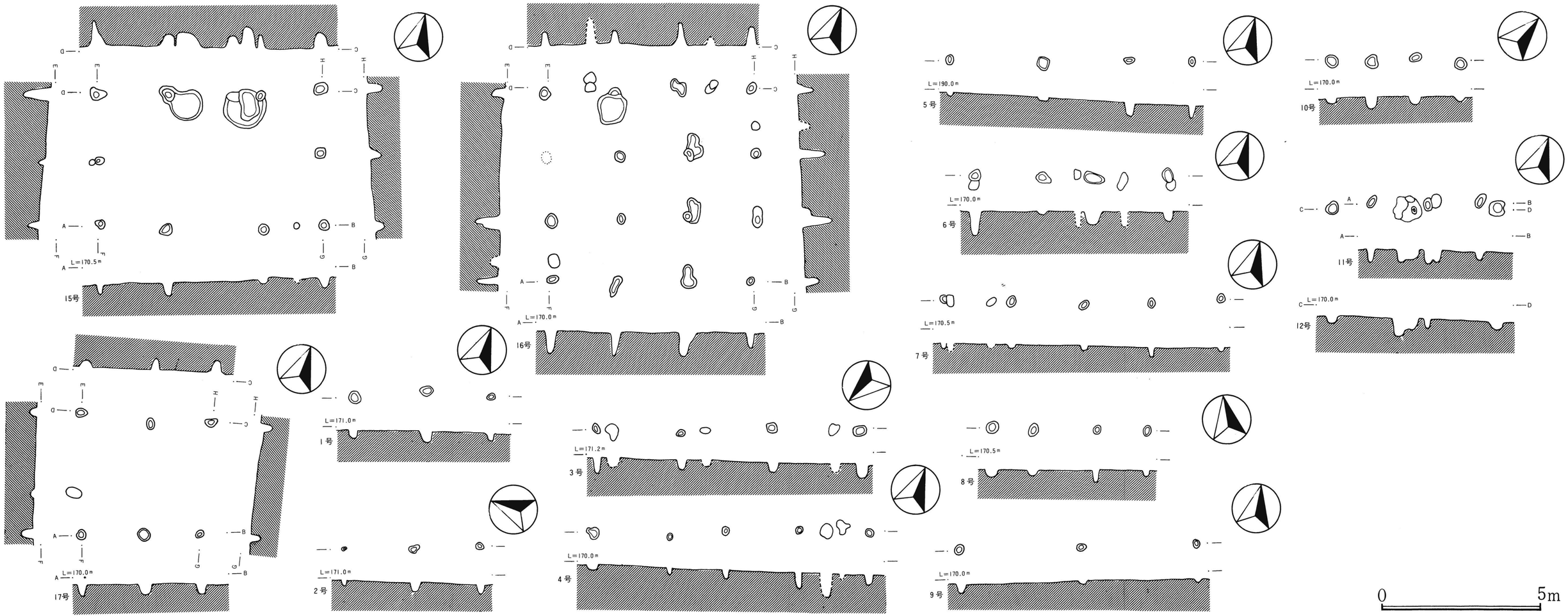
2O—112、113グリッドに位置する。柱間3間が確認され、方位はN—74°—Eを示す。柱間東1間が短く1.97mで最大97cmの差がある。規模は7.61mである。柱穴はほぼ円形である。



第43図　掘立柱建物址実測図



第44図　掘立柱建物址実測図



第45図　掘立柱建物址・柱穴列実測図

6号柱穴列

2Ｌ―115、2Ｍ―114グリッドに位置する。柱間3間が確認され、方位はＮ―68°―Ｅを示す。柱間は、中央の1間が短く1.6mで最大77cmの差がある。規模は6.07mである。柱穴はほぼ円形か楕円形である。

7号柱穴列

2Ｋ―115、116、2Ｌ―115グリッドに位置し、8・9・11号掘立柱建物址と重複する。柱間4間が確認され、方位はＮ―76°―Ｅを示す。柱間はほぼ等間で、規模は8.7mである。柱穴はほぼ円形である。

8号柱穴列

2Ｊ―117、118グリッドに位置し、13・14号掘立柱建物址と重複する。柱間3間が確認され、方位はＮ―82°―Ｗを示す。柱間は、中央が長く2ｍで、最大70cmの差がある。規模は4.9mである。柱穴はほぼ円形である。

9号柱穴列

2Ｊ―120、121、122グリッドに位置する。柱間2間が確認され、方位はＮ―81°―Ｅを示す。柱間は、西1間がやや長く3.85mで、規模は7.5mである。柱穴はほぼ円形である。

10号柱穴列

2Ｌ・2Ｍ―118グリッドに位置する。柱間3間が確認され、方位はＮ―53°―Ｅを示す。柱間は、東1間がやや短く1.25mで、最大17cmの差がある。規模は4.07mである。柱穴はほぼ円形である。

11号柱穴列

2Ｋ―121、122グリッドに位置する。柱間2間が確認され、方位はＮ―71°―Ｅを示す。柱間は、東1間がやや短く1.6mで、規模は3.4mである。柱穴は楕円形である。

12号柱穴列

2Ｋ―121、122グリッドに位置する。柱間2間が確認され、方位はＮ―76°―Ｅを示す。柱間は等間で、規模は5.2mである。柱穴はほぼ円形である。

c．井　　戸　（第46図）

1号井戸

2Ｊ―115、2Ｋ―115グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形で、覆土中に礫が混入しており掘形の構造上からも石組の井戸と推定され、石組は全体的に崩落したものと考えられる。井戸の下半は素掘りで円筒状をなし、上半は上面から70cmの所よりラッパ状に開いており、この部分に石組があったものと考えられる。

規模は上端径2.24m×1.74m、中段径1.25m×1.10m、底面形80cm×60cmで深さは3.98mである。

湧水層は中段から底面にかけてのＹＰ層で、調査中も多量の湧水があり、１日で井戸の８割程まで水がたまる状態であった。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは14世紀代の陶磁器片や石臼等が出土した。

２号井戸

２Ｊ―115グリッドに位置する。平面形は不整円形で、覆土中に礫が混入しており掘形の構造上からも石組の井戸と推定され、石組は全体的に崩落したものと考えられる。

井戸の下半は素掘りで円筒状をなし、上半は上面から50cmの所に平坦面を設けそこからラッパ状に開いており、この部分に石組があったものと考えられる。

規模は上端径2.26m×2.00m、中段径1.40m×1.35m、底面形1.00m×0.95mで深さ4.46mである。

湧水層は１号井戸と同じ中段から床面にかけてのＹＰ層で、やはり多量の湧水があり、１号井戸と同じ程水がたまる状態であった。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは14世紀末～15世紀前半代の内耳土器等が出土した。１・２号井戸は40cm程へだて隣接した位置にあり、構築方法も類似している。新旧関係は出土遺物から考えると１号井戸の方が古いと思われる。

d．土　　壙　（第48図～第49図）

Ｄ－１号土壙

２Ｃ―118グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は箱状をなす。規模は1.25m×1.03m、深さ38cmで長軸方向はＮ―31°―Ｗを示す。須恵器片１点、土師器甕１点が出土した。

Ｄ－２号土壙

１Ｘ、１Ｙ―118グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱状をなす。規模は1.89m×1.01m、深さ63cmで長軸方向はＮ―72°－Ｅを示す。須恵器片１点が出土した。

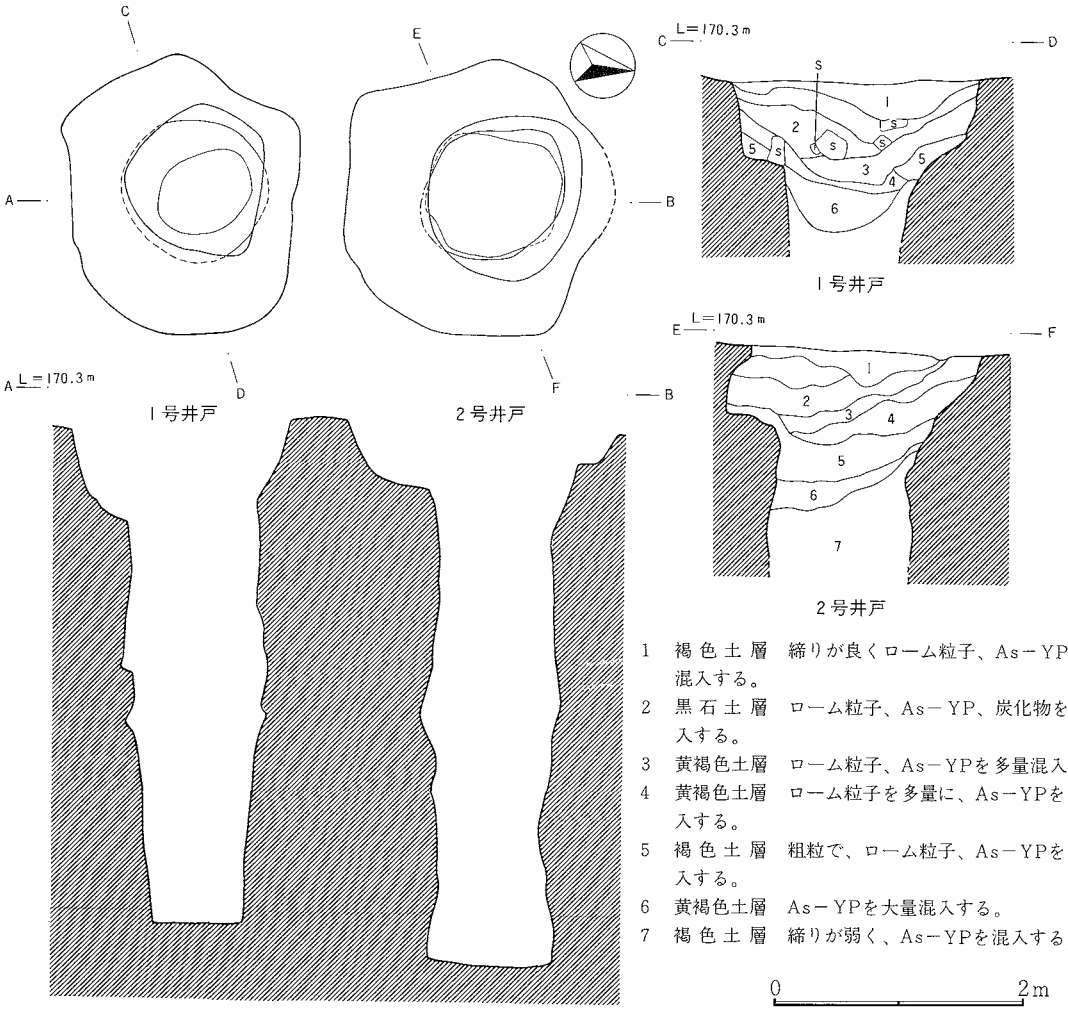
Ｄ－３号土壙

２Ｊ―113グリッドに位置し、溝状遺構、ピットと重複する。平面形は隅丸長方形で、断面形は浅い箱状をなす。規模は1.04m×0.74m、深さ16cmで長軸方向はＮ―78°－Ｅを示す。須恵器片３点、土師器片４点、内耳土器片６点が出土した。

Ｄ－４号土壙

２Ｉ―115グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.76m×1.16m、深さ52cmで長軸方向はＮ－４°―Ｗを示す。須恵器片１点、内耳土器片１点が出土した。

Ｄ－５号土壙



第46図　1号・2号井戸実測図

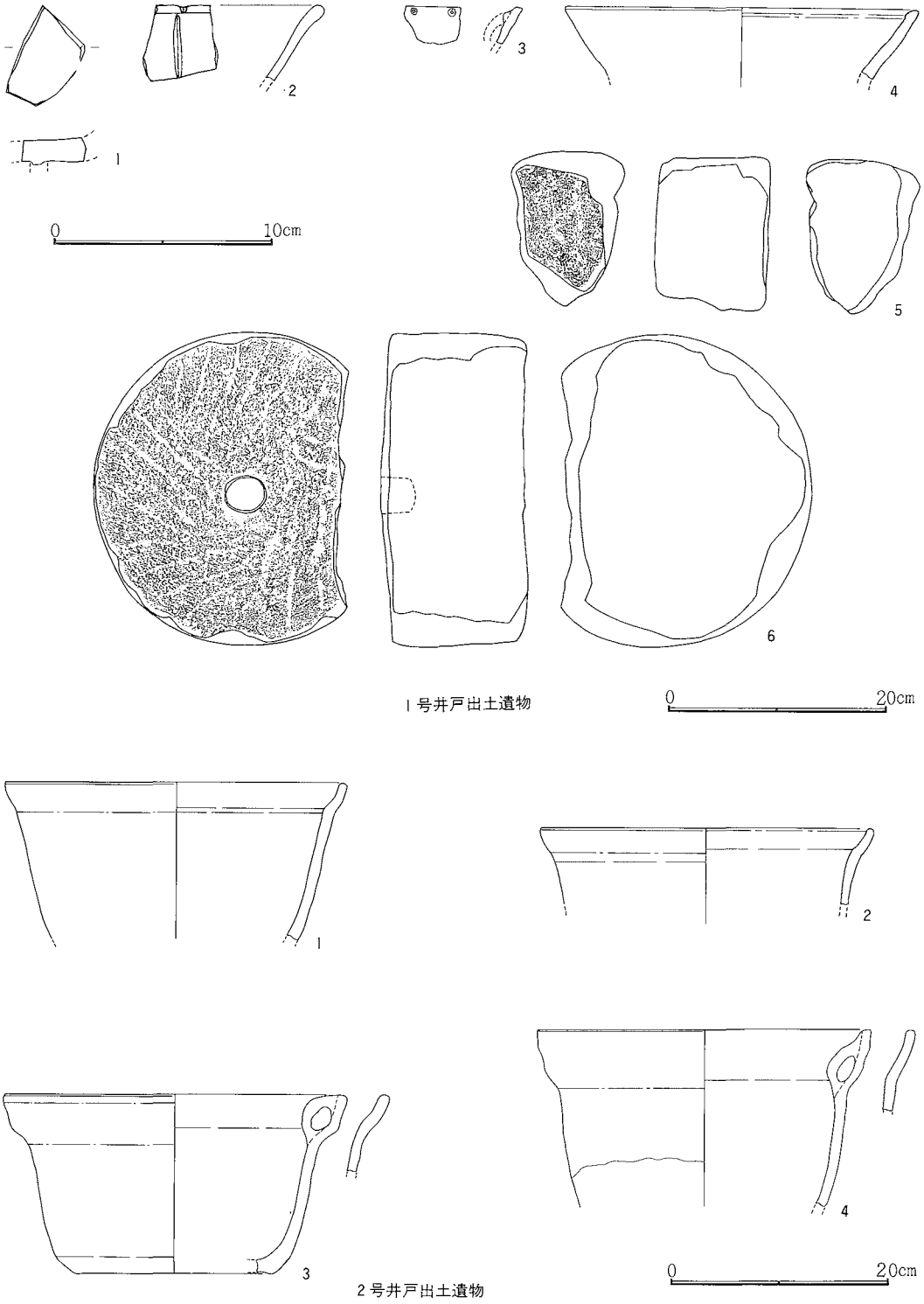
2J、2K—114グリッドに位置し、近代の土壙と重複する。平面形は不整円形で断面形は箱状をなす。規模は1.50m×1.20m、深さ1.13mで長軸方向はN—62°—Eを示す。須恵器片1点が出土した。

D—6号土壙　(第48図)

2J—115グリッドに位置し、近代の土壙と重複する。平面形は隅丸方形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.62m×1.50m、深さ66cmで長軸方向はN—88°—Eを示す。内耳土器片1点が出土した。

D—7号土壙　(第48図)

2M—112グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.52m×1.



第47図　1号・2号井戸出土遺物実測図

No.	種別	器種	釉	生産地	時代
1	磁器	碗	青磁釉	龍泉窯	14C
2	磁器	稜花碗	青磁釉	龍泉窯	14C

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
3	内耳	内外面共横ナデ、口縁部に菊花印文	細砂粒を少量含む	普通	口縁部のみ	軟質陶器
4	内耳	内外面共横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁部のみ	軟質陶器

No.	種別	特徴
5	石臼	上臼の小片である。目の断面は丸溝状をなす。安山岩
6	石臼	下臼である。径約28cm、高さ13cm、目の断面は丸溝状中心に円錘状の花棒孔がある。安山岩

第20表　1号井戸遺物観察表

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	内耳	内外面共に横ナデ、口縁部短い	砂粒を含むが緻密	普通	口縁～胴部1/8	軟質陶器 14C後
2	内耳	内外面共に横ナデ、口縁部短い	砂粒を含むが緻密	普通	口縁～胴部1/12	軟質陶器 14C後
3	内耳	内外面共に横ナデ	砂粒を含むが緻密	普通	1/5	軟質陶器 15C前
4	内耳	内外面共に横ナデ	砂粒を含むが緻密	普通	1/5	軟質陶器 15C中

第21表　2号井戸遺物観察表

03m、深さ91cmで長軸方向はN－26°－Wを示す。須恵器片1点が出土した。

D－8号土壙

2L、2M－112グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.50m×1.08m、深さ48cmで長軸方向はN－27°－Wを示す。土師器片1点、内耳土器片5点が出土した。

D－9号土壙

2L、2M－112グリッドに位置し、溝状遺構と重複する。平面形は隅丸方形で大小の礫が土壙と溝状遺構にかかって分布している。どちらの遺構に属するものか明確ではない。断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は2.00m×1.85m、深さ35cmで長軸方向はN－8°－Wを示す。内耳土器片3点が出土した。

D－10号土壙

2L、2M－116グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は1.65m×1.44m、深さ21cmで長軸方向はN－39°－Eを示す。土壙内を大小の礫で覆っている。茶臼1点が出土した。

D－11号土壙

2N－2O－113グリッドに位置し溝状遺構と重複する。平面形は隅丸の台形で、断面形は丸み

のある浅い箱状をなす。規模は2.43m×1.36m、深さ13cmで長軸方向はN—61°—Eを示す。内耳土器片1点が出土した。

D—12号土壙

2N—114グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は1.15m×0.96m、深さ10cmで長軸方向はN—75°—Wを示す。土師器片1点が出土した。

D—13号土壙

2P—112グリッドに位置しピットと重複する。平面形は楕円形で、断面形は皿状をなす。規模は1.96m×1.34m、深さ55cmで長軸方向はN—55°—Wを示す。内耳土器片1点が出土した。

D—14号土壙

2M—109グリッドに位置し、2号住居址と重複する。平面形は隅丸方形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は1.27m×0.47m、深さ25cmで長軸方向はN—82°—Eを示す。18世紀代の陶磁器片2点が出土した。

D—15号土壙

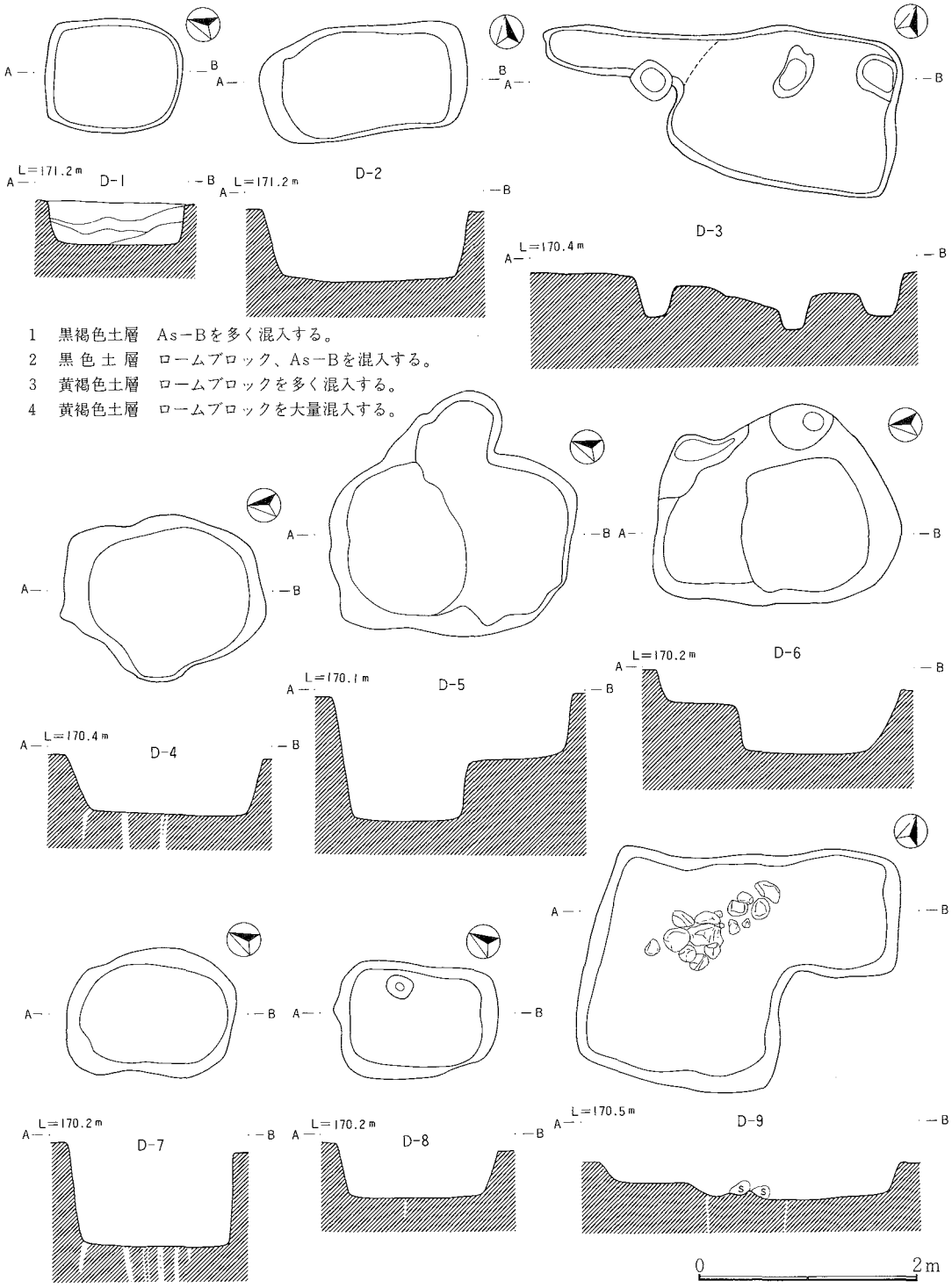
2N—110グリッドに位置し、2号住居址と重複する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1m×0.5m、深さ50cmで長軸方向はN—87°—Eを示す。19世紀代の陶磁器片1点が出土した。

D—16号土壙

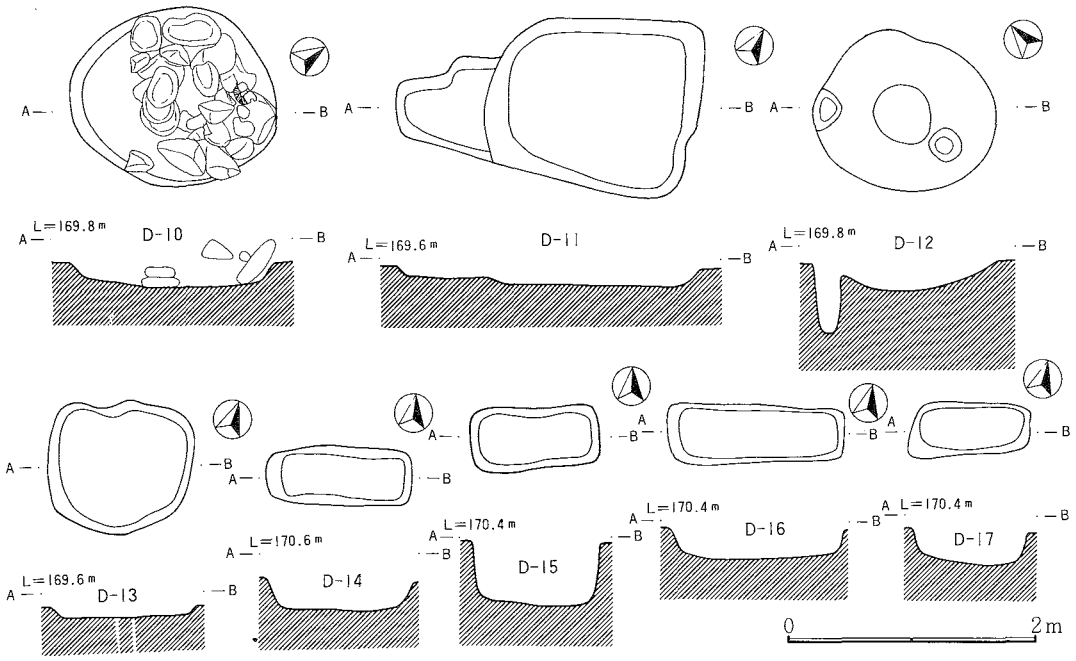
2N—109グリッドに位置し、1号住居址と重複する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は1.39m×0.46m、深さ25cmで長軸方向はN—77°—Eを示す。須恵器片2点が出土した。

D—17号土壙

2N—110グリッドに位置し、1号住居址と重複する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は1.94m×0.43m、深さ27cmで長軸方向はN—72°—Eを示す。土師器片4点、磁器片1点が出土した。


D-1
L=171.2m
D-2
L=171.2m
D-3
L=170.4m
1　黒褐色土層　As－Bを多く混入する。
2　黒色土層　ロームブロック、As－Bを混入する。
3　黄褐色土層　ロームブロックを多く混入する。
4　黄褐色土層　ロームブロックを大量混入する。
D-4
L=170.4m
D-5
L=170.1m
D-6
L=170.2m
D-7
L=170.2m
D-8
L=170.2m
D-9
L=170.5m
0
2m

第48図　土壙実測図（1）



第49図　土壙実測図（２）

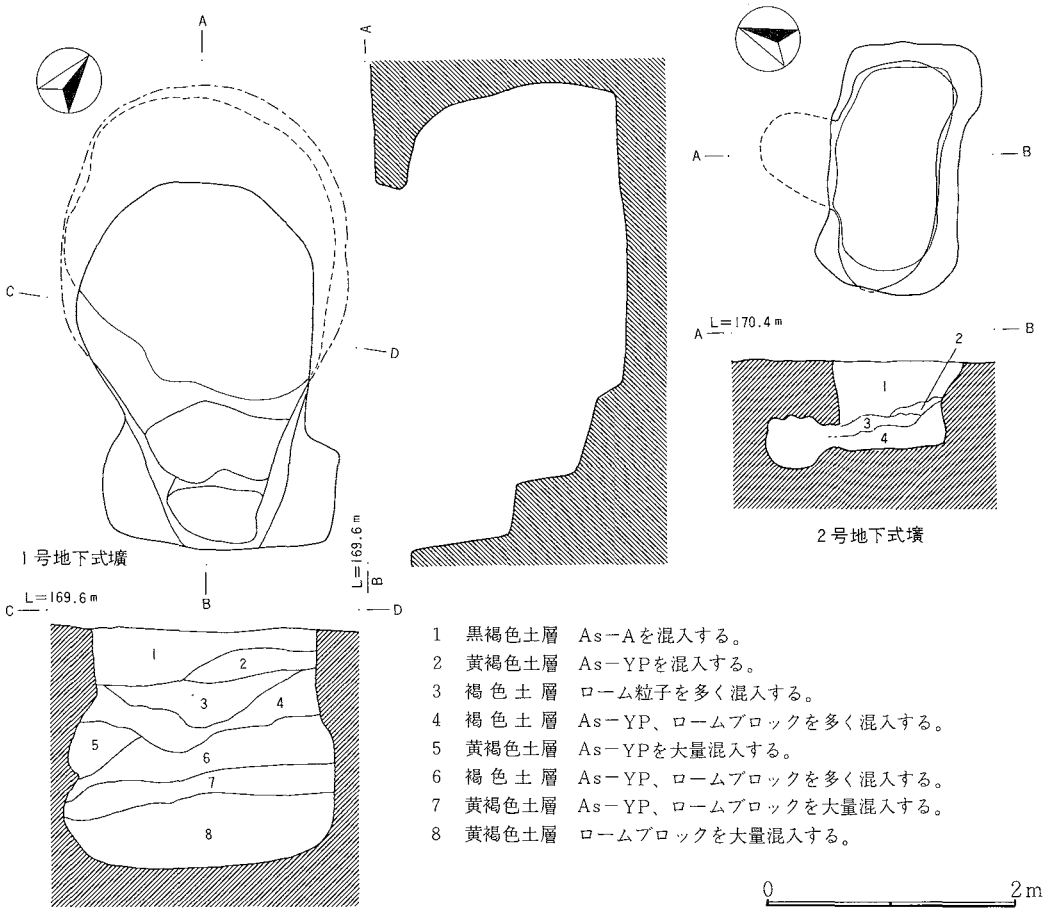
e．地下式壙　（第50図）

１号地下式壙

２Ｍ―118グリッドに位置する。形態は竪坑部と地下壙をもち、地下壙の天井部分が若干残っていた。地下壙平面形は楕円形を程し、底面はほぼ平らで、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は2.43m×2.29m、深さ1.94m、長軸方向はＮ―29°―Ｗを示す。竪抗部は地下壙の長軸方向にあり段階を持つ。規模は1.84m×1.39m、深さは上段87cm、下段1.57mである。覆土は最下層に天井部崩落土と思われる黄褐色土層が厚く堆積し、上層部分は自然堆積と思われる。遺物は内耳土器５点、湯釜１点、須恵器片４点が厚い最下層部から出土した。土壙周辺に附属施設としてのピット等の遺構は検出されなかった。

２号地下式壙

２Ｋ―112グリッドに位置する。形態は竪坑部と地下壙をもち、地下壙は天井の崩落もなく残っていた。竪穴部平面形は長方形を程し、規模は2.0m×1.4m、深さ71m、長軸方向はＮ―73°―Ｅを示す。地下壙は竪穴部短軸方向に掘り込まれていて、規模は65cm×62cm、深さ85cmである。覆土はロームブロック、As-ＹＰを多く含み、人為的に埋められたものと思われる。遺物は出土しなかった。



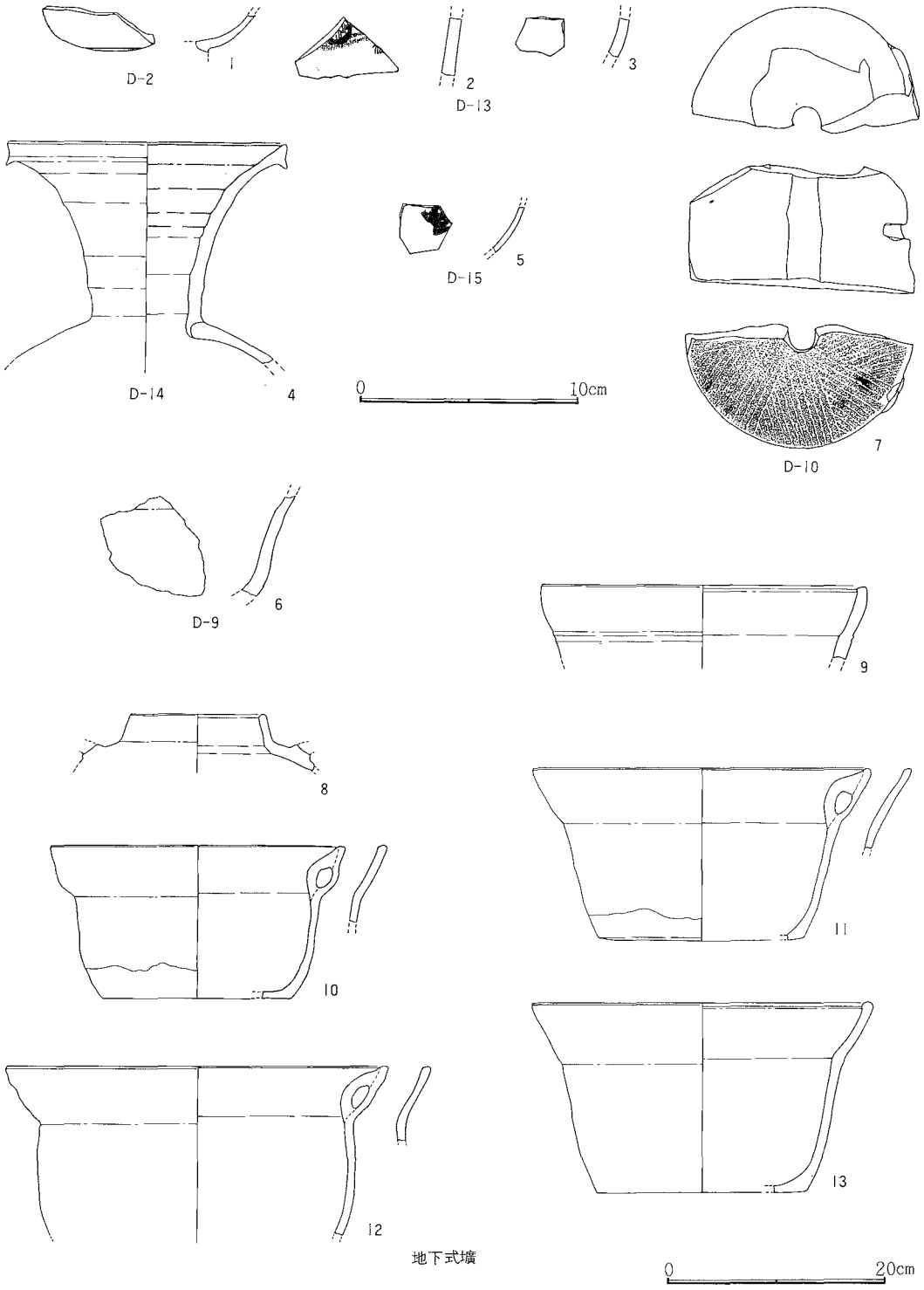
第50図　地下式壙実測図

f．溝　（第52図）

1 X－113～2 D－113グリッドに南走し、ほぼ直角に折れ2 D－112～2 D－108、2 E－109～2 E－106、2 F－106グリッドへ西走する。走向はN－6°－W～N－85°－Eで、最大幅1.70m、最小幅70cm、深さ60cm～24cmである。断面形は丸みのある逆台形状を呈し、溝内には数十基のピットを共なっている。遺物は18世紀代の陶磁器が4点出土した。

g．堀　（第52図）

館址西～南にかけての谷地部々まで堀が館址を回るものと推測されるが、今回調査範囲の関係上、館址北側の堀の確認のみに終った。確認された堀の長さは64m、中央西よりに土橋状遺構が確認され、この上面には土橋の橋脚と思われる柱穴が確認された。堀の形態は箱薬研状で、調査



第51図　土壙・地下式壙出土遺物実測図

No.	種別	器種	釉	生産地	時代	出土位置	備考
1	磁器	菊皿	白磁釉	伊万里系	17C	土壙2（5）	初期伊万里
2	磁器	不詳	染付	伊万里系	18C	土壙13（46）	
3	陶器	碗	長石釉	美濃焼	18C	土壙13（46）	
4	陶器	瓶	灰釉		10C前	土壙14（48）	
5	磁器	小碗	染付	伊万里系	18C	土壙16（63）	

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	出土位置	備考
6	内耳	内外面共に横ナデ	細砂粒を含む	普通	胴部1/9	土壙9	硬質陶器
8	湯釜	内外面共に横ナデ、肩部身厚	細砂粒を少量含むが緻密	普通	口縁～肩部1/12	1号横穴式壙	14C
9	内耳	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	普通	口縁部1/22	1号横穴式壙	硬質陶器 15C前
10	内耳	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含むが緻密	普通	3/50	1号横穴式壙	硬質陶器 15C前
11	内耳	内外面共に横ナデ、口縁～胴部くびれが弱い	細砂粒を少量含むが緻密	普通	3/5	1号横穴式壙	硬質陶器 15C中
12	内耳	内外面共に横ナデ、胴部が外側へはり出す	細砂粒を少量含むが緻密	普通	1/4	1号横穴式壙	硬質陶器 15C中
13	内耳	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含むが緻密	普通	1/4	1号横穴式壙	硬質陶器 15C中

No.	種別	特徴
7	石臼	上臼の破片である。経約20.5cm、高さ11.5cm中心に円錘状の芯棒受安山岩

第22表　土壙出土遺物観察表

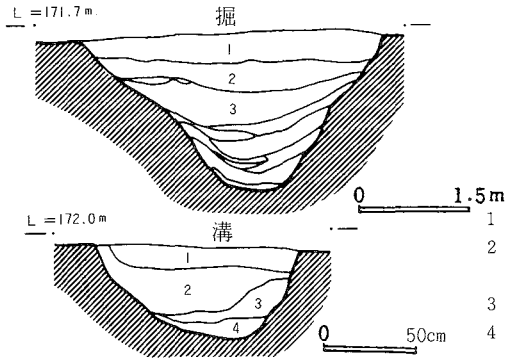
範囲のほぼ中央部分で折曲をもつ。規模は上端部幅4～4.5m、下端幅0.5～1m、深さ西端約3m、中央約2m、東端約1.4mで、台地先端部へ行く程浅くなる。覆土は3層から下全てＹＰ層と砂質土層の交互堆積で、自然の水性堆積と思われる。調査中も湧水があり、覆土のラミナ状堆積と考え合わせ、水をたたえていたものと思われる。

遺物は須恵器碗1点、至和元宝1点が出土した。

h．館址造成状況　（第54図）

本館は、館の北西に位置する天神山の直下峰つづきの舌状台地先端部に位置する。館に供なう遺構の確認を行っている時点で、場所により確認面の土色、粒子の変化が認められたため、この地に館を構築するに当り当時、そのままの地形をうまく利用しただけでなく、削平、盛土等の人為的造成を行っている可能性を考え、各遺構調査後に6本のトレンチを入れて土層の堆積状態を調査した。

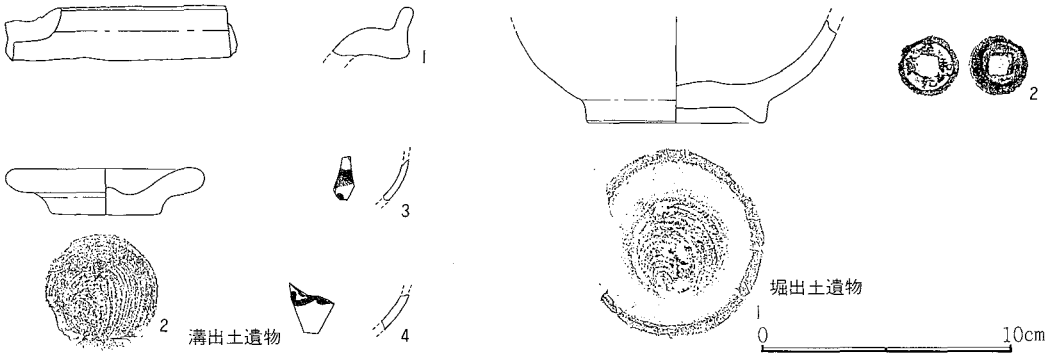
トレンチのセクションは細分されるが大きく3層に区分することができた。セクション図の白ヌキ部分は本館構築以前の地山の部々である。薄いスクリントーンの部分は黒褐色土に大量のAs-ＹＰ粒子、ロームブロックが混入した土層である。濃いスクリントーンの部分は特にAs－ＹＰ



1　褐色土層　As－Aを多量混入する。
2　褐色土層　締りが良い。As－YPを少量混入する。
3　褐色土層　締りが良い。炭化物を少量混入する。
※以下自然堆積土層、As－YPの混入が多く、下層は砂質土上層が多い。

1　黒褐色土層　締りが良い、As－Bを少量混入する。
2　黒褐色土層　締りがなく粒子が荒い。As－Bを少量混入する。
3　褐色土層　締りが良い、As－Bを少量混入する。
4　褐色土層　締りが良い、ロームブロックを少量混入する。

第52図　堀・溝セクション図



第53図　堀・溝出土遺物実測図

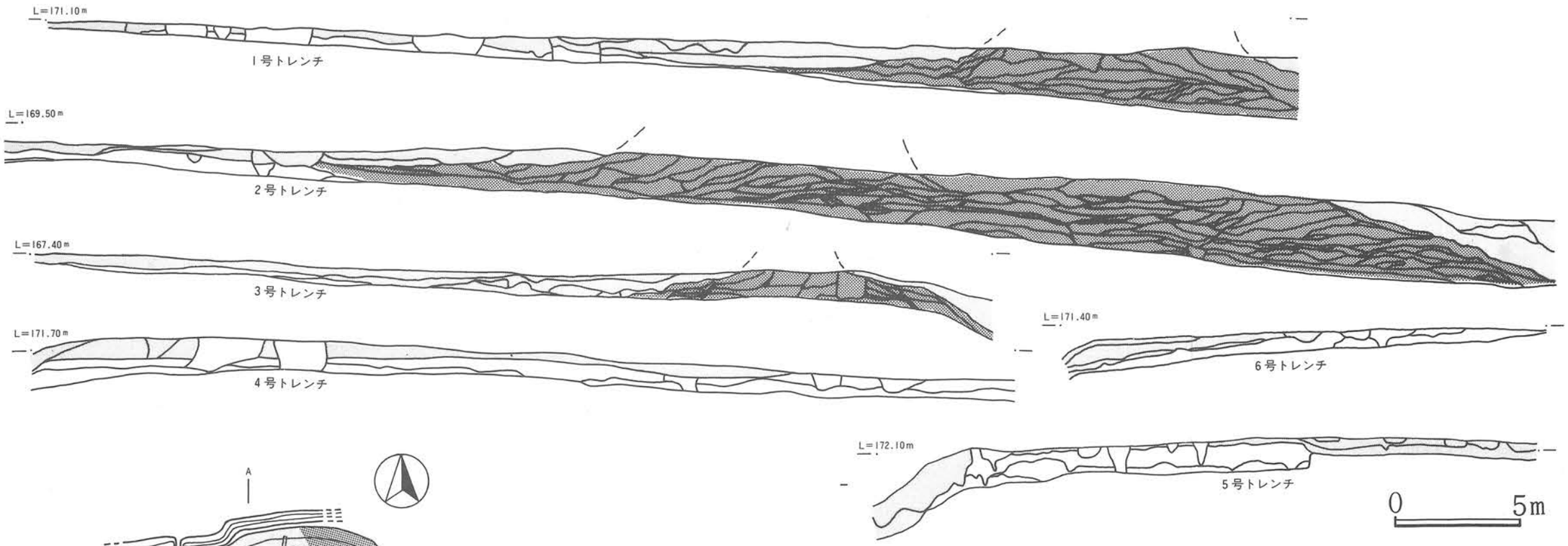
No.	種別	器種	釉	生産地	時代
1	焼しめの陶器	甕	無釉	常滑焼第3期	13C後
2	陶器	フタ	灰釉	美濃・瀬戸	18C
3	磁器	小碗	染付	伊万里系	18C
4	磁器	小瓶	染付	伊万里系	18C

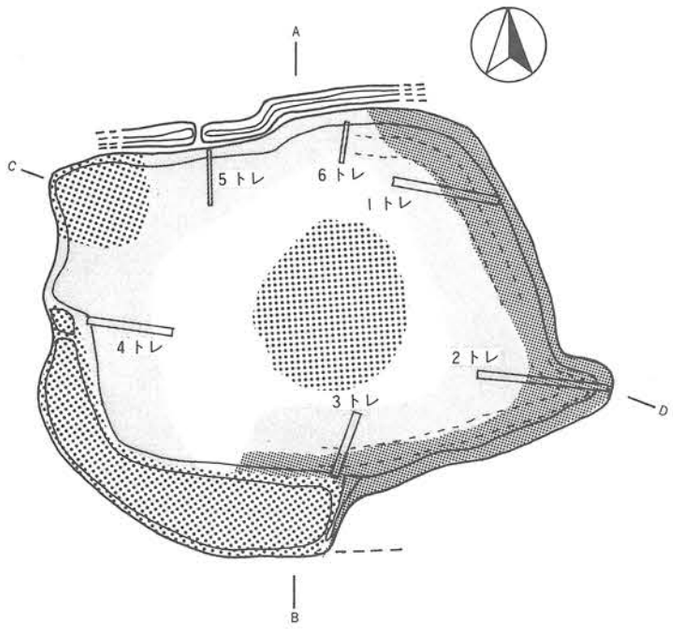
第23表　溝出土遺物観察表

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	須恵器碗	内外面共横ナデ、底部回転糸切り	砂粒を含むが緻密	硬質	5/8	

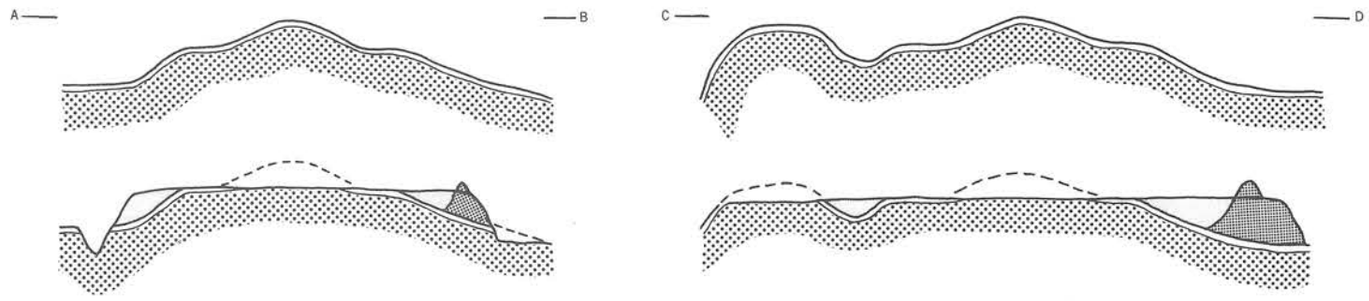
No.	種別	特徴
2	銭貨	至和元宝、北宋銭で初鋳造年代至和元年1054～1055廻読、字体は真書

第24表　堀出土遺物観察表





館址造成状況平面模式図



館址造成状況断面模式図

地　山

黒褐色土層　As－YP、ロームブロックを多量に混入する。

黒褐色土層　As－YP、ロームブロックを大量に混入する。

ローム層

第54図　館址造成状況図

粒子、ロームブロックが大量に混入した土層である。この土層は館を囲む堀を掘込んだ時に出た土と思われる。

トレンチセクション図の結果と、調査時に確認できた遺構確認面の土色・粒子の変化を考え合せて作成したものが、館址造成状況平面図と館址断面模式図である。白ヌキ、薄濃スクリントーンはトレンチセクション図と同じ土層を示し、荒いドット部分はローム層を示す。

結果として、これらのことより、館を構築するに当り地形をうまく利用しながら大規模な造成工事を行っていること、また館の東側に土塁が築かれていた事が明らかとなった。

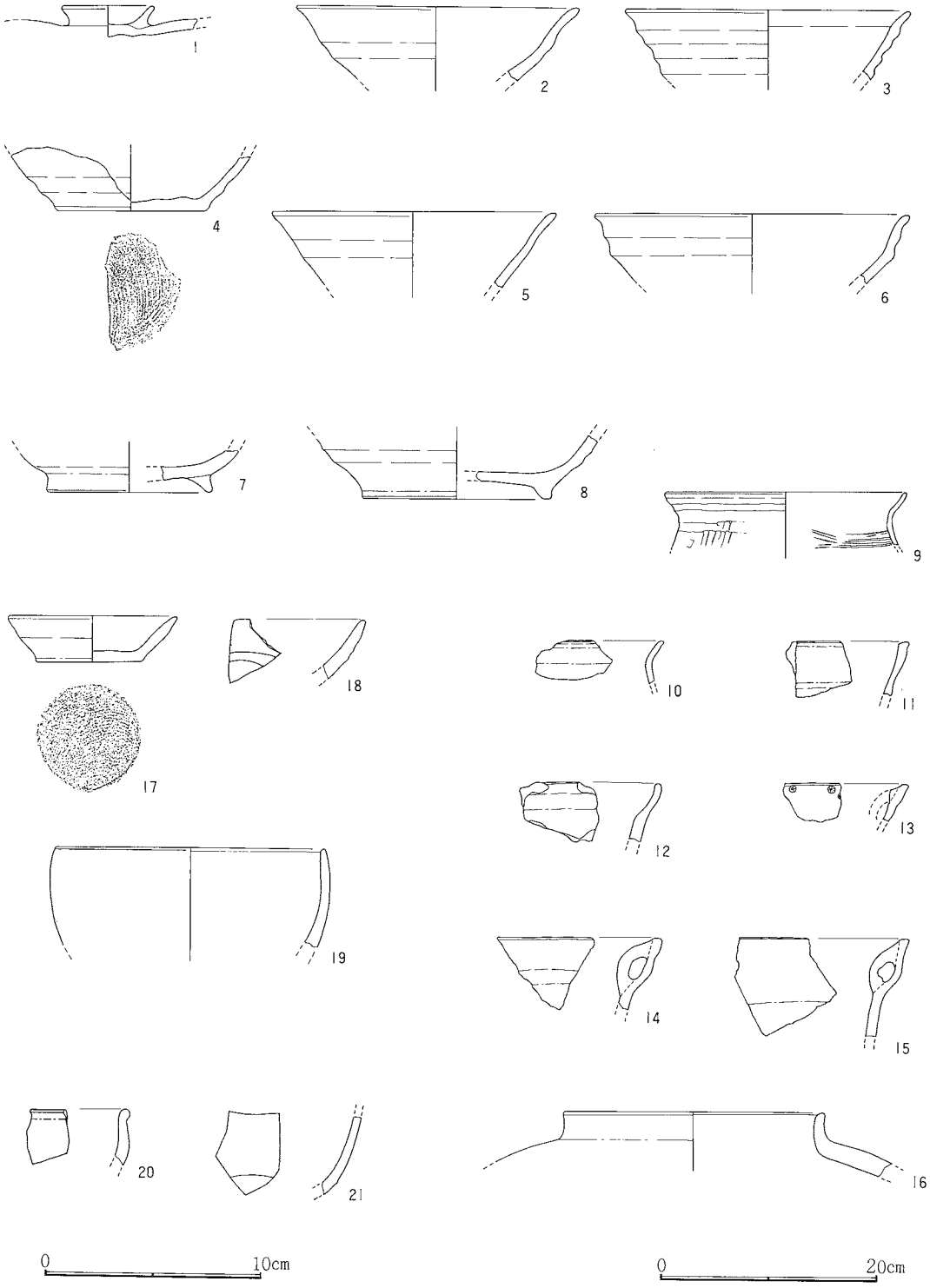
前にも書いた様に、天神山の直下峰つづきの高地という立地として好条件であったが、館を構築するには平坦な部分が少なく、うねりをもっていたために、土地の高い部分をカットし低い部分や少ない平坦部の周辺を埋め、さらに堀を掘った廃土を埋め立て現在確認されている規模にまで拡張造成を行ったのである。特に館東側については大規模な造成が行われている。

土塁は、遺構確認時に館東端に黄色がかった土が帯状に確認できたこと(平面図点線部分)。トレンチセクション図においても平面で確認された部分に特に As－ＹＰ、ロームブロックが台形状に集中することなどから、この部分に当時土塁が築かれていたことが推測される。トレンチセクション図の点線は削平以前の土塁の推定線で、高さ約２m～2.5m程の土塁であったものと推測される。

館の造成状況について調査を行っている例があまりなく他遺跡との比較は行えないが、動かした土量から館を造った豪族の力量や造成に掛った人員・期間などの点を今後の課題としたい。

ｉ．表採遺物　(第55図)

１は須恵器蓋で内面は回転横ナデ、つまみ付着部分はヘラ削りによる凹状のつまみが付く。２～５は須恵器杯で、２、３、５は体部外面にロクロ目を残し、口唇部がやや外反する。４は底部破片で外面にロクロ目を残し、底部は回転糸切り痕を残す。６は土師質の杯で、外面にロクロ目を残す。口唇部は外反する。７は須恵器高台付碗で、体部外面にロクロ目を残し、高台部は丁寧に装着されている。８は土師質の高台付埦で、体部外面にロクロ目を残し、高台部は丁寧に装着されている。９・10は土師器甕で、９は口辺部がコの字状口縁を呈し、口唇部はやや上方へ反る。10は内外面共に横ナデ調整が施されている。11～15は内耳土器で、内外面共に横ナデ調整が施されている。16は須恵器壺で、口縁部が短く直立する。17は灯明皿で、底部に回転糸切り痕を残す。18～21は陶器で、18は皿で産地は不詳、釉は灰釉、生産年代は19世紀と思われる。19・20・21は碗で、19は産地は瀬戸、美濃、釉は飴釉、生産年代は18世紀と思われる。20・21は産地は不詳、釉は鉄釉、生産年代は20が17世紀後半～18世紀前半、21が18世紀と思われる。



第55図　表採遺物実測図

3　3区の遺構と遺物

(1)　ピット群　(第56図)

3区ではピットが合計65口確認されたが、柱穴列、掘立柱建物址等としての柱穴の配置が確認できないためにピット群とした。2F、2G、2H—79、80、81グリッドに集中して分布し、規模も径15～40cmと大きく、深さも20～40cmとしっかりしたものが多い。何らかの建物址の柱穴となると思われる。全てのピットから遺物の出土はなく確実な年代を押えることは不可能であったが、覆土から見て全てのピットが中世に属するものと思われる。

(2)　溝　(第56図)

2J—76、2K—76、77、2L—77、78グリッドに分布し、西から南東方向へ向って斜面を斜めにおり、井戸と土壙3基と重複する。規模は上端幅1m、下端幅60cm、深さ15～40cmである。断面形は丸みのある逆台形状を呈する。遺物は出土しなかったが、覆土から見て中世の遺構と考えられるが性格不明である。

(3)　井　　戸　(第57図)

2M—78グリッドに位置し、溝と重複する。平面形ははほぼ円形で深さ約12cmまで擂鉢状にすぼまり、そこから左右に大きくふくらむフラスコ状の断面を呈する。規模は上端径1.46m×1.30m、中段くびれ部径85cm×80cm、張出し部径1.30m×1.25m、底面径60cm×55cmで深さは2mを測り底面はほぼ平坦である。素掘りの井戸であり、覆土は自然に埋没した様相を示し、土器片及び大小の礫が出土した。石組みの痕跡、石組みの崩落を窺わせる埋没状態を示していないことから、これらの土器片、礫は意識的に井戸の中へ投げ入れられたものと思われる。調査中も湧水があり、くびれ部分まで水の留る状態であった。出土遺物は内耳土器5点、土師器坏2点が出土した。

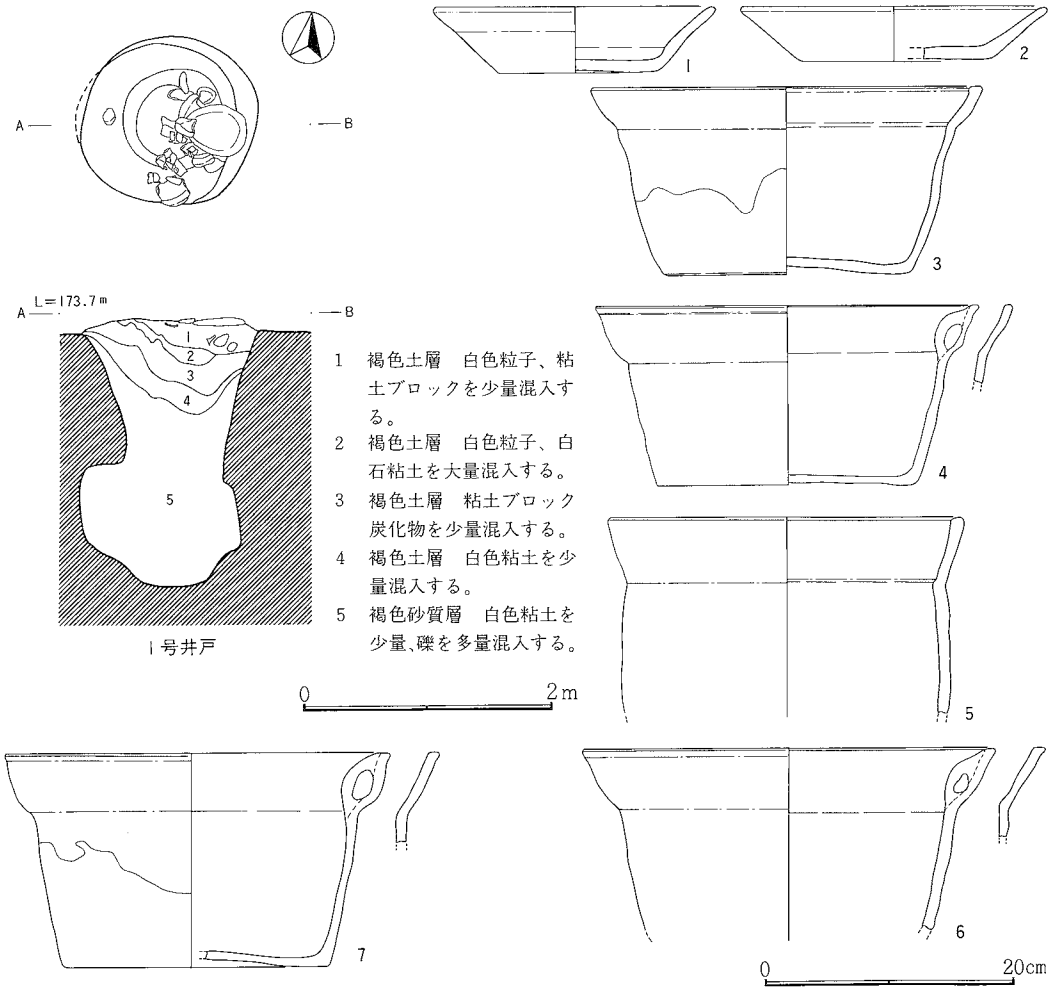
(4)　土　　壙　(第58図)

土壙は合計33基確認されたが、明らかに新しいと思われる土壙は除外する。

D—1号土壙、2F—79グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなす。規模は80cm×64cm、深さ7cmで長軸方向はN—46°—Wを示す。遺物は出土しなかったが覆土から中世の土壙と思われる。

D—2号土壙

2G—80グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は箱状をなす。規模は1.35m×1.20



1　褐色土層　白色粒子、粘土ブロックを少量混入する。
2　褐色土層　白色粒子、白石粘土を大量混入する。
3　褐色土層　粘土ブロック炭化物を少量混入する。
4　褐色土層　白色粘土を少量混入する。
5　褐色砂質層　白色粘土を少量、礫を多量混入する。

第57図　井戸実測図・井戸出土遺物実測図

No.	器　種	調　整　技　法	胎　土	焼　成	残存	備　考
1	須恵器 坏	内外面共回転横ナデ、底部回転糸切り(磨が著しい)	砂粒を少量含む	やや軟質	11/12	土師器
2	須恵器 坏	内外面共回転横ナデ、底部回転糸切り(磨が著しい)	砂粒を少量含む	やや軟質	3/8	土師器
3	内　耳	内外面共回転横ナデ	砂粒を少量含むが緻密	普　通	3/5	硬質陶器 15C中
4	内　耳	内外面共回転横ナデ	砂粒を少量含むが緻密	普　通	9/10	硬質陶器 15C後
5	内　耳	内外面共回転横ナデ、胴部はやや外側に張り出す	砂粒を少量含むが緻密	普　通	1/6	硬質陶器 15C後
6	内　耳	内外面共回転横ナデ	砂粒を少量含むが緻密	普　通	2/7	硬質陶器 15C後
7	内　耳	内外面共回転横ナデ	砂粒を少量含むが緻密	普　通	5/7	硬質陶器 16C前

第25表　1号井戸遺物観察表

m、深さ34cmで長軸方向はN―75°―Wを示す。遺物の出土はないが覆土により中世の土壙と思われる。

D－3号土壙

2G―82グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は段のある浅い擂鉢状をなす。規模は2.5m×1.95m、深さ47cmで長軸方向はN―10°―Wを示す。土壙北よりに10cm～50cm程の大小の礫が大量に混入していた。覆土により中世の土壙と思われる。

D－4号土壙

2H―81グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.15m×0.7m、深さ45cmで長軸方向はN―30°―Wを示す。遺物は古銭が2枚出土した。腐食が著しく銭名は不明。

D－5号土壙

2H―81、82、2H―81、82グリッドに位置する。平面形は長方形で、断面形は箱状をなす。規模は4m×0.7m、深さ43cmで長軸方向はN―49°―Eを示す。遺物は土師質坏1点が出土した。

D－6号土壙

2J―76、77グリッドに位置し、ピッドと重複し、南半はカク乱のため不明、平面形は不明で、断面形は丸みのある箱状をなす。規模は現状で長軸1.7m、深さ35cmである。土壙北寄に5cm～40cm程の大小の礫が大量に混入していた。覆土より中世の土壙と思われる。

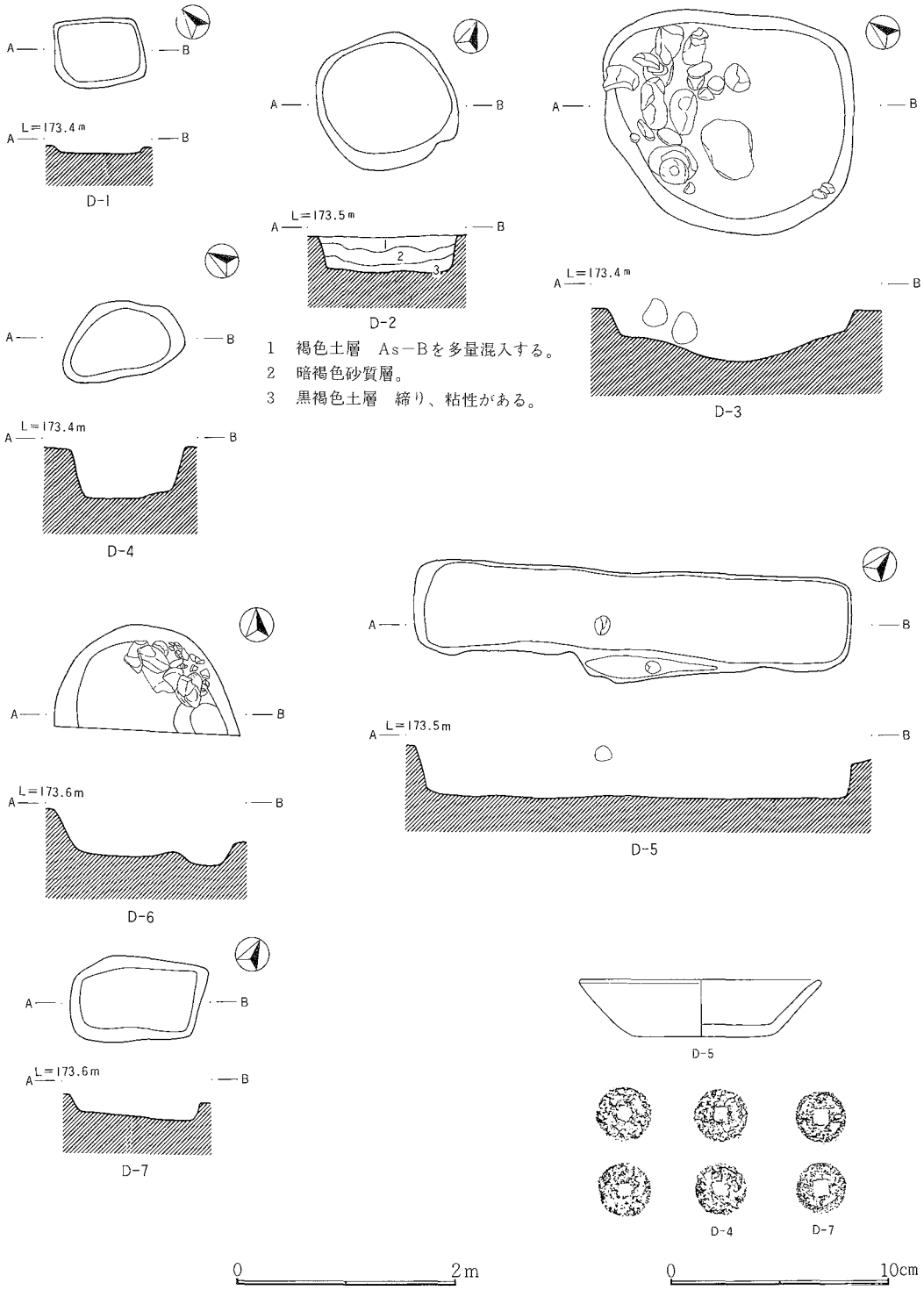
D－7号土壙

2P―77、78グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は丸みのある浅い箱状をなし、1号土壙に類似する規模は1.22m×0.78m、深さ16cmで長軸方向はN―58°―Eを示す。遺物は古銭が1枚出土した。腐食が著しく銭名は不明。

(5)　グリッド及び表採遺物　（第59図）

1～6はグリッド出土の遺物である。1～3は2J―81グリッド出土で土師質の坏である。1は内外面共に横ナデ調整が施され、底部にかすかに回転糸切り痕を残す。2は内外面共に横ナデ調整が施され、口唇部は外反する。3は内外面共に横ナデ調整が施され、口唇部は外反し、底部に回転糸切り痕を残す。4～6は2H―79グリッド出土の土師器坏である。いずれも磨滅が著しく、4は口唇部が弱く外反し、底部にかすかに回転糸切り痕を残す。5・6も底部にかすかに回転糸切り痕を残す。

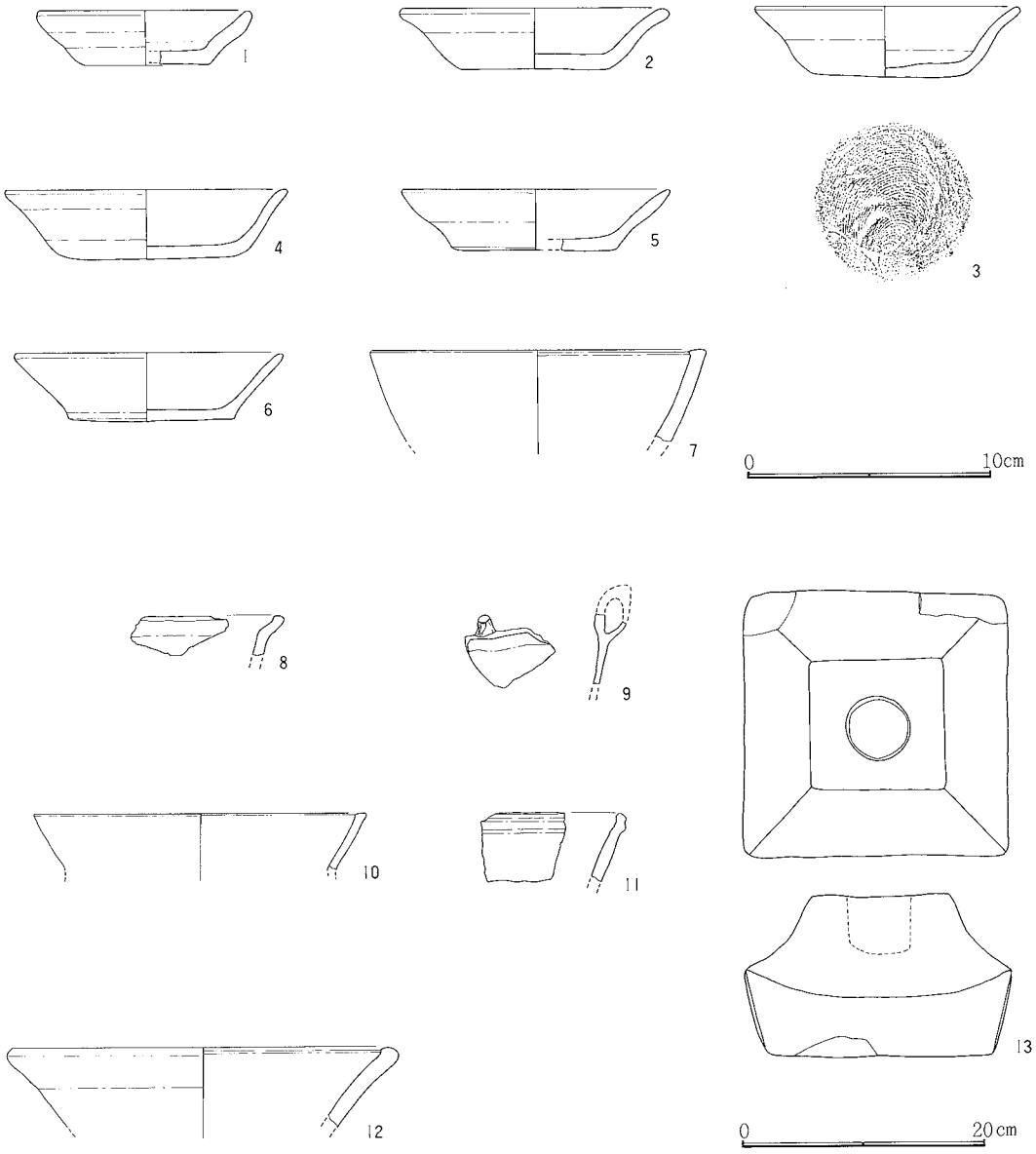
7―13は表採遺物である。7は土師質の碗で、内外面共に横ナデが施され、口唇部は内側に折反されている。8～10は内耳土器である。8は内外面共に横ナデが施され、口唇部は強く外反し短い。9は内外面共に横ナデが施されている。10は内外面共に横ナデが施され、口唇部は内側に



1　褐色土層　As－Bを多量混入する。
2　暗褐色砂質層。
3　黒褐色土層　締り、粘性がある。

第58図　土壙実測図・土壙出土遺物実測図

折反されている。11は須恵器甕で、生産地は秋間と思われる。12は軟質陶器の鉢である。口唇部は弱く外反し内側に折り反されている。13は五輪塔の火輪塔である。4区への落ち込み部分で表採されたもので、横22cm、高さ13cmを測る。



第59図　グリッド及び表採遺物実測図

4　4区の遺構と遺物

(1) 概　　要

遺　　構

2区館址と3区の間の谷地部分を4区とし、A区、B区の2ヶ所にわけて遺構確認を行った。確認面はB軽石除去面で行い、A区、B区を通して、現在2区館址沿を流れている道場川の旧流路を確認することができた。

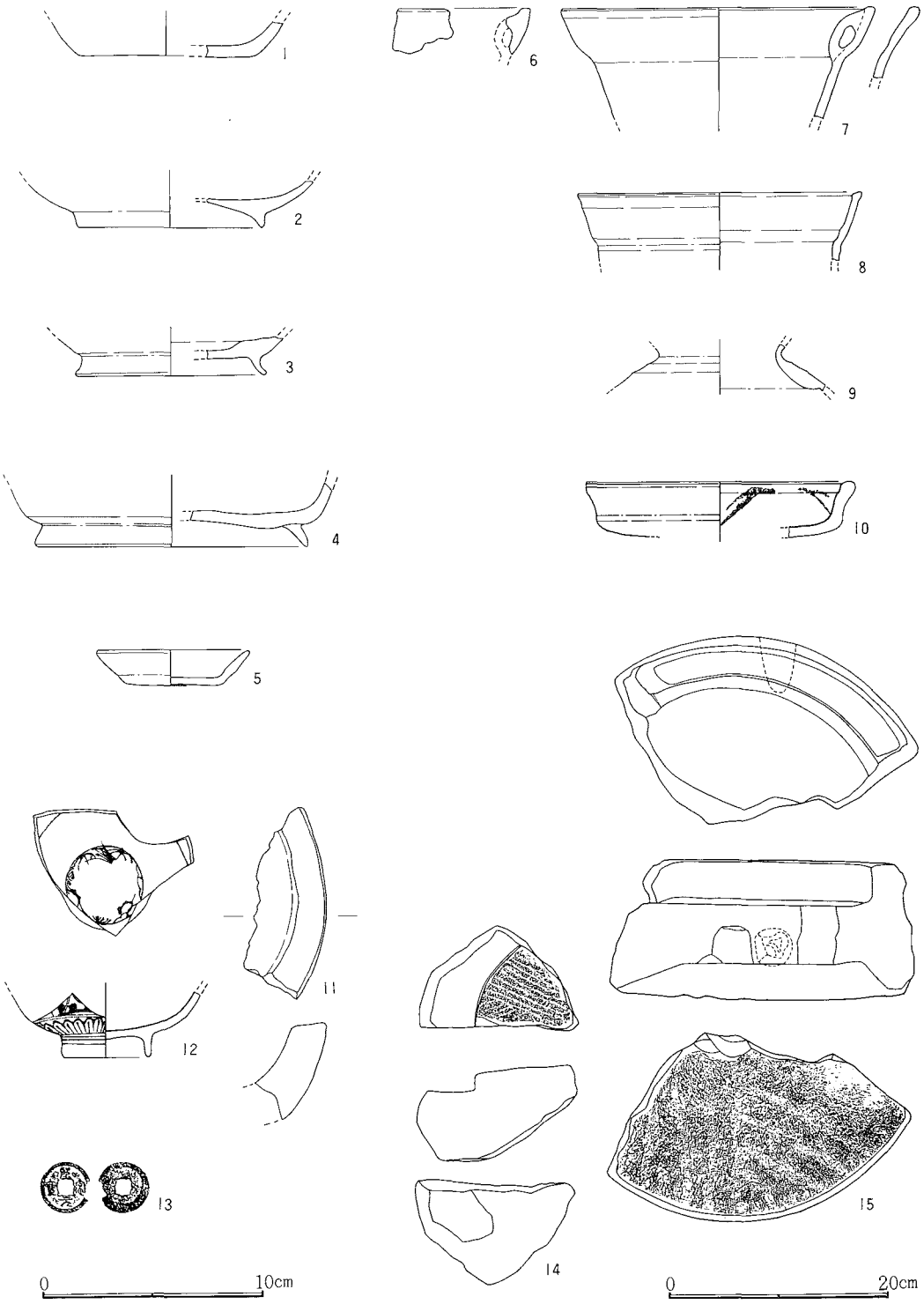
現在は館址の西から南にかけて回り込む様に館址沿を流れているが、調査の結果当時の流路は現在より西側、2区と3区のほぼ中央を流れていたようである。A区、B区共に湧水があり、B区では川底部に人為的投石されたと思われる大小の礫が多量に出土した。

B区はこの他、流路東館址側に平坦部を確認することができた。この平坦部は人為的なものと思われ、土壌が水田土壌に似ているために、水田址の可能性もあるが明言はできない。

(2) 表採遺物　(第60図)

全て川底付近から出土したものである。7が4－B区の他は全て4－A区からの出土である。

1は須恵器杯で、底部に回転糸切り痕を残し体部内外面共に横ナデ調整を施されている。2～4は須恵器高台付碗である。2は高台部が短く丁寧に貼付されている。3は高台部が細く外側に開いている。4は高台部を丁寧に貼付している。5は灯明皿で、底部に回転糸切り痕を残し、口唇部に油煙が付着している。6～8は内耳土器である。7は内外面共に横ナデ調整が施されている。8は内外面共に横ナデ調整が施され、口縁部外側には鉄分が付着している。9は須恵器平瓶で頸部から肩部にかけての破片で、内外面共に横ナデ調整が施され、肩部は身厚である。10は陶器の水盤である。釉は志野釉で内面にねずみ釉による絵付が施され、生産地は美濃焼で、生産年代は17世紀と思われる。11は磁器の碗である。釉は染付で生産地は伊万里系、生産年代は18世紀後半から19世紀前半と思われる。12は石鉢である。石質は安山岩で、内面にかすかに磨かれた痕を残している。13は古銭で、皇宋元宝である。初鋳造年代は1253年、南宋時代のものである。14、15は石臼である。13は下臼の破片で、茶臼と思われる。15は上臼の破片で、直径約32cmである。



第60図　表採遺物実測図

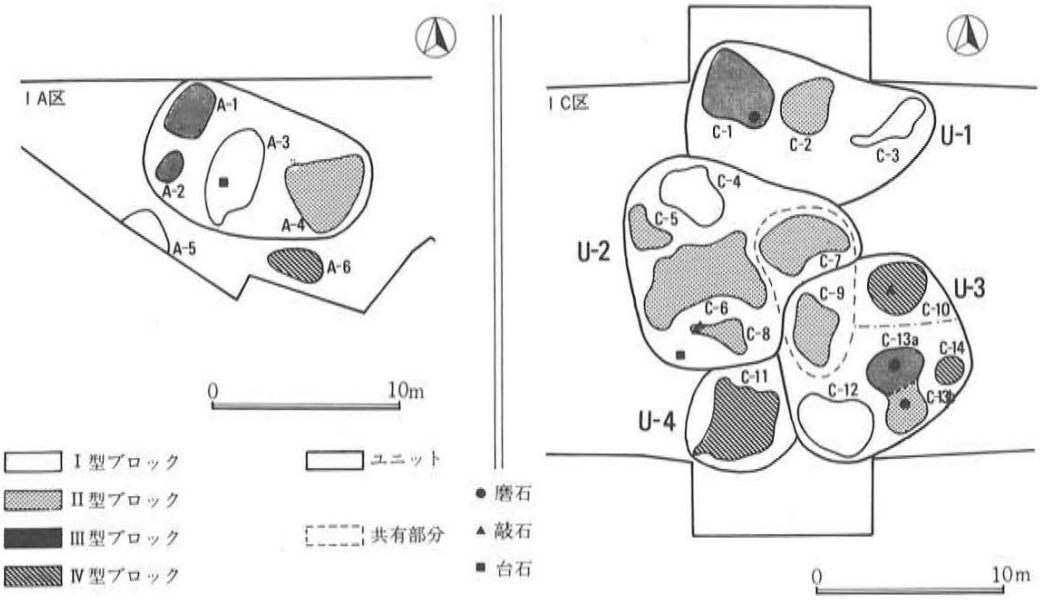
Ⅵ　成果と問題点

1　古城遺跡におけるＡＴ下の石器群について

(1)　１Ａ区における集落の景観

１Ａ区では６つのブロックが存在し、これを分析することにより、ユニット（Ａ－１～４）を抽出することができた。このユニットはⅢ型（石器消費型：Ａ－１、２）、Ⅰ型（石器生産型：Ａ－３）、Ⅱ型（石器生産消費型：Ａ－４）のブロックが一列に並ぶ構成をなす（第61図）。

ユニットの性格を明らかにするために、石器（道具）組成をみると（第62図）、ユニットの中心にあたるＡ－３ブロックはⅠ型で、石器製作作業が行われたと考えられる部分である。これを裏付けるように、ブロックの中心には台石が存在している。また、Ａ－１、２ブロックはⅢ型で、砥石、使用した可能性のある尖頭状の剝片や小形剝片がまとまっており、石器製作以外の作業を行った部分と推定される。そして、Ａ－４ブロックはⅡ型で、活動の核となるブロックである。このブロックには、ナイフ形石器がまとまっており、住居にあたるような居住の場であったと考えられる。しかし、火処の所在を示す資料は、今回の調査では何ら検出されておらず、その所在



第61図　１Ａ区・１Ｃ区ユニット概念図

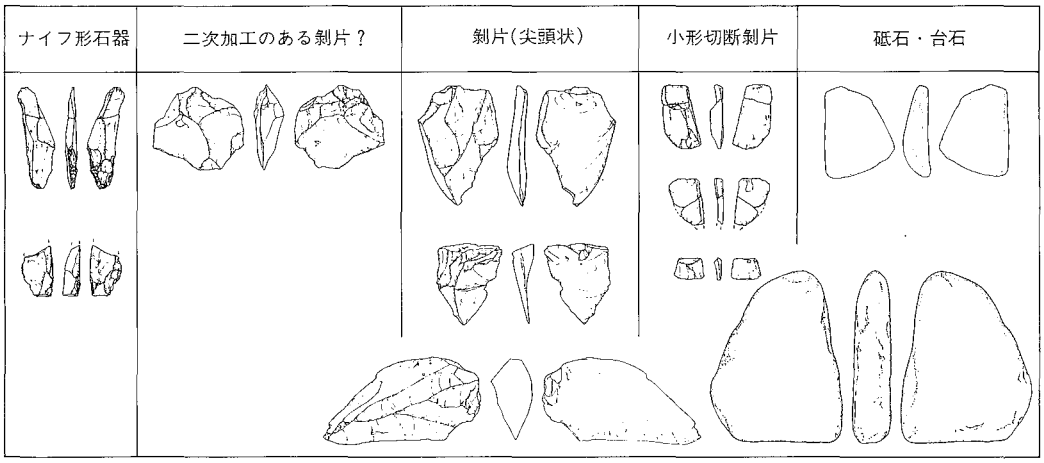
については不明である。

このように、このユニットは石器製作空間（Ａ－３）、石器製作以外の作業空間（Ａ－１、２）居住空間（Ａ－４）の３つの空間から構成されており、火処以外は生活を営む上での必要条件を充足した「世帯ユニット」であると推定される。一方、残ったＡ－５、６ブロックは、このユニットとは別個に存在しており、さらに南側に存在する別のユニットの構成要員であり、その一部が検出されたとみるべきであろう。そして、北側にもユニットの存在がうかがえ、これら幾つかの「世帯ユニット」により「単位集団」が構成されていたと想定される。

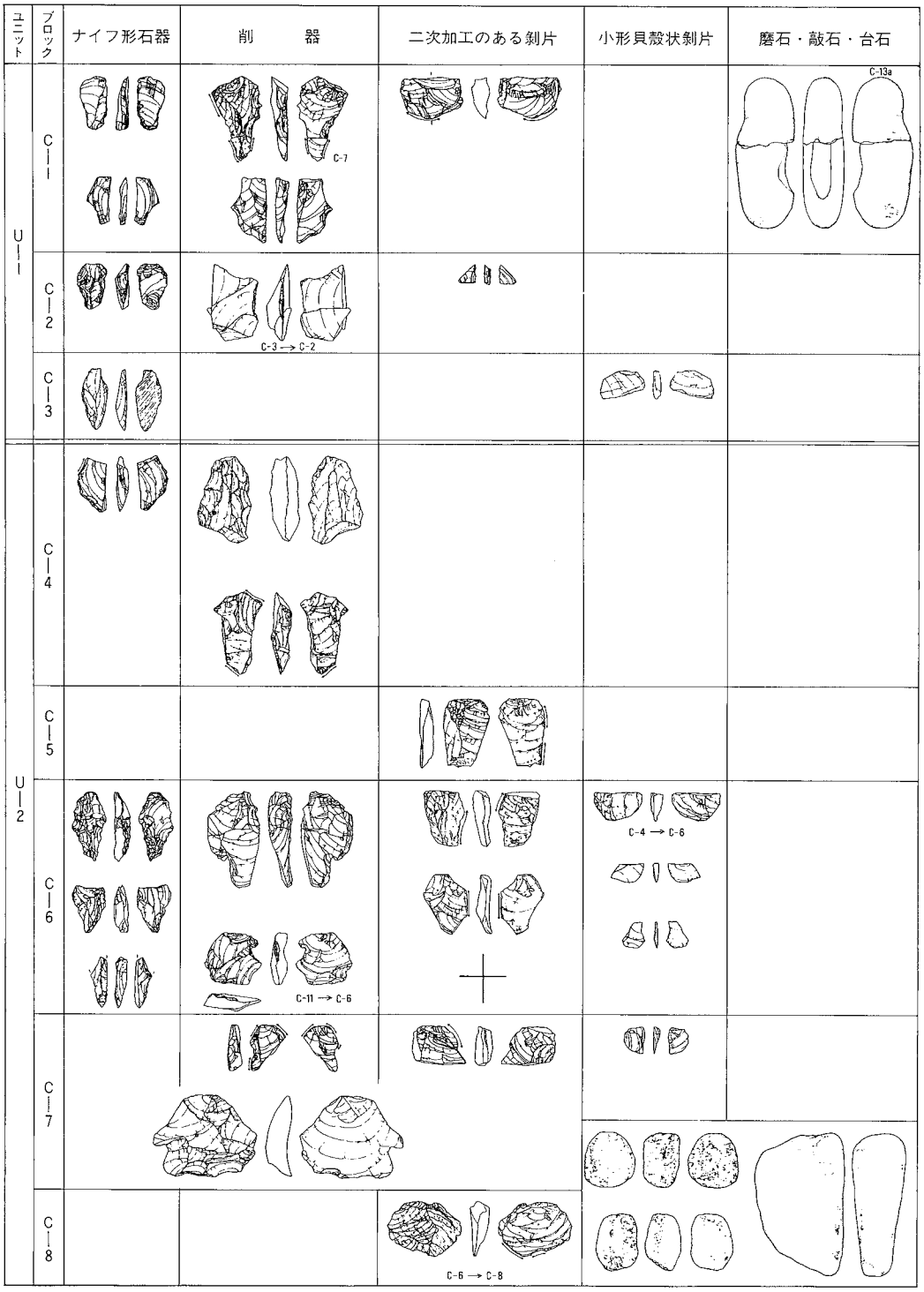
(2)　１Ｃ区における集落の景観

１Ｃ区では14のブロックが存在し、これを分析することにより、４つのユニットに分けることができた。また、これらのユニットは同時期に存在したものであることも前に述べた。ここでは１Ｃ区のユニット相互の関連性や道具組成、空間利用の問題について、少し考えてみたい。

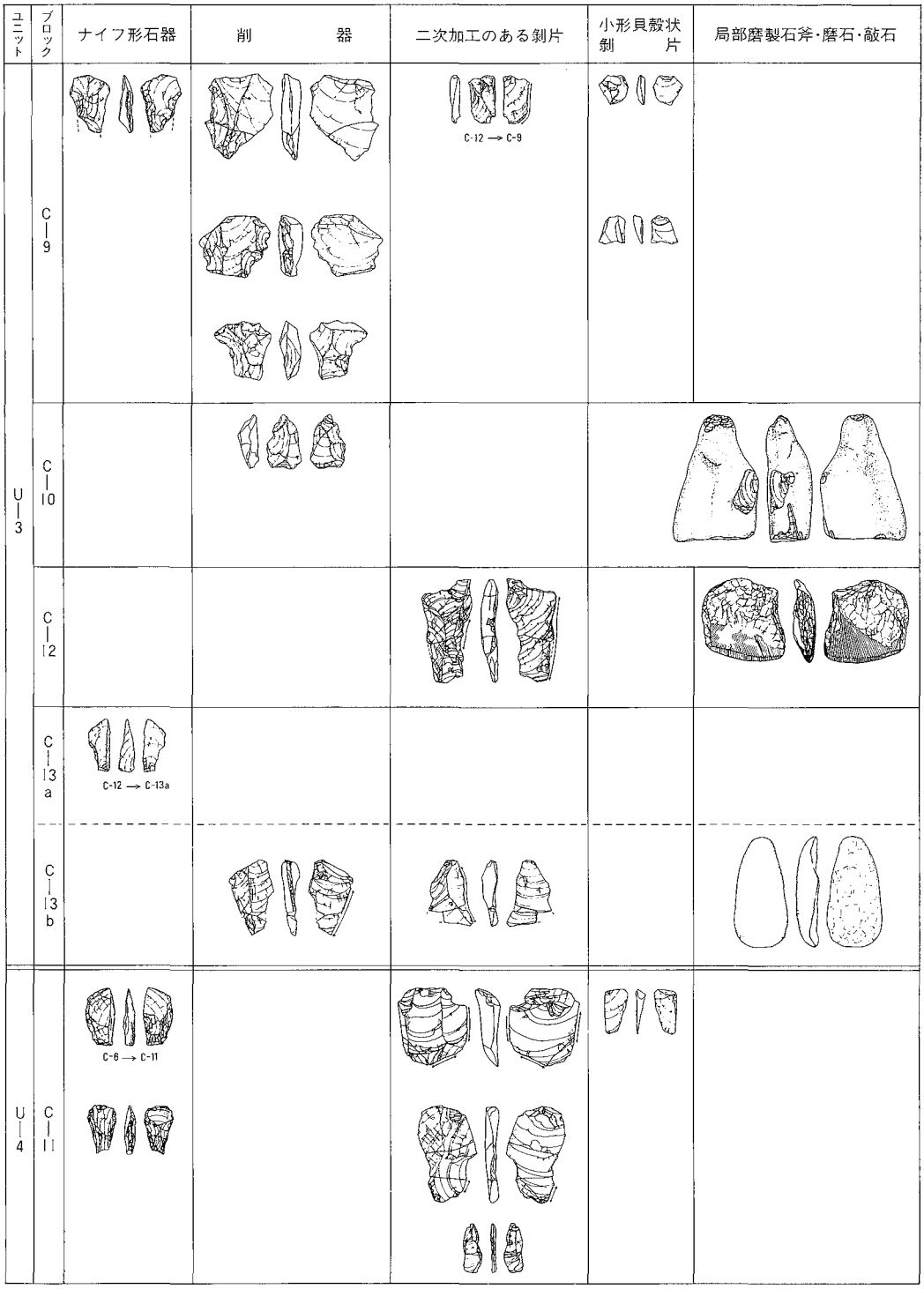
１Ｃ区のユニットの配置は第61図のとおりである。「コ」の字形に配列し、東側に開口部をもつ集落構造である。そして、各ユニット毎のブロック類型についてみると、ユニット１では１Ａ区のユニットでみられたように、Ⅰ～Ⅲ型のブロックが一列に並ぶ構成である。この配列はユニットの基本型と考えることができる。ユニット３ではＣ－９、12、13ａ・ｂブロックが中心グループを形成するが、このグループはⅠ～Ⅲ型が揃っている。このうち、Ｃ－９ブロックは後述するようにＣ－７ブロックと共同作業部分となるので、それを除外すると、ユニット３の中心部分はユニット１と同様にユニットの基本型であることがわかる。そして、ユニット３の場合はⅣ型（Ｃ－10、14）が周辺に附随する。Ｃ－14ブロックは位置的、内容的にみてユニット３の構成要員とみなることができる。しかし、Ｃ－10ブロックは石材、接合、個体別資料からみて、独立する条



第62図　１Ａ区ユニット別石器器種組成図



第63図　1C区ブロック・ユニット別石器器種組成図(1)



第64図　IC区ブロック・ユニット別石器器種組成図(２)

件を内包しており、このユニットの客分的存在であったことが推定される。或いは集落全体の中での客分的存在であったかもしれない。また、このことにより、ユニット３では基本型からやや外れた配列となったことが考えられる。

また、ユニット２はⅠ型とⅡ型から構成され、Ⅲ型は存在しない。そして、Ⅰ型ブロックは１つしか存在せず、他のブロックはⅡ型である。このユニットではＣ―７ブロックが集落の共同作業場となるため、このブロックを除外して考えると、一列に並ぶ構成をとり、基本的なブロック配列はユニット１、３と同じであることがわかる。しかし、ユニット３の場合、Ⅲ型ブロックが存在せず、基本型とは異なっている。この石器消費型ブロックを持たないという特性が、ユニット２の性格を示しており、この集団のリーダーの存在するユニットであることが推定される。

ユニット４はⅣ型（自給自足型）のユニットであるが、ユニット１、２より、わずかながら石器の移出入があり、完全に独立した存在とは言えない。また、道具組成（第64図）をみても削器が完全に欠落しており、削器を使う作業は他のユニットに依存していることが推定される。このようなことから、ユニット４は半独立世帯ユニットと想定される。

次にユニット相互の関連性についてであるが、ユニット１、３は磨石を半分ずつ持っており、密接な関係をもっている。しかし、磨石の台となる台石はユニット２が所有しており、これがないと磨石を用いる作業ができない。こうしたことから、これら３つのユニットは磨石、台石を用いる作業（調理？）については共同で行っていたことがわかる。そして、これらユニットの共同作業の場であるが、この集落の中心に位置するＣ―７、９ブロックが想定される。この２つのブロックはユニット２、３に所属しながら、各ユニットからの移出入が非常に頻繁である（第19図また、これらのブロックの道具組成をみると(第63、64図)、両ブロックとも削器が安定して存在している。特にＣ―９ブロックでは鋸歯状削器が３点揃っていて、作業内容をある程度特定することができる。そして、ユニット４では欠落していた削器がこの部分に存在している。これらの事実から、Ｃ―９ブロックは木や骨角を削ったり切ったりする作業が行われた空間であると推定される。また、Ｃ―７ブロックについては作業内容が多少漠然としているが、石器製作以外の作業が行われた共同作業空間であると思われる。ところで、この共有部分はユニットにより使用に偏りがみられ、Ｃ―７ブロックは主としてユニット１、３が、Ｃ―９ブロックについては主としてユニット２、３が共用している傾向が認められる。

１Ｃ区の各ユニットの道具組成については第63、64図のとおりである。これらの道具は集落内に遺棄、廃棄されたものであり、ユニットの装備の一部と考えられる。しかし、ある程度各ユニットの内容を知ることができる。各ユニットの装備を比較すると、各ユニットに共通して存在する石器と、特定のユニット、或いはブロックにのみ存在する石器がある。ナイフ形石器は各ユニットとも２～４点備えており別段差異は認められない。また、削器についてもブロックによる偏在

性はあるもののユニット４を除き、鋸歯状、抉入削器とも所有している。二次加工のある剝片はユニット２が卓越しており、他のユニットは少ない。これは二次加工のある剝片がユニット２において最も頻度が高く用いられたことを示しており、例えば動物を解体するような作業(註９)が行われたことが想定される。小形貝殻状剝片も二次加工のある剝片と同様の傾向を示しており、用途の関連性が考えられる。

また、特定のユニットにのみ存在する石器についてみると、ユニット４を除き各ユニットとも大形の礫石器を所有している。しかし、各ユニット共通の器種を持っているわけではなく、これらの石器は集落全体として、完成された組成となる。これは、共有する石器を各ユニットが分散して所持していることに帰因する。127＋128の磨石はそれを端的に物語っていると言えよう。このように生活を行ってゆく上で必要な道具を分散して所持しているということは、これらユニット（世帯）が単独では生計が成り立たず、ユニットの結合体（単位集団）でなければならない経済的、社会的背景があったものと考えられる。

以上のことから、１Ｃ区の集落構造についてまとめると、指導的立場のユニット２の世帯を中心として、ユニット１、３、４の世帯が、生計を一にする「自然家族」的結合体を形成して生活を行っていたキャンプサイト（野営地）であったと推定される。また、この集落におけるユニットの基本構造は長さ９～12m、幅３～５mの長楕円形であり、この中に３つの性格の異なる空間を有していたとみられる。住居址の所在については不明であるが、ユニットが世帯としての内容をもつことから、ユニットに重なるか、或いは附随して存在していたと考えられる。そして、ユニットに囲まれた空間は共同作業空間とみられる。(註10)

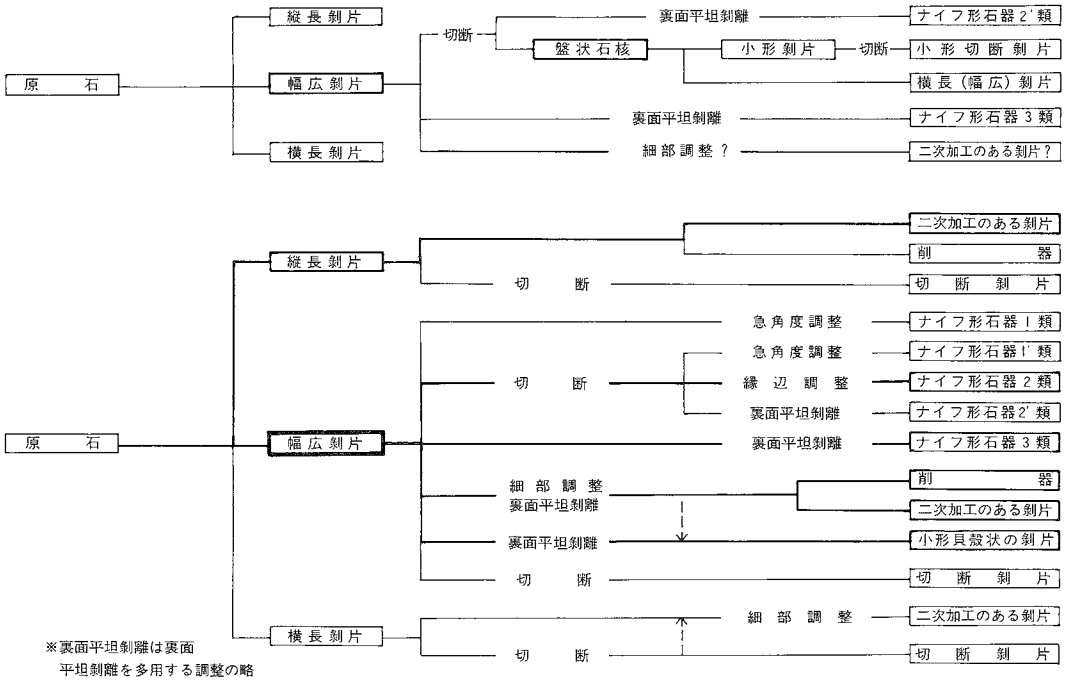
ＡＴ下位の同様の内容をもつ石器群の中で、このような小規模な単位集団の集落の例をみると、分郷八崎遺跡（白石他1986）、和田遺跡（若月1983）、北山遺跡（藤岡市未報告）、県外では東京都下里本邑遺跡（勅使河原、須藤他1982）、千葉県中山新田Ｉ遺跡（田村1986）等がある。(註11) また、これとは別に大規模な集落としては、下触牛伏遺跡（岩崎1986）の例がある。(註12) このような集落構造の差が何に帰因するかについては、さらに分析を行ってゆく必要があるが、「単位集団」の上位組織である「集団群（巣位集団群）」の存在と狩猟対象獣の違いにより、離合集散が行われた可能性も指摘されており（近藤1976、小野1976、春成1976）、古城遺跡などの小規模な集落は小型獣を対象とした分散期の、牛伏遺跡など大規模な集落は大型獣を対象とした集合期のものと想定することができよう。このような上位社会組織の存在によって、石器製作技術の共通性の問題についても理解することが可能である。

(3)　古城遺跡の石器群の位置づけ

古城遺跡１Ａ区、１Ｂ区、１Ｃ区の各石器群の特徴については、これまで述べてきたとおりである。このうち、１Ｂ区は１点しか存在しないので内容は不明である。そこで、１Ａ区、１Ｃ区の石器群相互の関係と、その位置づけについてまとめてみることにする。

１Ａ区と１Ｃ区の石器群を比較すると、幾つかの点で差異が認められる。まず第一に石器の出土層位についてであるが、古城遺跡ではＡＴの純層が調査区全域にわたって１～２cm堆積しており、肉眼で容易に識別できる状態であった。そして、両地点の石器群ともこのＡＴ層とほぼ同じ位置から検出されている。１Ａ区ではＡＴ直下（Ⅺc層上位）にまとまるものの、ＡＴ内（Ⅺb層）からも多く検出されており、一部はＡＴ直上（Ⅺa）からも検出されている。しかし、１Ｃ区ではＡＴ直下（Ⅺc層上位）に中心をもち、ＡＴ内（Ⅺb層）からも検出されているものの、量的には少ない。そして、ＡＴ直上（Ⅺa層）からは全く検出されず、Ⅺc層中位からも多く検出されるなど、１Ｃ区の石器群の方が１Ａ区の石器群より下位となると判断される要素が多い。また、両地点間に地形的な差違は認められず、両石器群の時間差に帰因するものと推定される。

次に、両石器群の剥片剥離技術については、整理すると第65図のように示すことができる。１Ａ区の場合、盤状石核作出工程が顕著であるのに対し、１Ｃ区ではこの工程は認められない。ま



第65図　１Ａ区・１Ｃ区剥片剥離工程模式図

た、ナイフ形石器は１Ａ区では２′類、３類であるのに対し、１Ｃ区では２類、３類が主体で、２類がより特徴的である。そして、１Ｃ区では特徴的な小形貝殻状剝片が存在せず、代りに１Ａ区では小形切断剝片が存在すること等、両石器群間に技術的な差異が認められる。

また、石材も１Ａ区では黒曜石がほとんど存在しないのに対し、１Ｃ区では全体の55％を占めており、石材組成上からも大きく異なっている。

以上のような剝片剝離技術、石材の差異は層位的事実を補強するものであり、両石器群の間には時間的な差違が存在し、１Ａ区の石器群の方が１Ｃ区の石器群より新しい段階のものであると考えられる。しかし、集落構造については、前述のようにユニットの基本型が同じ構造であり、両石器群の間には大きな時間差はなかったと推定される。

ところで、古城遺跡の石器群と同様に「台形（様）石器」を有し、裏面平担剝離技術を特徴とする石器群は、近年発見例が増加し、群馬県内でも、赤堀町下触牛伏遺跡(岩崎他1986)、北橘村分郷八崎遺跡（白石他1986)、笠懸村和田遺跡（若月1983)、藪塚本町藪塚遺跡（須藤1986)、藤岡市北山遺跡（未報告）等がある。これらの石器群はＡＴ下位より検出されているが、層位はほぼ同じで、上下差がほとんど認められず、層位から時間差を明らかにすることは困難である。

また、ＡＴ下位には、石刃技法により大形のナイフ形石器を作出する、技術的基盤が異なる石器群が存在する。古城遺跡においても石刃の可能性のある剝片もあるが、基本的には存在しないと考えられる。群馬県内において、これを主体とする石器群を検出した遺跡としては、笠懸村岩宿（杉原1956)、新里村武井（杉原1977)、月夜野町後田（麻生1987)、同大竹（篠原他1985)、同小竹Ａ(大賀他1985)、同善上(三宅他1986)、昭和村長井坂城(黒岩他1985)、赤城村見立溜井(白石他1985)、同諏訪西（谷藤他1986）などが知られている。

これら、「台形（様）石器」も有する石器群と「石刃」素材の大形ナイフ形石器を有する石器群はしばしば混在することが、下触牛伏、北山、武井（杉原1977)、栃木県磯山（芹沢1977)、東京都高井戸東(小田他1977)、千葉県中山新田Ｉ等の遺跡でみられる。下触牛伏、北山、武井、高井戸東では「台形（様）石器」が主体で「石刃」が客体的存在である。また、磯山、中山新田Ｉでは「石刃」が主体的存在で、「台形（様）石器」が客体的存在である。このような差異が、時間的要因によるものか、遺跡の性格によるものかについては、はっきりしないが、今後さらに検討を行ってゆく必要がある。(註13)

また、ＡＴ下位の石器群の剝片剝離技術については、分郷八崎遺跡を中心とした分析（白石1987)、があり、それに則して、古城遺跡の石器群をみた場合、古城遺跡１Ｃ区と分郷八崎遺跡については類似性が強い。しかし、分郷八崎遺跡で特徴的な尖頭状を呈するナイフ形石器(註14)(「基部調整尖頭石器」)は古城遺跡１Ｃ区では１点しか検出されておらず、また、ナイフ形石器の調整をみても、分郷八崎遺跡では切断手法は稀で、３類に分類されるものが卓越しているなどの相違点も

あり、一概に同質の石器群とは言えない。また、同様に他の遺跡の剝片離技術及び、ナイフ形石器の調整についてみると、下触牛伏遺跡では石核準備段階が存在し、１Ａ区の「盤状石核」準備段階との関連性もうかがえる。ナイフ形石器は３類のほか、２類、２′類、１′類と切断手法を多用する傾向がある。和田遺跡では「盤状石核」が存在しており、１Ａ区と共通する。ナイフ形石器は切断手法を用いる２′類が多く、２類もある。また、３類もやや多い。この傾向も１Ａ区と共通する。そして、藪塚遺跡では石核準備段階は存在せず、ナイフ形石器はすべて３類であり、分郷八崎遺跡と共通する。

このように、古城遺跡の２つの石器群と他遺跡の石器群との間には、上述のような共通点と差違が看取される。こうした共通点と差違が、いかなる要因によるものかについて、今後とも多角的な視点から検討を行ってゆく必要があろう。ただ、古城遺跡においては、１Ａ区と１Ｃ区の石器群では層位的な上下関係が認められることから、両石器群間の石器製作技術の差違は時間差として把えることができ、古城１Ａ→古城１Ｃという変遷が考えられる。

また、古城遺跡では「石刃」は基本的には存在せず、和田遺跡、藪塚遺跡でも存在しないが、下触牛伏遺跡では確実に「石刃」を有する石器群が存在し、分郷八崎遺跡でも「石刃」が存在するとみられる。系統の異なる「石刃」を有する石器群の有無が時間的要因によるものである可能性があるが、周辺地域との関係を含めて考えてゆく必要がある。

こうした「台形（様）石器」をもつ石器群は東京都下里本邑遺跡、多聞寺前遺跡（松谷他1983）、高井戸東遺跡（小田他1977）などでも検出されており、層位の明確な武蔵野台地に対比すると、Ⅶ層へⅨ層の石器群と把えることがきる。(註15) しかし、古城遺跡の場合ＡＴ直下という出土層位であり、土層堆積の問題を含めて、今後さらに検討してゆかなければならない。

「台形（様）石器」を含むＡＴ下位の石器群については、九州から北海道に至るまで凡日本的に広く分布しており、後期旧石器時代前半期のナイフ形石器文化を解明してゆく上で、重要な石器群である。代表的な遺跡では熊本県曲野（江本1984）、兵庫県七日市（藤田1985）、長野県野尻湖仲町（野尻湖人類考古グループ1980他）、秋田県七曲台遺跡群（大野他1985）、岩手県大台野（菊地他1975）、北海道祝梅三角山（吉崎他1974）などが知られている。この段階の石器群は近年遺跡の発見例の増加によって、注目を浴びるようになった石器群であり、ＡＴ層準のより明確な西日本において分析がなされている（松藤1985、1987）。しかし、まだ不明の部分が多く各地域における地域性の問題や、編年についても、ようやく途についたのが現状であろう。こうした中で、古城遺跡の石器群についても、今後多くの検討を行ってゆく必要があると考える。特に、今後の分析においては、周辺自然科学、とりわけ古環境と動物相(註16)との関連性を考慮しながら、石器群の存在する社会的背景について考えてゆくべきであろう。

註

1．ブロック、ユニッドの区分、分析方法は『寺谷遺跡』（鈴木他1980）、『野沢遺跡』（鈴木他1982）等の方法を参考とした。

2．個体別資料の認定については、黒色安山岩、黒色頁岩を中心に行った。黒曜石は個体の認定が困難であり、認定基準も曖昧となりがちなので、特徴的なものに限定したので量的に少なくなったが、本来はさらに多くの個体別資料が存在すると考えられる、また、今回の分析の場合、時間的制約から接合資料により示し得なかったブロック相互の関係を明らかにすることに主眼を置いて抽出した。そのため、ブロック内で完結する例は接合資料より少ないという結果となっている。

3．剥片剥離作業が行われたブロックには、剥片の量が多い、砕片、形状の整ってない剥片が存在する等の傾向がみられる。こうしたブロックを個体別資料の母体となるブロックという意味から母ブロックと呼ぶことにする。

4．ブロックの類型については、下里本邑遺跡IX層の石器群で「密集型」と「散漫型」に分類され、前者は「作業空間」、後者は「居住空間」に比定されている（勅使河原、須藤1982）。また、多聞寺前遺跡IV層の石器群では「譲渡型」、「分散型」、「収束型」に分類し、石器群の構造を分析している（栗島1983）。一方、ブロック内をゾーンに区分して分析する方法は寺谷遺跡（鈴木他1980）、野沢遺跡（鈴木他1982）等において実践されている。

5．群馬県内の石材については中束、飯島（1984）により産地が推定されている。

6．ナイフ形石器と分類したものは台形石器、台形様石器、基部調整尖頭石器（分郷八崎型ナイフ形石器）（白石1986、1987）、基部・側縁部整形石器（岩崎1986）、中山新田型ナイフ形石器（田村1986）等様々な名称で呼称されている。しかし、どれも同じものを指しており、統一名称が与えられていない。確かに従来ナイフ形石器とされていたものの特徴であるブランティングは施されていないものが多く、別の器種と考えることもできるが、ここでは統一名称が与えられていないので、混乱を避けるため、ナイフ形石器の範疇に含めて把えることにする。

7．二次加工のある剥片（リタッチド・フレイク）は刃部が明確に作出されておらず、微細な剥離が認められるものを総称している。したがって、使用により微細な剥離が残ったもの（使用痕のある剥片；U・フレイク）も含まれる。

8．小形貝殻状剥片は分郷八崎遺跡（白石1986、1987）においても検出されている。また、北陸地方に分布する立野ヶ原型ナイフ形石器（ウワダイラ型台形石器）（麻柄1982、小林1975、白石1978等）との関連性についても留意する必要がある。

9．二次加工のある剥片に残された微細な剥離はあまり堅くない対象物を切断した際に生じたも

のと推定される。なお、マイクロフレイキングについては阿古島香氏の実験的研究（1980）を参考とした。

10. 鈴木忠司氏は集落の類型を「並行型集落」と「交叉型集落」に大別しているが（鈴木1982)、１Ｃ区の場合、「交叉型集落」であり、世帯ユニットが未分化の状態を示していると考えられる。

11. 分郷八崎遺跡は１Ｃ区と遺物の分布状態が類似しているが、集落に関する分析が行われておらず、はっきりしない。また、下里本邑遺跡の集落構成は１Ｃ区と差異が認められ、時間的なものか地域的なものか検討する余地がある。

12. 下触牛伏遺跡では「大別15ヶ所、細別26ヶ所に及ぶ石器ブロック」が存在し、「概ね直径50m程の範囲に環状」に展開しており、大規模な集落と判断される。

13. 須藤隆司氏は系統論的視点から「岩宿段階」（台形石器を含む）→「後田段階」（大形石刃）→「寺尾段階」（小形石刃）という段階設定を行っている（1986)。

14. 栃木県磯山遺跡（芹沢1981）で「ペン先形のナイフ形石器」と呼称されている。

15. 多聞寺前遺跡のⅦ層・Ⅸ層の石器群では石核素材について「Ⅶ層では剝片素材が主であり、礫をそのまま、あるいは分割する例は従である。Ⅸ層では礫素材が主であり、剝片素材例は見受けられない。」としており（松谷1983)、これが南関東における一般的傾向であるとすれば、北関東の石器群との対比が可能である。

16. 野尻湖における発掘調査はこの分野の研究を行う上で非常に重要な意味をもっている。ナウマンゾウの化石が検出される層位は上部野尻湖層Ｉまでと推定され（野尻湖哺乳類グループ1979)、この層のＣ^{14}年代は24,710±1,660年Ｂ．Ｐ．から23,530±1,180年Ｂ．Ｐ．とされている（地団研専報27号編集委員会1984)。また、この層からは台形石器が検出されており（野尻湖人類考古グループ1980、1984、1987)、ナウマンゾウの狩猟と台形石器を有する石器群の関係について、考慮する必要がある。

2　古城館址についての若干の考察

(1)　遺構の概要

古城館址における今回の調査により掘立柱状遺構、柱穴列が重複し多数検出された。遺構の総数は、掘立柱建物址17棟、柱穴列12本、井戸２基、地下式壙２基、土壙(縄文時代) 9 基、(中世) 17基、住居址（平安時代）２棟、溝１条、その他近現代と思われる土壙、ピット等が多数検出された。掘立柱建物址、柱穴列はまとまらないピットが多数あるので増加すると思われる。

(2)　館址の構造

今回の調査により確認された館址の構造についてみてみたい。まず、入口は土塁の切れる東側と北側の土橋状遺構の正面に位置していたと思われる。また、館の南から西にかけてＬ字形の曲輪があり、西端部が一段高くなっている。この一段高い部分の上にこの区画への出入口が存在した可能性が考えられる。この他にも、Ｌ字形の曲輪の東端にある縦土塁の部々にも出入口の可能性が考えられるが、各遺構の配置からみて、その可能性は低いと思われる。このように、３ヶ所に出入口の存在が考えられるが、地形、地割、また東山道が館の南東を通っていたらしいことから、東が正面の出入口になるであろう。

堀は、折りをもつ薬研掘りで土橋状遺構をもつ。土橋状遺構の中央部分には柱穴が検出され、上部に木橋が掛けられていたものと思われる。この土橋状遺構から館に入った部々を囲むようにＬ字形の溝がある。この溝には板屏が存在したとみられ、屏の押え等の杭の跡と思われるピットが溝の中に多数検出されている。この溝により区画されている部分に遺構は何も検出されなかった。恐らく、枡形のように役割を持つものであろう。

また、この区画の西側、館址北西の隅に他より地面が一段高くなっている区域がある。ここにも遺構は何も検出されなかったが、『中仙道板鼻宿』（川島1972）の姥懐の出丸の記述によれば、徳定屋敷の西北の一隅に三島祠と稲荷祠が祭られているとある。また、高崎市の矢中下村北館址では、館の北西部の溝で区画された一段高い部分に、祭祀的な意味を持つと思われる建物址が検出されており、本館においても祭祀的な意味を持つ場と考えられ、神社等の建物があったのではないかと推測される。

(3)　遺構の時期区分　（第66、67図）

掘立柱建物址、柱穴列等の重複関係から少なくとも２つの時期に区分できることがわかった。調査時において時期区分に関する要素が得られなかったので、各遺構の位置関係や方向性などから同時期に存在したと思われる遺構を分類した。その結果、井戸、溝と数本の柱穴列を除いて遺構はⅠ期、Ⅱ期に区分することができた。

Ⅰ期の遺構

Ⅰ期は掘立柱建物址８棟と柱穴列９本で構成される。建物の種別は７・８・18号掘立が主屋と思われる。７・８号掘立は一部重複するがこれは建て変えと考えられる。また12・13号掘立は一棟にまとまる可能性もあり主屋的な建物と思われる。12・13・18号掘立は７・８号掘立に比べ規模が小さく、位置的なことからも副屋的なものと考えられる。５号掘立は総柱で倉庫、２・４号掘立は納屋、馬屋、下人等の付属屋と思われる。２・４号掘立は主軸方向が他の掘立と多少ずれるため、他の掘立とは意識的に区別したものであろう。

柱穴列は９本あり３・４・７・８・10号柱穴列は建立柱建物址の風除けや日隠しと思われ、９・11・12号柱穴列は正面入口と思われる東側へ延びるものと推測される。

Ⅱ期の遺構

Ⅱ期は掘立柱建物址９棟、柱穴列７本で構成される。建物の種類としては９・10・11・14号掘立が主屋と思われる。９・10・11号掘立については１～２棟の建物にまとまる可能性がある。この３棟の南に本館最大の総柱の15号掘立が位置する。建物の種類としては、規模や位置、また館北西に祭祀の場が存在する可能性から、15号掘立は持仏堂ではないかと考えられる。１・３・6・17号掘立はその規模や位置から納屋・馬屋・下人の住居などの付属屋と思われる。１・３・６号掘立は、主軸方向が他の掘立とずれるため、意識的に区別したものと考えられる。

柱穴列は７本あり、９・10・11・12号柱穴列はⅠ期と共通で、１・２・５・10号柱穴列は建物の風除けや日隠しと思われる。また、５号柱穴列は主屋の集まりの部々と付属屋の17号掘立を区分する立味ももつと考えられる。９・11・12号柱穴列はⅠ期と同じく東へ延びるであろう。

以上のように２期に区分したが、一部遺構が重複する部々があるためもう少し細かくなる可能性がある。いずれにせよ、この区分によりいくつかの事がわかった。

まず、第１に２期を通じて、主屋の集まりと付属屋の集まりを意識的に区別していることである。Ⅰ期もⅡ期も井戸をはさんで主屋の集まりと、付属屋の集まりの間にある程度の空間をおき、建物の主軸も意識的にずらしている。Ⅱ期の17号掘立などは主屋側に建っているが、主屋の集まりから多少離し、さらに柱穴列によって区画されている。

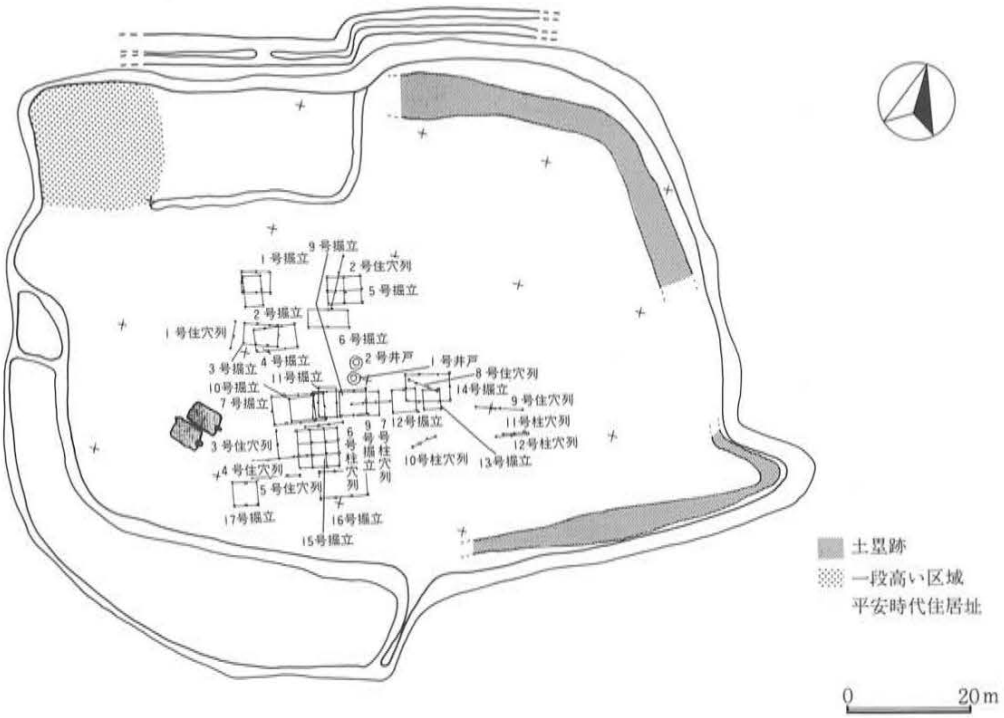
第２に２期を通じて、主屋的な建物が正面と思われる東の出入口に向かい列ぶことである。Ⅰ

期でみれば、7あるいは8号掘立の東に12・13号掘立・II期で見れば9・10・11号掘立の東に14号掘立という具合である。これは主屋の正面入口側に1棟建物を立てて外から来た人間の接待などのために使用し、晴の場と褻の場をはっきりと区別していたのではないだろうか。

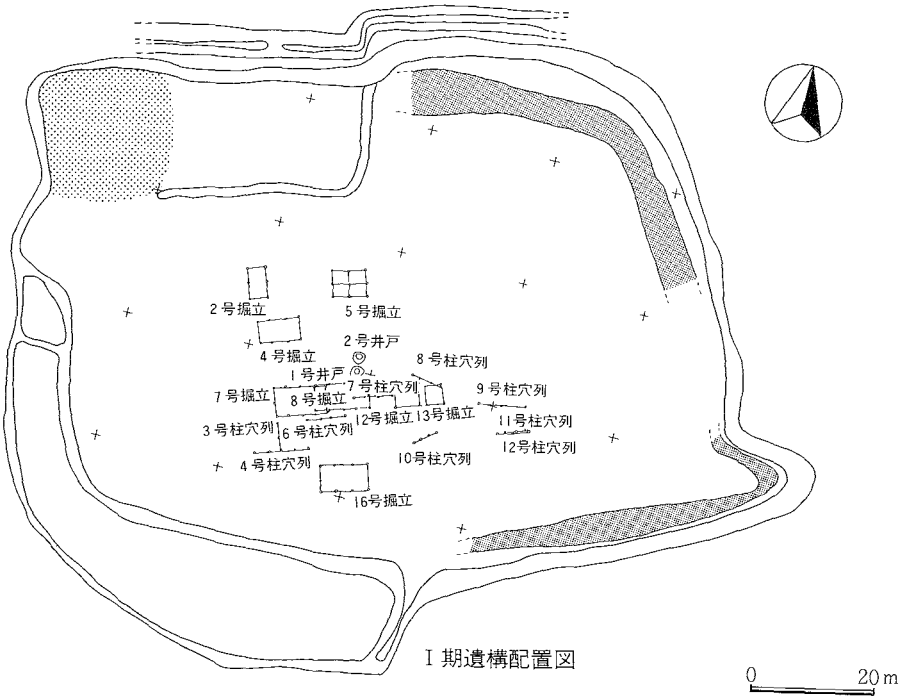
第3に2期を通じて、館の北東と南西に遺構が全く検出されない広い空間があることである。この時期の館では館の中に菜園をもつらしく、この空間を菜園に使用した可能性が考えられる。

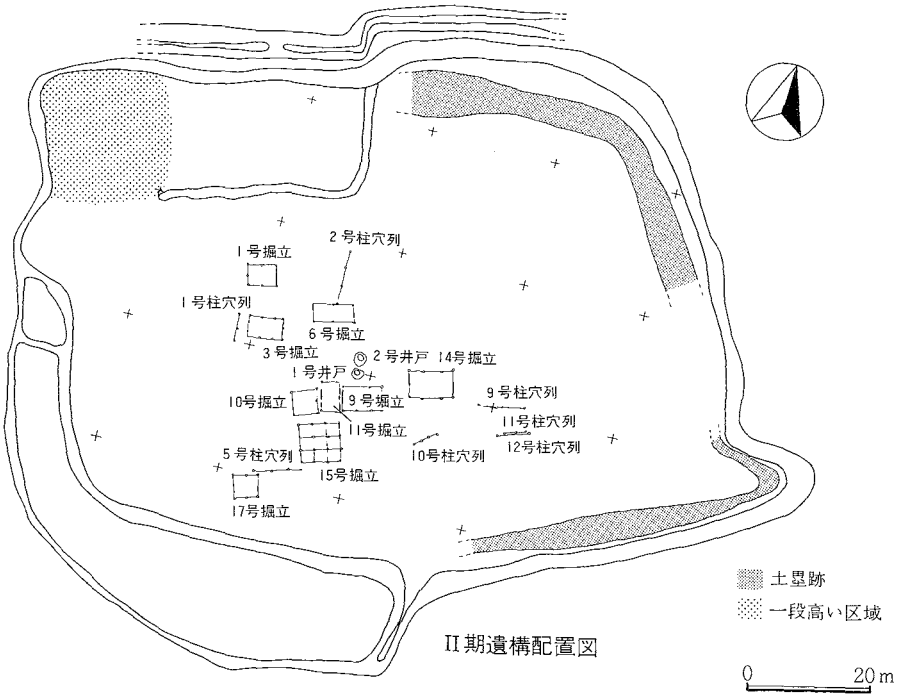
(4)　遺跡の年代

本館の年代について、出土した陶磁器類及び出土量の多かった内耳土器を基準として年代を考えてみたいと思う。これらの遺物でみた結果、本館の場合14世紀から15世紀の幅でとらえることができる。遺構の重複関係は2期であり連続的なものである。本造の建物の耐用年数がこの時代にどれ程あったか、仮に20～30年とした場合、すくなくとも40年、重複関係が2期より細かくなったとしても90年から100年であろう。このことからは本館の存続年代は100年を境として、その前後ということになる。つまり遺物でみた14世紀から15世紀の間の100年ほどの時期に存在していたと推測される。



第66図　古城館址中世遺構配置図





第67図　古城館址 I 期・II 期遺構配置図

第68図　古城館推定復元図（II期・北東より）

参考文献

安中市誌編纂委員会　1964　『安中市誌』

川島一郎　1961　『板鼻昔物語』

　　1972　『中仙道板鼻宿』

近藤義雄他　1983　『東山道』　群馬県教育委員会

大工原豊　1987　『板鼻城遺跡』

旧石器時代文献

赤沢　威・小田静夫・山中一郎　1980　『日本の旧石器』　立風書房

阿子島香　1980　「マイクロフレイキングの実験的研究」　『考古学雑誌』　66－4

安蒜政雄　1973　「関東地方における切出形石器を併う石器文化の様相」　駿台史学32

　　1977　「遺跡の中の遺跡」　『どるめん』　№15

麻生敏隆　1984　「群馬県に於けるナイフ形石器の覚書」　『研究紀要』1　群馬県埋蔵文化財調査事業団

麻生敏隆　1987　『後田遺跡（旧石器編）』　群馬県埋蔵文化財調査事業団

稲田孝司　1984　「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』30－4

　　1984　「更新世哺乳動物遺体の産状と人類文化－旧石器時代研究の課題－」　『考古学研究』　31－2

岩崎泰一他　1986　『下触牛伏遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団

江本　直　1984　『曲野遺跡Ⅱ』　熊本県文化財調査報告65　熊本県教育委員会

江本　直他　1986　『熊本県旧石器時代調査報告書』　熊本県文化財保護協会

小田静夫他　1977　『高井戸東遺跡』　高井戸東遺跡調査会

小田静夫・Charles　T. Keally.　1979　『JAPANESE PALEOLITHIC CULTURAL CHRONOLOGY』　XⅣth pacific science Congressheld　in. Khabarovsh, U.S.S.R.

小野　昭　1976　「後期旧石器時代の集団関係」　『考古学研究』　22－4

大賀　健他　1985　『関越自動車道（新潟線）水上町埋蔵文化財調査報告書』　水上町遺跡調査会

大野憲司・高橋忠彦・小林　克　1985　『七曲台遺跡発掘調査報告書』　秋田県埋蔵文化財センター

奥村吉信　1985　「北陸を舞台とした2万年前の出来事」　『考古学研究』　32－3

加藤晋平　1971　『マンモスハンター』　学生社

加藤晋平・鶴丸俊明　1980　『図録　石器の基礎知識Ⅱ－先土器(上)』　柏書房

　　1980　『図録　石器の基礎知識Ⅱ－先土器(下)』　柏書房

亀井節夫・広田清治　1983　「最終氷期の動物相－陸上動物を中心に」　『月刊地球』　vol.5　№1　海洋出版

河村善也　1985　「最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷」　『月刊地球』　vol　7　№6　海洋出版

菊地強一　1975　「大台野遺跡」　『日本の旧石器文化2遺跡と遺物(上)』　雄山閣

木崎康弘他　1987　『狸谷遺跡』　熊本県教育委員会

栗島義明・松谷純一他　1983　『多聞寺前遺跡Ⅱ』　多聞寺前遺跡調査会

百花台遺跡発掘調査団　1984　『百花台一九八三』　国見町教育委員会他

　　1985　『百花台一九八四』　国見町教育委員会他

黒岩文夫他　1985　『中棚遺跡・長井坂城跡』　昭和村教育委員会

群馬県立歴史博物館　1981　『第9回企画展野尻湖発掘展』

小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男　1971　「野川先土器時代遺跡の研究」　『第四紀研究』　10－4

小林達雄　1982　「伊勢見山遺跡」　『長野県史』　考古資料編　主要遺跡（北・東信）

　　1975　「タイポロジー」　『日本の旧石器文化1　総論編』　雄山閣

近藤義郎　1976　「先土器時代の集団構成」　『考古学研究』　22－4

三枝健二　1982　『地宗寺遺跡発掘調査報告』　広島県教育委員会・広島埋蔵文化財調査センター

清水宗昭　1973　「剝片尖頭器について」　『古代文化』　25－11

白石浩之　1978　「西日本におけるナイフ形石器終末期の予察」　『神奈川考古』　3

白石浩之・鈴木次郎　1980　『寺尾遺跡』　神奈川県埋蔵文化財調査報告18　神奈川県教育委員会

篠原　正他　1985　「関越自動車道（新潟県）埋蔵文化財調査報告書（第II分冊）」　月夜野町遺跡調査会
白石典之他　1985　『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』　赤城村教育委員会
白石典之他　1986　『分郷八崎遺跡』　北橘村教育委員会
白石典之　1987　「分郷八崎遺跡の石器群をめぐる二・三の問題」　『群馬史研究26』　群馬県史編さん委員会
杉原荘介　1956　「群馬県岩宿発見の石器文化」　明治大学文学部研究報告考古学Ⅰ　明治大学文学部考古学研究室
　　1977　『群馬県武井における二つの石器文化』　明治大学文学部研究報告考古学７　明治大学文学部考古学研究室
鈴木次郎・矢島国雄　1978　「先土器時代の石器群とその編年」　『日本考古学を学ぶ(1)』　有斐閣選書
鈴木遺跡調査団編　1978　『鈴木遺跡Ⅰ』　鈴木遺跡刊行会
　　1980　『鈴木遺跡II』　鈴木遺跡刊行会
　　1980　『鈴木遺跡III』　鈴木遺跡刊行会
　　1981　『鈴木遺跡IV』　鈴木遺跡刊行会
鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫他　1980　『寺谷遺跡』　平安博物館
　　1982　『野沢遺跡』　平安博物館
　　1985　『広野北遺跡』　平安博物館
須藤隆司・大工原豊他　1984　『御正作遺跡埋蔵文化財調査報告書』　大泉町教育委員会
須藤隆司　1986　「群馬県藪塚遺跡の石器文化―ナイフ形石器の型式的考察―」　『明治大学考古学博物館報』　№2
砂田佳弘　1986　「盤状剝片石核の系譜」　『神奈川考古』　22
芹沢長介　1977　『磯山―栃木県真岡市磯山旧石器時代遺跡出土資料―』　東北大学文学部考古学研究会
芹沢長介　1978　『岩戸』　東北大学文学部考古学研究会
　　1981　「磯山遺跡」　『栃木県史資料編・考古１』　栃木県史編さん委員会
田村　隆他　1986　『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書IV―元割・聖人塚・中山新田Ⅰ―』　千葉県文化財センター
田村　隆他　1987　『千葉県文化財センター研究紀要11』　千葉県文化財センター
谷藤保彦他　1986　『中畦・諏訪西遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
千葉県立房総風土記の丘　1986　シンポジウム　『房総の先土器時代―ＡＴ降灰以前の石器群―』発表要旨
月見野遺跡群調査団　1969　『概報　月見野遺跡群』　明治大学考古学研究室
塚田良道　1985　「石器群の原位置性・一括性に関するノート」　『旧石器考古学』　30
勅使河原彰・須藤隆司他　1982　『下里本邑遺跡』　下里本邑遺跡調査会
戸沢充則・安蒜政雄他　1974　『砂川先土器時代遺跡』　所沢市教育委員会
富山県埋蔵文化財センター編　1982　『白岩薮ノ上遺跡調査概要(2)』　立山町教育委員会
Torvald・Faegre,　磯野義人訳　1986　『天幕―遊牧民と狩猟民のすまい―』　エス・ピー・エス出版
中束耕志・飯島静男　1984　「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材―黒色頁岩と黒色安山岩」　『群馬県立歴史博物館年報』　5　群馬県立歴史博物館
中村富夫・間庭　稔・三宅敦気　1986　『善上遺跡・三峰神社裏遺跡・大友館址遺跡』　月夜野町教育委員会
野尻湖発掘調査団　1979　『野尻湖専門別グループ発表会資料集５』
　　1980　『野尻湖専門別グループ発表会資料集６』
　　1982　『野尻湖専門別グループ発表会資料集８』
　　1984　『野尻湖の発掘３（1978―1983）』　地学団体研究会
野尻湖人類考古グループ　1987　『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』
橋本　正　1975　「石器の機能と技術」　『日本の旧石器文化１総論編』　雄山閣
　　1977　「直坂II遺跡第５ユニットから」　『どるめん』　№15
春成秀爾　1976　「先土器・縄文時代の画期について(1)」　『考古学研究』　22―４
兵庫県教育委員会　1985　シンポジウム『旧石器時代の人間と自然』発表要旨
藤原好敏　1983　「東北地方における後期旧石器時代石器群の技術基盤」　『考古学論叢Ⅰ』　寧楽社
藤岡市教育委員会　1987　「北山遺跡」　『群馬の遺跡―最新の発掘成果―』　群馬県立歴史博物館
北陸旧石器文化研究会・近畿旧石器交流会　1986　北陸旧石器シンポジウム『日本海地域における旧石器時代の東西交流―国府系・立野ヶ原系石器群をめぐる諸問題―』発表要旨

麻柄一志　1982　「井島Ｉ型ナイフと立野ヶ原ナイフ」　『旧石器考古学』24
　　1986　「いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器の基礎的整理」　『旧石器考古学』　33
町田　洋・小田静夫・新井房夫・遠藤邦彦・杉原重夫　1984　「テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―」　『古文化財の自然科学的研究』　古文化財編集委員会
松藤和人　1985　「西日本におけるナイフ形石器文化の諸様相―とくに姶良 Tn 火山灰前後の石器群を中心に―」　『信濃』　37―４
松藤和人　1987　「西日本におけるＡＴ下位の石器群」　『国立歴史民俗博物館研究報告第13集』　国立歴史民俗博物館
水村孝行・田中英司・西井幸雄　1986　「埼玉県大宮台地の先土器文化」　『研究紀要』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
三国町郷土資料館編　1986　『第５回特別展北陸の旧石器展』　三国町教育委員会　龍翔館
御堂島正・上本進二　1987　「遺物の水平・垂直移動―周氷河作用の影響に関する実験的研究―」　『神奈川考古』　23
横山英介　1983　「北海道祝梅三角山遺跡―火山灰層と石器文化―」　『探訪先土器の遺跡』　有斐閣
横山裕平・川内　潤他　1984　『武蔵台遺跡Ｉ』　都立府中病院内遺跡調査会
若月省吾　1983　「和田遺跡」　『笠懸村誌』　別巻―資料編・自然編・原始古代編　笠懸村誌編纂室

中世文献

石坂　茂・徳江秀夫他　1985　『上並榎南遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
池上　悟　1986　「地下壙瞥見」　『立正史学』　59
上原啓巳・小林敏夫　1986　『大久保Ａ遺跡』　吉岡村教育委員会　群馬県教育委員会
須田　茂　1987　『東田遺跡』　新田町文化財調査報告書　9
長谷部達雄・西田健彦・大木紳一郎　1980　『庚塚・上・雷遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
長谷部達雄・中束耕志　1986　『洞Ｉ・II・III遺跡』　群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団
中束耕志・相京建史　1985　『小川城址』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
西田健彦・中沢　悟　1981　『清里、陣場遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
能登　健他　1985　『赤石城址』　群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団
山崎　一　1971　『群馬県古城塁址の研究』上巻　群馬県文化事業振興
　　1971　『群馬県古城塁址の研究』下巻　群馬県文化事業振興会
　　1979　『群馬県古城塁址の研究』補遺篇上巻　群馬県文化事業振興会
　　1979　『群馬県古城塁址の研究』補遺篇下巻　群馬県文化事業振興会
結城千尋・高橋　淳　1986　『下村北・砂内遺跡』　高崎市文化財調査報告書　77　高崎市教育委員会

付　編　1

古城遺跡のテフラ分析及び重鉱物分析

早　田　　勉
（パリノ・サーヴェイ株式会社）

1　分析の目的

安中市東部の碓氷川北岸に位置する古城遺跡（第69図、№５）では、旧石器時代の遺物包含層が確認された。遺物包含層の上位には、多くの軽石層や火山灰層をはさむ風成のテフラ（火山噴出物のうち、溶岩流と火山ガラスを除いたもの、いわゆる火山灰）が堆積している（第70図）。本分析では、これらのテフラを分析することによって、すでに噴出年代の把握されている示標テフラとの対比を行い、層位関係から遺物包含層の年代を推定する。

2　遺跡の地質層序

古城遺跡は碓氷川の河床から約40mの比高をもつ河岸段丘状の平坦地に立地している。平坦地の構造についてはまだ不明な点が多い。ここでは、遺跡内において確認された層序の記載を行う。

確認された地層のうち最下位には、黄味がかった灰白色の粘土が堆積している。粘土の層厚は120cm以上で、亜円礫を含んでいる。下部には円磨された巨礫を含んでおり、その粒径は30cmを超える。黄色がかった灰白色粘土の上位は、層厚23cmの褐色粘土に漸移している。

粘土層の上位にはリモナイトの濃集帯（層厚３cm）が見られる。旧石器時代の遺物は、このリモナイトの濃集帯の最下部付近から見出される。リモナイトの濃集帯の上位には、層厚８cmの暗褐色風化火山灰をはさんで最大層厚３cmのガラス質白色細粒火山灰（ＡＫ－１）がレンズ状に認められる。火山灰の上位には、暗褐色風化火山灰（層厚２cm）をはさんで厚い軽石層が堆積している。この軽石層は、下部の黄色軽石層（ＡＫ－21、層厚14cm）と上部の黄褐～黄色粗粒軽石層（ＡＫ－２ｕ、層厚29cm）の２層から構成される。

ＡＫ－２の上位には、暗褐色風化火山灰層の堆積がみられる。この暗褐色風化火山灰の上位には、間に褐色風化火山灰をはさんで、４枚のテフラ層が堆積している。最下位のテフラは粗粒火山灰の富む黄白色軽石層で、下部の比較的軽石の多いユニット（ＡＫ－31、層厚７cm）と上部の軽石がほとんど含まれていない火山灰層（ＡＫ－３ｕ、層厚３cm）に区分できる。その上位には約３cmの褐色風化火山灰層をはさんで、黄白色軽石層（ＡＫ－４、層厚８cm）が認められる。さらに上位には６cmの褐色風化火山灰層をはさんで厚い黄白色軽石層（ＡＫ－５、層厚29cm）が堆積している。一連の軽石層の最上位は、層厚17cmの黄色粗粒軽石層（ＡＫ－６）である。このテフラは、下部の粗粒の軽石層（ＡＫ－61、層厚９cm）と上部の軽石層（ＡＫ－６ｕ、層厚８cm）に区分できる。このテフラの上位には、少なくとも53cm以上の褐色風化火山灰層が堆積している。

遺跡内に堆積しているクロボク土中には、２枚の降下テフラが認められる。このうち下位のテフラは、層厚９cmの黄色粗粒火山灰層（ＡＫ－７）である。このテフラの下部には粗粒（最大径21mm）の軽石が認められる。上位のテフラは、層厚10cmの褐色火山灰層（ＡＫ－８）で粗粒の軽石（最大径20mm）を含んでいる。

3　分析の方法

遺跡の断面で観察されるテフラ層のうち、軽石や火山ガラス等の本質物質（噴火を起こしたマグマに直接由来する物質）を多く含むテフラを選び試料を採取した。試料の層位を第70図に示す。本質物質について粉砕・乾燥後、1/4～1/8mmの粒子を篩別して顕微鏡による同定の対象とした。同定には偏光顕微

鏡を使用し、重鉱物については200粒以上を同定して重鉱物組成とした。

テフラの対比の精度を上げるために、火山ガラスおよび斜方輝石について、新井（1972）の方法に従い屈折率の測定を行った。

4　分析結果

分析によって明らかになったテフラ試料の諸性質を表に示した。また、重鉱物組成については、ダイアグラムで示した（第71図）。以下に各テフラの諸特徴を記載する。

(1)ＡＫ－１：透明の火山ガラスからなるテフラである。大部分平板状のいわゆるバブル型火山ガラスから構成されており、少量の軽石型火山ガラスが含まれている。火山ガラスの屈折率(ｎ)は、1.498～1.501である。

(2)ＡＫ－21：含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（54%）、単斜輝石（33%）、磁鉄鉱（12%）で、ごく少量（１%）の普通角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.700～1.706である。軽鉱物では、斜長石のほかに石英が含まれている。

(3)ＡＫ－２ｕ：含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（64%）、単斜輝石（23%）、磁鉄鉱（10%）で、ごく少量（１%）の普通角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.700～1.706である。軽鉱物としては、斜長石のほかに石英が含まれている。

(4)ＡＫ－31：重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（51%）、単斜輝石（31%）、磁鉄鉱（14%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.702～1.708である。軽鉱物には、斜長石のほかに石英が含まれている。

(5)ＡＫ－４：重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（43%）、単斜輝石（30%）、磁鉄鉱（24%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.702～1.708である。軽鉱物は斜長石が非常に多く、石英は含まれていない。

(6)ＡＫ－５：重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（49%）、単斜輝石（36%）、磁鉄鉱（16%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.702～1.707である。軽鉱物としては、斜長石のほかに石英が含まれている。

(7)ＡＫ－６ｕ：重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（67%）、単斜輝石（25%）、磁鉄鉱（17%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.702～1.707である。軽鉱物には、斜長石のほかに石英が含まれている。

(8)ＡＫ－７：主に淡褐灰色の軽石からなり、少量の黒灰色のスコリアを混える。重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（75%）、単斜輝石（19%）、磁鉄鉱（６%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.708～1.710である。軽鉱物としては、斜長石のほかに石英が含まれている。

(9)ＡＫ－８：主に灰白～白色の軽石からなる。重鉱物は、量の多い順に斜方輝石(73%)、単斜輝石(22%)、磁鉄鉱物（６%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.707～1.712である。軽鉱物には、斜長石のほかに石英が含まれている。

5　考察―示標テフラ層との対比と遺物包含層の年代

テフラ試料の諸特徴から、すでに噴火年代および岩石記載的特徴の知られている示標テフラ（新井、1979．町田ほか、1984）との対比を行う。

ＡＫ－１は、1)透明のバブル型火山ガラスに富む細粒テフラであること、2)火山ガラスの屈折率(ｎ)から、約2.1～2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良 Tn 火山灰(ＡＴ：町田・新井、1976)に対比される。ＡＫ―21及びＡＫ－２ｕは、間に時間間隙が認められないことから、一続きの噴火活動によってもたらされたテフラであると考えられる。ＡＫ―21及びＡＫ－２ｕは、1)上下を明瞭な暗褐色風化火山灰によって挟まれていること、2)ＡＴのほぼ直上に堆積していること、3)斜方輝石の屈折率(ｒ)

から、浅間―板鼻褐色軽石群（As―ＢＰ：新井、1962．町田ほか、1984）最下部の軽石層（室田橙色浮石層、ＭＰ：森山、1971）に対比される。ＡＫ―31及びＡＫ―３ｕ、ＡＫ―４、ＡＫ―５、ＡＫ―61及びＡＫ―６ｕは、１）各々独立した４回の噴火活動に富む両輝石型のテフラであること、2)斜方輝石の屈折率（ｒ）などから、As-BP に対比される。なお As-BP の噴火年代については、約1.6万年前～2.1万年前と考えられている（町田ほか、1984）。分析した As-BP の試料のうち、ＡＫ―31付近で両輝石（斜方輝石＋単斜輝石）の割合が最も小さく、磁鉄鉱の割合が多いことがわかる。また町田ほか（1984）が述べているような、As-BP の間での斜方輝石屈折率（ｒ）の上方への増加傾向（1.700～1.705から1.705～1.708）は認められなかった。屈折率の高いユニットが、古城遺跡付近には分布していないのかも知れない。

遺物が認められる層準は、前述したようにＡＴの下位の暗褐色風化火山灰層（層厚８cm）の下位のリモナイトの濃集帯（３cm）の下部である。リモナイトが濃集した年代は、おそらく遺物の堆積した後と考えられるが、今のところ下位の粘土層の堆積環境および、堆積過程については不明な点が多い。しかし、ＡＴの純層と遺物出土層位との間には、８cm前後の風化火山灰あるいは粘土層しか堆積していないことから、遺物包含層の年代はＡＴ以前でＡＴに比較的近い年代と考えられる。

付　安中市とその周辺に分布する旧石器時代のテフラ層序

安中市のほぼ中央を流れる碓氷川流域には、浅間火山、榛名火山を給源とするテフラが厚く分布している。これらのテフラについては、これまでに多くの研究がある。ここでは、これらの研究を総括するとともに野外調査の成果を加え、本地域に分布する旧石器時代の示標テフラの層序を述べる。野外調査には、東京大学大学院の高田将司氏、当時東京大学学生であった須貝俊彦氏（現東京大学大学院）、前橋南高校教諭須賀伸一氏に同行いただいた。とくに須貝氏には、卒業研究の成果を混じえ御教授いただいた。厚く御礼申し上げます。

なお、重鉱物組成等の分析は、古城遺跡での分析方法と同様である。

⑴　**横川第１テフラ層（ＹＫ―１）**：模式地は、松井田町横川（地点番号１、前章の図２）。模式地では、層厚６cmでパッチ状にはさまる黄色降下軽石層である（第26表）。軽石の最大粒径は、４㎜である。重鉱物は量の多い順に磁鉄鉱（39％）、普通角閃石（32％）、単斜輝石（17％）で、ごく少量の単斜輝石（１％）が含まれている。軽鉱物には、斜長石の他石英が含まれている。給源火山は不明。

⑵**横川第２テフラ層（ＹＫ―２）**：模式地は、松井田町横川（地点番号１）。模式地では、層厚１cmの褐色風化火山灰である。重鉱物は量の多い順に斜方輝石（40％）、磁鉄鉱（26％）、普通角閃石（23％）である。また黒雲母（１％）が含まれている。軽鉱物には斜長石の他、石英が含まれている。給源火山は不明。

⑶**横川第３テフラ層（ＹＫ―３）**：模式地は松井田町横川（地点番号１）。中山（1978）によって横川第２軽石層と命名されている。横川では層厚38cmの黄白色の降下軽石層で、軽石の最大粒径は５㎜である。含まれる重鉱物は、量の多い順に普通角閃石（36％）、磁鉄鉱（26％）で、５㎜である。ごく少量の黒雲母および斜方輝石が含まれている。

⑷**横川第４テフラ層（ＹＫ―４）**：模式地は、松井田町横川（地点番号１）。最大層厚７cmでパッチ状に挟まれている白色火山灰である。細粒（最大径２cm）の黄白色軽石が含まれ、結晶鉱物に富むテフラである。重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（55％）、磁鉄鉱（14％）、普通角閃石（９％）、単斜輝石（８％）である。軽鉱物は大部分石英からなっており、少量の斜長石が含まれている。

⑸横川第５テフラ層（ＹＫ－５）：模式地は、松井田町横川（地点番号１）。中山（1978）によって横川第１軽石層（YoP.1）と命名されたテフラと考えられる。最大層厚11cmの橙色軽石層で、パッチ状に挟まれている。軽石の最大粒径は、20mmである。含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石(52%)、単斜輝石(26%)、磁鉄鉱(５%)である。軽鉱物は、斜長石のほかに石英が含まれている。ＹＫ－１～５のテフラは安中市内ではまだ発見されていない。

⑹榛名－白川火砕流堆積物：白川 Pyroclastic flow deposit（新井、1962)。安中市東部に堆積している。上記ＹＫ－１～ＹＫ－５との層位関係は不明である。白川 Pyroclastic flow deposit の噴出直前には、八崎軽石層（ＨＰ）が噴出している（新井、1962)。白川 Pyroclasstic flow deposit については14Ｃ年代測定法によって40,500±3,500y.B.P. 大島、1986)、ＨＰからはフッショントラック法によって4.4±0.45、4.2±0.9万y.B.P.（鈴木、1976）の値が得られている。また、ＨＰは約4.5～4.7万年前に噴出した大山倉吉軽石層（ＤＫＰ：町田・新井、1979）との層位関係から、約4.0～4.1万年前に噴出したと考えられている（町田・新井、1979)。軽石に含まれる重鉱物は、角閃石が大部分を占め、ほかにはシソ輝石および磁鉄鉱からなり、普通輝石は含まれていない（新井、1962)。

⑺八ヶ岳新期第Ⅳ軽石（YPm－Ⅳ：Kawachi et al., 1967)：安中市周辺では、富岡市黒岩遺跡の発掘の際に発見されている（新井氏同定：稲田、1984)。ＹＰｍ－Ⅳの噴火年代は、約2.5万年前と考えられている（町田ほか、1984)。重鉱物としては、単斜輝石、斜方輝石（屈折率、ｒ1.700～1.704)、少量の角閃石を含有する（町田ほか、1984)。給源は、北八ヶ岳の横岳と考えられている（Kawachi et al., 1967)。

⑻姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井、1976)：北海道を除く日本各地で発見されている広域テフラである。松井田町横川（地点番号１）で認められた（ＹＫ－６、層厚３cm）他、安中市注連引原Ⅱ遺跡（ＡＳ－１、層厚３cm。火山ガラスの屈折率、ｎ1.498～1.501）でも暗褐色風化火山灰中に肉眼で認められる。透明平板状のバブル型ガラスと少量の軽石型ガラスからなる。

⑼浅間－板鼻褐色軽石群（As－BP：新井、1956、1962、町田ほか、1984）：新井（1956）によって安中市板鼻付近で２～３層に分かれて堆積していることが述べられているが、浅間火山から離れた地域での細分対比はまだ確立されていない（町田ほか、1984)。この細分対比の試みとしては、中沢ほか（1984）の例がある。本報告では、安中市域においてこの As-BP の細分を行った。

松井田町中里（地点番号３)、安中市注連引原Ⅱ遺跡（地点番号４)、安中市古城遺跡（地点番号５)、安中市板鼻（地点番号６）の各地点で As-BP は間に褐色風化火山灰をはさんで５枚のテフラ層に区分できる。最下部のテフラ層とその上部のテフラ層の間には、顕著な暗褐色風化火山灰が堆積しており、最下部のテフラ層とそれ以上のテフラ層は容易に区分できる。森山（1971）はこのことから、最下部のテフラ層を室田降下軽石層（ＭＰ：今回は As-MP とよぶ）と呼び、上位のテフラ層と区別した。As-MP は、注連引原Ⅱ遺跡において４つのユニットに区分された。以下、注連引原遺跡でのテフラ分析の結果を述べる。最下部のテフラは、層厚10cmの白色風化軽石である（ＡＳ－21)。ＡＳ－21に含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（59%)、単斜輝石（19%)、磁鉄鉱（13%）である。軽鉱物は斜長石のほか石英が含まれている。斜方輝石（59%)、単斜輝石（19%)、磁鉄鉱（13%）である。軽鉱物は斜長石のほか石英が含まれている。斜方輝石の屈折率（ｒ）は、1.714～1.724で非常に高い値をもつ。

ＡＳ－21の上位には２cmの褐色に風化した火山灰がのる。その上位には、層厚12cmの白色風化軽石層（ＡＳ－２ｍ）が堆積している。重鉱物としては、量の多い順に斜方輝石（73%)、磁鉄鉱（13%)、

単斜輝石（12%）である。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.712～1.724である。軽鉱物には、斜長石のほかに石英が含まれている。

As-MP の最上部は、層厚46cmの黄橙色降下軽石層（ＡＳ－２ｕ）である。重鉱物には、量の多い順に斜方輝石（70%）、単斜輝石（24%）磁鉄鉱（６%）である。軽鉱物としては、斜長石の他に石英が含まれている。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.700～1.706である。

As-MP の上位のAs-BP の層序および岩石記載的特徴については古城遺跡のテフラ分析の結果を参照していただきたい。

⑽浅間一白糸軽石（As一SP：町田ほか、1984．中沢ほか、1984）：約1.5万年前に浅間火山から噴出したテフラで、白～黄橙色のよく発泡した軽石である。重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石のほかに少量の緑色角閃岩が含まれている。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.704～1.707である（町田ほか、1984）。主に浅間火山から東方に分布しており(中沢ほか、1984)、碓氷川流域では純層として認めることができない。安中市注連引原II遺跡（地点番号４）及び安中市板鼻（地点番号６）では、As-BP の最下部のテフラの上位、As-YP の下位に軽石が散在しており、その堆積層準をおおまかに確認できる。

⑾浅間一板鼻黄色軽石（As一YP：新井、1956、1962．町田ほか、1984）：浅間第１軽石流に先行する降下軽石の可能性が強いテフラで、噴出年代は13,000～14,000年前と考えられている（町田ほか、1984）。発泡のよい黄色降下軽石層で、色調に特徴がある。上部に成層した火山灰層が堆積している。

なお、安中市注連引原II遺跡では、下部の粗粒（最大径41mm）の軽石層（ＡＳ－71、層厚17cm）と、上部の比較的細粒（最大径13mm）の軽石層（ＡＳ－７ｕ、層厚16cm）に分かれる。Ａｓ－71に含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（53%）、磁鉄鉱（27%）、単斜輝石（13%）で、磁鉄の割合が大きい。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.707～1.712である。軽鉱物としては、斜長石の他に石英が含まれている。Ａｓ－７ｕに含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石（56%）、磁鉄鉱（23%）、単斜輝石（16%）で、Ａｓ－71同様磁鉄鉱の割合が大きい。斜方輝石の屈折率(ｒ)は、1.707～1.712である。軽鉱物としては、斜長石の他に石英が含まれている。

文　献

新井房夫（1956）　赤城火山西南部の関東ローム．地球科学、28、ｐ．23～30．

新井房夫（1962）　関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編、10、ｐ．１～75．

新井房夫（1972）　斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定テフロクロノロジーの基礎的研究一．第四紀研究、11、ｐ．254～269．

新井房夫(1979)　関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル、157、ｐ．41～52．

荒牧重雄（1968）　浅間火山の地質．地団研専報、14、ｐ．１～45．

稲田孝司（1984）　更新世哺乳動物遺体の産状と人類文化一旧石器時代研究の課題一．考古学研究、31、２、ｐ．18～44．

Kawachi, S., Nakaya, S. and Muraki, K. (1967)　YPm-IV pumice bed in Northern Yatsugatake volcanic chain, central Japan. —Studies on yatsugatake tephra, Part Ｉ—. Bull. Geol. Surv. Japan, 29, 21～33.

町田　洋・新井房夫（1976）　広域に分布する火山灰一姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義一．科学、46、ｐ．339～347．

町田　洋・新井房夫（1979）　大山倉吉軽石層一分布の広域性と第四紀編年上の意義．地学雑、88、p．313～330．

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）　テフラと日本考古学一考古学研究と関係するテフラのカタログ一．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p．865～928．

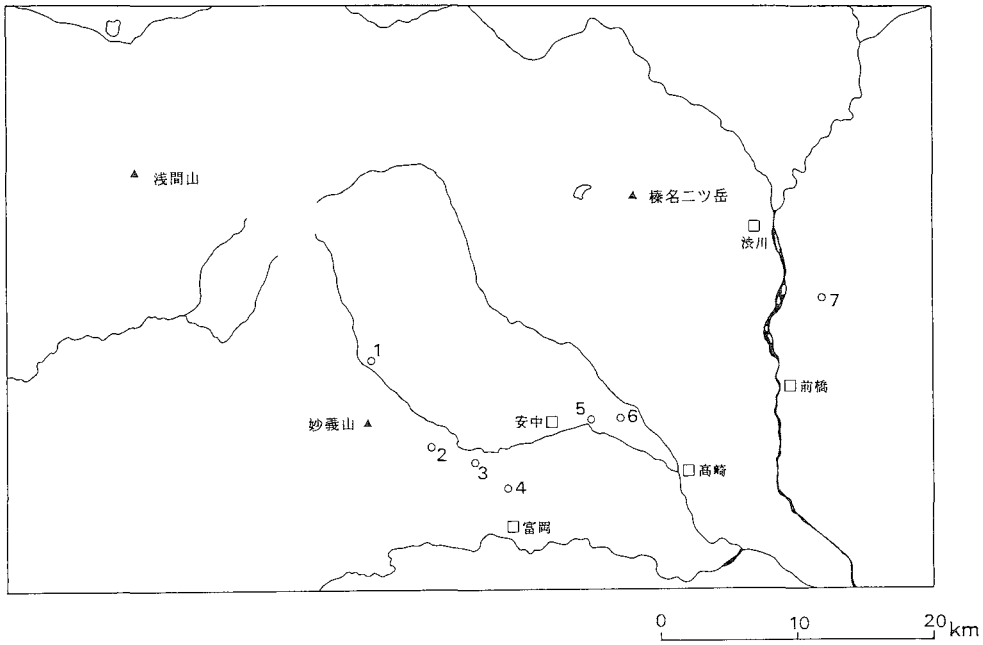
森山昭雄（1971）　榛名火山東・南麓の地形—とくに軽石流の地形について．愛知教育大学地理学報告、36・37、p．107～116．

中山茂樹（1978）　碓氷川流域の河岸段丘の駒沢地理．14、p．245～252．

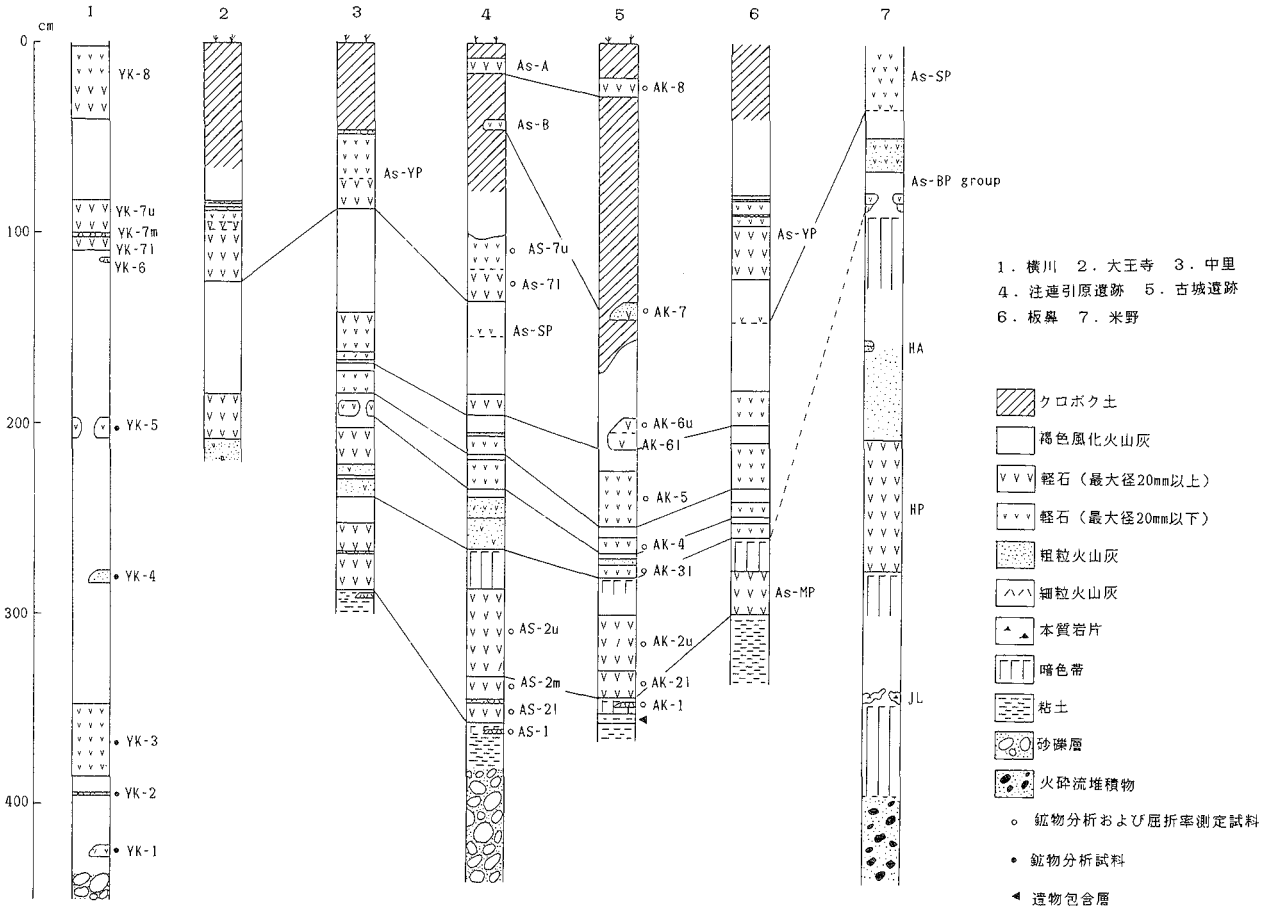
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）　浅間火山、黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集、14、p．36～70．

大島　治（1986）　榛名火山．日本地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」、p．222～224．

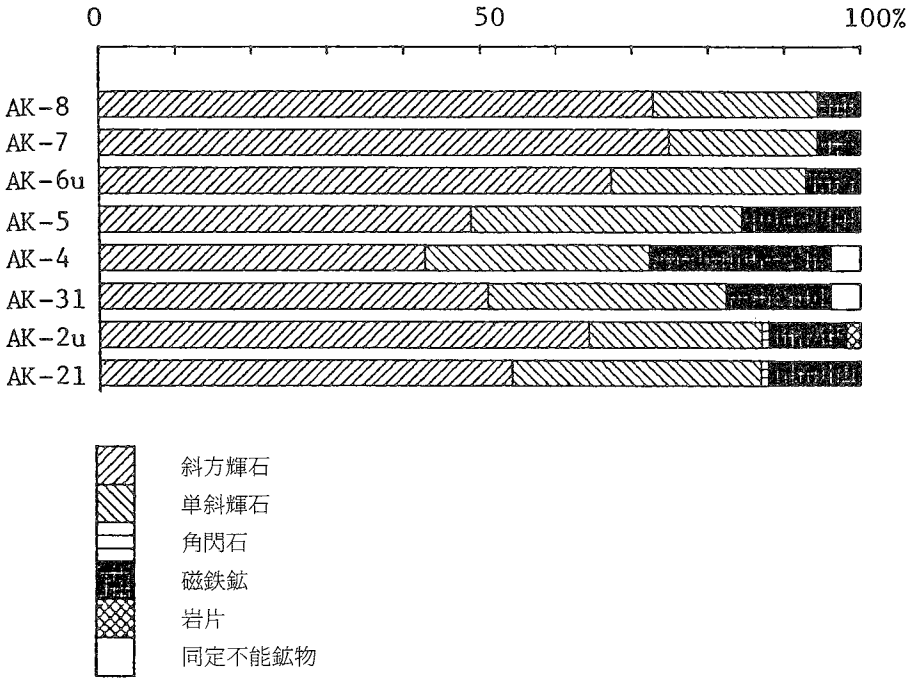
鈴木正男（1976）　Fission Track 年代測定法の人類遺跡への二・三の応用例．日本第四紀学会講演要旨集、5、p．24．



第69図　古城遺跡(No. 5)とテフラの代表的露頭の位置



第70図　古城遺跡とその周辺のテフラ柱状図



第71図　古城遺跡テフラ試料　重鉱物組成

テフラ	層厚(cm)	色	鉱　物　組　成	対比される示標テフラ
YK-10	23	gr-wh		A_s-A
YK-9u	9	yl		A_s-B
YK-9m	1	bl		A_s-B
YK-9l	3	yl		A_s-B
YK-8	41	yl-or		A_s-BP group
YK-7u	17	yl-wh		A_s-BP group (Murota Pumice)
YK-7m	2	yl		A_s-BP group (Murota Pumice)
YK-7l	7	yl-wh		A_s-BP group (Murota Pumice)
YK-6	3	wh	vitric (bw＞pm)	AT
YK-5	11	or	opx＞mt,pl,qt.	YoP. 1 ?
YK-4	7	wh	opx＞mt＞ho≒cpx,qt,pl.	
YK-3	38	yl-wh	ho≫mt＞opx,bi,qt,pl.	YoP. 2 ?
YK-2	1	br	opx＞mt≒ho,bi,pl,qt.	
YK-1	6	yl	mt＞ho＞opx＞cpx,pl,qt.	

gr；灰色，wh；白色，yl；黄色，bl；黒色，or；橙色，br；褐色，bw；バブル型火山ガラス，pm；軽石型火山ガラス，opx；斜方輝石，cpx；単斜輝石，mt；磁鉄鉱，pl；斜長石，qt；石英，ho；普通角閃石，bi；黒色母。

A_s-BP group より上位のテフラは，野外での対比が可能である。

第26表　横川駅北露頭にみられるテフラの諸特徴

付　編　2　黒曜石の産地推定

分析者：鈴木正男（立教大学）
　　戸村健児（立教大学）
　　金山喜昭（野田市郷土博物館）
　　福岡　久（日本大学・理）

分析法：熱中性子放射化分析法
時代・時期：旧石器時代（ＡＴ火山灰層相当層）
試　　料：25点
採　集　法：黒曜石全点中から１辺１cm以上の長さを有する剝片類141点を色調、光沢、斑晶などの観察にもとづいて３種類に分類し、按分率によって計25点を抽出する。
結　　果：全点共、信州系八ヶ岳産（４Ｂ100―68･69（Ｃ―11）、３W101―４（Ｃ―２）、３W101―２（Ｃ―２）、４Ａ99―22（Ｃ―６）欠、４Ｂ102―30（Ｃ―12）、４Ａ99―４（Ｃ―６）、４Ｃ100―29（Ｃ―11）、４Ｂ100―22（Ｃ―11）、４Ａ100―22、４Ｃ100―22（Ｃ―11）、４Ｃ102―３（Ｃ―12）、４Ｂ101―12（Ｃ―12）、３Ｘ100―８（Ｃ―４）、４Ｃ100―40（Ｃ―11）、４Ｂ102―44（Ｃ―12）、４Ｂ101―18（Ｃ―12）、４Ａ100―19（Ｃ―６）、４Ｃ100―45（Ｃ―11）、４Ｃ100―４（Ｃ―11）、４Ｂ100―20（Ｃ―11）、４Ｂ100―８（Ｃ―11）、４Ｂ101―６（Ｃ―12）、４Ｂ102―20（Ｃ―13）、４Ｂ103―２（Ｃ―14）、４Ａ100―23（Ｃ―６）

付　編　3　板鼻城の成立と歴史

山　崎　　一

1　鎌倉期の板鼻

碓氷峠は関東西北の関門であり、その東下に横たわる碓氷川、九十九川で形成された東西17km、南北７kmの河谷は、東端を板鼻の隘路でくくられ好適な関門の後、背地を形成する。また逆に、関外からの侵入者には、関東経略の拠点ともなるここは軍事的枢要である。関東は関西の中央政権にとり、奥州経営の根拠地であったばかりでなく、兵力培養供給の特殊地域として取扱われ、その結果は意想外に将門の乱を経、鎌倉幕府の成立となって中央と対立する地域が形成された。室町幕府も、その特性に対応すべく鎌倉府を置き、変貌しつつも近世まで持続するのである。

関西の古代政権が関東、東北を支配する陸路の大動脈は碓氷を越える東山道であったが、鎌倉に政治的結節が発生した時点鎌倉と東山道とを結ぶ要路が必然構成され、東山道と鎌倉道との接点が板鼻に位置づけられ、板鼻の重要性が頓に増したことは申す迄もあるまい。

鎌倉等関東南部の政権の関東経営の路線としては、陸路のほかに利根水系の内陸舟行が極めて重要であったことも当然考えられるが、この末端が烏、碓氷両河の合流点までのび、それが板鼻を指向していたこともまた等閑にできない。室町末期の山の内上杉家所領注文と思われる彦部文書（年月日欠）中に「一、八幡庄之内豊岡村半分、一、宇須井庄之内飽間村、岩戸村、高別当村、池尻村」等と記されて居り、永禄11年（1568）の竹林文書には「上州板鼻八幡宮云々」とあり現高崎市八幡町の八幡宮を含む八幡庄の豊岡までが板鼻に関連して認識されていたと考えられる。

板鼻の地名は、鷹の巣の断崖から生じたと想像して誤りないであろうが（岩鼻の名は、烏川中に二つ

の巨岩…江戸時代に取り除く…から生まれた)、鎌倉時代に既に存在したことは次の史料から知ることができる。

吾妻鏡建久四年（1193）三月廿一日の条以下に「…仍将軍家為下野國那須野信濃國三原等狩倉今日進発給…中略…廿五日壬辰於武蔵國入間野有追鳥狩…」と頼朝が入間野で狩を行った後三原に向ったと記したのに対応し鎌倉時に作られたと考えられている「曽我物語」に「入上野國山名板鼻松井田宿軈其夜山名里見高山小林多胡小幡丹生高田瀬下黒河人々用心禁奉守護无少隙信野境打超碓井山…」と頼朝が板鼻、松井田、碓井を通って信濃に向ったとしている。「曽我物語」の著者が吾妻鏡の「信濃國三原」に合せて推記したことも考えなければならないが、当時板鼻の地名のあったことは肯定して差し支えあるまい。尚、其夜、山名以下の人々が護衛して、どこに泊ったか、また、山名、板鼻も松井田と同じく宿と呼んでいたかも明らかではない。板鼻、松井田も現在の集落ではなかったであろう。確認されてはいないが、鎌倉道は、八幡宮南側から若田原を通り板鼻北部の小字海竜寺附近で東山道に連結していたのではあるまいか。

2　南北朝期の板鼻

太平記の新田義貞挙兵につき原資料となったであろうとも言われる「神明鏡」に「五月五日、新田小太郎義貞義助一族卅余人、宣旨ヲ三度拝之笠懸野辺打出其勢僅百五十餘ニ不過ケリ、越後等騎來其日二千餘騎ニ成、甲斐信濃源氏五千餘騎ニテ八幡庄マテ馳付」と、甲斐、信濃の軍勢が義貞方に合すべく兵を進めたのは「八幡庄まで」であった。義貞が軍の主力となった。これら五千の兵を掌握したのは板鼻を含めた八幡庄だったのである。越後の大井田氏等の来属したのも当然現高崎市付近であったと考えるのが地形上妥当であろう。当時の利根川は現伊勢崎西側の広瀬川の流路であって少数ではあるが義貞勢は烏川の合流点より上手の水量の尚少い地点で利根川を渡り、高崎付近で越後、信濃、甲斐の軍勢を掌握して態勢を整え、烏川、神流川を渡って、武蔵野に進撃するのが当然の戦略行動である。当時の慣例は、廻文に応じて出兵した人々が兵勢の強大を見て合流し雪だるまの如くふくれ上るものだったので、僅か数百の兵を以て進撃を開始しても鎌倉を覆滅する兵力を獲得することの不可能は義貞自身充分承知の上だった筈である。予め触山伏によって兵力集結地を示してあったのが当然の処置で、「其勢五千余騎夥敷見ヘテ馳來義貞義助不斜悦テ是偏八幡大菩薩ノ擁護ニヨル者也云々」と大平記の記したのは、神護を強調した粉色ではなく、計画通り掌握することのできたのを喜んだという意ではあるまいか。義貞の意図のうちには所望の兵力を獲得し得なかった場合、碓氷谷に一時駐兵し、兵力増大を待つ計画があったかも知れない。この情勢において板鼻が極めて重要な戦略点であったこと論を俟たない。

やがて建武中興の業も破綻し、全国に動乱を捲き起すが、建武３年（延元元年）５月の佐野義綱軍忠状によれば「…当年四月廿二日於土根河中渡御□指向之間一族佐野与太郎清綱相共河渡懸先早扱懸入敵陣領阿代殿私候人五郎兵衛尉経政討取之条田中三位殿古戸孫五郎桃頭彦五郎合見知之間其日合戦一筆被付了翌日廿三日板鼻合戦敵二人討取之処被切乗馬畢…」と、尊氏方となった義綱が義貞方と戦っている。

信濃国に拠点をもつ義貞方が関東作戦の橋頭堡とした碓氷谷を掃蕩しようと戦ったのであろう。その結果については明らかでない。

その際、義貞方によって、板鼻附近に野戦築城的な小工事が施された可能性はある。当時の築城の参考資料としては応安元年（1368―正平23年）頃、新田義宗が立篭ったと伝えられる利根郡白沢村高平地域城の愛宕山の砦（第74図）がある。

3　板鼻に関する室町以後の中世史料

室町時代以後になると、板鼻に関する明確な史料が若干認められるようになるので、ここにそれらを掲げてみよう。

(1)　(安保文書)

御状委細披見了抑右馬助入道其外那波一族当宿ニ可有在陣候其故者自野栗口御敵可出張之由其聞候殊更長尾左衛門尉当國へ馳越候間國事無心元存候其上入西一揆属右馬助入道手当宿ニ可令在陣之申遣候処自是の左右以前ニ与長尾左衛門尉令同道板鼻へ着陣間旁以其方之時宜無心元存然那波刑部少輔入道其外一族悉以其方可有在陣之旨申之候毎時其方事者可有御計略候将又御親類以下長尾左衛門尉ニ被差副之由承候誠喜入存候　恐々謹言

十二月六日　　長棟（花押）

安保信濃入道殿

(註) 永享12年 (1440)、上杉憲実 (長棟) から安保信濃入道への書状で、当宿は神奈川、入西は入間郡西部、右馬助入道は固庁鼻性順 (上杉憲信)、刑部少輔入道は那波宗茂である。

(2)　(談柄)

関東管領上杉顕定文亀二年壬戌八月廿八日於上杉板鼻庄海竜寺御老母青蔭庵目山妙皓禅尼十三回忌佛事之次第

一、陞座佛事建長玉蔭 (英璵) 和尚施物万疋此外馬廿小袖

一、拈香佛事円覚誠仲 (仲諄) 和尚施物五千疋此外馬廿小袖

一、安座佛事円覚子明 (紹俊) 和尚施物三十貫廿馬小袖

一、十刹西堂布施千疋

一、単寮　布施七貫文

一、佛事奉行　長尾能登守

一、布施奉行先勝寺瑞首座同尻高左京也

一、当日法座面ノ幕ハ力石幕ヲタセラレタルゝ色彼名字御判代故也私云陞座拈香時ノ氈ニハ梅竹ヲ紋ニ織也上田侍中管領へ進上ト云也スクレタル氈也

一、建長円覚長老三人同永明和尚叔悦 (禅懌) 和尚御宿へハ行器ヲイレルゝ也

其外ノ僧衆ハ板鼻道場ノ大鼓ヲ聞テ彼道場ニ衆会スル也

一、長老西堂侍者喝食管領御館へ一日御招待アリ乱酒ノ上能登守取リナサルゝ也

一、一旦顕定御館エ喝食侍者計御請侍仕立魚魚(ママ)也

一、僧中走廻リハ円覚大雲庵忻甫歓首座也俗ハ長尾也同円覚柱昌庵謙首座俗ハ大石也一七日勤行維那雲頂省但首座也

一、当日維那ハ円覚長寿庵文宗演首座也諸山西堂ニテ勤之当日ハ疏也

一、仏事了テ一日単尺アリ題評也題ハ官路探匊地子明釆上出サルゝ也顕定ノ詩モアリ執事ハ建長円覚ノ侍者喝食已上七人也此内喝食両人何レモ円覚ヨリ出ル也済淦軒昭字梵昆皈源庵奇文禅才也奇文十三才ノ時也執事ノ礼トシテ金緑(ママ)盆両金扇子何ヘモ被贈也顕定ノ詩ハ奇文書給フ也

一、顕定ノ御宿ハ依田徳昌軒也

一、僧中ノ刷ハ依田

一、懺法ノハナベラヲハ貧楽斎啓書記 (賢江詳啓) カゝルゝ也

一、当日座へ顕定モツカセラルゝ也客位ノ対面五六人コレアッテ盛合ニ小屏風ヲ立テ座氈ヲ置ルゝ也座

ヘヲンツキアル也

點心茶盆皆トリ大衆不立時先管領計リヲン立チアツテ唐戸ノワキ客位ニヲン立チアル時大衆座ヲ立ツ先四首ヲ唐戸ラ出ル時各管領ト一礼(ママ)管 八四カシラト一礼アッテ其儘内座エ入リ玉フ也其後大衆座ヲ出ル也

（註）(3)「玉隠和尚語録」に顕定は亡母の七周忌を行ったとあるのを、文亀2年（1502）のこの法会が誤りないとすれば十七周忌と改める要がある。何故か三周忌、七周忌の記録がなく、この文書のようにこの回が、極めて丁重な法要であったことから或いは…。三周忌を十三周忌と「談柄」が誤写したのかも知れないとも思われる。

(3)　（玉隠和尚語録）

青蔭庵月山皓大師七周忌陞座

（註）永正3年（1506）8月28日、上杉顕定、板鼻海竜寺で亡母の七周忌法要を行う

(4)　（長伝寺文書）

板鼻之内長伝庵之事蒙仰之条寺領以下無相違如先々可進置候兼而御懇望之上如斯候積鉢之事者円後守精々可申達候　恐々敬白

永禄九年丙寅拾一月二日　　安中景繁（花押）

（註）箕輪落城直後に当る永禄9年（1566）11月、安中景繁、懇望に応じ板鼻長伝庵の寺領を従前通り認める旨の武田氏指令を示達する。丹後守は当時松井田に在城した小宮山冒友であろう。

(5)　（平石文書）

為名田之替地於上州板鼻之内参貫文被下置候名戸ニ而上原淡路守所可請取之由被仰出候也仍如件

丁卯十二月十一日　　跡部大炊助奉之

平石兵庫助殿

（註）永禄10年（1567）丁卯、武田氏が名田の替地として、上原淡路守所管の板鼻の地を平石兵庫助に与えた証文である。平石氏は甘楽の宮崎領から松井田に移ったので、その際の処置であろう。竜印のないのは写本だからである。

(6)　（市川文書）……長野県浅科

竜印 定

信州田口之本領相違候之間為彼替上州板鼻之内拾八貫四百五十文之所被下置候

向後相当ニ武具等致支度可勤軍役(ママ)者也　仍如件

元亀二年辛未七月二日　　市川備後守奉之

加藤与五衛門尉

（註）元亀2年（1573）　加藤与五衛門尉の信州田口の本領に替え板鼻に地を与えた武田氏の印判状

(7)　（小森沢文書）……東京

□相拘候板鼻□御成口乗取之段誠□敵数多討、捕之由心地□談合候て其地備堅固□用所有之而使可□遣候猶万吉重可申候謹(カ)言

□月廿四日　　景勝

小森沢刑部少輔(カ)殿□

（註）上杉景勝が小森沢刑部少輔の板鼻城を攻略したのを賞したもので、日付は天正18年3月24日か4月24日でなければならないおそらく4月であろう。

(8)　（福田文書）

（包紙ウハ書）　関八州八十一城内板鼻城御掟書　　伊備中　　松尾張
堀伯耆　　大駿河

天正十一年未六月

一、所定木戸番六人少、然与踞り晝夜共人可改事
一、他所之不知者留主中留間敷事
一、町人かしら晩々に人改可仕事
一、火事無出來所専一二候火焼在ても仕取立間敷候風日ニ火焼間敷事
一、横合非分押かいらうせき有之者書之て城へ可申上事
一、日暮候後他所へ出入仕間敷其一宿之用心可致候事
一、宿中之者木草かりに出時者何時も一所ニあつまり町人中致談合罷出者ハ筒貝成候時炊出候も貝次第かけへき事
一、かりそめ之人之非分成共□引仕御帰城之砌書付を以一々可申上若不申上候も可為重科猶貝次第草かり木取之等へ出家わた一面もかけへしかけす候も曲事たる也

右所定如件

（虎印）
未六月四日　　上宿町人衆中

（註）天正11年（1583）北条氏が板鼻上宿に出した掟。伊備中＝伊藤備中守、松尾＝松田尾張守憲秀、堀伯耆＝堀伯耆守、大駿河＝大道寺駿河守政繁

⑼　（長伝寺文書）

後長伝庵之義寺領共ニ不残一物可付与自宅公ニ候也為後日ニ一筆出早

天正十年壬午十二月十三日　　為景清春（花押）

自宅公江

（註）天正10年（1582）、板鼻長伝庵の為景清春から自宅に長伝庵を譲り渡した証文、清春は安中景繁の兄だったという。

⑽　（坂本文書）

伝馬次
あしかが
太　田　　しけの二可申
せ う 田
こ わ せ　　仁手代新井蔵助に可申
金 く ぼ　　斎藤一路に申
ふ へ 木　　ほしのに可申
くらかの　　あひ子代ほそのに可申
和　田　　町人衆中
板 は な　　町人衆中
安　中　　町人衆中
松 井 田　　金井佐渡守に可申
さ か 本　　佐藤に可申
坂（ママ） も と

右虎之御印判進候

閏八月九日　　氏　邦（花押）

（註）閏八月のあったのは天正13年（1585）で、北条氏邦の伝馬次掟書

⑾　（矢口文書）

禁　制　　上野國下板鼻村

一、当手軍勢甲乙人（カ）濫妨狼藉事　　一放火事　　一対地下人非分之儀申懸事

右条々若於違犯之族者忽可被処厳科之旨依仰執達如件

天正十八年五月　　筑前守

弾正少弼

（註）前田利家、上杉景勝、豊臣秀吉の禁制を下板鼻村に執達。八幡宮付近を下板鼻と呼んでいたことがわかる。

⑿　（成就院文書）

（封紙ウハ書）上野國大聖護國寺

一、上野國臼井郡板鼻庄八幡宮大聖護國寺事

一、本尊仏供免永楽銭卅貫文任本領寺納候不可有相違事

一、於寺中不可殺生事

一、先々末寺不可有相違事

一、寺内門前竹木不可伐採事

一、寺中門前諸役免除可為如常來事

右條々御朱印之趣家康任判形旨聊不可有相違候也

天正十八年八月三日　　上野國大聖護國寺

（註）天正18年、徳川家康が大聖護國寺に出した制令

⒀　（矢口文書）

一、当所之事不催促人速可調ニ付十月中ニ皆済手堅一札可被差越事

一、納の内半分代物半分可為兵糧事亥子両年之算用可被致候事

一、八幡別当より書付被差越候可披見屈事

郷中之儀畢竟其方被任候義入精厳密可被走廻事以上

右当地へ可被参也候間五日之内河越可為御帰用所者可被申沙汰如件

巳九月十六日　　肥前守奉

下板鼻　防村新左衛門　百姓中

（註）文禄２年（1593）、朝鮮役に際し、豊臣秀吉、下板鼻に人員、兵糧の調達を指令

⒁　（長伝寺文書）

長伝寺御寺領当所於板鼻弐拾石令寄進候為後日一札申入候　仍如件

慶長十三年甲成四月十七日　　里見讃岐守忠重（花押）

長伝寺衣鉢閣下

（註）慶長十三年（1608）、里見忠重、長伝寺に二十名の寺領を寄進

⒂　（雞助編）小川右京の高名覚抄

……首壱ツ東上野國なわニおゐて木村甚右衛門と申者と互に馬上ニ而鑓組仕候　同十七歳

首一ツ西上野板花之代ニ而鑓（カ）先ニ而高名仕候事同十八歳

首二ツ武州上野境てし川原之代ニ而北条武川伊豫守軍之時一日ニ弐ツ高名仕候事十九歳……
右条々於御不審他家中ニも証拠人御座候御尋被成候はゝ引合はつに出合可申者也

元和八年戌八月　　小川右京

（註）北条、武川伊予守戦の時とあるのは天正10年（1582）の神流川合戦のことで、その時右京は19歳。その前項の板鼻台(代)での功名は18歳の時とあるが、北条氏邦に属していた小川右京が板鼻で戦ったのは同じ天正10年3月、武田氏滅亡に乗じ氏邦が西上州に進駐した時以外考えられず、右京はその時満年令19歳に達して居らず、同年6月19・20日の神流川合戦には19歳になっていたと考えてよいのであろうか。

4　板鼻城創立時期の摸索

古文書(8)の示すとおり、天正11年（1583）6月、板鼻城は明らかに存在した。また、(1)は東国が真二つに割れて争った結城合戦の一こまであって、この戦は結城篭城に焦点がしぼられるが、実態は、そこに戦局が集中したのは嘉吉元年に入っての末期の状態であって、この一年間の争乱に結城方、幕軍方に分れた人々の所領は互いに混在し、律令制に由来する家長権、惣領権の撞着によって生じた不満葛藤がその機に乗じて至る所で表面化し、一族、兄弟さえ真っ二つに分れて血で血を洗う闘争が展開されたのである。

当時信濃にあって結城方を支持した大井持光の勢力は強大で、それが関東に出現することは幕軍の主力である上杉勢を危地におとし入れるものであった。そこで、上杉憲実（長棟）は最も信頼する長尾左衛門尉景仲を持光制圧にはせ向わせ、安保信濃入道も一族をあげて景仲と同陣、憲実は大いにそれを賞したのである。

景仲らは、碓氷峠にかけ上ってその閉塞をはかったのでなく、板鼻に止って持光の動きを監視し、発動を抑止した。もし碓氷峠に進出すれば、行動の自由を失い、敵を誘発して決戦を強いられることとなろう。大井方が碓氷を越えれば、それを碓氷谷に捕捉して撃破する主動権が得られ、万一敵が甘楽谷に向っても、板鼻からはその側背を衝き得る餘猶をもつ。

敵兵力が優勢な場合、板鼻の地形を利用して支え、味方の来援を待って反撃する場合もあろう。従ってこの場合、時間を得るため、若干の築城がこの付近で行われた可能性もあろう。或は既存の城砦があったとすれば、それが強化されたことも考えられる。

文書(2)(3)は、上杉顕定が板鼻の海竜寺で母妙皓禅尼の法要を行った記録である。顕定は依田徳昌軒の屋敷を臨時の居館とし、鎌倉から建長寺、円覚寺の僧を招じ盛大に仏事を施行している。これにより、海雲寺は妙皓禅尼の墓所で、或は上杉の菩提所ではなかったかとも考えられよう。顕定は越後上杉から入って山の内家を継いだのであるから、生母の墓は越後にあり、ここに葬られていた妙皓尼は、顕定の姑に当る上杉房顕の室ではあるまいか。山の内家と海竜寺との関係は更に明確にしなければならないが、山の内上杉氏と板鼻とに深いかかわりのあったことは否定できまい。

前記彦部文書の、山の内上杉氏所領注文と思われるものの中に、八幡庄の内豊岡村の半分と宇須井（碓氷）庄之内飽間村等の諸村が記されているが、何故か板鼻は見えない。最もこの文書は不完全なものと思われるが、一応の疑問は感じられよう。

それは暫く置き、(5)(6)両文書を見ると、何れも武田氏が、板鼻に居住していない（平石兵庫助は松井田、加藤与五右衛門は市川備後守支配下の南牧かその信州側の士）人物に、代替地として板鼻に所領を与えたものである。他に適当な欠所等がなく、板鼻には二か所もそれがあったからであろう。飛躍した考え方になるかも知れぬが、上杉憲政（山の内家）の所領が板鼻にもあり、それを受け継いだ上杉謙信

の手の及ばない所となったのを、武田が横領して宛行ったとは言えないであろうか。資料は失われてしまったが山の内上杉家の領所が板鼻にもあったかも知れない。

文書(2)中、もう一つの問題は、顕定の居館に用いられた依田徳昌軒の屋敷のことである。伝承に過ぎないのだが、板鼻城は、天文7年（1538）長野業政が築き、女婿依田宮内大輔（右衛門佐・六郎）光慶を後閑城から移したと言われているが、それより32年前既に依田徳昌軒屋敷が板鼻にあったこととなるその屋敷は、管領の仮屋形として使える程の確かなものであったらしい。

川島一郎氏の「板鼻昔物語―昭和三十六年」中に、天神山南麓、小字徳定（とくじょう）屋敷に長者屋敷があったと記されているがその小字名はない。或は徳昌屋敷の転訛ではあるまいか。

永正6年（1509）9月、連歌師宗長が「東路の津登」の一節に、「廿一日草津より大戸へ帰り出侍りぬ、兼約とて一座興行「時雨かは紅葉の中の山めくり」きのふけふわけ出侍る山中前後左右の紅葉の秋の興計なるへし。可諄九月廿五日太守佳例の法楽連歌依田中務少輔光幸宿にして、「菊さきてあらそふ秋の花もなし」則懐紙を越後の陳へとなんはま川並松別当にして「色かへぬ松はくれ行秋もなし…以下略」とあり、大戸から浜川への道筋を考えれば、依田中務少輔光幸宿は板鼻にあったと推定しても無理にはなるまい。更に光幸、光慶の名のりと年代差から、光慶は光幸の子という可能性も考えられよう。

このように、現板鼻城は天正11年（1583）6月には確実に存在し、文亀2年（1502）8月には既に何らかの形でその前身ともなるべき館（屋敷）の存在が示唆されるのであるが、この80年間のどの時点で現遺構の形態をとったかが問題である。

この80年間は、関東では最も目覚しい築城法飛躍の時期に当る。室町幕府の威令が失墜し、下克上の風が蔓延し、新秩序成立迄の間出現した戦国動乱期である。初期の秩序が崩壊し小勢力に散乱した実力単位間の戦闘は、小規模、短時間に止っていたが逐次に併呑、合作が進むにつれ、各単位の軍事力が増大し、防禦施設もそれに対応し得るよう構造も規模も見る間に発展強化され、鉄砲の導入、その数量の急増が戦闘法を変えてそれに拍車をかけた。築城法の進歩速度は地域的に緩急甚しく、そのため、城館址形式の時間的変化を指摘することは極めて難しい。現状では、多くの調査研究を積み重ね、個々の遺構に対し、概念的、比較的に築城の時機や築城者を推定するよりほかない状態である。

板鼻城は、構造の部で記述したように、他に類型を見ることのできない螺旋状交通壕を主素質とした城郭である。そのため築造年代の系列に入れることが困難だが本丸堀の幅10m、折の間隔40m以下という規模だけからでも、鉄砲の数が増大し、性能が向上した天正年間のものでないことは肯定し得られよう。しかしこの卓越した構想は、列郭（並郭、梯郭）の直線的経始を主系とした永禄初期迄と推定される城郭「榛名町の鷹留城（第73図）吉井町の新堀城（第73図）等」よりは後で囲郭的経始の高崎根小屋城「基調は列郭」（第73図）、富岡市の内匠城（第73図）と同時期の創立と推定させる。つまり、永禄末年の築城であるから、ここでは築城者は武田信玄以外には考えられぬこととなろう。従って板鼻城の築城目的は箕輪城、國峯城、甲州の繋ぎと、碓氷谷隘路口の緊締である。

5　箕輪軍記中若田原の戦と板鼻築城までの考察

箕輪軍記は江戸時代に成立した所謂戦記物という読み物で史書ではないが一応伝承を踏まえて記されてはあろう。その下巻に「両軍若田の原にて勇を争ひ雌雄を決し戦いける…中略…甲兵もたまり兼悉く敗軍せり、内藤下知をなし軍を安中之引城方も殊外疲れ終に不及みのわえ引退」と若田原の戦のことが記されている。

当時、長野業政の後を継いだ氏業（業盛）は、上杉謙信の支援を期待しつつ西上州を支えて武田信玄に抗していたが、既に甘楽、多野を信玄に席捲され、永禄7年には倉賀野、松井田、安中を奪われ、箕

輪は孤城落日のありさまであった。その箕輪勢が遙かに城を離れて若田原に、武田勢と決戦を挑むということがあり得ようか。篭城戦は、城の要害を利して寄せ手に損害を強い、その萎靡混乱に乗じ出撃して潰乱させ、或は一日一刻も長く敵を城側に引きつけて拘束し、味方の来援を俟って攻勢に転じるのが常套で、箕輪勢が若田原に出撃する理由は見当らない。只一つ、支配者である謙信の指令による場合だけの可能性が考えられよう。

永禄8年（1565）6月27日、上杉輝虎（謙信）が里見義弘に送った書状中に、「…西上州倉賀野左衛門五郎若輩故以油断地歩被奪凶徒候間相残味方一段窮屈之条物裡至于信州調儀之事頻而詫言…來秋者先信濃へ深々与可成動儀定候…常野両州其外味方中被打振爰元進発同日武州へ出陣太田美濃守為案内者可被相動由堅申居候…」とあり、同月25日付富岡主税助宛輝虎書状には「…西上州倉賀野仕合付而長野左衛門大夫弥以窮屈之間物裏信州行専一由以代官度々佗言來候条無拠儘先々彼筋へ可出馬候然者西上州備之義候間來月八日人数打振有出張為長野左衛門大夫案内者相稼簡要候輝虎事も同日信州へ可越山候」と第72図のような大作戦を準備した。しかしこの計画が頓座し、次の文書に見られるように9月には安中松井田が信玄に奪われてしまった。（9月15日付太田資矩から白川義親宛書状抄）「…将亦武田信玄上州出張安中之地被属本意候、氏康父子当月四日出陣石戸川越ニ両所被立馬候…」

翌永禄8年（1565）8月、輝虎はこの作戦を決行した。この年世良田長楽寺の義哲は所謂永禄日記を書いていた。その8月25日の条を見ると、「…河辺説ニ氏康鉢形へ昨廿四被寄陣ト告來信州へノ首尾ニ御嶽へ可被進馬ト其聞アリツル…入夜マヤ橋陣ヨリ返事帰着如書中一（ママ）昨廿四雨降舟橋押切左右ニ候程先々河内へ諸勢ヲ可被入小舟被申間厩橋へ打返シ候重明後日小幡谷へ可動トノ文躰也」と輝虎方の東上州勢は厩橋に集結、舟橋を架け、北条高広指揮の下に利根川を渡ったが雨による増水のため舟橋が切れそうになったので引返して河内（前橋南部）で待機、明後日の再渡河を準備しているというのである。

この年7月23日付富岡主税宛の輝虎書状（蠹簡集残編所収）に「急度申遣候明日廿四日于信州必乱入不移時日彼國上郡へ可押詰候兼日度々如申越厩橋へ早速相移北条丹後守ヵ西上州名相談小幡谷安中口へ深々与動肝要候彼筋之人数悉信州へ可越候諸要害留守中無疑候条今般敵城其擬専一候乍例稼此時候謹言」とあるのがこの作戦であった。「為長野左衛門大夫案内者相稼簡要候」と見られるように西上州突進部隊の案内者が長野氏業になっている。左衛門大夫は箕輪城主の長野市の世襲の通称で、業政の死去後であるからこれは氏業（業盛）である。案内者とは先鋒の意で、箕輪勢が先鋒となって東上州勢の進撃路を啓開するのである。東毛勢の利根川渡河を掩護するには、橋頭堡前面に布陣して、敵の妨害を阻止するか。敵部隊を攻撃し撃攘するかの二途があるが、この作戦では、爾後安中、小幡谷に深々と突進しなければならぬのであるから後者をとるのが至当と考えられよう。箕輪勢は当然安中に向って進撃を開始し、武田の先鋒内藤冒豊隊との間に若田原の激戦が展開されたのであろう。しかし主力部隊の渡河中止によりこの企図は頓座し、箕輪勢は帰城するよりほかなかった。

戦記のことであるから、全面的には信用し難いが、この戦に板鼻城が登場せず、昌豊は安中に撤収したのであって、板鼻城は尚存在しなかったように思われる。若田原は板鼻城の東の地続なのだからである。

輝虎のこの作戦行動は遂に不発に終ったが、武田方には板鼻城の必要を痛感させたであろう。永禄8年の若田原の戦が板鼻城の築かれる要因となったと推定する。尚、板鼻の築城には内藤昌豊が深くかかわっていたのではあるまいか。その後昌豊が築いたと伝えられる保渡田城（第74図）が、当時のものには例のない渦状構造を残しているからである。ちなみに、渦状構造は江戸城の基本構造であり、日本最後の日本式城郭である慶応2年完成の前橋城も見事な渦郭構造になっていて、日本築城法の最終精華と

目される。板鼻城の螺旋構造は、渦郭式城郭への一つの試行だったのではあるまいか。この意味に於いて板鼻城は二つとない日本城郭の至宝である。

さて、板鼻には、板鼻城以前の城館も存在したらしいことを既に述べた。依田館のことだが、それが果して板鼻城の前身であったであろうか。ということは、(1)現板鼻城の所に依田館があったか。(2)依田館址も含めて板鼻城の防戦体系が編成されているか、つまり依田館址が板鼻城の外堡になっているか。(3)依田氏が板鼻城を築いて移ったか。を考えようということである。

「東路の津登」中で宗長は、鉢形城、忍城は「館」と呼び、大戸浦野氏、依田光幸、浜川の各館は「宿所」又は「宿」として区別している。すべて作戦の場としてでなく居所として認識したからであろう。しかしその区別には規模の大小が感じられる。館は大形、宿所は小形である。

浜川には、浜川館址（小字館にある）や発掘調査でほぼ全形の明らかになった寺の内館、矢島城のほか与平屋敷、高田屋敷などが確認されているが何れも第74図の浜川館程の規模である。また大戸では、中世環濠住居址はまだ発見できず、地形上その存在の可能性は少く、大戸城は居住には不都合の多い山城であって、第74図の大戸平城よりほか大戸浦野氏宿所に当て得るものはない。依田氏の宿所もそれ以上の構えはなかったと推定される。依田光幸は宗長を招いた程であるから、大戸浦野氏や浜川長野氏なみの権力者で、それが板鼻に居たとすれば、板鼻最大(力)の居館を構えていたのではあるまいか。その遺跡として考えなければならない場所の中に、板鼻本城、小丸田出丸、徳定屋敷及び小字「館下」に関連する碓氷八幡宮の西300mの館（第74図）あげることができよう。このうち(1)に該当する板鼻本城を除いては(2)として、小丸田等各出丸について考える必要があろう。

徳定屋敷は、今次の発掘調査でほぼ全貌が明らかとなった。南下、本城との間の道が、あづま道に該当する古道かとも思われるので、これが初期の板鼻城ではあるまいかと考えてみた。五十子の砦（第74図）や阿内古城（第73図）と対比し、上杉顕定時代の城砦としても、大きさや構造から肯けるからである。しかし発掘調査の結果は次の難点を示した。(1)出土品の少いこと。(2)建物遺構（柱穴）が錯綜することなく、長期居住が否定されること。

郭面の半ばは造成地のため遺構の検出が困難であるが、本城の発掘調査よりも徹底した作業であったにもかかわらず出土品が少なく、活用年代も長期に渉っていないらしいことは、ここを板鼻城の前身と推定するのをためらわせた。戦術的配置からは小丸田、鷹巣両砦と対応する外堡と考えられ、古城址をそれに利用したのではなく、板鼻築城の戦術構想の下に築かれた堡壘と一応結論しておく。

小丸田の砦は、江戸初期に里見忠重一万石の陣屋となった所だが、近く発掘調査を行う予定なので、すべてその結果を俟ちたい。鷹ノ巣の砦址は居館とはなり得ない。

板鼻本城そのものが、出土品からは依田館址に築かれたと推定できぬこともないが、何にしても一部分の調査結果にしか過ぎないので何とも言い難い。何れにしても板鼻城の全貌を把握するには、板鼻そのものの解明が必要で、中世板鼻の位置形状を知るには、あづま道、海竜寺、館址の検出、調査がなされねばなるまい。

6　板鼻城の戦史

板鼻城には二つの戦の記録がある。

一つは文書⒂小川右京高名覚書中の西上野板花の代で首をあげたというもので、北条氏邦に属していた小川右京が板花の台(代)で戦ったことがある可能性は、天正10年（1582）３月、武田勝頼敗亡の際と天正18年（1590）３月、小田原の役に、北国勢が碓氷峠を越えて侵入した時の２回よりほかない。この文書には、つづいて神流川の戦に勅使ヶ原の台で一日に首２つをあげたことを記されているので註記の

ように天正10年３月とするよりほかない。

（三上文書）

廿日一札今廿二未刻到來信州表之儀者自是も京説申入き可為着候者十九日到来候間廿日より諸国へ陣触五日之内外皆可参（カ）集候動之筋者于今無落着候甲州之是非与覚悟何と御分別候哉信州之平地へ大軍押出候者何共防戦之模様甲州成間敷候城介殿ハ十一日出馬滝川なと勢州衆十二日に出馬候昨今来勢州舟之者共申候猶上州之模様何ヶ度も可有得進候喜多条安芸かたへ計策ハ有間敷哉信州之様子ハ疾に可知候間早々忠信候へと被仰候者慥可乗計策候如何様其表之儀トハ動以前善も悪も筋々へ被致候ハゝ尤候哉

恐々謹言

二月廿二日　　氏　　政（花押）

安房守殿

（正村文書）

雖未申通候啓達候仍八崎長尾入道両度之御状披見紙上之趣誠簡要至極存候

今度甲府御仕合無是非候然に氏直各御譜代之筋目付而箕輪之各和田先忠被成候貴所にも自箕輪可有意見由候ツル間如何ニも最之段令返答候然処八崎江御状共令披見候間此度申入候氏直江御忠信此時相極候

恐々謹言

三月十二日　　安房守　氏　邦（花押）

真田殿御宿所

前者は、北条氏政から北条氏邦に対し、武田の崩壊を見通して北条（喜多条）安芸入道芳林（高広）を味方につけるよう工作を命じたもの、後者では氏邦から真田昌幸に、箕輪の内藤昌月や和田の和田信業が味方につき白井の長尾憲景も北条に属して八崎に移り、それぞれ昌幸にも勧誘したであろうから味方になれとすすめている。

後者の日付は勝頼が敗死した３月11日の翌日のもので、その情報はまだ諸方に達していなかったであろう。その時点、氏邦は既に箕輪に進駐を開始したと思われ、情報未確認の武田勢との間には戦闘が交えられたのであろう。

小川右京の板鼻台での戦は、この時、板鼻城守備兵との間の事件と思われ、おそらく小競合い程度であったであろう。(8)の福田文書の天正11年より１年早いが、５の板鼻築城までの条で推論したように板鼻城は既に存在していた筈である。(7)の小森沢文書は、板鼻城攻防戦の明らかな史料である。破損の甚しい文書で、これこそ蠹簡なのだが、板鼻の下の欠損は、その後に「乗取之段」とある事から板鼻城と推読できよう。

上杉景勝が板鼻城にかかわりのあったのは、天正18年（1580）の小田原の役よりほかない。日付も、「月廿四日」の上が欠損しているが、これは３月24日か４月24日である。景勝は、前田利家の先鋒となってその年３月15日、碓氷峠で大道寺政繁の子直昌と戦ったことが次の文章に記されている。

（徴古雑抄）

去十五日臼井峠敵打上候処、乗向、則追崩、敵数多討捕、分取無際限由、大軍先之仕合、前代未聞比類感悦候、弥竭粉骨可走廻儀肝要候、謹言

三月十八日　　氏　　直

大道寺新四郎殿

ところが、４月16日付で秀吉から前田利家、真田昌幸に送った書状中の「…然者松井城（ママ）既水手迄取詰之由尤之義候」とあることにより、松井田城が尚、落城に及んでいないことがわかり、４月20日付の

伊達家の使者守屋意成の書状中には「うすいのとうけふもとまつゑたと申候地に大とうし殿こもり被申候か昨日廿日懇望被申罷出申候ヲ云々」と20日に松井田城の降参したことを伝えている。ここに「まつゑた」とあるのは、意成の東北訛りであって、「松枝」と書くようになったのは江戸時代のことである。

また、4月29日、秀吉が真田昌幸に送った書状には「去廿四日書状今日、廿九披見候、箕輪城之儀羽賀信濃守追出保科居残城相渡ニ付て」と、24日かその前に箕輪城が降ったことを告げている。従って(7)の板鼻城の落成を伝えた24日は箕輪が降ったのと同日の可能性がある。しかし、4月7日、真田昌幸が石田三成に送ったものには、「此表之儀、上野國中悉放火仕其上松井田之地根小屋撃砕」と松井田攻略前に上州各地を攻撃したことを伝え、松井田城攻に加わった夏目定吉の子定房が記した「管窺武鑑」にはこの戡定作戦を詳しく記している。従って、松井田城攻囲中景勝は、小森沢刑部少輔の一隊を派し3月24日に板鼻城を攻め落したのかも知れない。

前記3月18日付氏直から大道寺直昌に与えた感状に対し、真田昌幸が浅野幸長、石田三成に宛てた報告には次のように述べられている「…去十二日、同國軽井沢参陣仕候然所愚息伊豆守松枝之城為順見近習之士百卅餘人召連従臼井乗下至町口之被成(ママ)城代大道寺新四郎敵の小勢見済昆甲七八百騎従城乗出自三方取詰既及一戦候当方者伊豆守為始軍兵何茂皆真裸ニ而及難儀候処剰信州佐久郡住人依良入道宗源と申者手勢数十人引分坂本之民屋放火後を可取切様子及見家來吉田庄介富沢主水助懸合悉伐払依良宗源を従馬上撞落則首討取候以其勢盛返向敵八十余人討捕得勝利候ニ付残党悉及敗軍候…右依良入道事者甲上信三州無其隠士之条首為進上仕候…」と真田文書中にある。昌幸の文書が真田にある点さえ不審であるのに、文中に「松枝」とあり、大物見の兵が素裸といい、信幸を伊豆守と呼び、城代大道寺新四郎とあり、おそらく偽文書であろう。従って文書中の依良宗源入道は依田氏で板鼻居住という説も問題にするには当るまい。

7　北条氏の宿掟等につき

文書(8)は北条氏が板鼻上宿に出した宿掟で、天正11年には既に宿場が成立していたことがわかる。上宿があったのであるから、当然下宿もあった筈である。これを「かみ宿」と呼んだか「うえ宿」と呼んだか不明だが、上、下両宿が連続していたのではなく、分在したと考えるのが至当であろう。もし連続したものであれば上下、或は上中下宿を一括して支配する方が都合よいであろうから掟書の宛名も「上中下宿の町人衆中」となったと思われる。上宿、下宿が分在したとする上台にあったのが上宿、現在の町並付近にあったのが下宿と呼ばれたと考える。従って読み方も「うえ宿」か「うわ宿」であろう。現在の上町、下町の小字名はこれと関係なく明治初年に定められたものであり、文書中の上板鼻、下板鼻の呼び方とも別なものである。(8)文書にあるように木戸が設けられていたのであるから周囲にも柵か垣がめぐらされ隔絶されていたに違いない。その上、この文書の末項に「帰城の上云々」とあって、宿も広義の城内として取扱われていたのではあるまいか。このように考察する時、上宿は既に初期の城下町と考えてよかろう。そこでは職人による工業的生産だけでなく町人による経済流通活動も存在したことと思われる。

北条氏は宿内に或程度の自治組織と自営を許し、首長（町人かしら）も認め、火災、盗難の防止は城主（城代）の実力を頼りに治安や医療まで行われていたに違いない。草刈等が集団で実施し、筒貝の合図で行動したことは、他領との関係などの険しさが察せられる。

文書(10)の北条氏邦の伝馬次ぎ規程でも、和田、板鼻、安中の宿に対しては伝馬の取扱いを「町人衆」に任せている。これより3年前の天正10年5月、滝川一益が上方から厩橋迄の伝馬制を設け、安中宿に掟書を出しているので、板鼻にも交付されたと思うが、現在しない。このように、武田氏滅亡以後も板

鼻城は番城として存在をつづけたが、天正18年（1590）３月（又は４月）24日、上杉景勝勢に攻略され、そのまま廃城となったのである。また板鼻上宿は、あずま道と板鼻城に依存していた宿場だったので、この時存在の意義を失い次第に下宿に吸収されて消滅したのであろう。

徳定屋敷出丸　（第72図）

板鼻本城の西北に、東西150m、南北120mの位置に徳定（とくじょう）屋敷と呼ばれる館址がある。本城との間には、本城の東から北下方をめぐる自然壕が入り込み、更に西北にのびて徳定屋敷の西面を守る。本丸との間では幅約100m、徳定屋敷の西では幅40m足らずとなる。

上面は東西125m、南80mの平行四辺形で東南に突出部がある。東北から南、西南の外側３分の２に渉り下方３乃至５mに腰郭が着き、東南部ではそれが四段も重なっている。最上段の腰郭は最大で、西南から東南をつつんで弓形となり、長さ115m、最大幅約15mである。中央よりやや東寄りに土居状の通路があり、そこから上の郭に上る。通路より東は西よりやや高い。戸口は郭面の北縁西寄りと、東面の突出部基部に開く、東戸口は、そこから三段の跳り場を通って東南に下っているが、上面の突出部は戸口南側の大横矢となり強力に前面を側防する。

北面下の堀は薬研形で、中央に逆の「折」があり、現在の土橋から東70mが検出されたが、土橋から西にも西北角を廻って西面にのびる部分があり、東北部でも、東虎口の上段跳り場下まで掘られていたのではないかと思われる。従ってその場合、東面腰郭は帯郭となって堀の外縁を形成する。北面の堀の「折」から12m程の所に掘り残しの仕切り状のものが発見されたが、低く、幅が狭く土橋とは考え難い、「折」との関係位置は戸口前の土橋となる部に当るので、後に何らかの理由でこのように削られたのかも知れない。堀障子としても不適当である。

郭面の西北部に小規模な溝で仕切られた一郭がある。その溝は、「折」の所から起って南に15m進み、そこから西に折れて郭面西端まで達していたようである。但しその西部は削り去られたらしく検出できなかったが、郭縁の引込んだ形からそれを推定できよう。原地形は西北が高く、東南が低いので、郭面造成時にも削られたと思うが、近世以降の農耕にも一層削られて溝は失なわれたのであろう。郭面西半からは古代以前の遺構のほか発見されなかった。東部及び南部はこれに反して厚い造成部が広く存在し、そこでの遺構検出も困難で、諸遺構の検出も中央部だけに止まり出土品も僅かであった。

西北部の溝で仕切られている部分は、一段高かったと思われ、その方位から、屋敷守護の祠でもあった所であろうか、高崎市矢中町の下村北屋敷にもこれと同様な例がある。

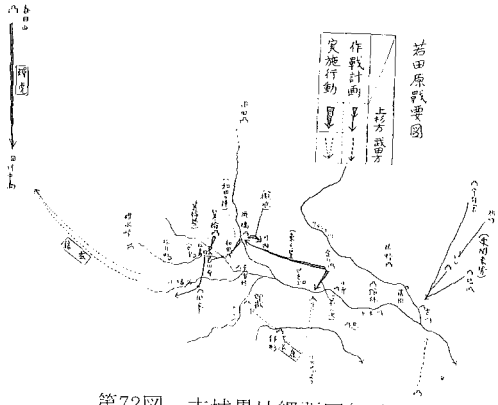
徳定屋敷が、文書(2)中の上杉顕定の仮居館に用いられた依田徳昌軒の屋敷跡であり、「東路の津登」中の依田光幸の宿所との推定が誤りでなければ、ここは文亀２年（1502）頃から既に板鼻の中核で、その60年後、板鼻城構築の際、小丸田、鷹の巣と共にその出丸として転用されたと考えたい。ただ問題とするのは遺構出土品の少いことである。

ここの東北側に顕定が亡母の年忌法要を２回にわたり盛大に行った海竜寺の跡があり、あずま道もこの南下をかすめて、東北に上野國府をめざし、鎌倉道もこの東方であずま道に合し、そこに板鼻の集落が栄えていたらしいのである。偶然かも知れないが上野國では、城館の東から東南に根小屋などの集落のある例が多いので、その例を若干あげておくこととする。

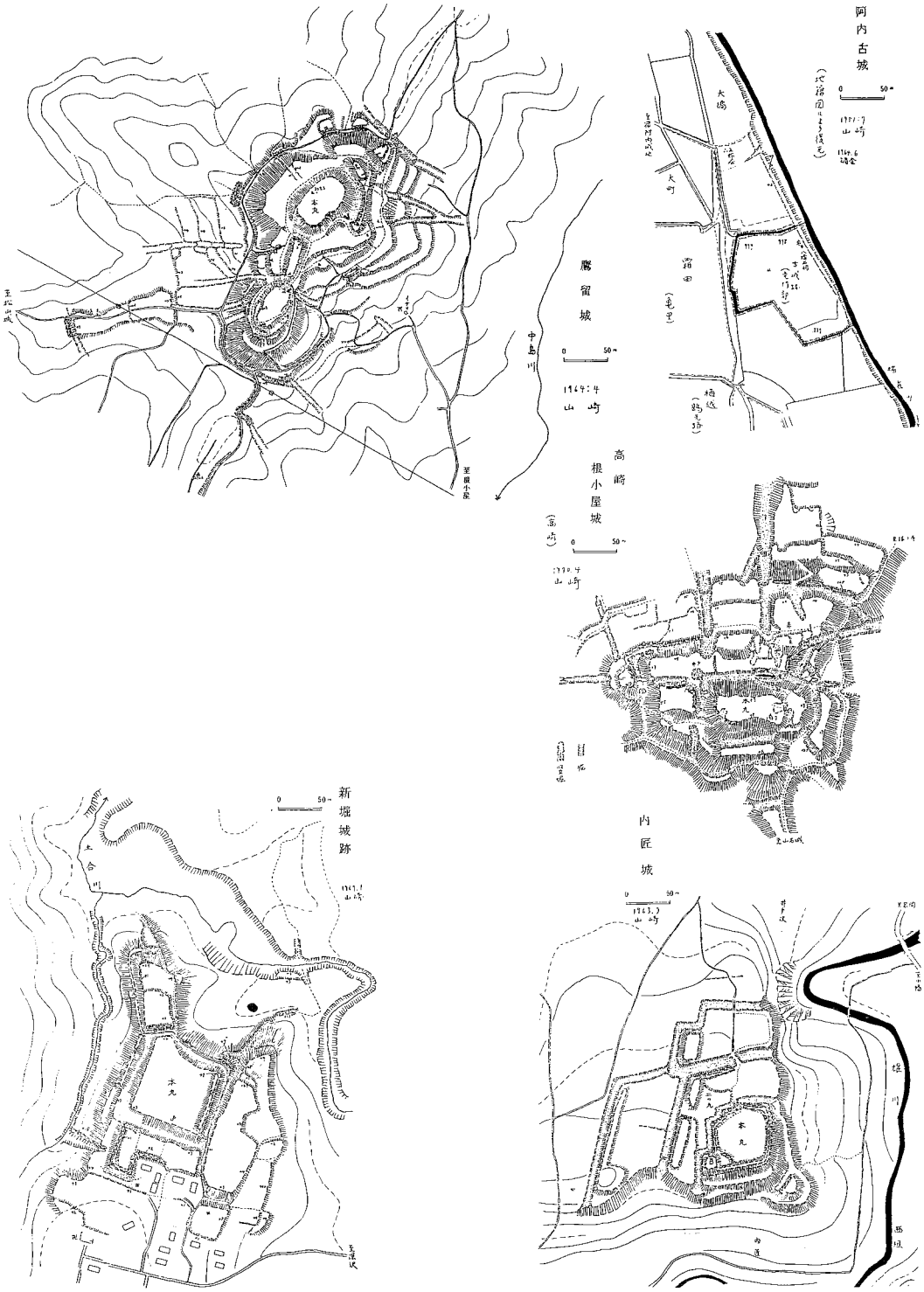
箕輪、厩橋、臼井、沼田、岩櫃、三原田、大胡、伊勢崎、和田、和田下之城、大類、下斎田、馬庭、宮崎、倉賀野、大戸、藤岡、小泉、世良田　これに符合しないもの　平井、館林、松井田、総社

何れともいえないもの　安中、國峯、太田金山、桐生

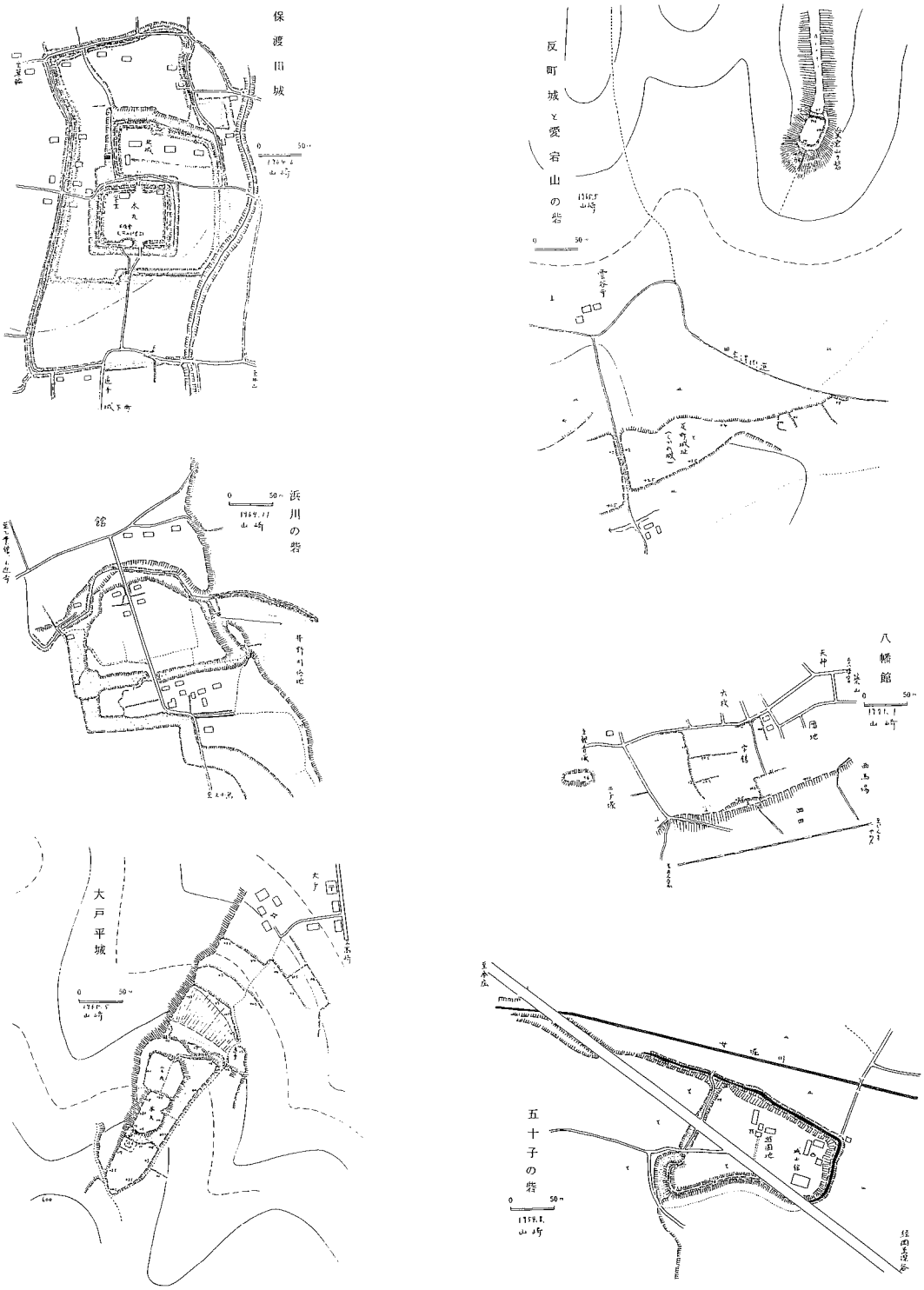
※この論考は山崎一氏『板鼻城考』より「板鼻城の成立と歴史」「徳定屋敷出丸」を抜粋したものです。



第72図　古城塁址縄張図(１)



第73図　古城塁址縄張図(２)



第74図　古城塁址縄張図(３)

写　真　図　版

上空からみた古城遺跡とその周辺

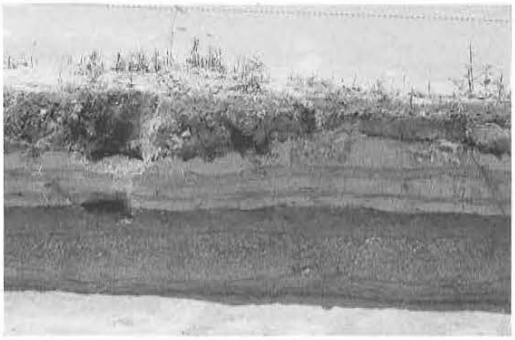
古城遺跡全景

古城遺跡全景（東より）

古城遺跡全景（北西より）

図版－2

1A区遺物出土状況



1A区土層断面

1B区全景

1B区土層断面

1C区全景

1C区土層断面

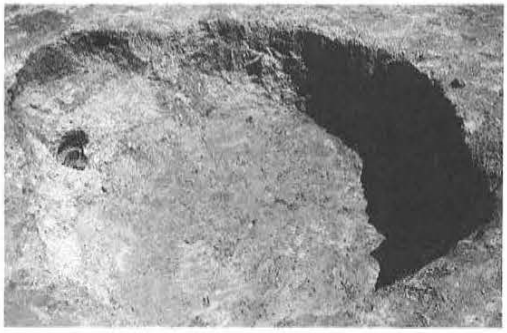
1C区遺物出土状況(C-4、5、6ブロック)

1C区遺物出土状況(東半分)

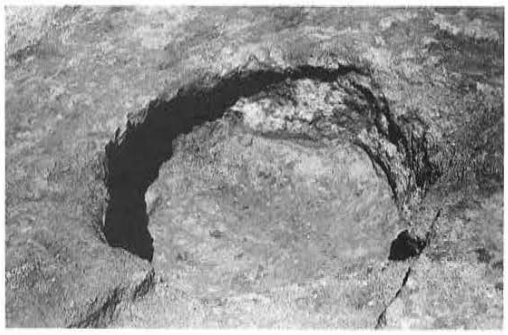
1C区土層断面(◀の層の白い部分がＡＴ)

Ｃ－12ブロック磨製石斧出土状況

２区古城館址全景



ＪＤ－７号土壙

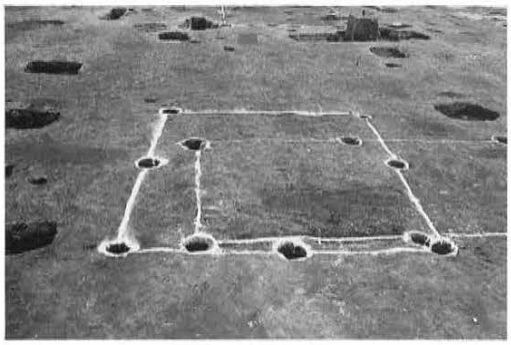


ＪＤ－８号土壙

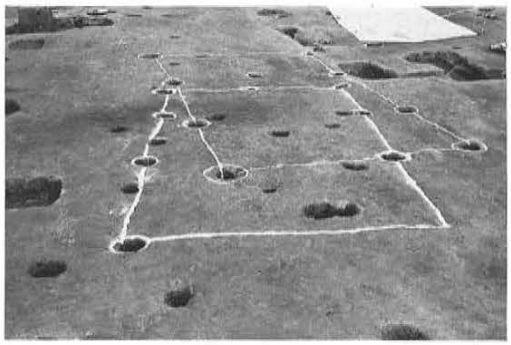
図版－4

H－1号住居址

H－2号住居址

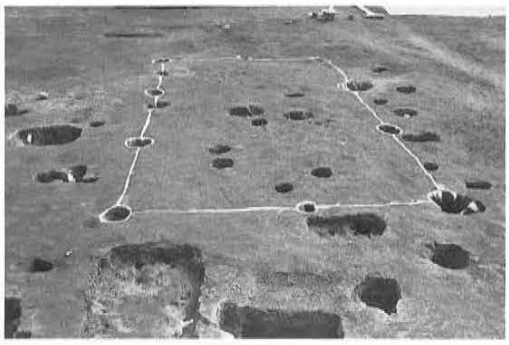


1号・2号掘立



3号・4号掘立

15号掘立

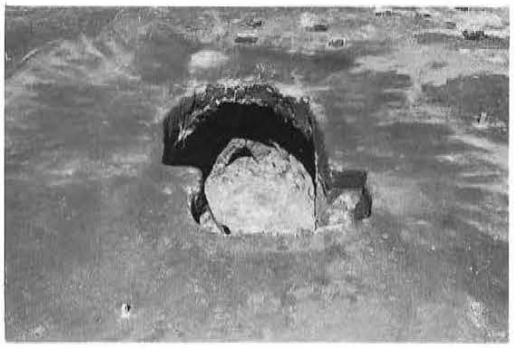


16号掘立

D－9号土壙

D－12号土壙

D－10号土壙



1号地下式壙

2区1号井戸

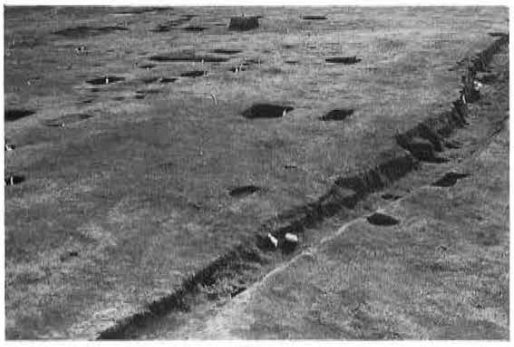
2区2号井戸

堀全景

堀(折部分)

壙土層断面

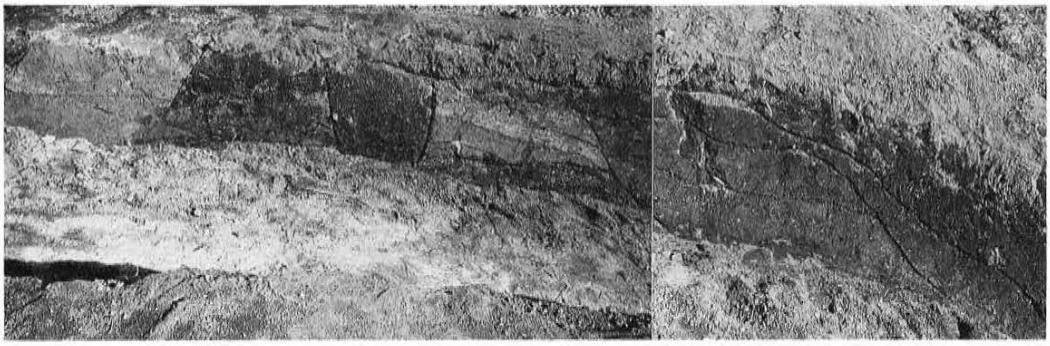
図版－6



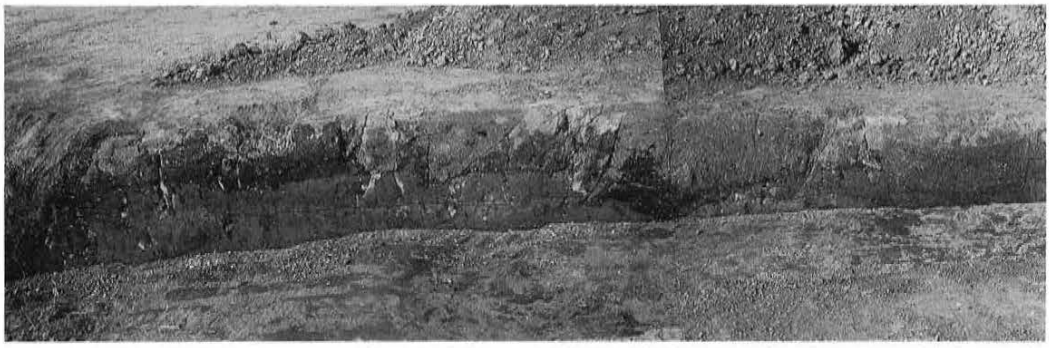
溝

2号断面

2号断割土層断面

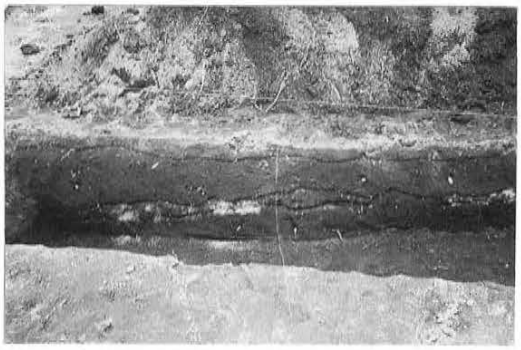


3号断割土層断面



4号断割土層断面

5号断割土層断面



6号断割土層断面

3区全景

3区3号土壙

3区6号土壙

3区1号井戸

3区調査状況

図版－8

4A区全景

4A区土層断面

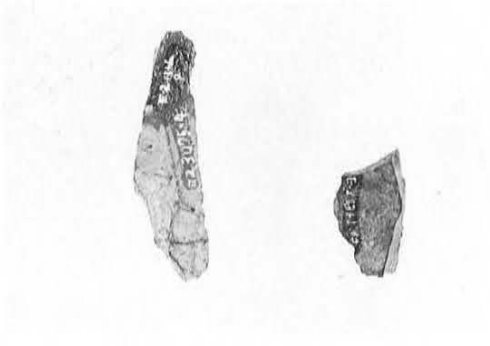
4B区全景

旧流路（集石群）

4B区調査状況

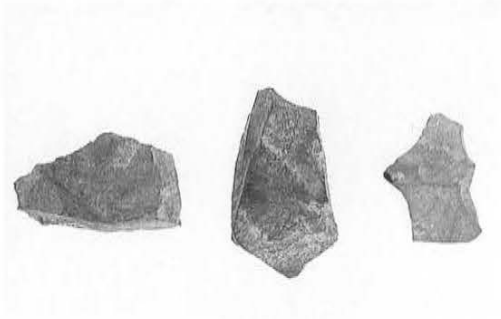
試掘調査（遺構確認）

現場説明会風景

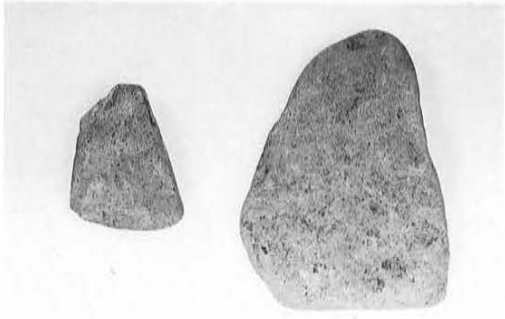


1A区出土のナイフ形石器

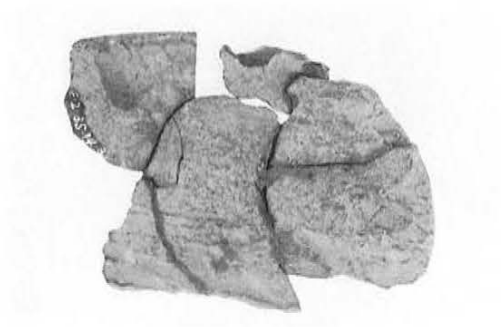
A－1.2.3.4.5.6ブロック・ブロック外(左から上下に)



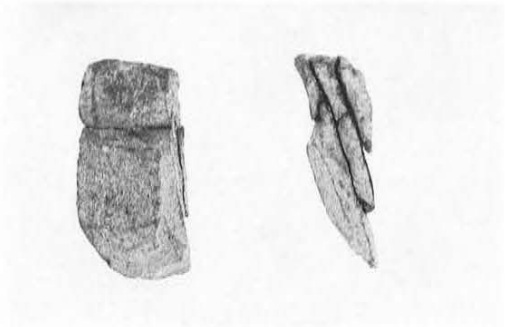
1A区出土の石核



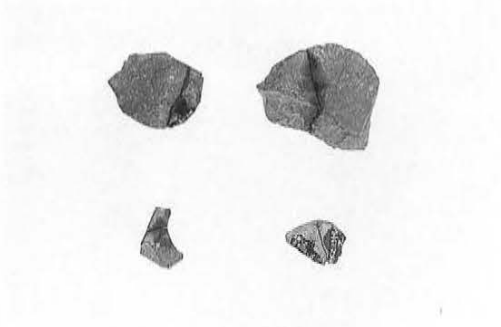
1A区出土の砥石(?)台石



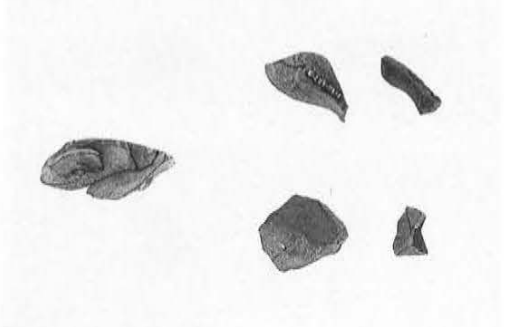
AG－1



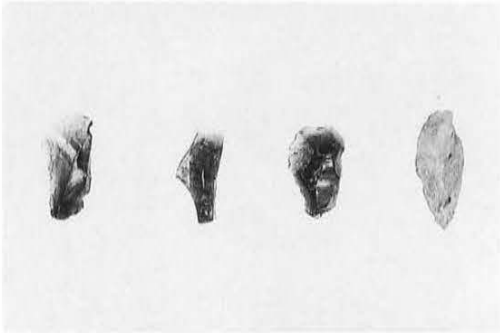
AG－2



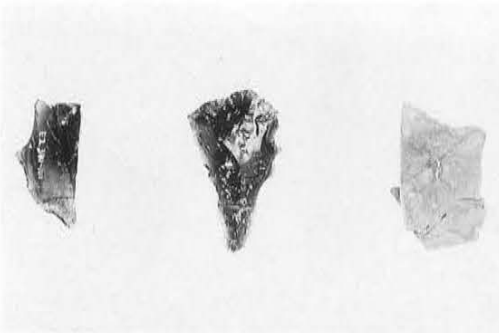
AG－3.4.5.9



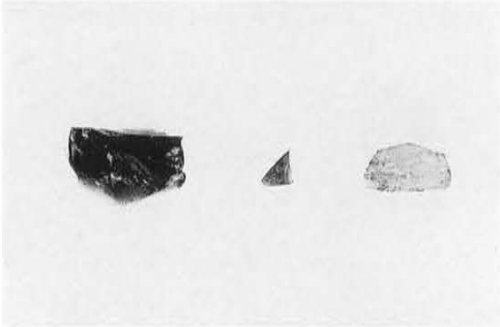
AG－7



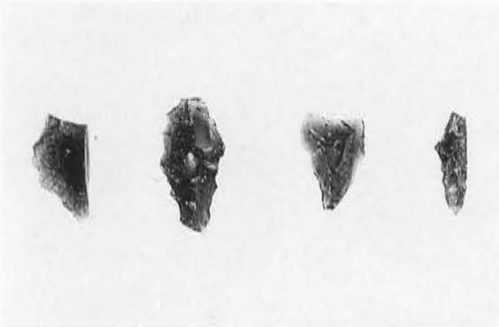
C－1.2.3ブロック出土のナイフ形石器



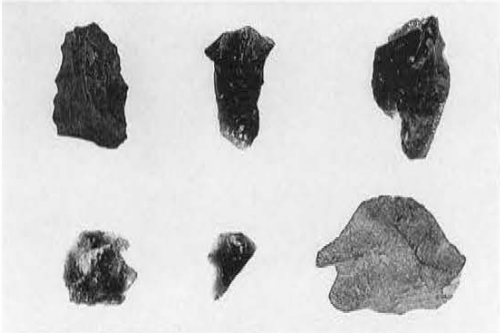
C－1.2ブロック出土の削器



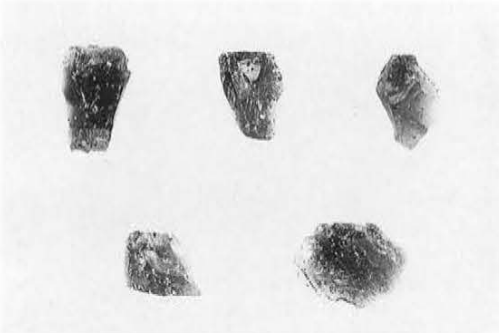
C－1.2.3ブロック出土のR・F、小形貝殻状剥片



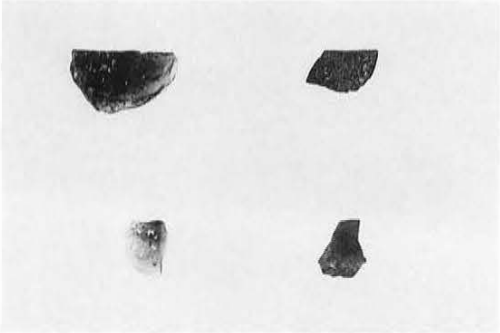
C－4.6ブロック出土のナイフ形石器



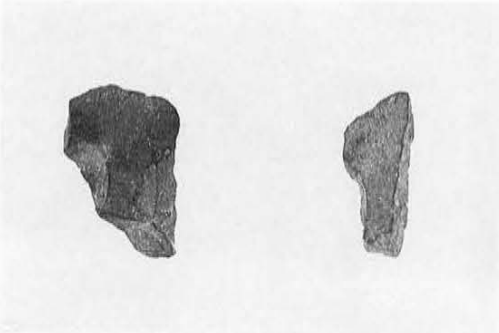
C－4.6.7ブロック出土の削器



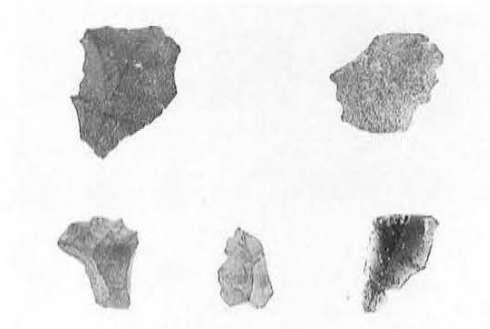
C－5.6.7.8ブロック出土のR・F



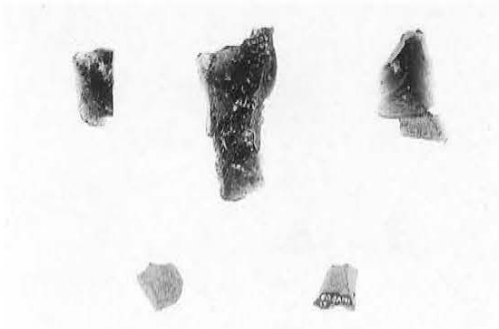
C－6.7ブロック出土の小形貝殻状剥片



C－9.13 a ブロック出土のナイフ形石器

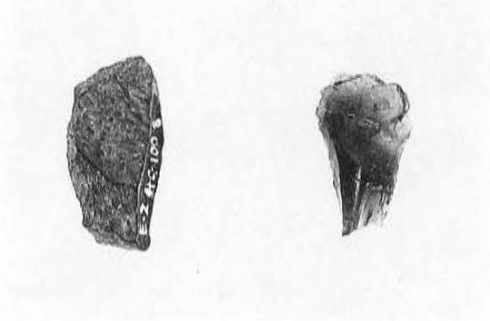


C－9.10.13ｂブロック出土の削器

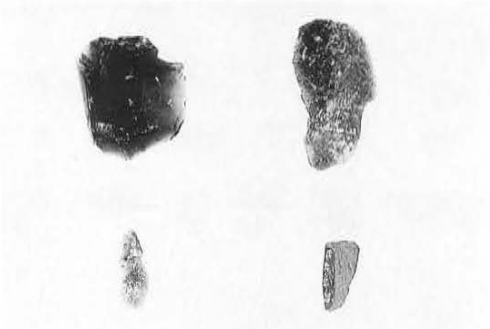


C－9.12.13ｂブロック出土のR・F、小形貝殻状剝片

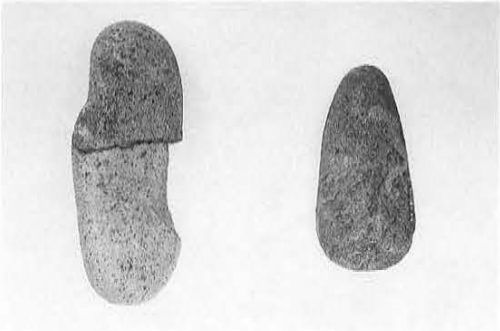
C－12ブロック出土の局部磨製石斧



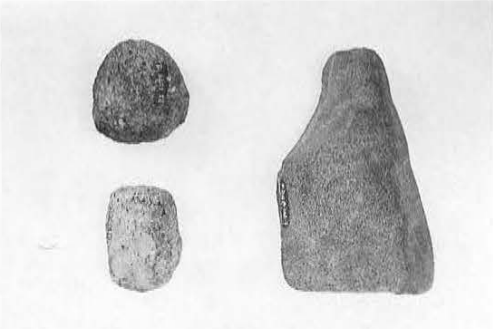
C－14ブロック出土のナイフ形石器



C－11ブロック出土のR・F、小形貝殻状剝片



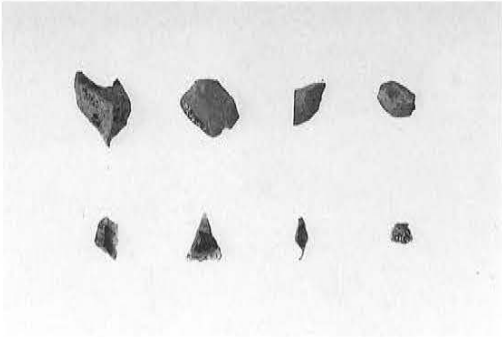
C－1.13ａ.13ｂブロック出土の磨石



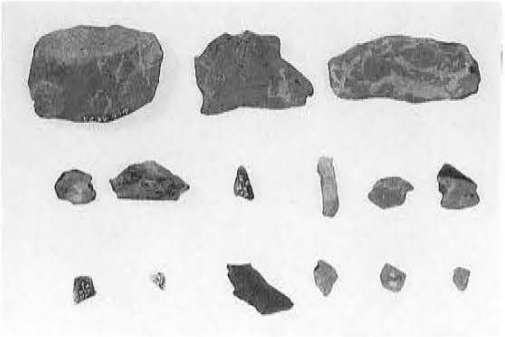
C－8.10ブロック出土の敲石

C－８ブロック付近出土の台石

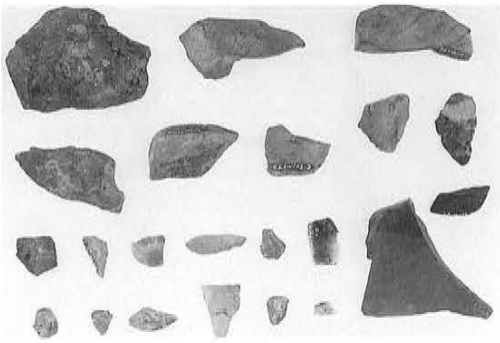
図版－12



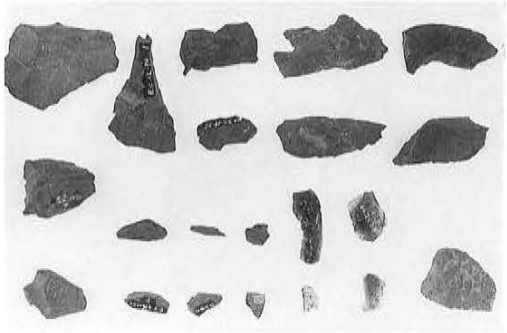
C－1ブロック出土遺物



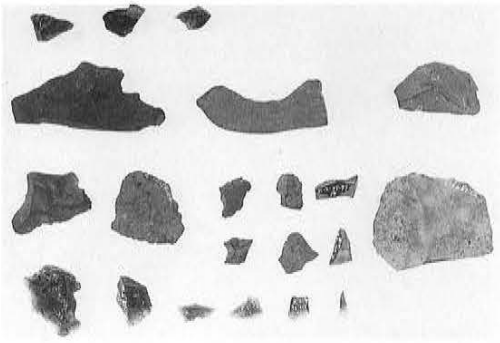
C－2ブロック出土遺物



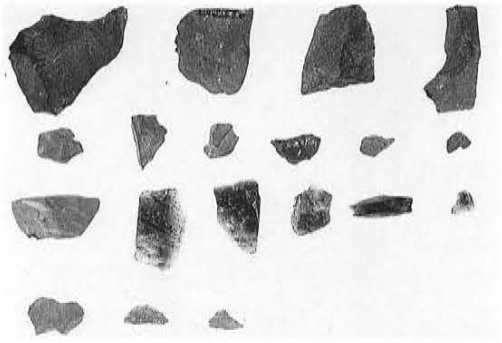
C－3ブロック出土遺物



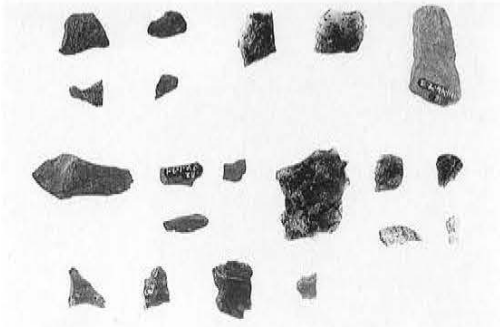
C－4ブロック出土遺物



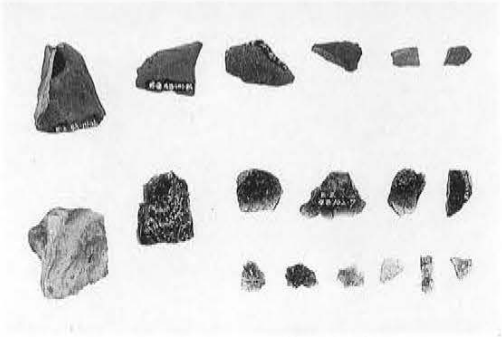
C－5ブロック(最上段)、C－6ブロック出土遺物



C－7ブロック、C－8ブロック(最下段)出土遺物

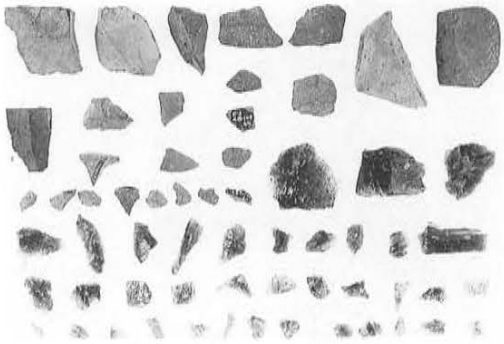


C－9ブロック(上)、C－10ブロック(下)出土遺物

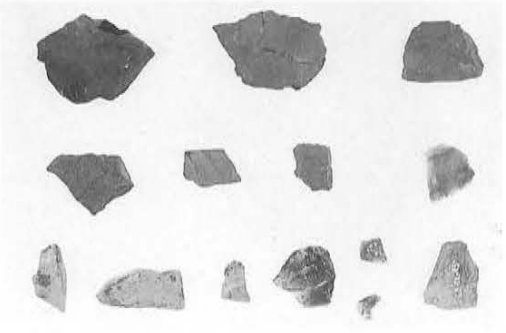


C－12ブロック出土遺物

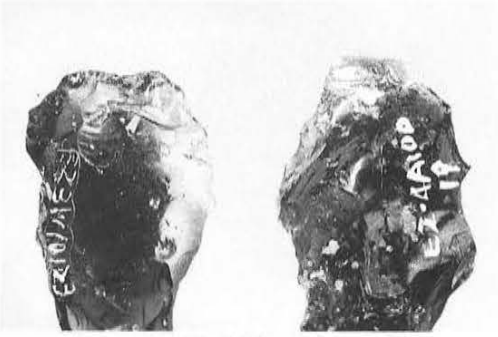
C－13ａブロック(左)、C－13ｂブロック(右)出土遺物



C－11ブロック出土遺物



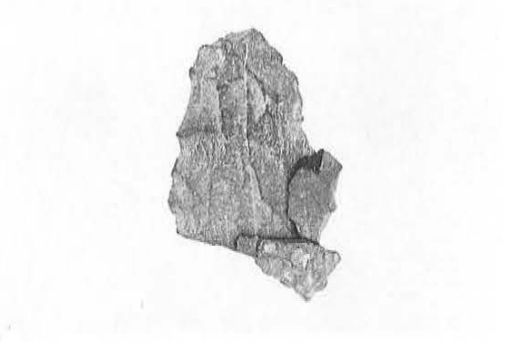
ブロック外出土遺物



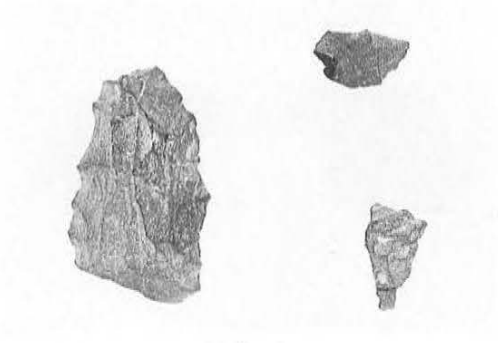
ナイフ形石器刃部にみられる潰れ

削器(左)、二次加工のある剥片(右)の刃部に観察される微細な剥離

磨製石斧に観察される線条痕

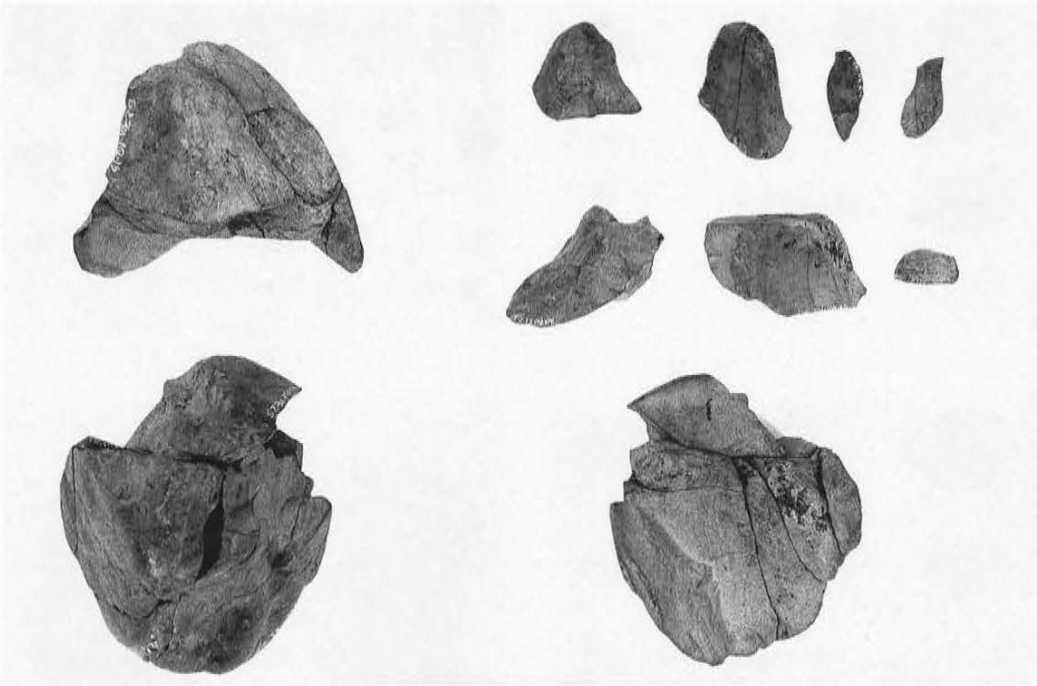


ＣＧ－1

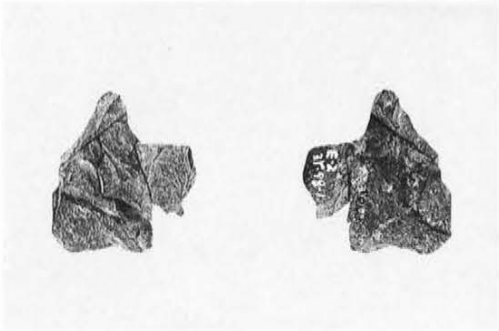


ＣＧ－1

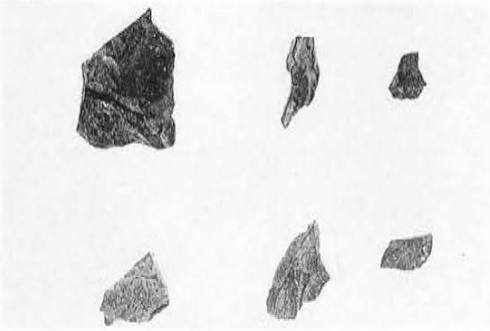
図版－14



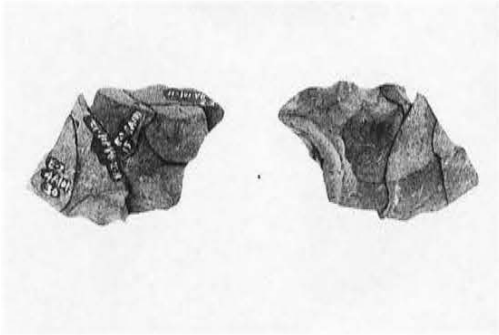
ＣＳ－1



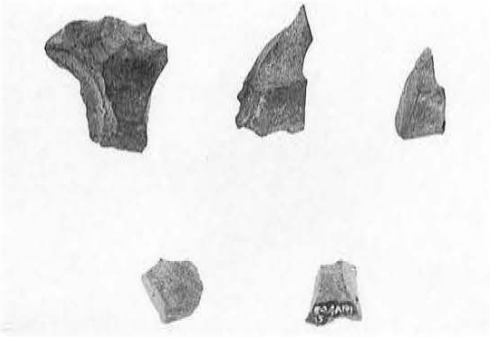
ＣＧ－3



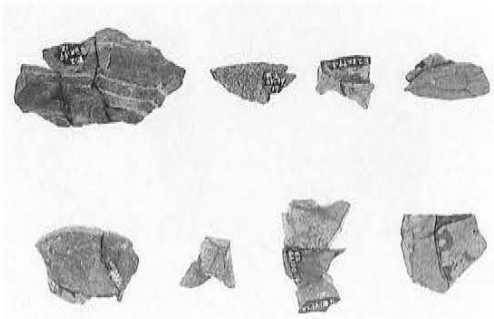
ＣＧ－3



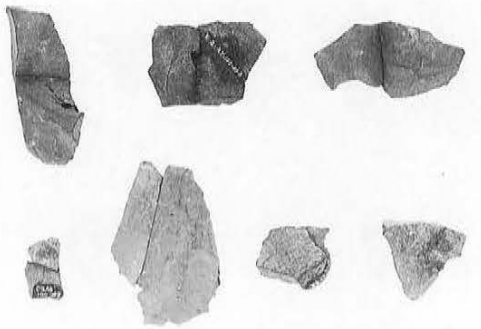
ＣＧ－15



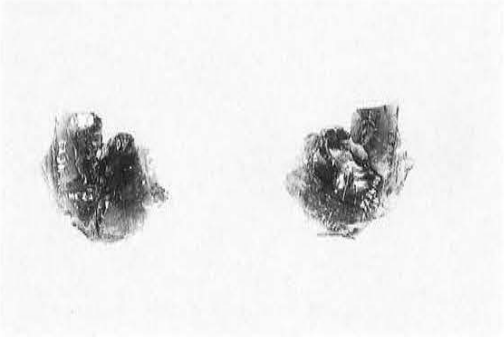
ＣＧ－15



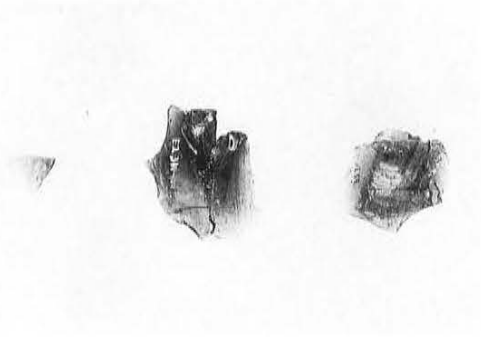
ＣＧ－2.4.5.6.7.8.9(左上から)



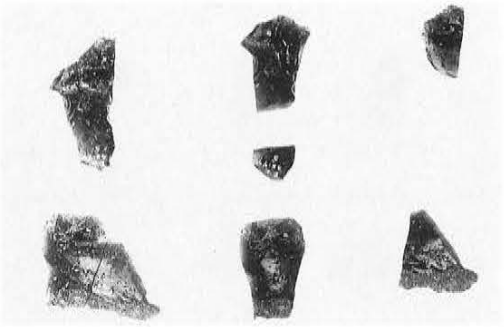
ＣＧ－11.12.13.14.16.17.19(左上から)



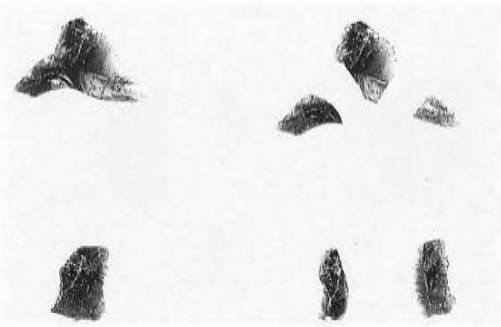
ＣＯ－1



ＣＯ－1



ＣＯ－14(上) ＣＯ－7(下)

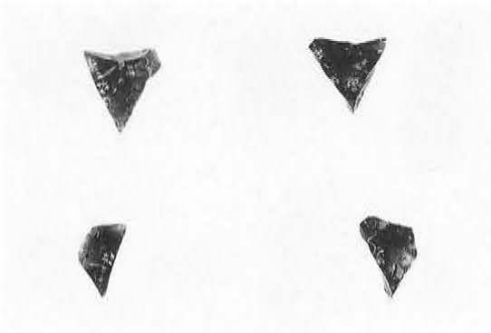


ＣＯ－13(上) ＣＯ－30(下)

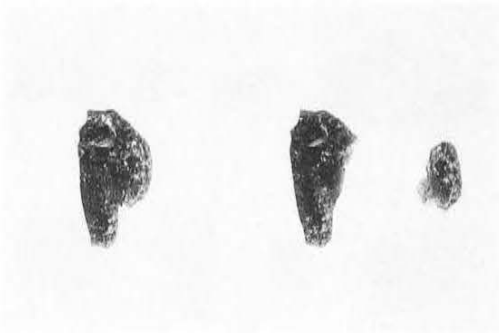
ＣＯ－6

ＣＯ－6

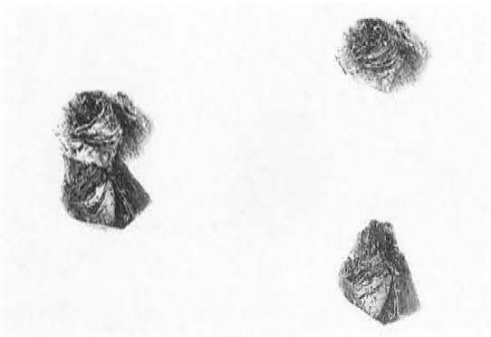
図版－16



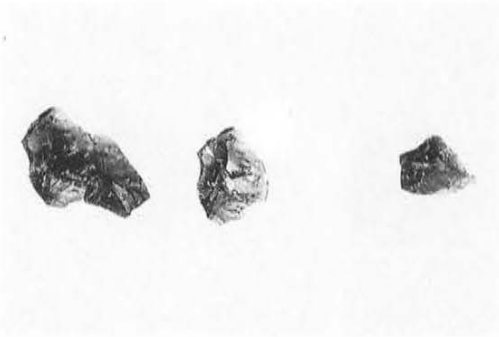
ＣＯ－10



ＣＯ－9

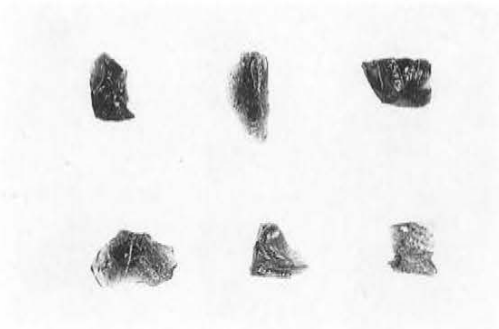


ＣＯ－16

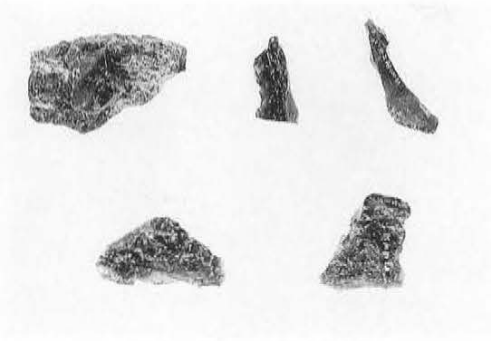


ＣＯ－15

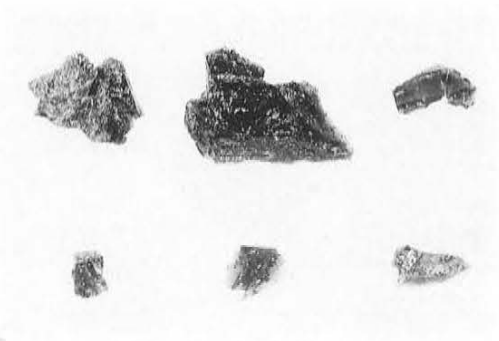
ＣＯ－17



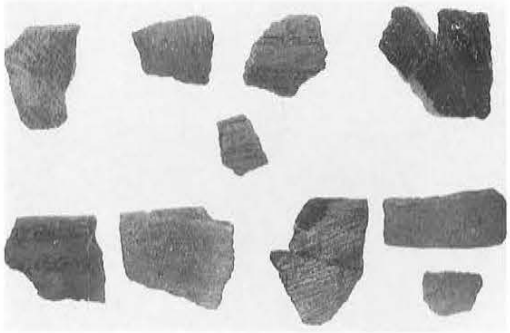
ＣＯ－3.4.8.12.26.29



ＣＯ－19.21.22.23.24

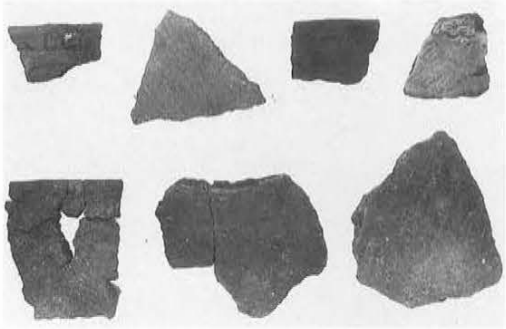


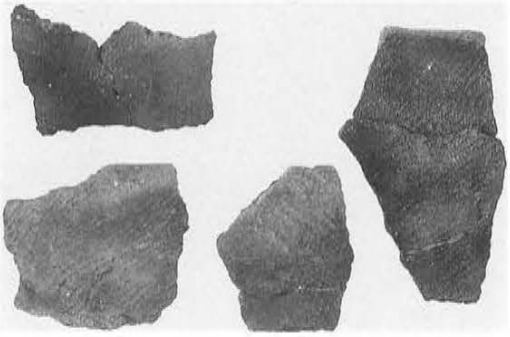
ＣＯ－25.32.34.35.37.39



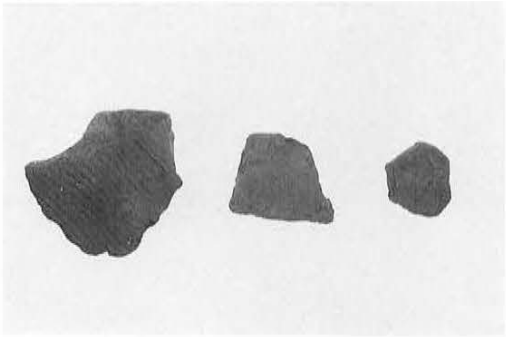
ＪＤ－1・ＪＤ－4・ＪＤ－6・ＪＤ－8・ＪＤ－9出土遺物

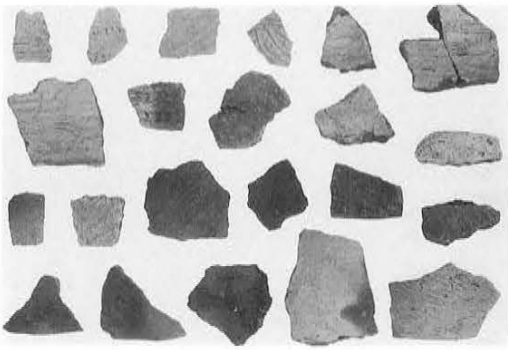
ＪＤ－８
出土遺物

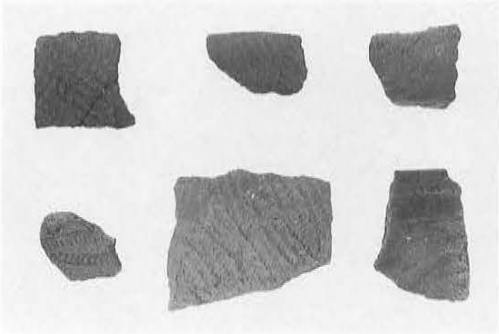


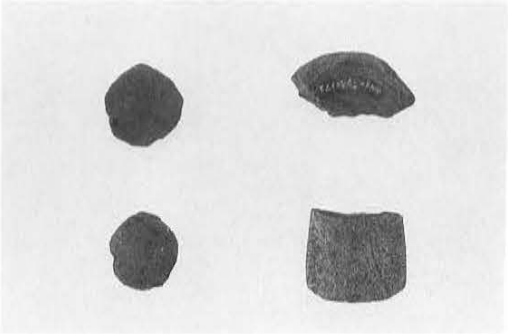


ＪＤ－７出土遺物



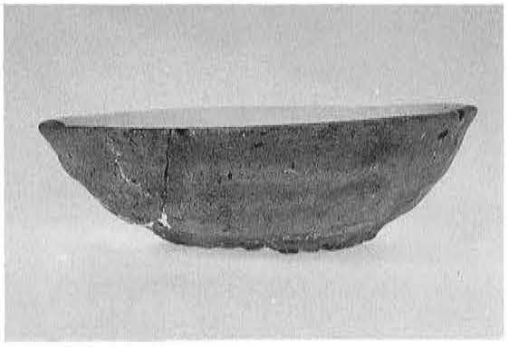
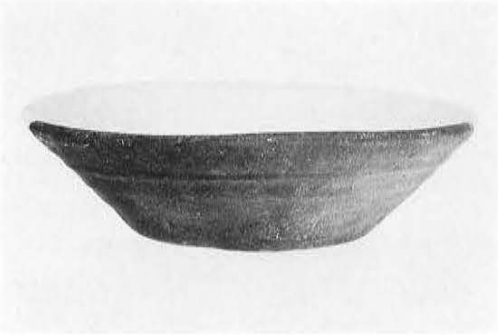
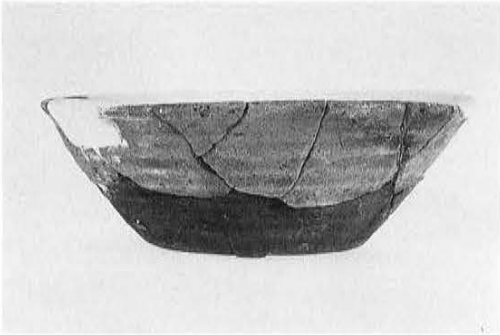
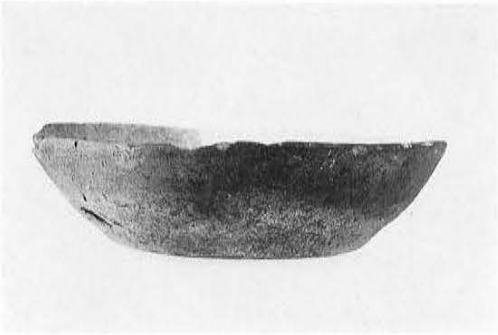
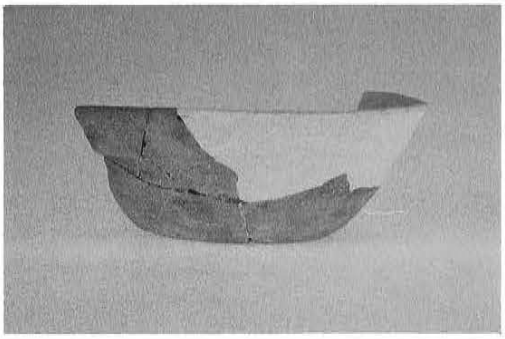
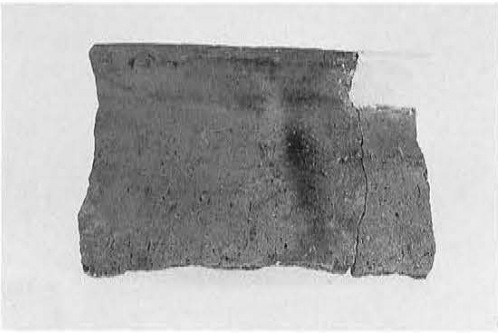
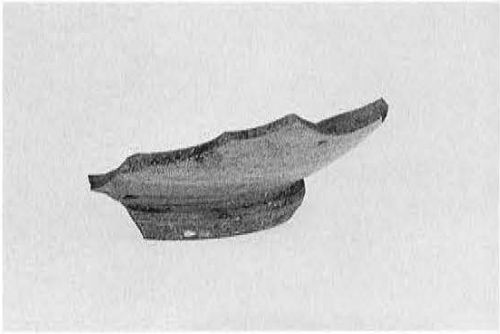
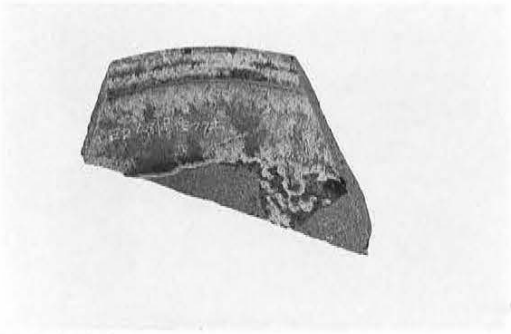




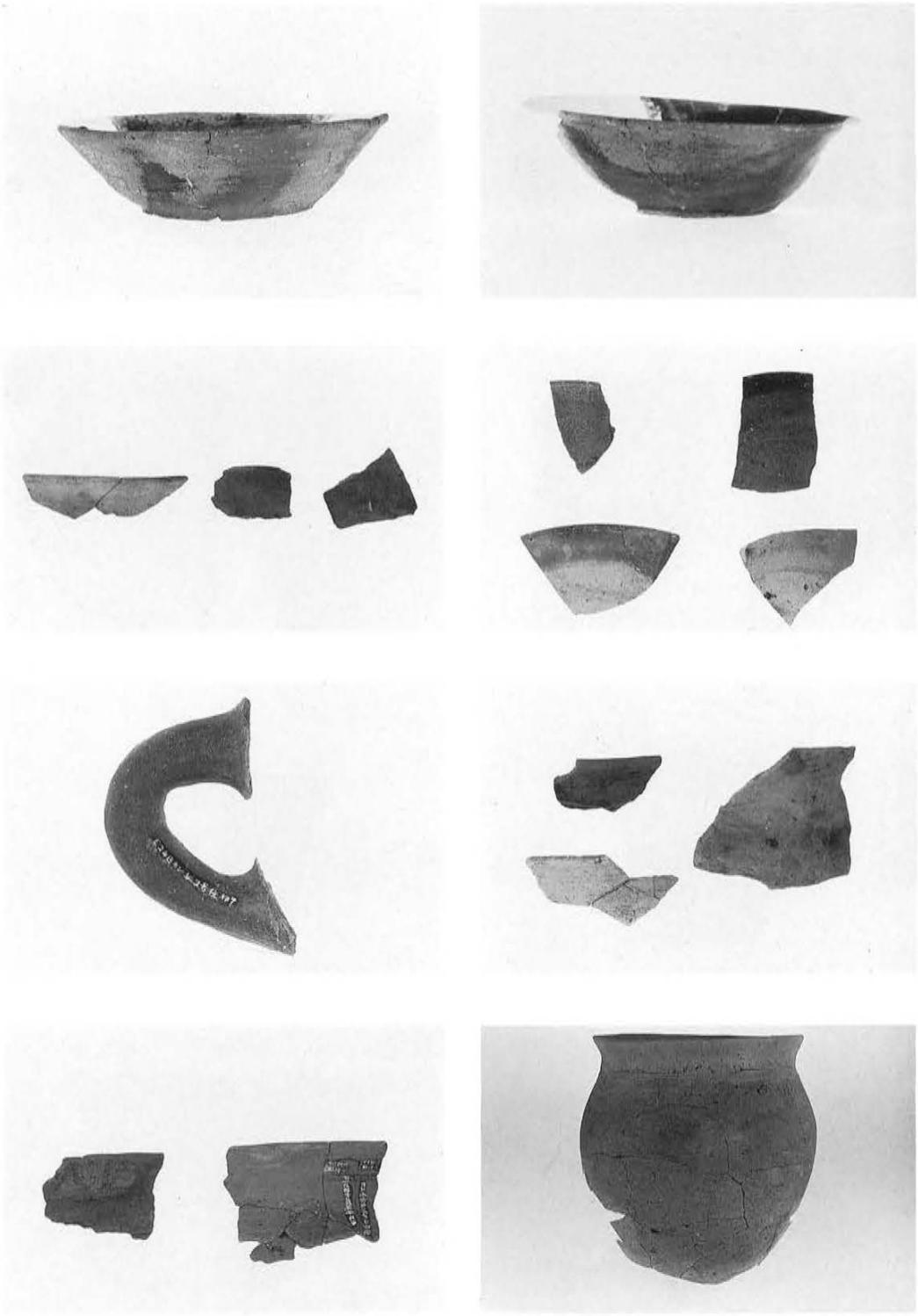


表採遺物

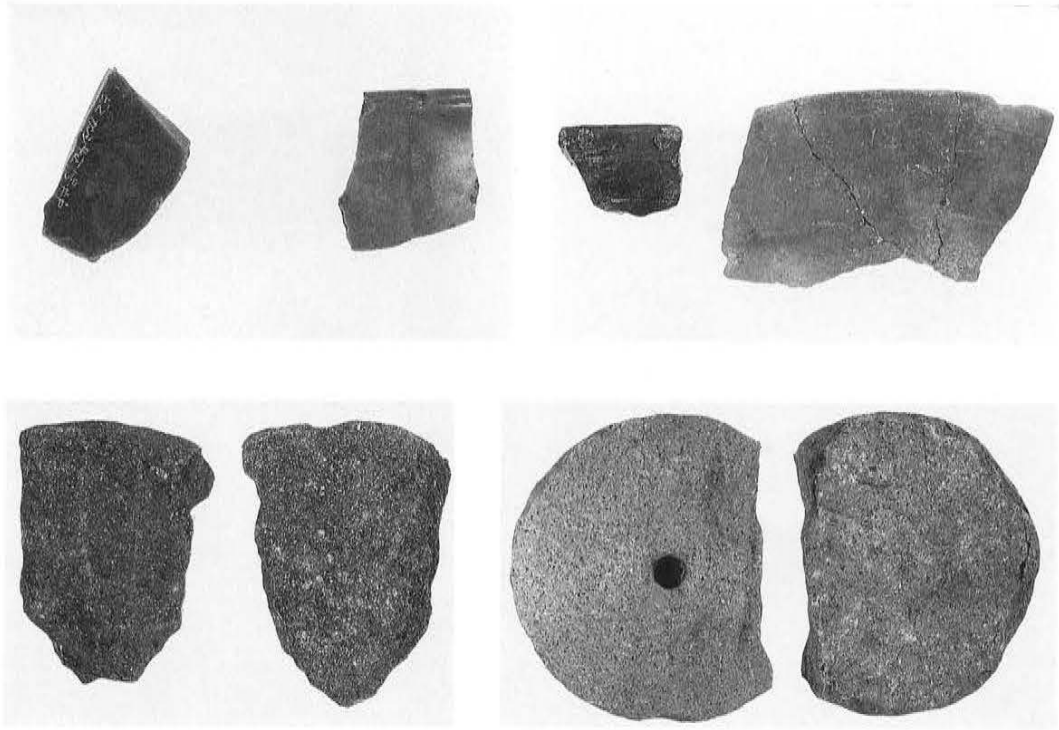
図版－18

H－1号住居址出土遺物

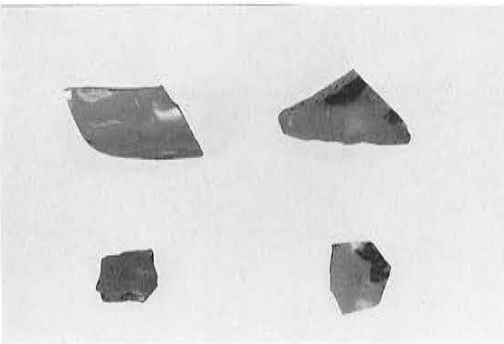


H－2号住居址出土遺物

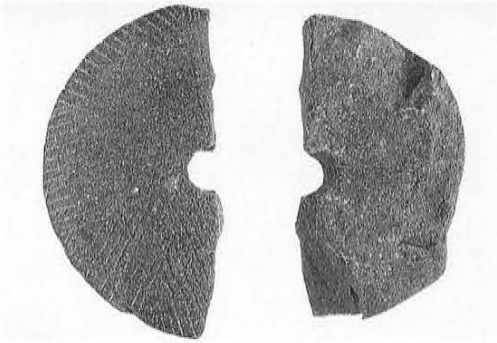


2区1号井戸出土遺物

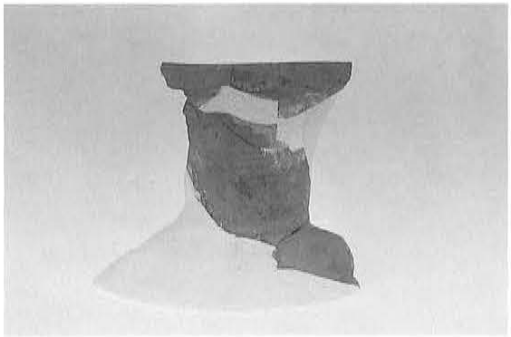
2区2号井戸出土遺物



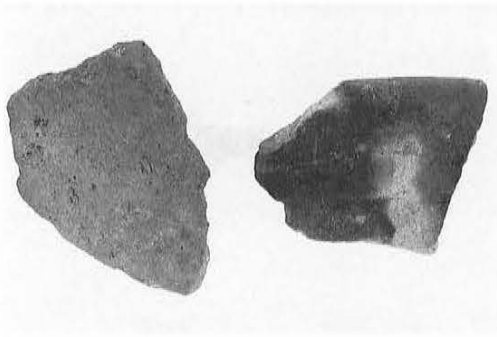
D－2・D－13・D－16出土遺物



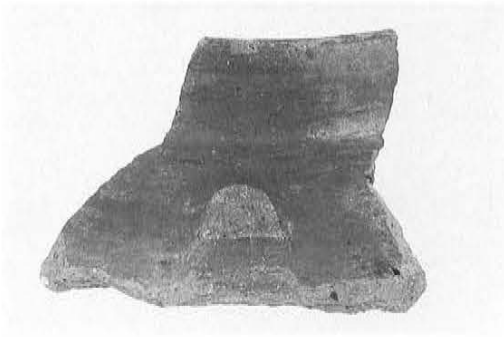
D－10出土遺物

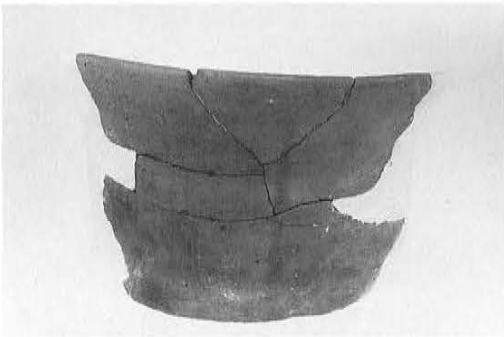


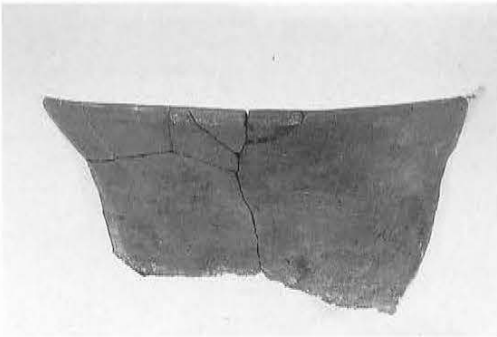
D－14出土遺物



D－9出土遺物

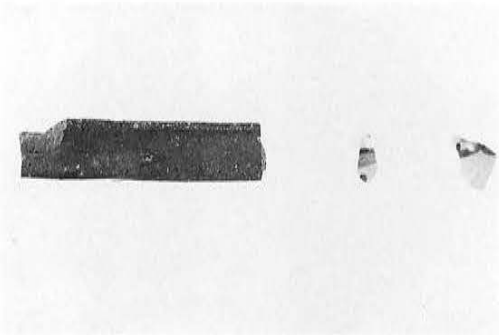


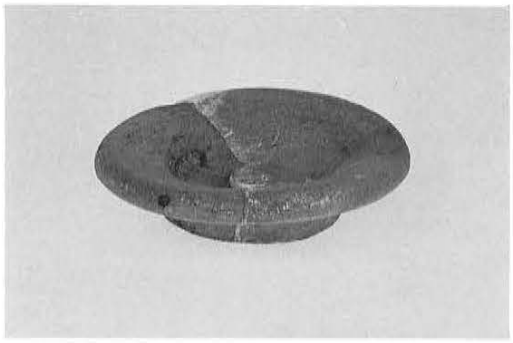




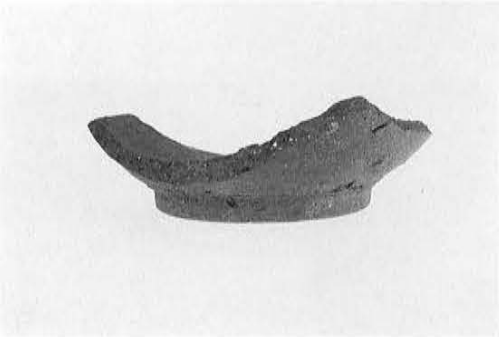
1号地下式壙出土遺物

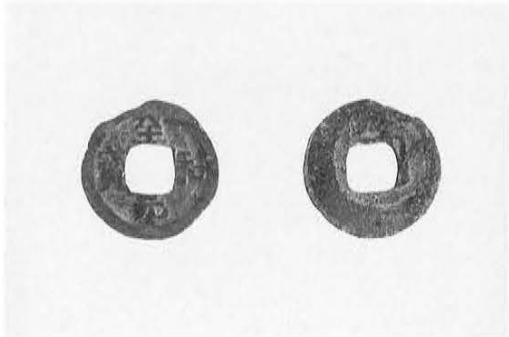
図版－22



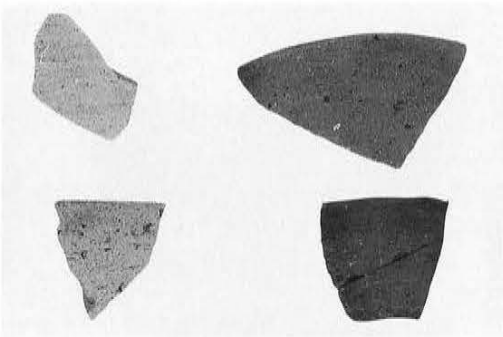


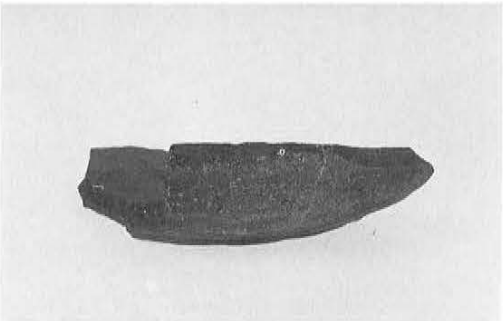
溝出土遺物



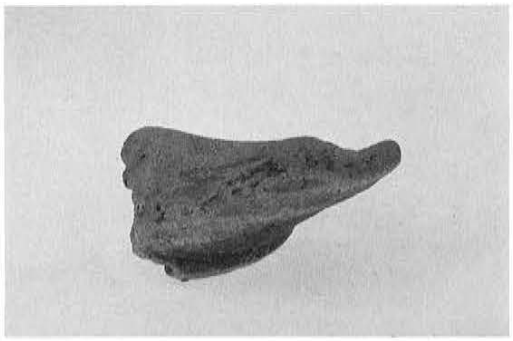
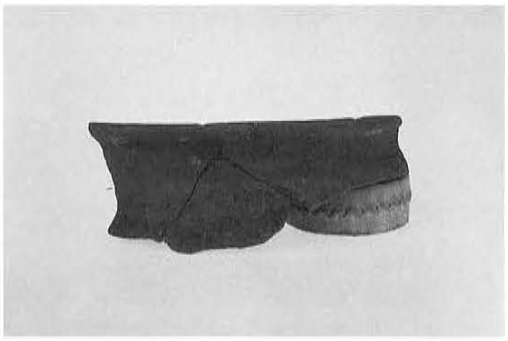
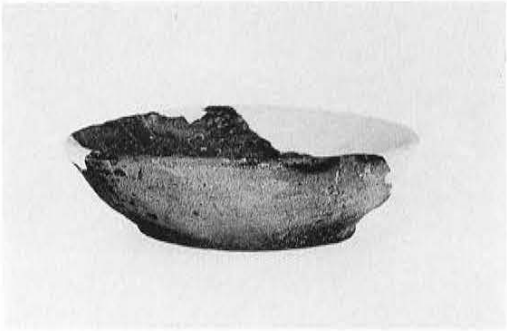
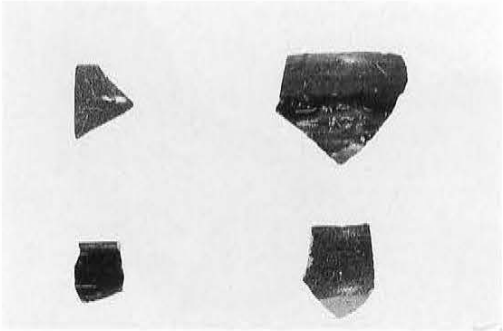
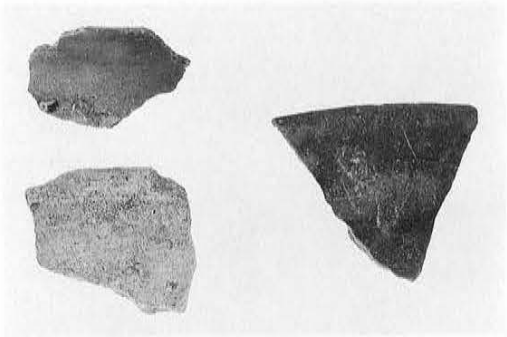
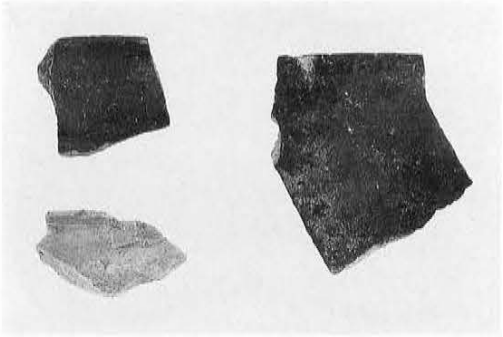


掘出土遺物

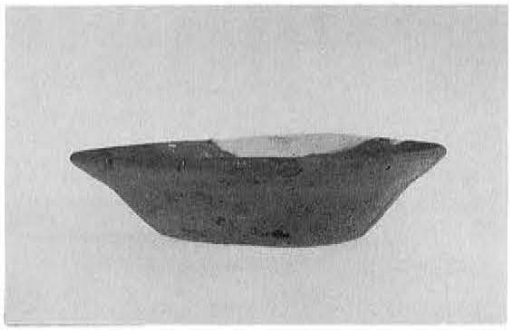
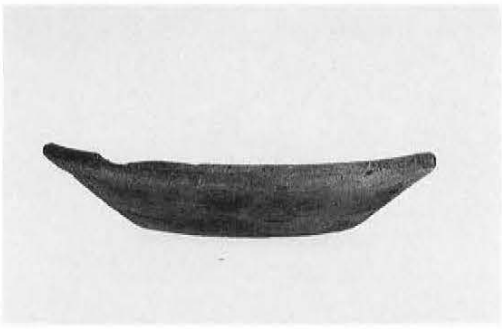




2区表採遺物

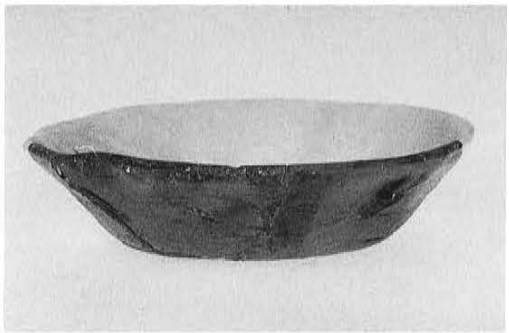







2区表採遺物

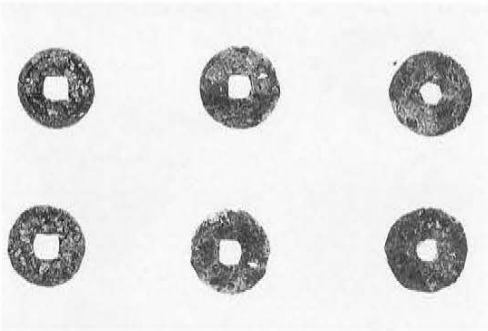



3区1号井戸出土遺物

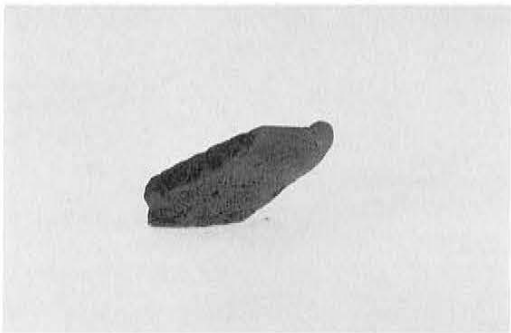
3区1号井戸出土遺物



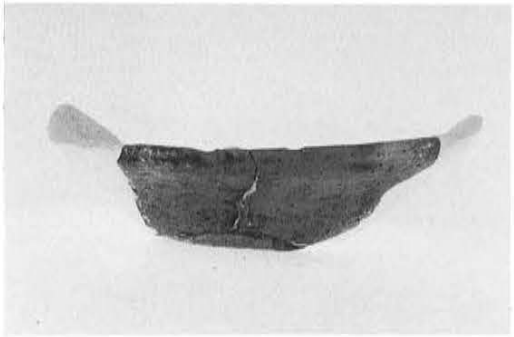
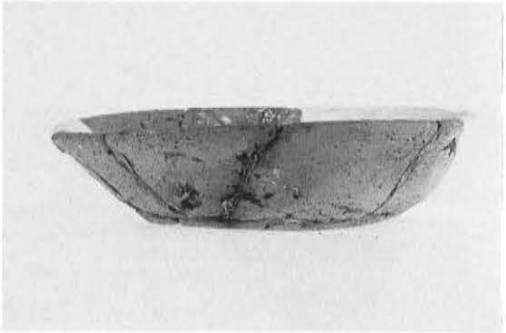
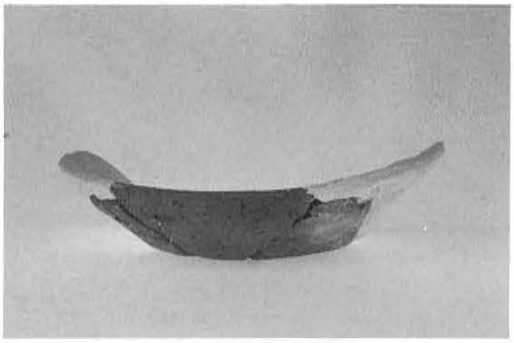
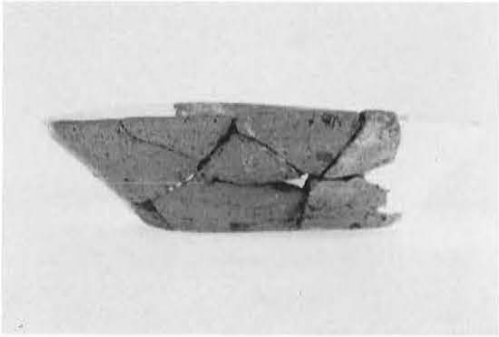
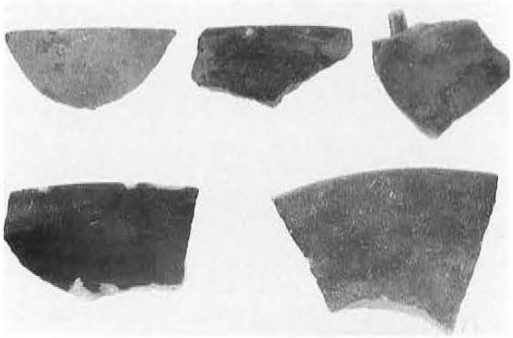
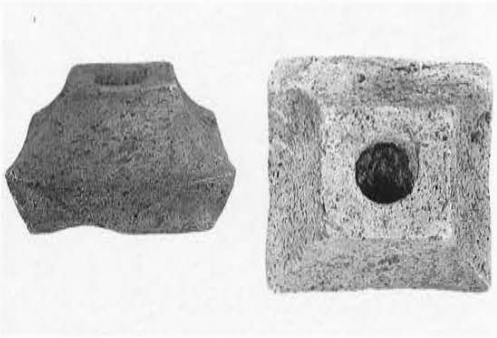
3区D－5号出土遺物



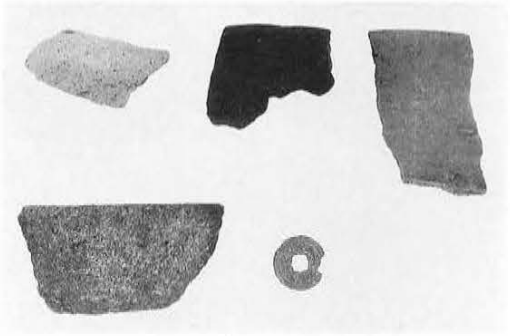
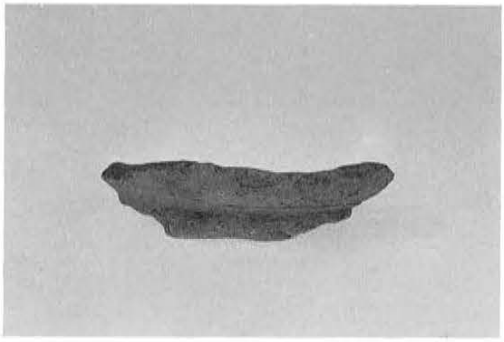
3区D－4・D－7号出土遺物



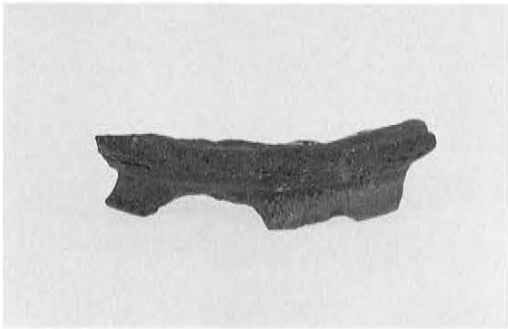
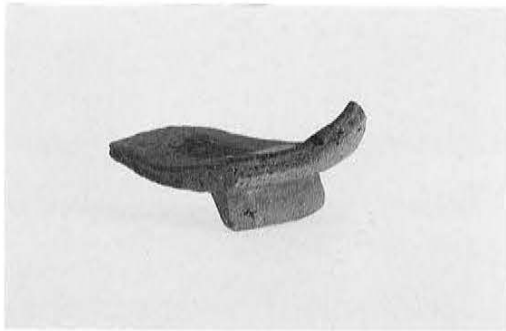
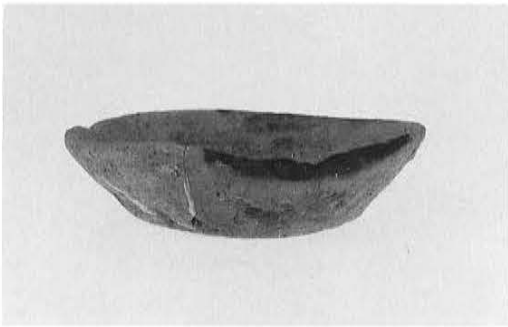
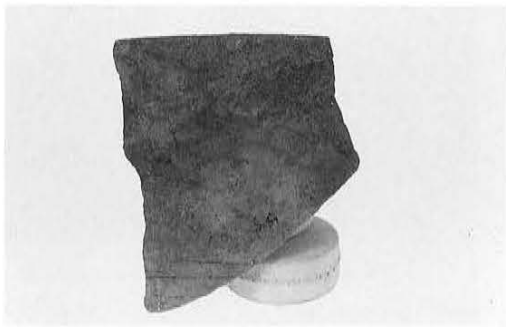
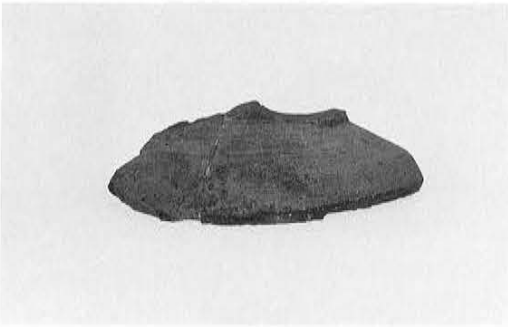
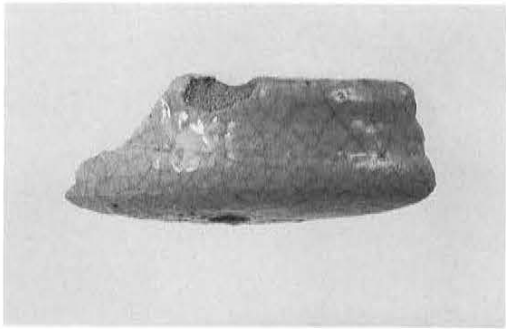
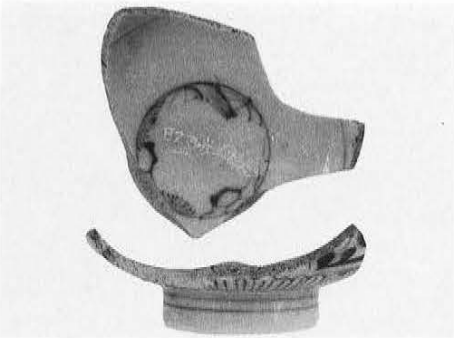
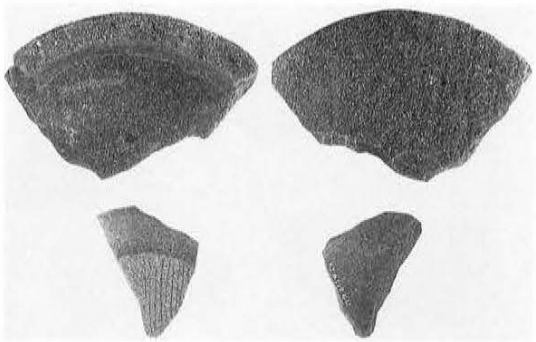
3区表採遺物

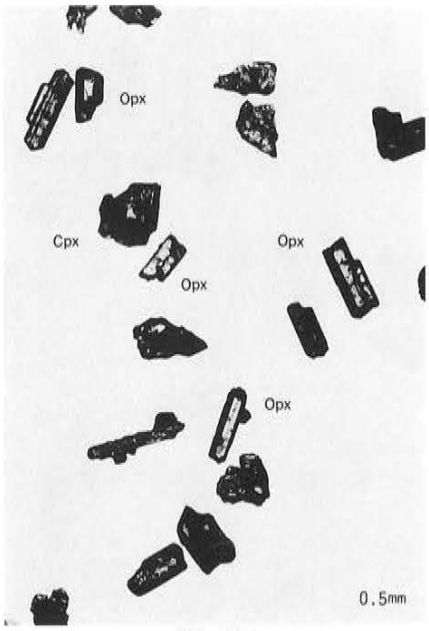
3 区表採遺物

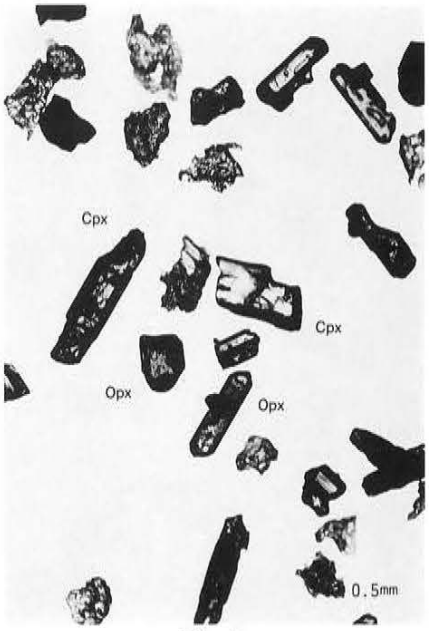
4 区表採遺物

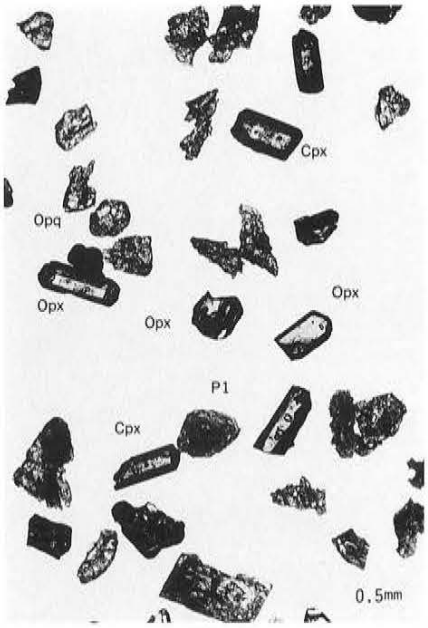
4 区表採遺物



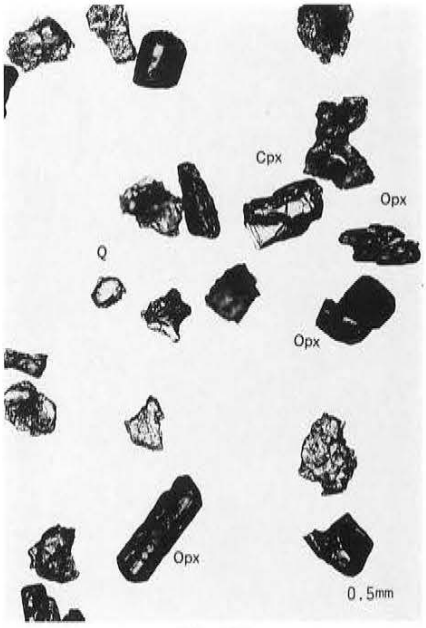
AK－6u



AK－5



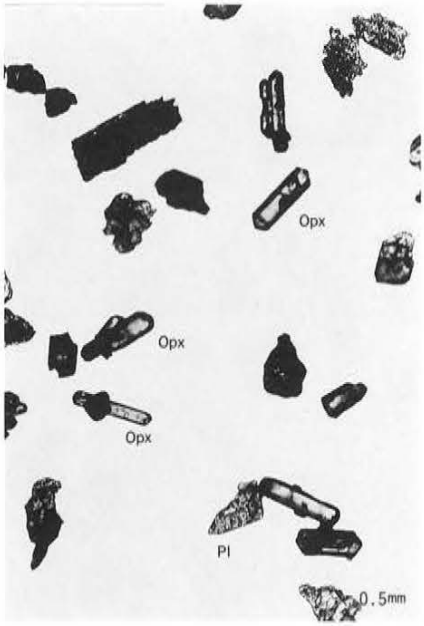
AK－4



AK－31

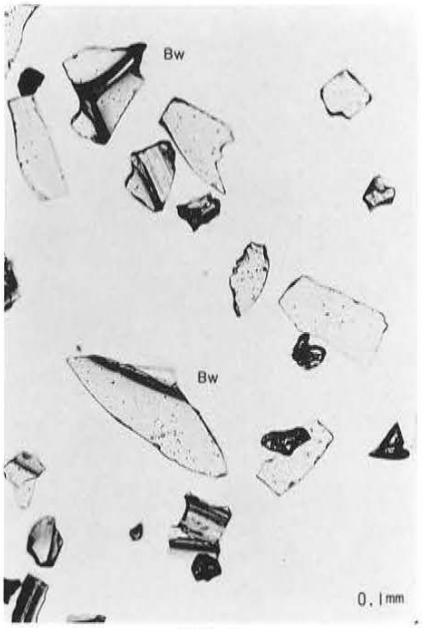
Opx：斜方輝石.　CP　Cpx：単斜輝石.　Pl：斜長石.　Q：石英.
Opq：不透明鉱物(磁鉄鉱)

土層中に含まれる重鉱物 (1)



AK−2u

AK−2l



AK−1

Opx：斜方輝石
Pl：斜長石
Q：石英.
Bw：バブル型火山ガラス

土層中に含まれる重鉱物 (2)

古 城 遺 跡

―安中古城住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

発 行 日　昭和63年3月31日
編集・発行　安中市教育委員会社会教育課
印　　刷　朝日印刷工業株式会社